

# 中国横断自動車道 建設に伴う発掘調査

1

元定古墳群  
上野遺跡  
大内原遺跡

1994・3

日本道路公団広島建設局津山工事事務所

岡山県教育委員会

# 中国横断自動車道 建設に伴う発掘調査

1

元定古墳群

上野遺跡

大内原遺跡

1994・3

日本道路公団広島建設局津山工事事務所

岡山県教育委員会

## 序

中国横断自動車道・岡山米子線は「国土開発幹線自動車道建設法」に基づいて、均衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち落合～米子間は米子自動車道として昭和45年6月の基本計画決定以来20余年の歳月を経て、平成4年12月18日全線66.7kmが開通しました。米子道は中国自動車道と一体となり、山陰・山陽と京阪神・北九州を結び、産業経済の発展に大きな役割を果たしております。

日本道路公団広島建設局・津山工事事務所は米子自動車道の建設に伴い、その予定路線敷地内にある遺跡について岡山県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は岡山県真庭郡落合町・久世町・湯原町における元定古墳群などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。この調査記録が、ロマンにみちたはるかな過去に生きた先祖の文化・生活を現在に蘇らせてくれる道しるべとなり、今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものです。

なお、この発掘調査および本書の編集は岡山県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表わすものであります。

平成6年3月

日本道路公団広島建設局津山工事事務所

所長 高橋文雄

## 序

中国横断自動車道は、中国地方を南北に結ぶ交通の大動脈であり、この道路が果たす文化的・経済的波及効果は計り知れないほど大きいものがあります。

岡山県教育委員会では、この中国横断自動車道（川上～落合間）の建設に先立ち、その予定地内に所在する埋蔵文化財の保護・保存について関係当局と繰り返し協議・調整を図ってまいりましたが、やむなく記録保存の処置を講じなければならない遺跡については、昭和62年度から発掘調査を実施してきました。

今回の第1分冊には、昭和62年度から平成3年度にかけて調査を実施した川上村・湯原町・久世町・落合町内に所在する遺跡について収録しております。このうち久世町の上野遺跡については、山間部における弥生時代後半期の集落の実態の解明に貴重な成果を得ることができました。この報告書が今後の地域史解明の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを希望します。

発掘調査の実施、報告書の作成に当たっては、中国横断自動車道（川上～落合間）建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の各先生方から種々の御教示と御指導を得、また日本道路公団をはじめ地元の方々からも、多大の御協力を賜りました。関係各位に対し、記して厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助

## 例　　言

1. この報告書は、中国横断自動車道（川上～落合間）の建設に伴い、日本道路公団の委託を受け、岡山県教育委員会が発掘調査を実施したものである。

2. 報告書に収載する遺跡は、元定古蹟群、上野遺跡、大内原遺跡他である。

3. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の下記委員から有益な助言、指導を得た。記して深甚の謝意を表する次第である。

鎌木義昌（岡山県文化財保護審議会委員）

近藤義郎（岡山県文化財保護審議会委員）

白石　純（岡山理科大学）

土居　徹（津山市立北小学校）

船津昭雄（久世町文化財保護委員）

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

宗森英之（岡山県立津山高校）

安川豊史（津市教育委員会）

4. 発掘調査は、昭和62年度の川上地域の確認調査を岡山県古代吉備文化財センター職員葛原克人、正岡陸夫、松本和夫、昭和63年度の川上地域の調査を下澤公明、大智浩、平成元年度調査を下澤、大智（川上地域）、山磨康平、池上博および仁木康治調査補助員（久世地域）、福田正継、松岡浩太郎（湯原、久世地域）、平成2年度を山磨、福田、池上、松岡（久世、落合地域）、平成3年度を福田、松岡、安井悟、氏平昭則（久世、落合地域）があたった。

5. 報告書の作成にあたっては、図面整理、製図には主に各担当者があたり、石器の実測については、平井典子補助員、三垣佐知子、土器の実測について主に東秀己、製図については、田中淑子、中野晴美の協力を得た。遺物写真は、柴田英樹の援助を受け山磨が行った。遺物の検討等について平井勝、平井泰男、高畠知巧、島崎東の助言、援助を受けた。

6. 本報告書の執筆は、第1章を葛原、第2、3章を主に山磨（歴史地理的環境の項を池上）、第4章を主に福田（小川散布地の項を下澤）が行った。編集は、山磨が担当した。

7. 報告書に記載した高度値は海拔高であり、遺構図中の方位は磁北である。

8. 報告書中の遺構、遺物の縮尺は基本的に共通する。住居1：80、土器1：4、鉄器、石器1：2などである。

9. 発掘調査にかかる諸記録、出土遺物の全ては、文化財センターに収蔵、保管している。

## 本文目次

1. 発掘調査の経緯と経過	1.
1. 発掘調査に至るまで	11
2. 発掘調査の開始	41
3. 調査体制	48
2. 落合地域の調査	11
1. 調査の経過	11
2. 元定古墳群	14
3. 元定散布地、信実散布地	72
3. 久世地域の調査	73
1. 調査の経過	73
2. 地理、歴史的環境	76
3. 上野遺跡	79
4. 大内原遺跡	194
4. 湯原地域の調査	199
1. 調査の経過	199
2. 上ユタニ散布地、下ユタニ散布地	201
3. 茅森大森散布地	202
4. 茅森磯尾散布地	203
5. 小川古墳推定地	204
6. 小川散布地	205
7. 大平散布地	206

## 図 目 次

第1図 収載遺跡の位置図	1
第2図 調査遺跡位置図 (1/500,000)	2
第3図 中山西、城山東遺跡トレンチ位置図 (1/5,000)	5
第4図 下郷原・和田遺跡トレンチ位置図 (1/2,000)	6
第5図 下郷原・田代No1地点トレンチ位置図 (1/2,000)	6
第6図 下郷原・田代No2地点トレンチ位置図 (1/2,000)	6
第7図 落合地域位置図(1/25,000)	11
第8図 元定古墳群トレンチ設定図 (1/2,000)	12

第9図 遺構配置図(1/1,500) .....	15	第41図 土壙8出土遺物2 .....	32
第10図 1区全体図(1/500) .....	16	第42図 土壙9(1/30) .....	32
第11図 竪穴住居2(1/80) .....	17	第43図 土壙9出土遺物 .....	32
第12図 竪穴住居2出土遺物1 .....	18	第44図 2、3、5、6号墳調査前測量図 (1/300) .....	33
第13図 竪穴住居2出土遺物2 .....	18	第45図 2、3、5、6号墳墳丘測量図 (1/200) .....	34
第14図 竪穴住居2出土遺物3 .....	18	第46図 2号墳主体部(1/40) .....	35
第15図 竪穴住居3(1/80) .....	19	第47図 2号墳墳丘断面(1/100) .....	35
第16図 竪穴住居3出土遺物 .....	20	第48図 2号墳出土遺物 .....	36
第17図 竪穴住居4(1/80) .....	20	第49図 3号墳墳丘断面(1/100) .....	36
第18図 竪穴住居4出土遺物1 .....	21	第50図 5、6号墳墳丘断面(1/100) .....	37
第19図 竪穴住居4出土遺物2 .....	21	第51図 5号墳主体部1(1/40) .....	38
第20図 竪穴住居5(1/80) .....	22	第52図 5号墳主体部2(1/40) .....	39
第21図 竪穴住居5出土遺物 .....	23	第53図 6号墳主体部1(1/40) .....	40
第22図 竪穴住居6(1/80) .....	24	第54図 6号墳主体部2(1/40) .....	41
第23図 竪穴住居6出土遺物 .....	25	第55図 7号墳(1/150) .....	41
第24図 竪穴住居7(1/80) .....	25	第56図 7号墳出土遺物 .....	42
第25図 竪穴住居7出土遺物 .....	26	第57図 8号墳(1/150) .....	42
第26図 竪穴住居8(1/80) .....	26	第58図 8号墳出土遺物 .....	42
第27図 竪穴住居8出土遺物 .....	26	第59図 11号墳(1/150) .....	43
第28図 段状遺構1、2(1/80) .....	27	第60図 12号墳(1/150) .....	44
第29図 段状遺構3(1/80) .....	27	第61図 土壙2(1/30) .....	45
第30図 段状遺構1、2出土遺物 .....	27	第62図 土壙4(1/30) .....	45
第31図 段状遺構3出土遺物 .....	27	第63図 土壙5(1/30) .....	46
第32図 溝(1/200) .....	28	第64図 土壙6(1/30) .....	46
第33図 溝断面(1/80) .....	28	第65図 その他の出土遺物1 .....	47
第34図 溝出土遺物 .....	28	第66図 その他の出土遺物2 .....	47
第35図 土壙1(1/30) .....	29	第67図 2区全体図(1/400) .....	48
第36図 土壙1出土遺物 .....	29	第68図 竪穴住居1(1/80) .....	49
第37図 土壙7(1/30) .....	30	第69図 竪穴住居11、14、16、22、23、24 (1/100) .....	50
第38図 土壙7出土遺物 .....	30		
第39図 土壙8、10、11(1/30) .....	31		
第40図 土壙8出土遺物1 .....	32		

第70図 住居新旧図(1／400) .....	51	第101図 3区全体図(1／400) .....	65
第71図 堪穴住居11出土遺物 .....	51	第102図 土壙27(1／30) .....	66
第72図 堪穴住居11、14出土遺物 .....	52	第103図 土壙28(1／30) .....	66
第73図 堪穴住居10、12、13、20、21 (1／80) .....	53	第104図 10、13号墳(1／150) .....	67
第74図 住居新旧図(1／400) .....	54	第105図 10号墳出土遺物 .....	67
第75図 堪穴住居12出土遺物 1 .....	54	第106図 4区全体図(1／400) .....	68
第76図 堪穴住居12出土遺物 2 .....	55	第107図 建物 1(1／80) .....	69
第77図 堪穴住居15(1／80) .....	56	第108図 建物 2(1／80) .....	70
第78図 堪穴住居17(1／80) .....	56	第109図 建物 3(1／80) .....	70
第79図 堪穴住居17出土遺物 .....	56	第110図 元定散布地トレンチ設定図 (1／2,000) .....	72
第80図 堪穴住居18、19(1／80) .....	57	第111図 信実散布地トレンチ設定図 (1／2,000) .....	72
第81図 堪穴住居18、19出土遺物 .....	57	第112図 久世地域位置図(1／50,000) .....	73
第82図 土壙37(1／30) .....	57	第113図 上野遺跡周辺図(1／3,000) .....	75
第83図 土壙45(1／30) .....	57	第114図 遺跡分布図(1／25,000) .....	77
第84図 土壙44(1／30) .....	58	第115図 調査区図(1／1,500) .....	79
第85図 土壙45出土遺物 .....	58	第116図 上野遺跡全体図 1(1／500) .....	80
第86図 土壙44出土遺物 .....	58	第117図 上野遺跡全体図 2(1／500) .....	81
第87図 1号墳調査前測量図(1／250) .....	59	第118図 土壙14(1／30) .....	82
第88図 1号墳(1／150) .....	60	第119図 土壙20(1／30) .....	82
第89図 1号墳出土遺物 1 .....	60	第120図 土壙49(1／30) .....	82
第90図 1号墳出土遺物 2 .....	60	第121図 土壙59(1／30) .....	83
第91図 1号墳墳丘断面(1／100) .....	61	第122図 土壙59出土遺物 1 .....	83
第92図 4号墳(1／150) .....	61	第123図 土壙59出土遺物 2 .....	84
第93図 4号墳出土遺物 1 .....	62	第124図 土壙61(1／30) .....	85
第94図 4号墳出土遺物 2 .....	62	第125図 土壙62(1／30) .....	85
第95図 14号墳(1／150) .....	62	第126図 土壙69(1／30) .....	85
第96図 建物 5(1／60) .....	63	第127図 土壙69出土遺物 .....	86
第97図 建物 6(1／80) .....	63	第128図 土壙70(1／30) .....	87
第98図 土壙35(1／30) .....	64	第129図 土壙71(1／30) .....	87
第99図 その他の出土遺物 .....	64	第130図 土壙72(1／30) .....	88
第100図 土壙43近世墓出土遺物 .....	64		

第131図 土壙73(1/30) .....	88	第163図 壇穴住居6出土遺物 .....	107
第132図 土壙73出土遺物 .....	88	第164図 壇穴住居7(1/80) .....	108
第133図 土壙78(1/30) .....	89	第165図 壇穴住居7出土遺物1 .....	109
第134図 土壙79(1/30) .....	89	第166図 壇穴住居7出土遺物2 .....	109
第135図 土壙80(1/30) .....	89	第167図 壇穴住居8(1/80) .....	110
第136図 土壙81(1/30) .....	89	第168図 壇穴住居8出土遺物1 .....	110
第137図 土壙82(1/30) .....	90	第169図 壇穴住居8出土遺物2 .....	111
第138図 土壙84(1/30) .....	91	第170図 壇穴住居8出土遺物3 .....	112
第139図 土壙89(1/30) .....	91	第171図 壇穴住居8出土遺物4 .....	112
第140図 土壙92(1/30) .....	91	第172図 壇穴住居9(1/80) .....	113
第141図 土壙95(1/30) .....	92	第173図 壇穴住居9出土遺物1 .....	114
第142図 その他の出土遺物 .....	92	第174図 壇穴住居9出土遺物2 .....	114
第143図 壇穴住居1(1/80) .....	93	第175図 壇穴住居9出土遺物3 .....	115
第144図 壇穴住居1出土遺物1 .....	94	第176図 壇穴住居10(1/80) .....	116
第145図 壇穴住居1出土遺物2 .....	94	第177図 壇穴住居10出土遺物 .....	117
第146図 壇穴住居2(1/100) .....	95	第178図 壇穴住居11(1/80) .....	117
第147図 壇穴住居2出土遺物1 .....	96	第179図 壇穴住居11出土遺物1 .....	118
第148図 壇穴住居2出土遺物2 .....	97	第180図 壇穴住居11出土遺物2 .....	118
第149図 壇穴住居2出土遺物3 .....	98	第181図 土壙1、2(1/30) .....	119
第150図 壇穴住居3(1/80) .....	99	第182図 土壙1、2出土遺物 .....	120
第151図 壇穴住居3出土遺物1 .....	100	第183図 土壙3(1/30) .....	121
第152図 壇穴住居3出土遺物2 .....	101	第184図 土壙4(1/30) .....	121
第153図 壇穴住居3出土遺物3 .....	101	第185図 土壙3出土遺物 .....	122
第154図 壇穴住居3出土遺物4 .....	102	第186図 土壙4出土遺物 .....	122
第155図 壇穴住居3出土遺物5 .....	103	第187図 土壙6(1/30) .....	123
第156図 壇穴住居4(1/80) .....	104	第188図 土壙7(1/30) .....	123
第157図 壇穴住居4出土遺物1 .....	105	第189図 土壙6出土遺物 .....	123
第158図 壇穴住居4出土遺物2 .....	106	第190図 土壙8(1/30) .....	124
第159図 壇穴住居4出土遺物3 .....	106	第191図 土壙8出土遺物 .....	124
第160図 壇穴住居5(1/80) .....	106	第192図 土壙9(1/30) .....	125
第161図 壇穴住居5出土遺物 .....	107	第193図 土壙9出土遺物 .....	125
第162図 壇穴住居6(1/80) .....	107	第194図 土壙10(1/30) .....	126

第195図 土壙10出土遺物	126	第227図 土壙30出土遺物 1	140
第196図 土壙11(1／30)	126	第228図 土壙30出土遺物 2	140
第197図 土壙11出土遺物	126	第229図 土壙31(1／30)	141
第198図 土壙12(1／30)	127	第230図 土壙31出土遺物	141
第199図 土壙15(1／30)	127	第231図 土壙32(1／30)	141
第200図 土壙15出土遺物	127	第232図 土壙32出土遺物	142
第201図 土壙16(1／30)	128	第233図 土壙33(1／30)	142
第202図 土壙17(1／30)	128	第234図 土壙34(1／30)	143
第203図 土壙16出土遺物 1	129	第235図 土壙34出土遺物 1	143
第204図 土壙16出土遺物 2	129	第236図 土壙34出土遺物 2	143
第205図 土壙18(1／30)	130	第237図 土壙35(1／30)	144
第206図 土壙18出土遺物 1	130	第238図 土壙35出土遺物	144
第207図 土壙18出土遺物 2	130	第239図 土壙36(1／30)	145
第208図 土壙19(1／30)	131	第240図 土壙36出土遺物 1	145
第209図 土壙21(1／30)	131	第241図 土壙36出土遺物 2	146
第210図 土壙21出土遺物 1	132	第242図 土壙37(1／30)	146
第211図 土壙21出土遺物 2	132	第243図 土壙38(1／30)	146
第212図 土壙22(1／30)	133	第244図 土壙39(1／30)	147
第213図 土壙22出土遺物	133	第245図 土壙40(1／30)	147
第214図 土壙23(1／30)	134	第246図 土壙39出土遺物	147
第215図 土壙24(1／30)	134	第247図 土壙40出土遺物	147
第216図 土壙25(1／30)	135	第248図 土壙41(1／30)	148
第217図 土壙25出土遺物	136	第249図 土壙41(47)出土遺物 1	148
第218図 土壙26(1／30)	137	第250図 土壙41出土遺物 2	148
第219図 土壙27(1／30)	137	第251図 土壙42(1／30)	149
第220図 土壙26、27出土遺物	137	第252図 土壙43、48(1／30)	150
第221図 土壙28(1／30)	138	第253図 土壙42出土遺物 1	151
第222図 土壙29(1／30)	138	第254図 土壙42出土遺物 2	151
第223図 土壙28出土遺物	138	第255図 土壙43出土遺物	151
第224図 土壙29出土遺物 1	139	第256図 土壙44(1／30)	152
第225図 土壙29出土遺物 2	139	第257図 土壙45(1／30)	152
第226図 土壙30(1／30)	140	第258図 土壙44出土遺物 1	153

第259図	土壌44出土遺物 2	153	第291図	土壌68出土遺物	168
第260図	土壌46(1/30)	154	第292図	土壌74(1/30)	168
第261図	土壌47(1/30)	154	第293図	土壌74出土遺物	168
第262図	土壌46出土遺物 1	155	第294図	土壌75(1/30)	169
第263図	土壌46出土遺物 2	156	第295図	土壌75出土遺物 1	169
第264図	土壌46出土遺物 3	157	第296図	土壌75出土遺物 2	170
第265図	土壌47出土遺物	158	第297図	土壌76(1/30)	171
第266図	土壌50(1/30)	158	第298図	土壌77(1/30)	171
第267図	土壌51(1/30)	158	第299図	土壌83(1/30)	172
第268図	土壌52(1/30)	159	第300図	土壌83出土遺物	172
第269図	土壌52出土遺物	159	第301図	土壌85(1/30)	172
第270図	土壌53(1/30)	160	第302図	土壌85出土遺物	172
第271図	土壌54(1/30)	160	第303図	土壌86、87(1/30)	173
第272図	土壌55(1/30)	160	第304図	土壌88(1/30)	174
第273図	土壌56(1/30)	161	第305図	土壌90(1/30)	174
第274図	土壌57(1/30)	161	第306図	土壌88出土遺物	175
第275図	土壌57出土遺物	161	第307図	土壌90出土遺物	175
第276図	土壌58(1/30)	162	第308図	土壌91(1/30)	176
第277図	土壌58出土遺物 1	162	第309図	土壌93(1/30)	176
第278図	土壌58出土遺物 2	163	第310図	土壌94(1/30)	177
第279図	土壌60(1/30)	164	第311図	土壌94出土遺物	177
第280図	土壌63(1/30)	164	第312図	段状遺構 1、2(1/80)	178
第281図	土壌63出土遺物	164	第313図	段状遺構 3(1/80)	178
第282図	土壌64(1/30)	165	第314図	段状遺構 3出土遺物	178
第283図	土壌64出土遺物	165	第315図	段状遺構 4(1/80)	178
第284図	土壌65(1/30)	166	第316図	段状遺構 5(1/80)	179
第285図	土壌66(1/30)	166	第317図	段状遺構 6(1/80)	179
第286図	土壌66出土遺物	166	第318図	段状遺構 7(1/80)	179
第287図	土壌67(1/30)	166	第319図	段状遺構 9(1/80)	179
第288図	土壌67出土遺物 1	167	第320図	段状遺構 8(1/80)	180
第289図	土壌67出土遺物 2	167	第321図	建物 1(1/80)	180
第290図	土壌68(1/30)	167	第322図	建物 2(1/80)	181

第323図 建物3(1/80) .....	181	第342図 西区全体図(1/300) .....	196
第324図 建物3出土遺物 .....	181	第343図 土壙7(1/30) .....	196
第325図 建物4(1/80) .....	182	第344図 溝6(1/80) .....	197
第326図 建物5(1/80) .....	183	第345図 溝8(1/80) .....	197
第327図 建物6(1/80) .....	183	第346図 出土遺物 .....	198
第328図 建物7(1/80) .....	184	第347図 湯原地域位置図(1/50,000) .....	199
第329図 建物8(1/80) .....	184	第348図 上ユタニ・下ユタニ散布地トレーニチ 設定図(1/2,000) .....	200
第330図 建物9(1/80) .....	185	第349図 茅森大森散布地トレーニチ設定図 (1/2,000) .....	202
第331図 建物9出土遺物 .....	185	第350図 茅森磯尾散布地トレーニチ設定図 (1/2,000) .....	203
第332図 建物10(1/80) .....	185	第351図 小川古墳推定地トレーニチ設定図 (1/2,000) .....	204
第333図 柱穴他出土遺物 .....	186	第352図 小川散布地トレーニチ設定図 (1/2,000) .....	205
第334図 1号墳墳丘図(1/150) .....	187	第353図 大平散布地トレーニチ設定図 (1/2,000) .....	206
第335図 1号墳墳丘断面(1/150) .....	188		
第336図 2号墳墳丘図(1/150) .....	189		
第337図 2号墳墳丘断面(1/150) .....	190		
第338図 2号墳主体部(1/40) .....	190		
第339図 調査位置図(1/2,000) .....	194		
第340図 東区上層全体図(1/300) .....	195		
第341図 東区下層全体図(1/300) .....	195		

## 図版目次

### 元定古墳群

- 図版1-1 遺跡遠景(南から)  
 　　2 調査後遠景(東から)
- 図版2-1 1区 南半全景(北西から)  
 　　2 1区 竪穴住居2(南東から)
- 図版3-1 1区 竪穴住居3、段状遺構3  
 　　(南から)  
 　　2 1区 竪穴住居4(西から)
- 図版4-1 1区 竪穴住居6(南から)  
 　　2 1区 竪穴住居5(南東から)

- 図版5-1 1区 竪穴住居7(南西から)  
 　　2 1区 竪穴住居8(南から)
- 図版6-1 1区 土壙1(北から)  
 　　2 1区 土壙2(南から)  
 　　3 1区 土壙4(西から)  
 　　4 1区 土壙5(北西から)  
 　　5 1区 土壙6(西から)  
 　　6 1区 土壙7(南西から)
- 図版7-1 1区 2、3、5、6号墳  
 　　(北東から)

- |                                   |                           |
|-----------------------------------|---------------------------|
| 2・1区 3、5、6号墳<br>(北東から)            | 2・2区 1号墳周溝、出土遺物<br>(北東から) |
| 図版8-1 1区 2号墳主体部(南から)              | 図版18-1 2区 4号墳(南西から)       |
| 2・1区 5号墳箱式石棺<br>(南東から)            | 2・2区 14号墳(南東から)           |
| 3・1区 5号墳箱式石棺<br>(北西から)            | 図版19-1 3区 調査後遠景(北東から)     |
| 図版9-1 1区 6号墳箱式石棺<br>(東から)         | 2・3区 近世墓、建物4周辺<br>(北から)   |
| 2・1区 6号墳箱式石棺<br>(南西から)            | 図版20-1 3区 13号墳、溝6(東から)    |
| 3・1区 6号墳箱式石棺<br>(西から)             | 2・3区 土壙28(北西から)           |
| 図版10-1 1区 7号墳全景(南西から)             | 3・3区 土壙27(北東から)           |
| 2・1区 8号墳全景(南から)                   | 図版21-1 4区 調査後遠景(東から)      |
| 図版11-1 1区 7、11、12号墳付近全景<br>(南東から) | 2・4区 全景(南から)              |
| 2・1区 12号墳全景(西から)                  | 図版22-1 4区 建物1(北から)        |
| 図版12-1 2区 竪穴住居1(北東から)             | 2・4区 建物2(北から)             |
| 2・2区 竪穴住居12(西から)                  | 図版23 出土遺物1                |
| 図版13-1 2区 竪穴住居16(南から)             | 図版24 出土遺物2                |
| 2・2区 竪穴住居11、14、16、22、24<br>(北から)  | 信実散布地、元定散布地               |
| 図版14-1 2区 竪穴住居13(東から)             | 図版25-1 信実散布地全景(西から)       |
| 2・2区 竪穴住居18、19<br>(南東から)          | 2・信実散布地トレンチ2<br>(西から)     |
| 図版15-1 2区 竪穴住居15(西から)             | 3 元定散布地全景(南西から)           |
| 2・2区 竪穴住居17(東から)                  | 上野遺跡                      |
| 図版16-1 2区 建物5(南から)                | 図版26-1 航空写真(北から)          |
| 2・2区 建物6(南から)                     | 2 調査後遠景(北から)              |
| 図版17-1 2区 1号墳(北から)                | 図版27-1 調査区中央付近(北西から)      |
|                                   | 2 調査区南半(北から)              |
|                                   | 図版28-1 土壙59(南西から)         |
|                                   | 2 土壙59東西断面(南西から)          |
|                                   | 3 土壙20(北東から)              |
|                                   | 図版29-1 竪穴住居1(北から)         |
|                                   | 2 竪穴住居2(北東から)             |
|                                   | 図版30-1 竪穴住居3(西から)         |

2 竪穴住居 4 (北から)	図版43-1 土壙46遺物出土状況 (南から)
図版31-1 竪穴住居 5 (東から)	2 土壙58遺物出土状況 (南から)
2 竪穴住居 6 (南西から)	3 土壙88遺物出土状況 (北西から)
3 竪穴住居 7 (南から)	
図版32-1 竪穴住居 8 (南西から)	図版44-1 1号墳 (南から)
2 竪穴住居 9 (南西から)	2 2号墳 (南から)
図版33-1 竪穴住居10 (北から)	3 2号墳主体部 (南から)
2 竪穴住居11 (東から)	図版45-1 定池古墳推定地 (南西から)
図版34-1 段状遺構 1、2 (南から)	2 調査風景 (北から)
2 段状遺構 3 (北から)	3 説明会風景 (西から)
3 段状遺構 5 (北東から)	図版46 出土遺物 1
図版35-1 建物 1 (南から)	図版47 出土遺物 2
2 建物 2 (北東から)	図版48 出土遺物 3
図版36-1 建物 3 (東から)	図版49 出土遺物 4
2 建物 4 (南から)	図版50 出土遺物 5
3 建物 5 (南から)	大内原遺跡
図版37-1 土壙 1、2 断面 (東から)	図版51-1 第1次調査後遠景 (北西から)
2 土壙 1、2 (北東から)	2 東区上層全景 (北西から)
3 土壙22、23 (北から)	図版52-1 東区下層溝 (北西から)
図版38-1 土壙 8 断面 (東から)	2 西区全景 (北から)
2 土壙 9 断面 (南から)	図版53 出土遺物
3 土壙25断面 (西から)	湯原地域
図版39-1 土壙 8 (南から)	図版54-1 上ユタニ散布地 T 4
2 土壙 9 (南から)	2 下ユタニ散布地 T 3
3 土壙25 (西から)	3 茅森大森散布地 T 3、4
図版40-1 土壙74断面 (北から)	図版55-1 茅森磯尾散布地
2 土壙75断面 (北から)	2 小川古墳推定地 T 2
3 土壙76断面 (北から)	3 大平散布地
図版41-1 土壙36 (西から)	川上地域
2 土壙43、48 (北東から)	図版56-1 城山東遺跡 T 2断面
図版42-1 土壙52 (東から)	2 下郷原和田遺跡
2 土壙86、87 (北西から)	3 下郷原田代No 2地点

# 1 発掘調査の経緯と経過

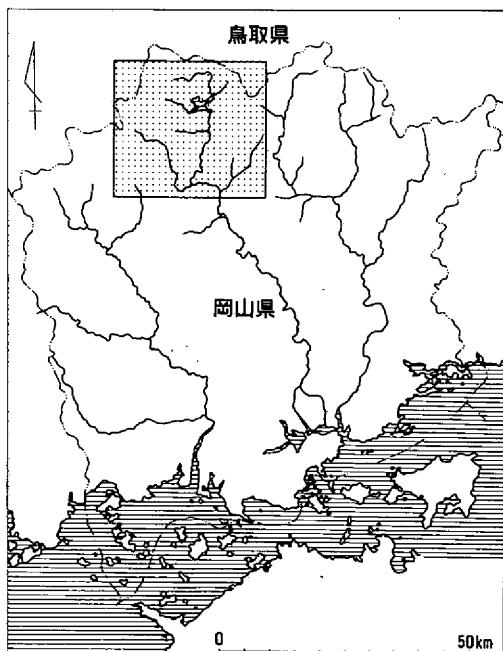
## 1 発掘調査に至るまで

中国横断自動車道は、岡山～米子間を南北に結ぶ高規格幹線道路網計画の一貫として位置づけられる、高速道路である。建設予定路線について南から順に記すと、岡山総社インター・チエンジから北房ジャンクションまでの28kmを貫いて、その北は既存の中国横断道を利用し、さらに落合ジャンクションから川上インター・チエンジの間30.3kmを経て鳥取県境までの約6.1kmを繋ぐもので、岡山県内における新規建設路線の総延長のみで総長64.4kmに達する、一大事業である。

予定路線が公表され、日本道路公団に対して施工命令が出されたのを機に、岡山県教育委員会は、従前どおり、さっそくこの路線および周辺にわたって埋蔵文化財の分布調査に取り組むこととした。建設に先立つ分布調査は、昭和50（1975）年度事業として文化庁より国庫補助を受け「中国横断自動車道埋蔵文化財分布調査委員会」を結成して、実施する運びとなった。こ

の委員会は関係する3市7町1村の教育委員会教育長ならびに各市町村職員、県内考古学研究者、および岡山県教育委員会の職員などによって構成され、昭和50年12月から翌年3月までの落葉の時期に合わせておこなわれ、これまで周知されていた遺跡数のおよそ10倍に及ぶ多大な成果をおさめて終結した。この事業に関する成果はすでに『中国横断自動車道埋蔵文化財分布調査概報』としてまとめたところであり、それぞれの内容の詳述についてはここでは割愛する。

しかしながら、この事業が終了したのち湯原町～落合町間については、これまでとまったく異なる大きな路線変更をきました



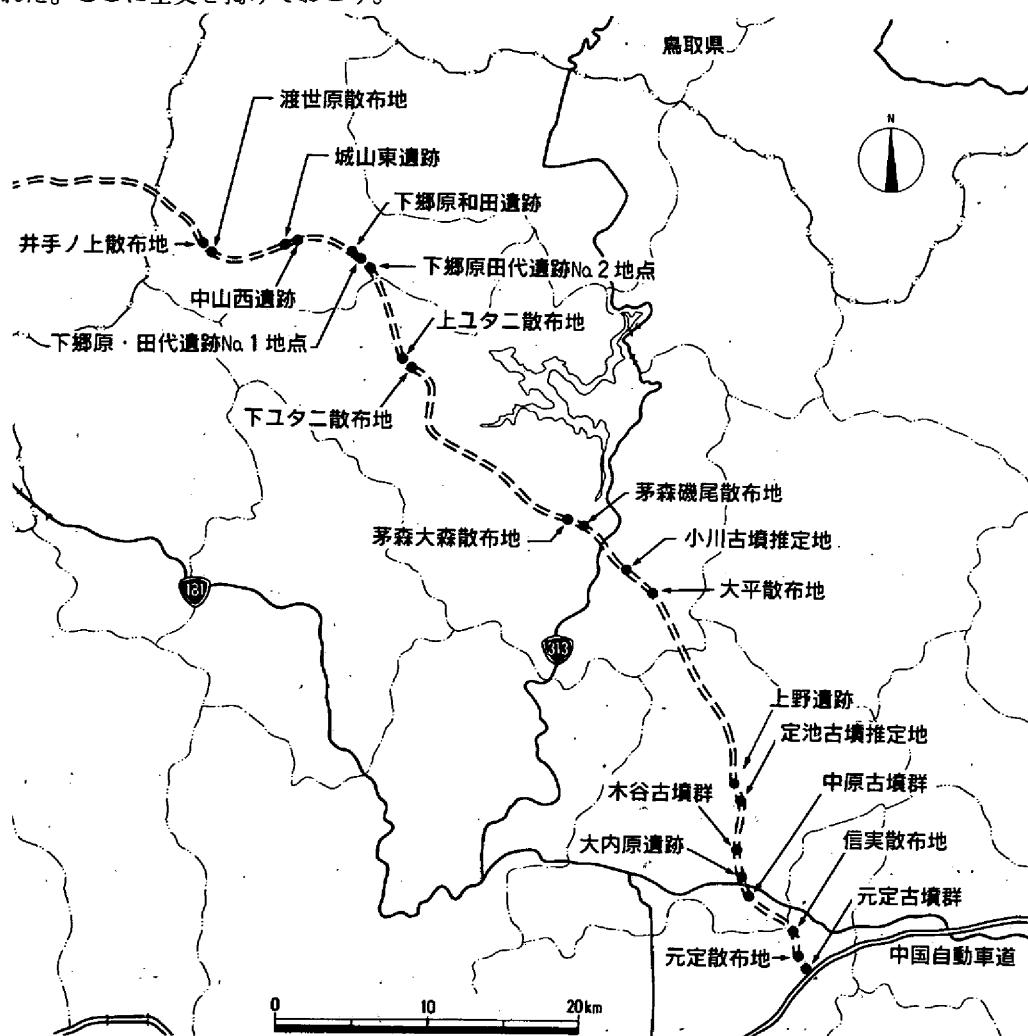
第1図 収載遺跡の位置図

## 1. 発掘調査に至るまで

ので、この区間に関しては県文化課の専門職員によって、再度、綿密に分布調査を重ねる事態が生じたばかりでなく、その後においても、広大な対象面積であるだけに繰り返し分布調査がおこなわれ、あらたに追加された調査対象地も少なくない。

ひき続き、保存問題の生じた、久世町木谷8号墳および湯原町古久見古墳群との二つの物件の対応について記しておきたい。

まず木谷8号墳については、平成元年7月11日付け久教第687号をもって久世町文化財保護審議会会长菱川克士・同町教育委員会教育長宮島久夫の両名によって、日本道路公団広島建設局津山工事事務所所長あてに「中国横断自動車道建設用地に係る遺跡の保存要望について」との表題のもとに、同町木字上口上に所在する木谷古墳群中の8号墳に対する保存要請がなされた。ここに全文を掲げておこう。



第2図 調査遺跡位置図 (1/500,000)

平素より本町の文化財保護行政には何かとご支援ご協力をいただいておりますことを厚くお礼申し上げます。

さて、高速交通網としての中国横断自動車道建設における本町ルートにつきましては、貴職の積極的なご努力により着実にその進捗をみているところであり、ご同慶の至りでございます。

つきましては、当ルート上に保存いたしております下記遺跡（横穴式石室、保存状態良好）について小規模ではありますが、本町では他に例がなく、教育上からも極めて貴重な文化財の一つとなっております。

そこで、当遺跡の今後の保存について本町の保護審議会では、可能な限り現状保存を第1希望とし、これが道路建設の上で不可能な場合には第2として移設保存を要望するよう決定いたしました。

ここに、この旨強く要望いたしますので、何とぞご賢察の上、善処方をよろしくお願ひ申し上げます。

なお、ご承認をいただいた上は、具体的にご協議申し上げたいと存じます。

上記のような内容であった。時を移さず同年7月18日には、津山工事事務所林森利博名で、岡山県教育委員会に対して、久世町より上掲の公文書が提出されたが、県としてはどう考えるか見解を求められた。また、この事業にかかる埋蔵文化財保護対策委員会からも保存の方向で検討するよう要請のあったことは言うまでもない。ここに至って、県教育委員会と、日本道路公団広島建設局および津山工事事務所との間で、昭和62年度から平成元年度まで数次にわたり協議がもたれたが、結論的にいえば、用地買収もすでに完了した段階であり、改めて路線変更を考慮することはもはや至難であるところから、当墳の内部主体である横穴式石室の石材すべてを公団の負担のもとに運搬し、移築保存を図ることで決着をみた。こうして当面、久世町の指定する所定の場所へ石室石材を運び出し、将来、復元作業をおこなう準備が整ったのである。

もう一つの、湯原町古久見古墳群の顛末については以下のとおりであった。この古久見古墳群は大小の円墳9基から成るか、または、うち2墳が1基の前方後円墳となる可能性を秘めるものであったが、いずれにせよ当初の予定路線はすべての古墳に接するがごとく、あるいは数基がその墳端を破壊されるような計画となっていた。少なくとも東端の1号墳と西端の8号墳および9号墳は切断される法面の中に全てではなく部分的に包摂される設計図となっており、その他の墳端も崩される危険性をはらんでいた。取り扱いをめぐって、県教育委員会と公団とのやりとりが開始されたのは、そのためである。公団側の言い分は、取得した用地内の調査については覚え書き協定にもとづき当然のこととして経費負担ができるとはいえ、用地外に関してまで所用経費をもつことはできない、と原則論に立って力説する。対する、県教育委員会側

## 2. 発掘調査にの開始

は、調査対象の物件が古墳という特殊な属性をもつゆえ、その半分または3分の1を限定調査したのち残存部を放置することは問題で、まったく記録保存の名にも値しない暴論だと主張して譲らない。仮に人骨が出土した場合その上半または下半部のみを取り出す行為など社会通念からしてもとうてい許されない、と激しく反論したのであった。双方による協議は、試行錯誤のうえ、法面仕上げの方法を再検討することによって、ようやく歩み寄ることができた。それは、本来の緩やかな一つの法面を、全体として深く切り込みながら法面の数を2ないし3段に分け増やし、その擁壁の角度をも急勾配に変更する、というものであった。こうして、当町で唯一の古墳群にたいする一切の発掘調査は回避され、現状保存されることになったのである。

## 2 発掘調査の開始

いよいよ発掘調査に向けての動きが活発になってきたのは、昭和61（1986）年も年の瀬の押し迫った時期であった。急ぎ取り組んだ分布調査事業がすでに完了して、ゆうに10年余を経過したこととなる。

同年12月8日、県庁内においては、花房副知事を中心として、建設促進側から土木部長はじめ道路建設課課長代理や参事など主要な役職職員が出席するいっぽう、文化財保存行政を担う県教育庁からも教育長、教育次長、文化課長などおもだつた役職職員が参集し、中国横断自動車道にかかる埋蔵文化財問題をめぐって、協議が開始された。翌62（1987）年2月2日、雪の舞とぶ寒中であったが、県庁内でふたたび副知事を中心にほぼ上記のとおりの関係者が相寄って、対象地に占める埋蔵文化財の数と規模および要する調査期間について論議され、これらに対して早急に見通しを立てる必要がある、との認識で一致したところである。まずもって、これらの点をおさえなければ、ひきつづき実施される建設工程の予測がまったく定まらないからである。また別の表現をすれば、ここ数年来、建設工事の前段においておこなわれる、地形地質、気候、水利、経済、環境、関連公共事業、用地など多岐にわたる調査の中にあって、文化財問題の解決こそ建設全般にとって最も重要な影響を与え、その正否の鍵をにぎるもの、という共通認識が高まったともいえる。文化財問題が優先して論議されはじめたのは、ゆえなきことではなかった。

こうして、ようやく同年2月18日、快晴のもと、岡山県道路建設課の呼び掛けに応じて、日本道路公団関係者はいうまでもなく県庁内の関係各課すべてが一同に会し、はじめて中国横断自動車道岡山米子線一落合川上間工事概要一が示され、建設上の諸問題があれこれ熱心に検討されはじめたのである。

ことが始まると、今まで停滞的であった行政的対応は逆に加速度的に進行する。まず昭和62

## 1 発掘調査の経緯と経過

年度事業として、早々に、県北の川上村内における遺跡の範囲確認の調査を急ぐよう要請があった。日本道路公団の受けた第7次施工命令区間が米子～川上間36.3kmとされたため、岡山県にふくまれる川上村分がすでにこの区間の一部に入っていたからである。岡山県教育委員会としては、施工区間が両県にまたがるとは予想せず、したがってそれほど早急に遺跡調査に取り組まざるを得ない状況がおとずれるとは想ていなかつたため、この年度における人的配置はまったく考慮していなかつたのである。やむなく、本年度における当面の試掘調査には、9月から順次、1カ月交代で文化財保護主査、文化財保護主幹、課長、と調査二課の役職職員をもってあてることとした。以下にその結果を略述することにする。

井手ノ上散布地（真庭郡川上村上徳、調査面積230m<sup>2</sup>、担当者正岡睦夫）

長短あわせて5本のトレンチを設定し試掘調査を試みたが、遺構・遺物ともに検出されず、今後、発掘調査は必要ないもの、と判断された。

渡世原散布地（真庭郡川上村上徳、調査面積100m<sup>2</sup>、担当者正岡睦夫）

調査地は、井手ノ上散布地に隣接する真南にあたり、3本の試掘溝を入れたが、上記と同様何らの遺構も見い出すことができなかつた。本格的な発掘調査の必要はない、と考えられた。

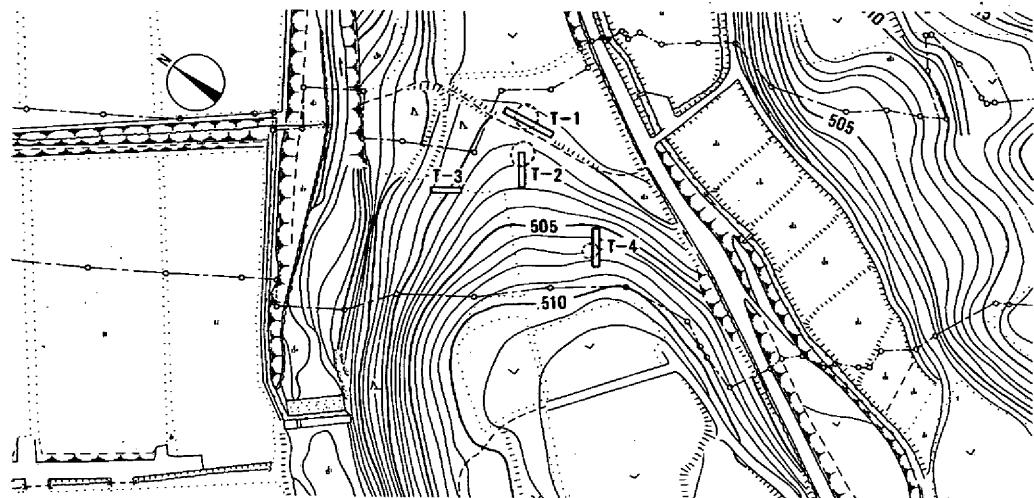
中山西散布地（真庭郡川上村延助・中山西、調査面積238m<sup>2</sup>、担当者葛原克人）

標高525mないし530mの大根畠に7本の試掘溝を設定。この所は、開墾でかなり削平を受けていたため、今回のトレンチ調査では明瞭な遺構を検出できなかつたが、縄文時代早期の遺物が散見できるので、再度遺跡範囲の確認につとめ、全面調査に入る必要がある。

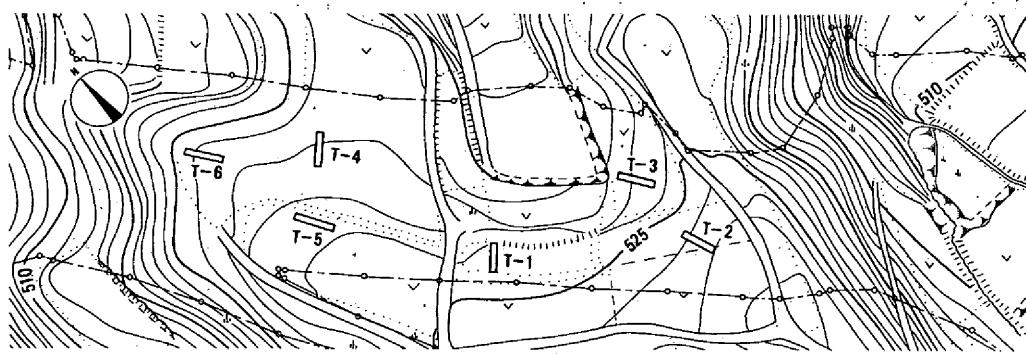


第3図 中山西、城山東遺跡トレンチ位置図（1/5000）

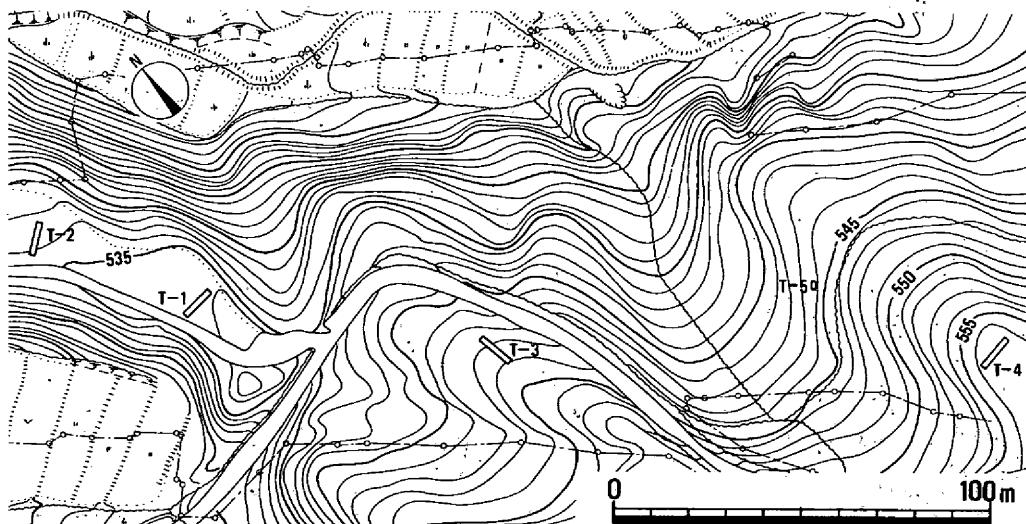
## 2. 発掘調査に於ける開始



第4図 下郷原・和田遺跡トレンチ位置図（1/2000）



第5図 下郷原・田代No.1地点トレンチ位置図（1/2000）



第6図 下郷原・田代No.2地点トレンチ位置図（1/2000）

城山東散布地（真庭郡川上村延助・城山東、調査面積142m<sup>2</sup>、担当者葛原克人）

合計10本の試掘溝を設定し、発掘調査をおこなった結果、溝状遺構および柱穴などを検出したほか、姶良火山灰層の直下から黒耀石片の出土する地点もあり、さらに遺跡範囲の確定につとめながら、全面調査に備えなければならない。

下郷原和田遺跡（真庭郡川上村下郷原・和田、調査面積75m<sup>2</sup>、担当者正岡睦夫）

4本の試掘溝を掘りあげ、竪穴住居址3軒が各試掘溝において認められた。弥生時代終末から古墳時代に属するこれら竪穴住居址からは、山陰系土器とともに碧玉片が数点出土しているため玉造工房跡の可能性もあり、本格的な全面調査が必要である。

下郷原田代No.1 地点（真庭郡川上村下郷原・田代、調査面積114m<sup>2</sup>、担当者松本和男・正岡）

試掘溝を6本設定した。若干の柱穴と弥生時代終末期の土器片を検出したにすぎないが、弥生時代の集落遺跡と考えられるので、今後、調査が必要である。

下郷原田代No.2 地点（真庭郡川上村下郷原・田代、調査面積84m<sup>2</sup>、担当者松本和男）

遺構は検出されなかったものの表土直下から縄文時代早期の土器片が出土するのに加え、姶良火山灰層の直下からも黒耀石・安山岩・チャートなどの剥片が検出されたため、先土器時代と縄文時代の遺跡が現れるものとおもわれる。調査を要する。

そして全面調査は、翌昭和63年度から開始され、工事工程と照らしあわせながら北から順次、川上村、湯原町、久世町、落合町へと南下し、あしかけ4年間を要したところであり、表1に示した発掘工程表にじたがって調査を進めた。

昭和63年度には、下澤公明と大智浩との2名の調査員で広大な川上インター・エンジ内に所在する中山西遺跡と城山東遺跡について、その範囲を絞り込む作業と合わせ、その後の全面調査に主力を傾注した。平成元年度からは一挙に調査員を増員し6人体制をとってことにあたり、初期の目的を果たすよう懸命の努力をはらったところである。その成果については、年次ごとに『岡山県埋蔵文化財報告』をもって速報したとおりである。

調査日程表

年度	昭和62年度				昭和63年度				平成元年度				平成2年度				平成3年度			
	第1	第2	第3	第4	第1	第2	第3	第4	第1	第2	第3	第4	第1	第2	第3	第4	第1	第2	第3	第4
町村名	川上村				散布地試掘				中山西・城山東遺跡				城山東・中山西・和田遺跡							
	湯原町				小川散布地				散布地確認調査											
	久世町								上野遺跡				中原古墳群				中原古墳群			
	落合町								木谷古墳群				大内原遺跡				元定古墳群			

### 3. 調査体制

## 3. 調査体制

### (1) 行政組織

昭和62年度（1987年度）

#### 岡山県教育委員会文化課

課長 高橋 誠記（12月15日まで）

吉尾 啓介（12月16日以降）

課長代理 河野 衛

課長補佐 伊藤 晃  
（兼星云文化財係長）

主査 藤川 洋二

#### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 橋本 泰夫

#### 総務課

課長 佐々木 清

総務主幹 藤本 信康

主任 花本 静夫、岡田 祥司

#### 調査第二課

課長 葛原 克人

文化財保護主幹  
（兼第一係長） 正岡 陸夫

文化財保護主査  
（兼第二係長） 松本 和男

昭和63年度（1988年度）

#### 岡山県教育委員会文化課

課長 吉尾 啓介

課長代理 河野 衛

課長補佐 伊藤 晃  
（兼星云文化財係長）

主査 藤川 洋二

#### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 水田 稔

#### 総務課

課長 佐々木 清

総務主幹 藤本 信康

主任 花本 静夫、岡田 祥司

片山 淳司

#### 調査第一課

課長 河本 清

#### 第二係

課長補佐 下澤 公明  
（兼係長）

主任 大智 浩

平成元年度（1989年度）

#### 岡山県教育委員会文化課

課長 吉尾 啓介（11月30日まで）

鬼澤 佳弘（12月1日以降）

課長代理 河野 衛

課長補佐 伊藤 晃  
（兼星云文化財係長）

主査 藤川 洋二

#### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 長瀬日出明

次長 河本 清

#### 総務課

課長 竹原 成信

課長補佐 藤本 信康  
（兼総務係長）

主任 岡田 祥司、平松 郁男

片山 淳司

#### 調査第一課

課長事務取扱 河本 清

#### 第二係

課長補佐 下澤 公明  
（兼係長）

文化財保護主査 山磨 康平、福田 正継

文化財保護主事 大智 浩、松岡浩太郎

主任 池上 博

平成2年度（1990年度）

## 岡山県教育委員会文化課

課長 鬼澤 佳弘

課長代理 光吉 勝彦

課長補佐  
(兼埋蔵文化財係長) 伊藤 晃

主査 藤川 洋二

## 岡山県古代吉備文化財センター

所長 長瀬日出明

次長 河本 清

## 総務課

課長 竹原 成信

課長補佐  
(兼総務係長) 藤本 信康

主任 平松 郁男、坂本 英幸

## 調査第一課

課長事務取扱 河本 清

## 第二係

課長補佐  
(兼係長) 下澤 公明

文化財保護主査 山磨 康平、福田 正継

文化財保護主事 松岡浩太郎

主事 池上 博

平成3年度（1991年度）

## 岡山県教育委員会文化課

課長 鬼澤 佳弘

課長代理 大橋 義則

課長補佐  
(兼埋蔵文化財係長) 柳瀬 昭彦

主査 時長 勇

## 岡山県古代吉備文化財センター

所長 横山 常實

次長 河本 清

## 総務課

課長 藤本 信康

課長補佐  
(兼係長) 小西 親男

主任 平松 郁男

主任 坂本 英幸

## 調査第三課

課長 伊藤 晃

文化財保護主幹 下澤 公明

## 第二係

係長 福田 正継

文化財保護主事 松岡浩太郎、安井 悟

主事 氏平 昭則

以上、発掘調査体制の直接的な担当者のみを列記したが、この事業に対する取り組みは、近年にない熱意のこもったもので、いわば全県庁あげての促進・協力体制がとられたといって、過言ではない。県庁内には、おそらく全国的にも初めてとおもわれる「幹線自動車道埋蔵文化財対策協議会」が設置されたのである。この「協議会」は、岡山県土木部次長を座長にえらび教育次長を副座長として、関係するあらゆる課の課長ならびに所属長をもって構成され、そのもとに、さらに課長代理・参事・主幹など実務担当者からなる「幹事会」が組織されて、工事工程の細かな進捗状況や、その事前に終了しておかなければならぬあらゆる物件とくに埋蔵文化財に関する詳細な打ち合わせがもたれたのであって、尽力いただいた方々の御芳名は逐一とても列記しえない数であったことを、付記しておきたい。

なお、日々の発掘作業にはおもに地元の方々の参加を得て、一丸となってともに汗して、祖先の残した文化遺産を蘇らせたところである。

## 3. 調査体制

## (2) 対策委員会記録

開催年月日	場 所	審 議 事 項
昭和62. 10. 7	真庭郡川上村全域	第一次調査の対象地すべてを現地視察
昭和63. 5. 20	真庭郡川上村中山西遺跡	昭和63年度発掘調査計画について説明し、 発掘調査方法について検討する
昭和63. 11. 8	真庭郡川上村中山西遺跡 〃 城山東遺跡	発掘調査の現地指導をうける
平成元. 6. 20	真庭郡川上村和田遺跡 〃 久世町上野遺跡	平成元年度発掘調査計画を説明したのち、 発掘調査の現地指導をうける
平成元. 11. 14	真庭郡川上村田代遺跡 〃 久世町木谷古墳群 〃 〃 上野遺跡	発掘調査の現地指導
平成2. 2. 16	真庭郡久世町木谷古墳群 〃 上野遺跡	発掘調査方法についての現地指導
平成2. 5. 28	真庭郡久世町木谷古墳群 〃 上野遺跡	発掘調査の中間検討会
平成2. 10. 16	真庭郡久世町木谷古墳群 〃 上野遺跡	同じく発掘調査の途中における調査方法 の検討会
平成3. 2. 5	真庭郡久世町木谷古墳群 〃 落合町中原古墳群	調査の終盤をむかえ、遺漏がないかを検 討調査開始に先立ち、調査方法検討
平成3. 5. 9	真庭郡落合町中原古墳群 〃 〃 元定古墳群	平成3年度発掘調査計画を説明 発掘調査方法について現地指導
平成3. 7. 22	真庭郡落合町中原古墳群	横断道関係の調査が最終段階に入り、全 体的指導および今後の計画について協議
平成5. 2. 4	岡山県古代吉備文化財セ ンター	調査報告書の作成計画及び作成状況につ いて協議
平成5. 11. 2	〃	報告書の第1分冊の検討と第2分冊の作 成状況について協議

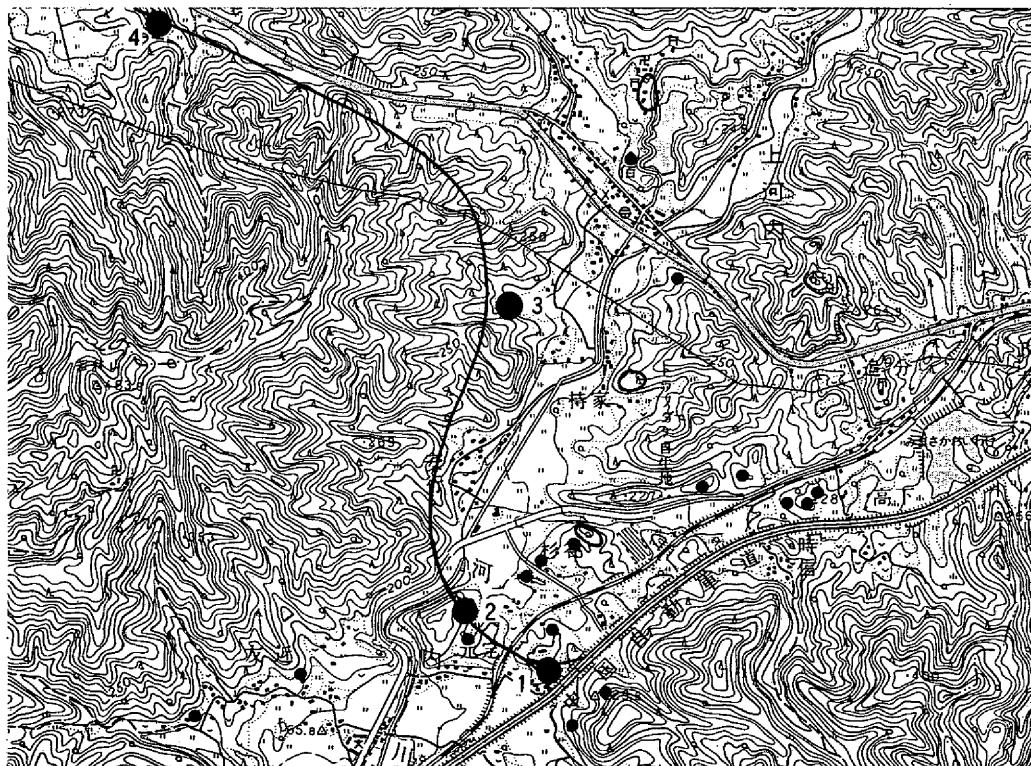
## 2 落合地域の調査

### 1. 調査の経過

昭和62年度から川上地域で始まった横断道落合、川上間の調査は、平成3年までの足掛け5年の年月にわたった。この間落合地域での調査は、後半期の平成2、3年度に久世地域と併行しながら実施した。

当地域内の調査対象は、3カ所であった。このうち信実散布地と元定散布地の2カ所については、確認調査により遺構の把握をまず行うこととなり、前者については、平成2年7月2日から7月15日の間に第2班が実施し、後者については、第1班が同年11月に実施した。調査の結果は、いずれも遺構は確認されずトレンチ調査のみで終了した。

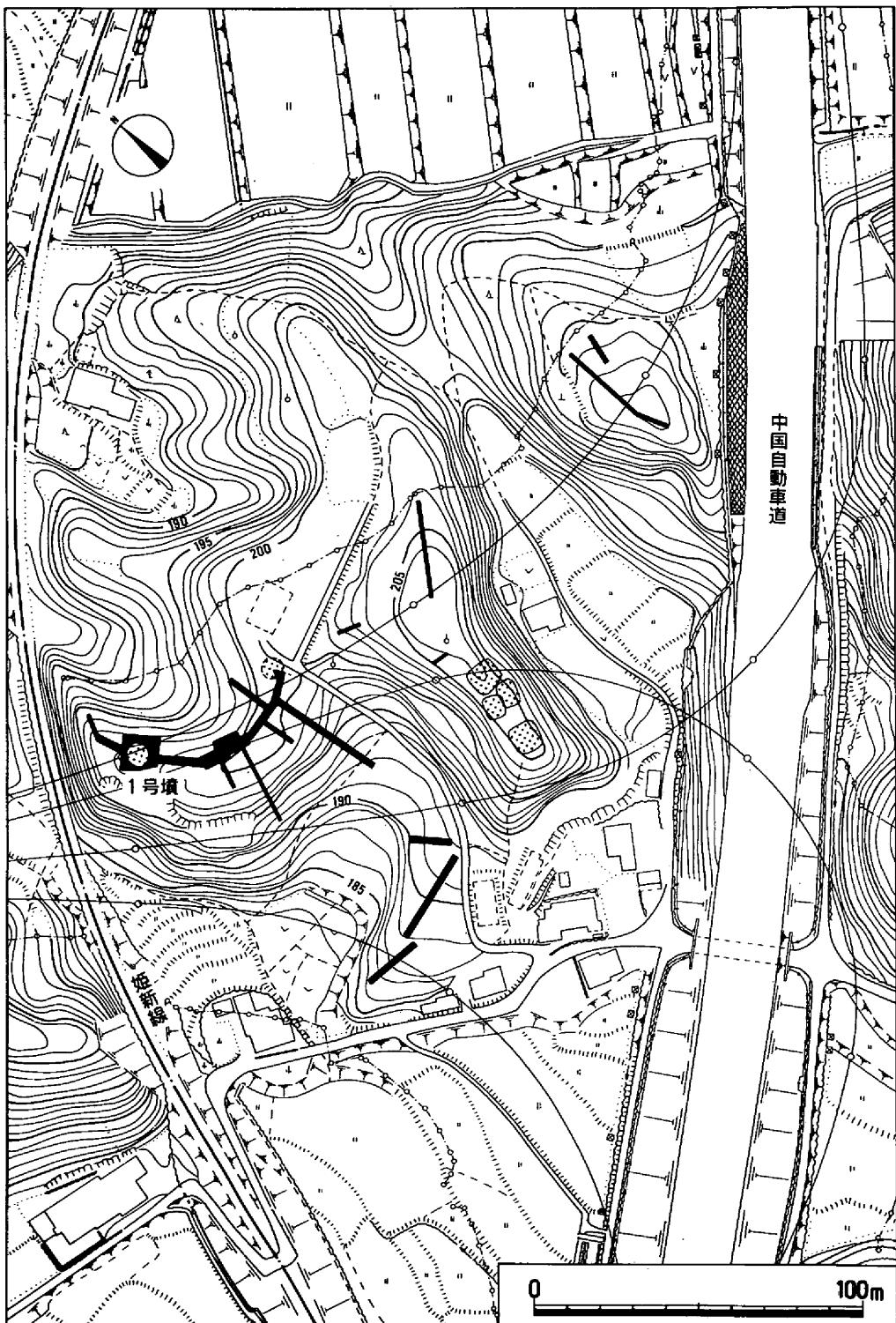
元定古墳群については、当初1基の古墳のみ確認されていたため元定古墳と呼称していたものの、周辺部の踏査や確認調査により新たに複数の古墳の存在が確認されたため古墳群と名称



1. 元定古墳群 2. 元定散布地 3. 信定散布地 4. 中原古墳群（久世）

第7図 落合地域位置図 (1/25,000)

1. 調査の経過



第8図 元定古墳群トレンチ設定図 (1/2,000)

変更した。

調査は、元定散布地と並行して、平成2年11月より第1班が古墳の調査を開始し併せて周辺部のトレンチ調査を行った。確認調査と踏査により調査の対象範囲が大幅に拡大したために、平成2年度末までの調査日程としてまず元定1号墳（2区）の調査と第1区の調査を先行して終了させることになった。

年度の改まった平成3年4月からは、工事工程が迫ってきたことや元定古墳群の担当者2名の異動が行われたため急きょ久世地域を担当していた第2班と新たに加わった2名の担当者の4名の合同により元定古墳群の残り2～4区の調査を実施し、5月10日をもって落合地域の調査を全て終了した。

## 日誌抄

平成2年	剥ぎと3区の確認調査。
7月2日 落合地域の調査開始。	28、29日 3区検出作業（古墳周溝検出）。
2日～15日 この間信実散布地の確認調査 (第2班福田、松岡)。	2月21日 1区、2、3、5、6号墳の調査終了。
11月1日 元定散布地、古墳群の調査開始 (第1班山磨、池上)。	3月12日 1区、主に竪穴住居の調査終了。
6日～9日 元定散布地の確認調査。	7日～13日 この間4区の確認調査 (柱穴検出)。
13日 元定1号墳の掘り下げ。	12日～28日 1区、丘陵下端の遺構の調査。
14日 1号墳立地の丘陵の確認調査開始 (柱穴、土壙、古墳、住居検出)。	3月28日 1区及び2区の1号墳の調査終了。
17日 南丘陵(2区)の踏査で新たな古墳確 認、1号墳調査の続行。	4月 担当者2名の異動により、福田、安 井、松岡、氏平の4名による新体制 で元定古墳群の残り2～4区の調査 再開。
26日 元定1号墳の墳丘下に1号住居を確認。	1日～30日 4区、建物、土壙、近世土壙 墓等の検出。3区古墳、建物、土壙 等の調査。
11月29日～12月6日 この間中原古墳群の調査 のため中断。	5月1日～10日 3区、各遺構の実測、写真撮 影。2区、竪穴住居、建物、土壙等 の調査。
12月7日 元定古墳群の調査再開。	5月10日 平成2年11月から調査を開始した元 定古墳群の調査を5月10日を持って 全て終了する。
8日～21日 元定1号墳、1号住居の調査、 2区丘陵部の確認調査(住居検出)。	
25日 1区、2、3号墳の表土剥ぎ、(この 間に5、6号墳の検出)。	
平成3年	
1月16日～25日 重機を使用し2区丘陵の表土	

## 2. 元定古墳群

# 2. 元定古墳群

## 1. 調査の概要

### 第1調査区

1区で検出した遺構は、古墳時代の直径10m前後的小規模古墳8基と弥生時代の後期を中心とする竪穴住居8軒、これに伴う柱穴群、土壙（貯蔵穴）等である。

古墳8基は、いずれも削平が著しく、主体部の残存していたものは、第1調査区南端の尾根上の3、5、6号墳のみであった。3号墳は、木棺直葬、5、6号墳は、箱式石棺の主体部を検出した。いずれも副葬品は認められず、周構内から若干の遺物の出土があったのみである。

この他、出土遺物は認められなかったが、縄文時代と考えられる動物捕獲用の落とし穴4基を検出している。

### 第2調査区

調査区の西端に位置している1号墳のみが、当初の対象であった。1号墳は、直径約7mの円墳であったが、墳丘がかなり流失していたため、主体部を検出することができなかった。1号墳調査後の丘陵部の調査の結果、縄文時代～古墳時代、近世の遺構が検出された。

縄文時代の遺構としては、第1調査区と同様な動物捕獲用の落とし穴1基を検出している。

弥生時代の遺構としては、竪穴住居8軒、土壙3基を検出した。住居跡は、いずれも円形プランを持ち、直径3～10mのものであった。そのうち1軒からは、柱穴と中央ピットを結び、住居外へ延びる溝が検出された。遺物は少量であるが、後期と考えられる土器が土壙および住居跡から出土している。

1号墳以外の古墳時代の遺構としては、方形の竪穴住居4軒、1間×2間の方向を同じくする掘立柱建物2棟、周溝の一部のみ残存する古墳2基（4、14号墳）を検出した。4号墳周溝から6世紀初頭の須恵器が出土した。

その他、近世と考えられる遺構として、土壙13基、溝2条、柱穴約70本を検出した。

### 第3調査区

第1、2調査区よりやや低い標高185～190mの南西に延びる尾根上に位置する調査区で、弥生時代、古墳時代、および近世の遺構を検出した。

弥生時代の遺構としては、土壙2基を検出し、うち1基は後期の土器を出土する袋状土壙であった。

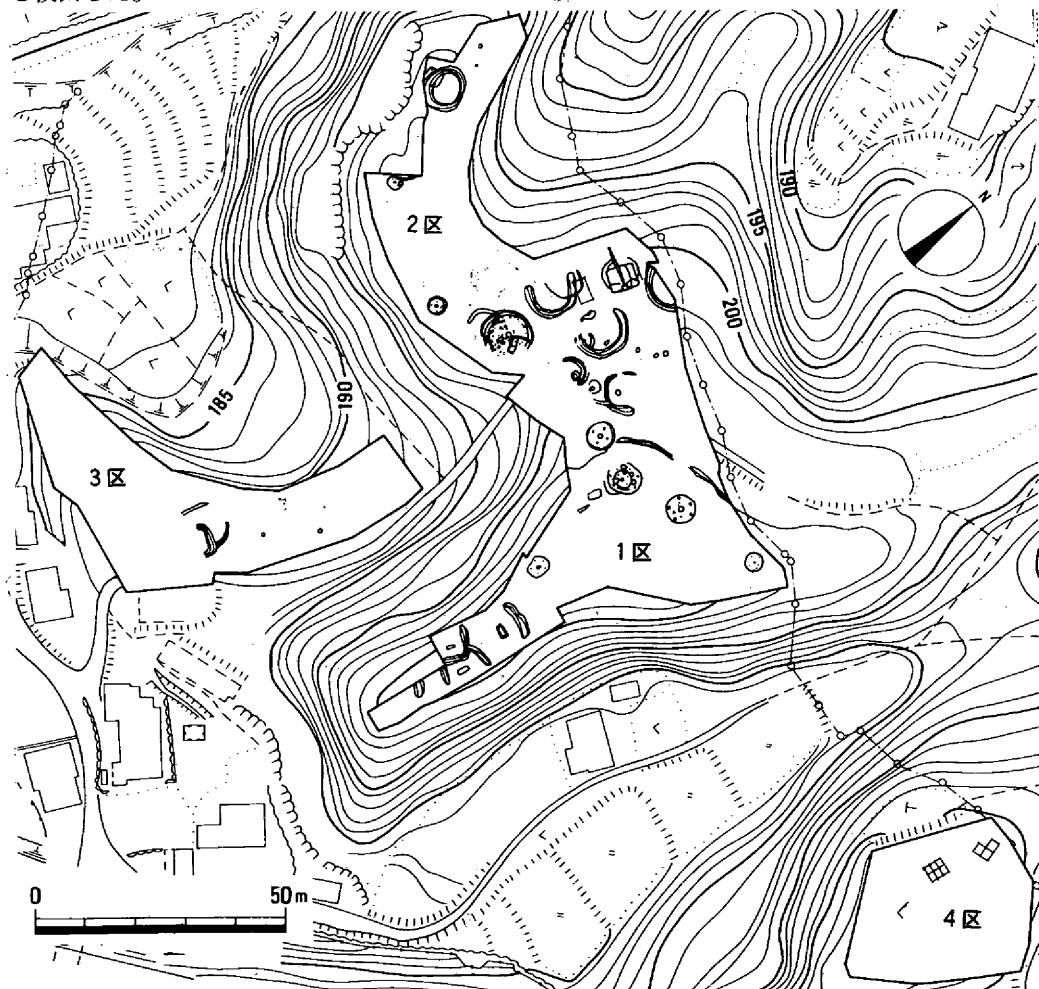
古墳は、周溝のみが残る10号墳と13号墳の2基が切り合った状態で検出し、10号墳のほうが古いことが確認された。

近世には、この調査区南東部は屋敷地になっていたようで、東西25m以上南北10m以上の平坦面が造成されており、掘立柱建物、土壙を検出した。その他、近世土壙墓4基、時期不明の土壙2基、溝3条、柱穴数本を検出した。

#### 第4調査区

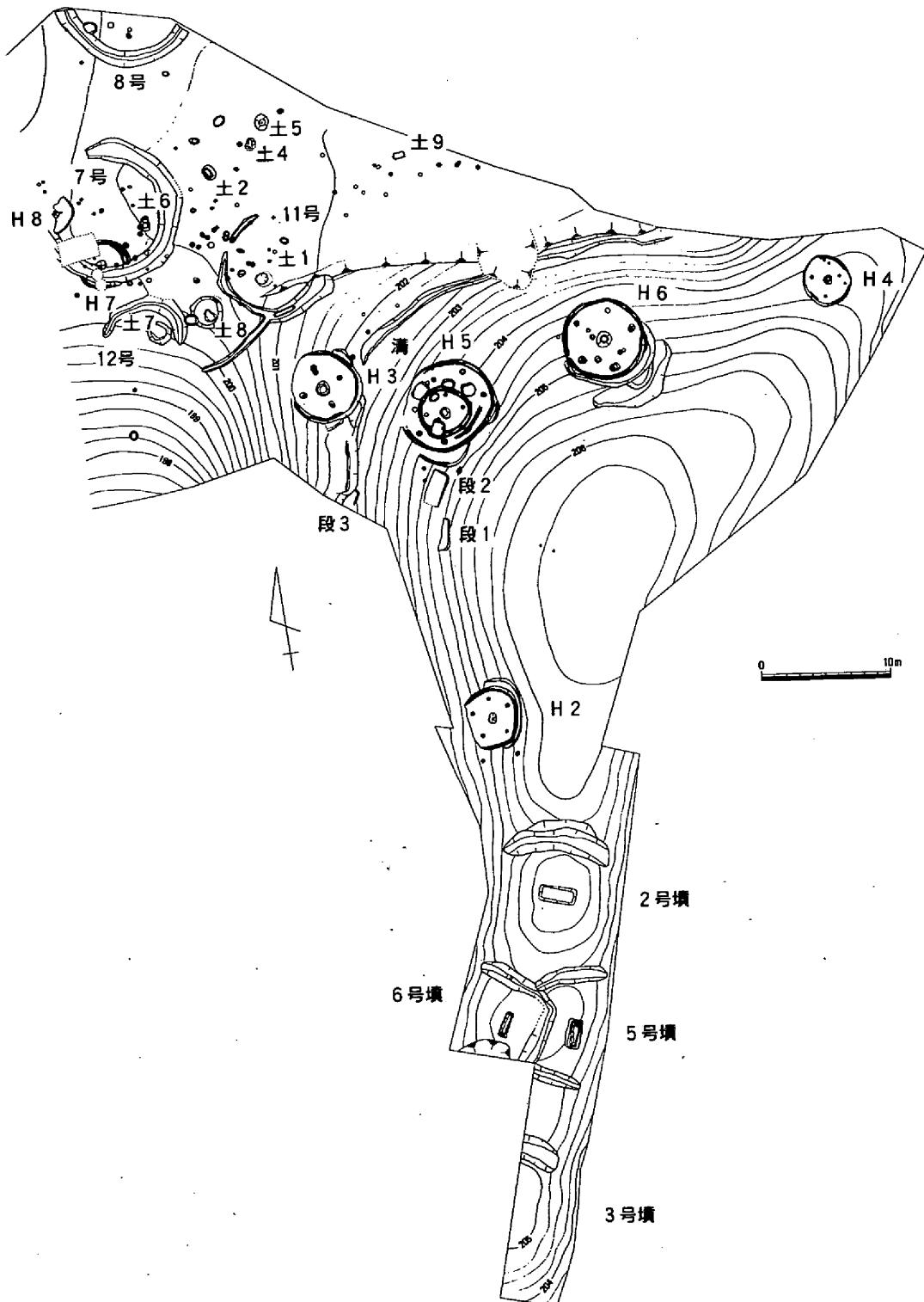
第1～3調査区から東へ約100m離れた標高205～208mの丘陵上に位置する。北に向かって緩やかに下がる斜面に、弥生時代後期の土器を伴う掘立柱建物3棟と柵列を検出した。

その他、古銭などの遺物を伴う近世の土壙墓9基、古道1本、時期不明の土壙5基、溝3条を検出した。



第9図 遺構配置図 (1/1,500)

2. 元定古墳群



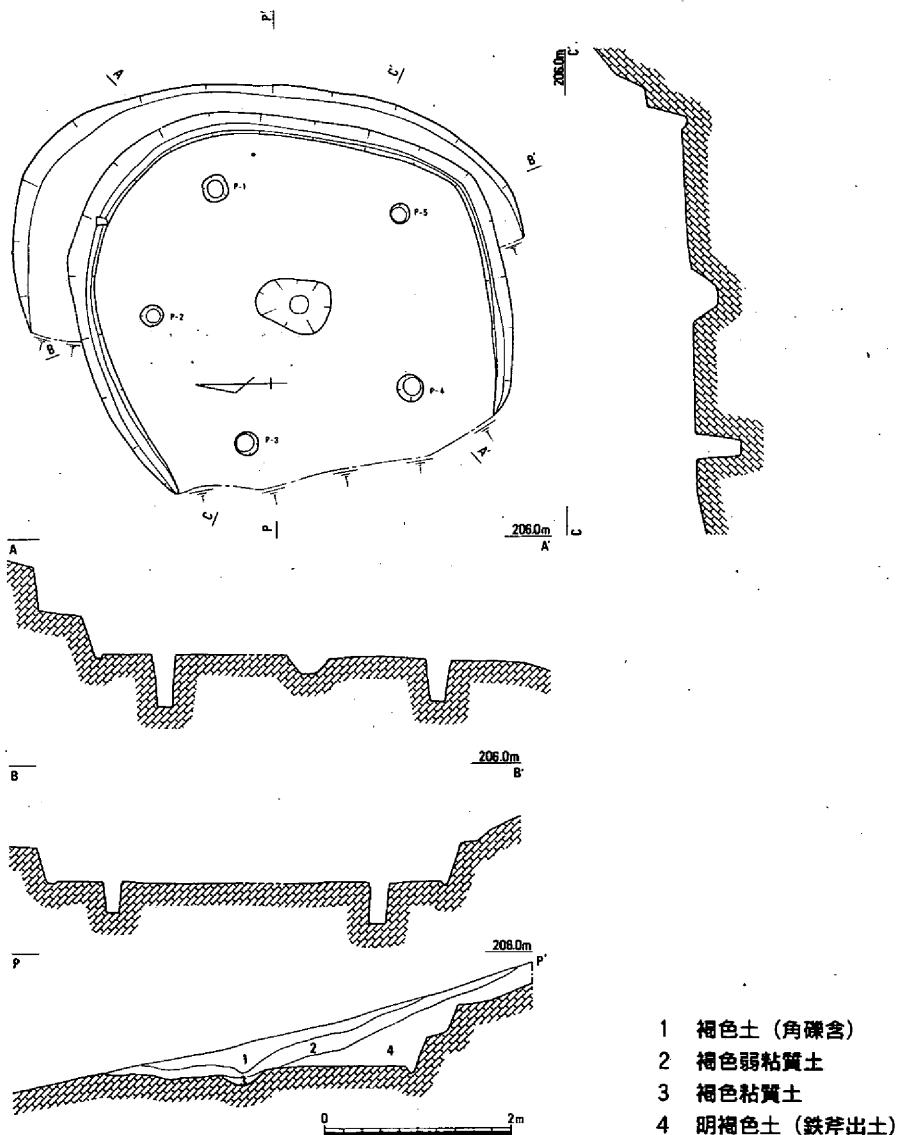
第10図 1区全体図 (1/500)

## 2. 第1調査区

## 1. 弥生時代の遺構・遺物

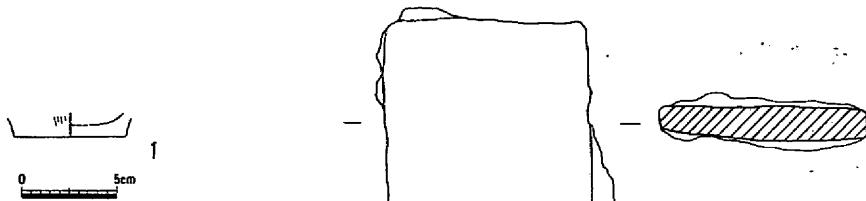
## 竪穴住居

## 竪穴住居2

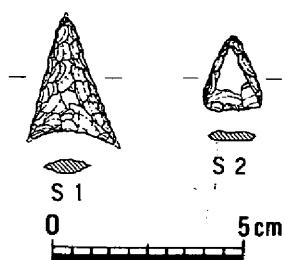


第11図 竪穴住居2 (1/80)

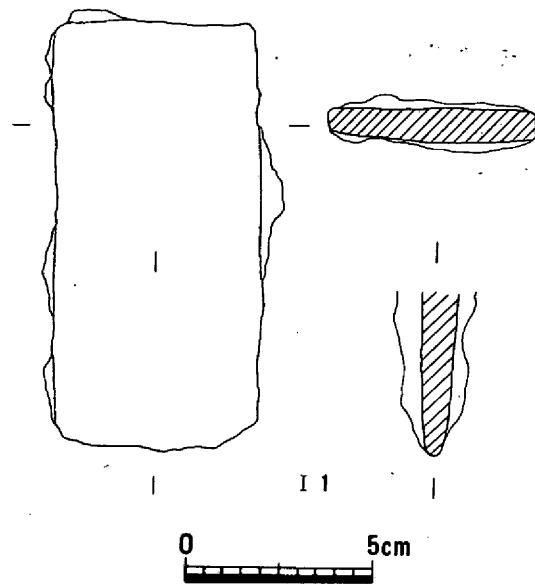
## 2. 元定古墳群



第12図 壇穴住居2出土遺物1



第13図 壇穴住居2出土遺物2



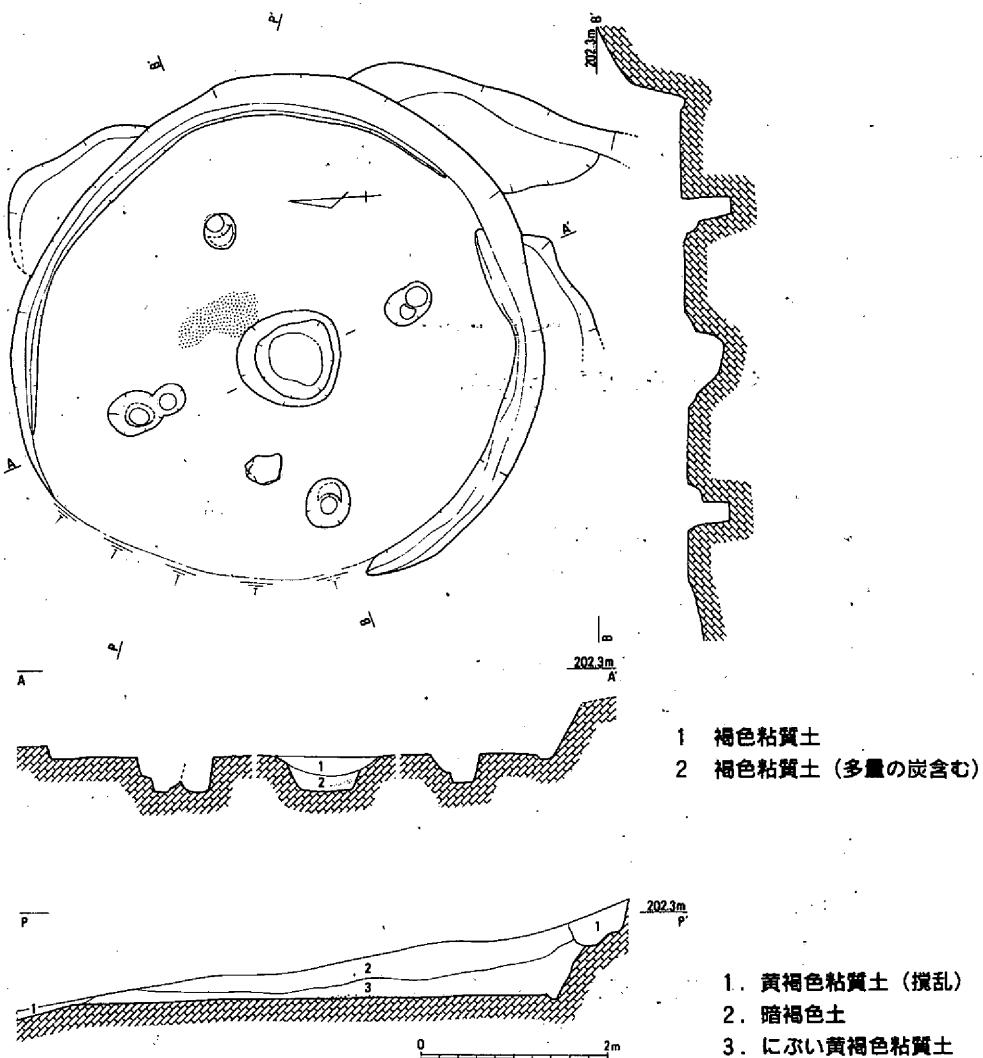
第14図 壇穴住居2出土遺物3

第1調査区の丘陵頂部から南に延びる尾根の西側斜面に位置する壇穴住居である。住居掘り方の下方は、床面も削平を受けており平面形がやや不明瞭ながらも、直径4.6m程の台形に近い形状と推察される。住居掘り方の山側には、幅30~70cm、最大深さ60cm程のテラス状の段を設けている。柱穴は、床面上に5本の主柱穴を確認した。規模は、直径20~30cm、深さは、ピット2がやや浅く35cm、他は、45~55cmを測る。柱穴間隔は、P1-P2とP2-P3がやや狭く1.5mと1.65m、他は1.8~2.0mを測る。床面中央には、楕円形を呈す中央穴を設けている。中央穴の規模は、上面で長径80cm×短径55cm、底面では直径20cmを測る。掘り方断面は、すり鉢状を呈し、深さ28cmを測る。中央穴埋土は、上下2層に分離でき、下層埋土中には炭を含んでいる。中央穴周囲には、土手状の高まりはなく、ほぼ水平な床面を保つ。壁面下には、幅10cm前後、深さ5cmの溝が巡っている。住居内埋土は、3層に分離可能であるが、いずれも褐色を主体とする堆積層である。

出土遺物は、床面の東端から鉄器1点と北東の壁面に接して土器の体部片が出土している以外は、埋土中からの細片が多い。掲載した底部以外に、凹線文様の細片を含んでいる。時期は、出土遺物の特徴から弥生時代中期後半の可能性が強い。

### 壇穴住居3

第1調査区ほぼ中央の丘陵北西斜面に位置する壇穴住居である。住居掘り方は、斜面下方で



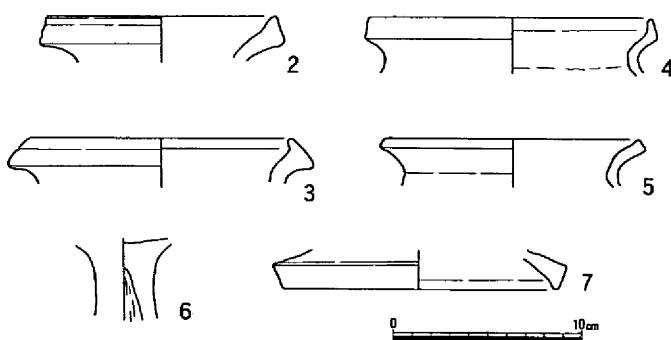
第15図 竪穴住居3 (1/80)

は一部削平を受けているものの残存部分より直径5.4~5.7mほどの円形の形態と推察される。

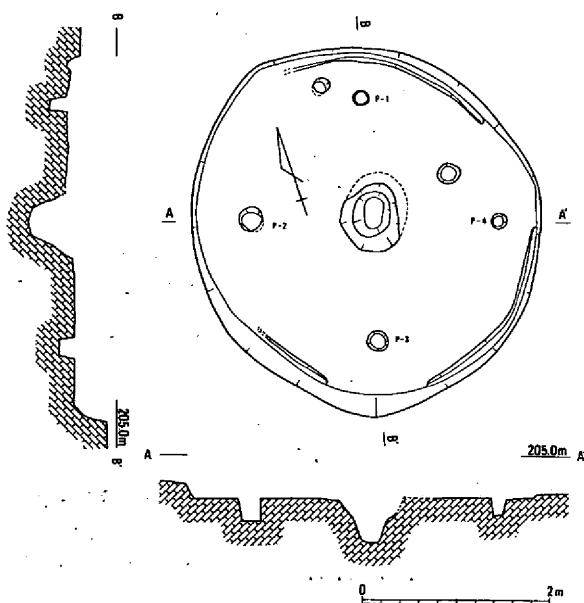
掘り方は、東側の山側で最大深さ80cmを測る。

埋土は、上下2層に大別でき、下層のにぶい黄褐色粘質土の下部から床面付近にかけて炭化物を多く含んでいる。柱穴は、掘り方壁面から1~1.2m内側にはば等間隔に位置する4本が主柱穴である。ただ北西側の柱穴は、重複しており小規模な建て替えの可能性がある。他の柱穴は、いずれも柱穴内の一端が2段に掘り込まれているが、深さ15cmと浅く、柱の抜き取り痕跡の可能性もある。柱穴規模は、直径35~45cm、深さ30~55cmを測る。

## 2. 元定古墳群



第16図 竪穴住居3出土遺物



第17図 竪穴住居4 (1/80)

込みについては、さらに南に掘り方が続き段状遺構3となる。

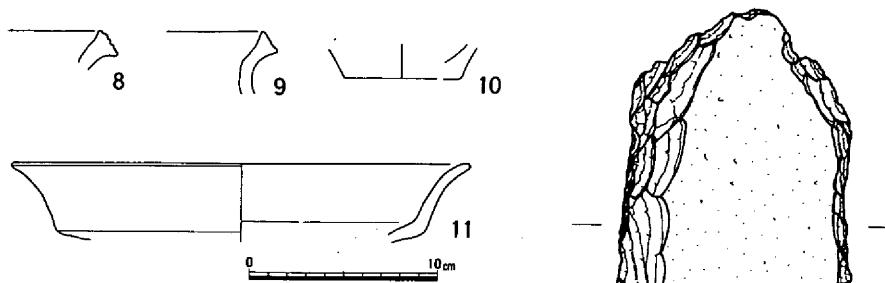
出土遺物は、床面の北西部に直径40cm程の作業用の台石が位置している以外には、大半が埋土中の出土である。時期は、出土遺物の諸特徴や遺構の配置や形状等から弥生時代後期の前半期の遺構と考えられる。

### 竪穴住居4

第1調査区東端の丘陵尾根筋よりやや北側によった場所で確認調査により検出した小形の竪

柱間は、南側の東西が2.4mとやや長いほかは2.2~2.3mを測りほぼ等間隔である。中央穴は、やや不整形な円形をなし、住居のほぼ中央に位置し、上面で直径1.05~1.1m、底面で直径50~60cm、深さ40cmを測る。中央穴の埋土は、上下2層に分離でき、下層の褐色粘質土の埋土中には大量の炭を含む。中央穴の北側には、90cm×50cmの範囲に恐らく中央穴からのかき出しと見られる灰、炭の広がりがあり、東側にも30cm×50cm程の範囲に灰、炭と焼土の広がりが認められる。

住居掘り方の外側には、2号住居程に明瞭ではないが、斜面の上手にあたる北側の一部と南側に段状の掘り込みが認められる。ただ南側の掘り



第18図 墓穴住居4出土遺物1

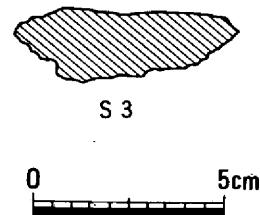
穴住居である。平面規模は、ほぼ円形を呈し、長径  $3.95\text{m} \times \text{短径 } 3.65\text{m}$  を測り、掘り方尾根側の最も深い場所で  $40\text{cm}$  程を測る。柱穴は、床面に合計 5 本確認しているが、このうち掘り方の内側  $40\sim 60\text{cm}$  の場所に位置する P 1 ~ P 4 がこの住居の主柱穴と考えられる。柱穴規模は、直径、深さとも  $17\sim 25\text{cm}$  とやや小振りである。柱間は、やや不揃いであるが、 $1.75\sim 1.95\text{m}$  の間におさまる。中央穴は、住居のはば中央に位置し、確認調査時に若干掘り方上面を削平したものの、ほぼ上下とも橢円形の形状をなし、上面で長径約  $85\text{cm} \times \text{短径 } 70\text{cm}$  、底面で長径  $33\text{cm} \times \text{短径 } 20\text{cm}$  、深さ  $47\text{cm}$  を測る。中央穴の周囲には、恐らく中央穴からのかき出しであろう灰が薄く広がっている。

遺物は、埋土中から石包丁の未製品 1 点と高杯、壺、甕の各器種の土器片が埋土および床面近くから出土している。時期は、出土土器の諸特徴から弥生時代後期の前半期と考えられる。

### 墓穴住居 5

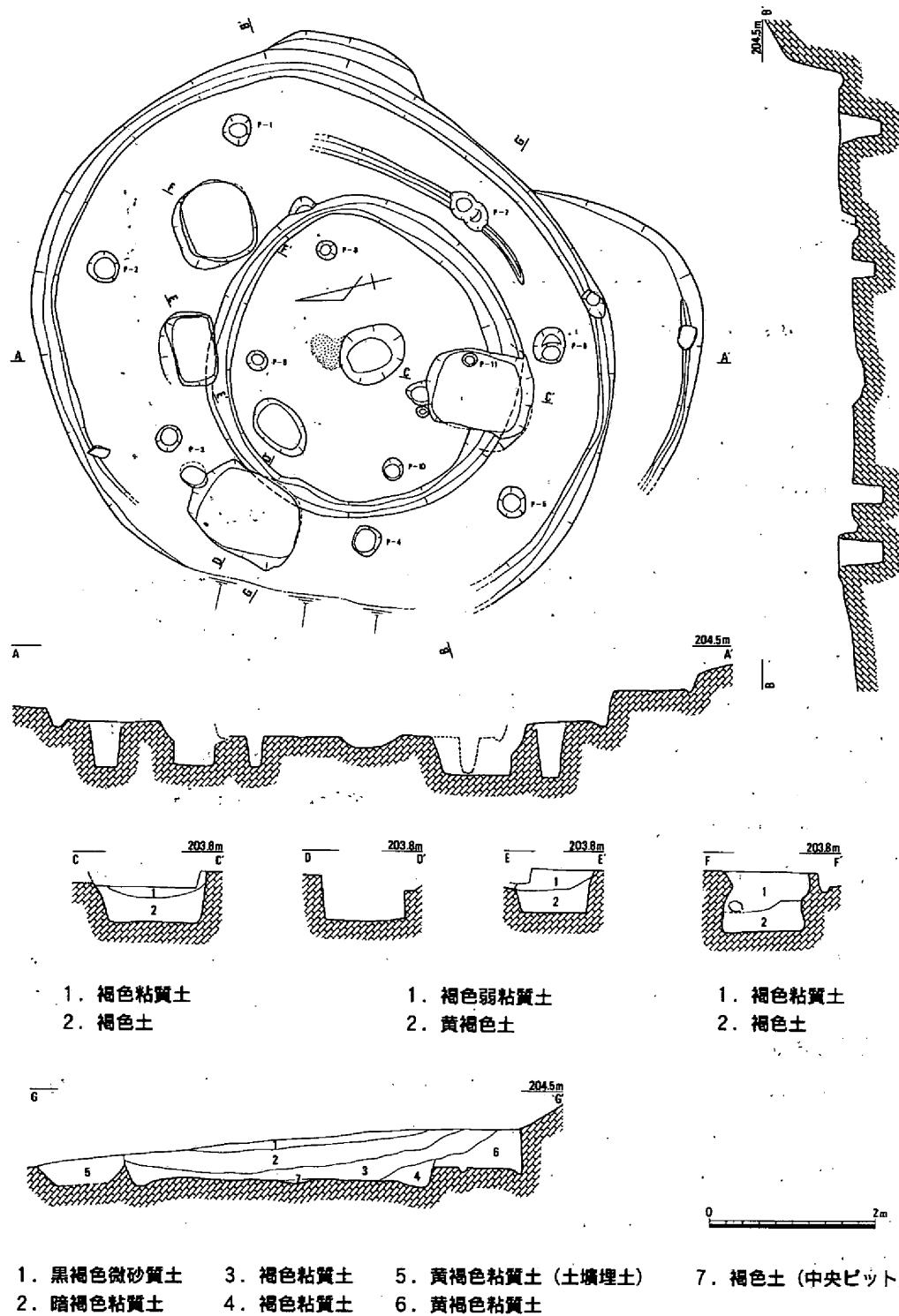
第 1 調査区のはば中央の丘陵北西斜面に位置する墓穴住居である。住居は、掘り方の重複や周溝の状況から最低 3 回の建て替えが行われたことが窺われる。掘り方の新旧は、南西部の弧字状にわざかに掘り方が残存する住居が最古で、つづいて中央の最大の掘り方の住居に拡張され最終的には中心に位置する小形住居に縮小されている。この間、最大拡張面にもわずかに周溝の痕跡が確認されることから、この面での建て替えも考えられる。なお、床面は、建て替えのたびに深くなっている。

最終遺構は、ほぼ中央に位置する直径  $3.75\text{m}$  の小形の住居である。掘り方は、北西側で  $30\text{cm}$  、

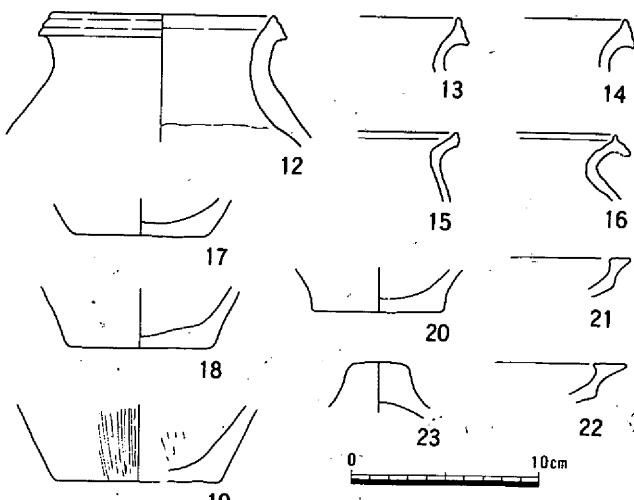


第19図 墓穴住居4出土遺物2

2. 元定古墳群



第20図 竪穴住居5 (1/80)



第21図 竪穴住居5出土遺物

山側の南東側の土層観察面では上面からの掘り込みが不明瞭であるが埋土上面からの掘り込みを考えると60cmである。埋土は、大きく5層程度に分離可能で、第1層には黒褐色の腐植土。第2層以下は、褐色を主体とする粘質土である。柱穴は、掘り方から50cm内側に位置する合計4本が主柱穴で長方形の配置をなす。柱間は、長辺が2.1m、短辺が1.6mである。柱穴は、南西の土壤と重複し検出面が

やや下層であったもの以外は、直径25cmと同規模である。深さは、26~44cmとややばらつきがある。床面中央に位置する中央穴は、長径80cm×短径66cmのやや梢円形を呈し、深さは18cmと浅く皿状の断面をなす。中央穴の北側には、灰と焼土の広がりが認められた。

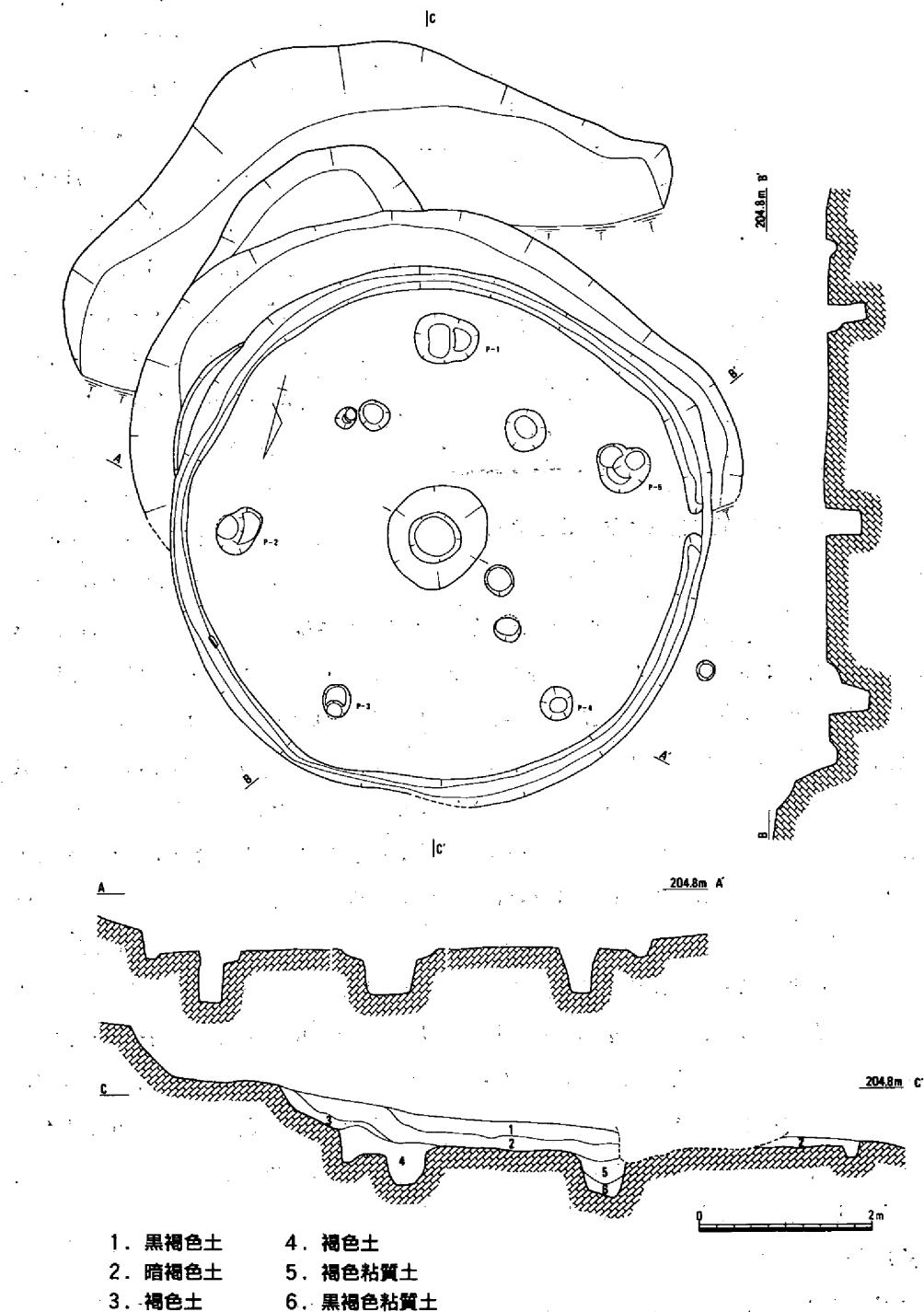
最大拡張時の住居は、斜面下方では掘り方および周溝も消失しているがほぼ梢円形を呈し長径7.2m×短径6.2mを測る。住居掘り方は、最大60cmを測り、床面は、旧住居と比較して40cmほど掘り下げている。柱穴は、掘り方壁面より80cm内側に位置する合計7本が主柱穴と考えられる。ただP2、3、6付近には重複もしくは複数の柱穴が認められることからこの時期にさらに建て替えの可能性が考えられる。柱穴は、直径30~40cm、深さ50~70cmを測る。

また、この時期に床面に4基の土壤を設けている。規模は、いずれも方形もしくは隅丸長方形を呈し、最大で長辺1.35m×短辺1.0m、最小で長辺90cm×短辺65cmを測る。掘り方断面は、台形もしくは筒状をなし、深さ50~70cmである。埋土は、観察した3基では2層に分離可能な褐色を基調とする土層である。なお、中央ピット等は、最終住居の掘り方により削平されている。出土遺物は、最終の小形住居の埋土中より壺、甕、高杯等の細片が出土している。時期は、出土の土器等より弥生時代後期の前半であろう。

### 竪穴住居6

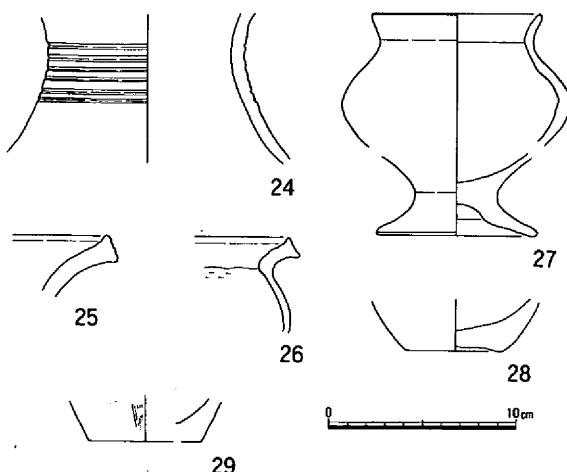
第1調査区の北東部に5号住居と6mの間隔を置き、ほぼ同様のレベルに位置する竪穴住居である。平面規模は、直径6.2mを測る円形を呈し、掘り方の山側には幅50~80cm程のテラス状の段を設けている。なお、テラス状の段のさらに山側に最大幅2m、長さ7.2mの段状の掘

2. 元定古墳群

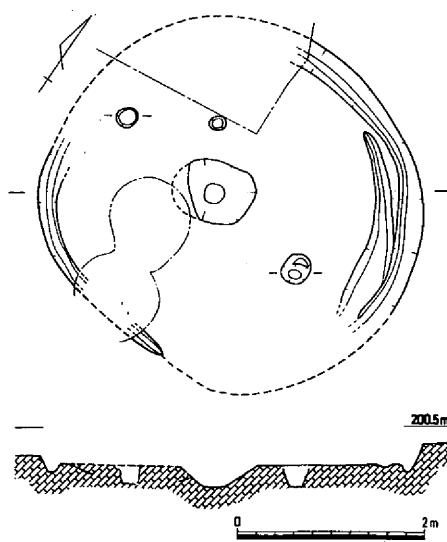


第22図 穫穴住居6 (1/80)

## 2 落合地域の調査



第23図 竪穴住居6出土遺物



第24図 竪穴住居7 (1/80)

世の擾乱と7号墳の周溝により削平を受けている。平面規模は、直径3.7~4.1m程の円形に近い形態である。掘り方は、最も深い場所で深さ20cmを測る。柱穴は、床面に3本確認しているが、削平が大きいため主柱穴の配列は不明瞭である。中央穴は、ほぼ住居の中央に、長径約80cm×短径65cmの楕円形に近い形状をなし、深さ20cmを測る。周溝は、掘り方北西部で一部重複しており、住居の建て替えの可能性が考えられる。

時期は、出土遺物が細片のため確定し難いが、弥生時代後期の範中でとらえられる。

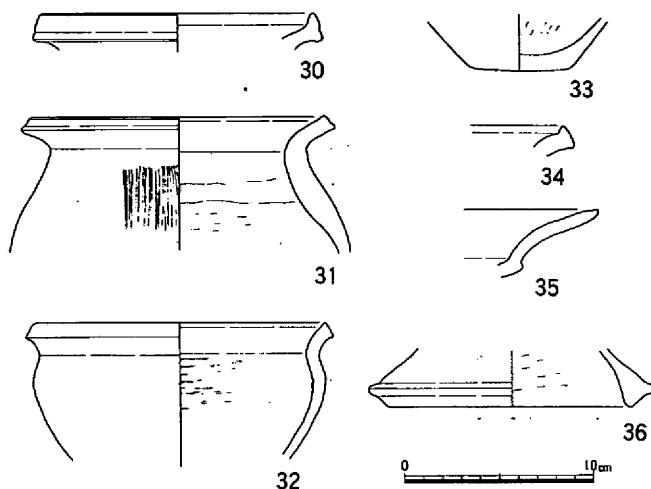
り込みが見られるが、これについては、直接住居に伴うか不明瞭である。柱穴は、掘り方の壁面より内側80cmに位置するP1~P5が主柱穴と考えられる。深さは、いずれも50cm前後を測り、P1、2、3、5にはいずれも掘り方に浅い段を伴っている。柱間は、P1、5とP2、3の間が2.6m、P1、2とP4、5の間がやや長く3~3.2mである。床面中央には、ほぼ円形を呈す中央穴を設けている。規模は、上面で直径1.2m、底面で直径50cmを測る。掘り方断面は、上面で浅い皿状をなし、下半で台形状の掘り方をなす。中央穴埋土は、上下2層に分離でき、下層埋土中には、炭化物をやや多く含んでいる。

出土遺物は、埋土中からが大半を占め、しかも土器の細片が多い。時期は、出土遺物の特徴から弥生時代後期前半と考えられる。

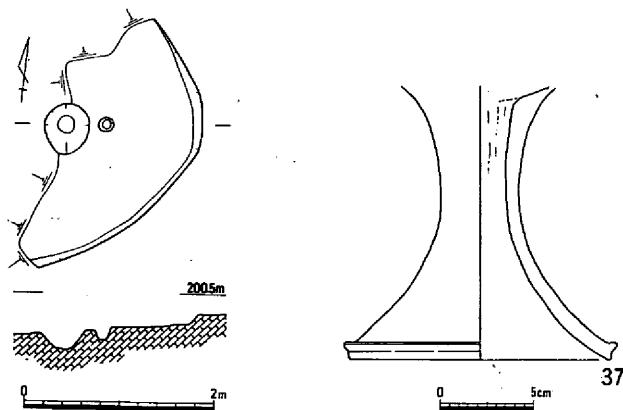
### 竪穴住居7

第1調査区の北西部で7号墳と重複する位置にある。住居は、後

## 2. 元古墳群



第25図 壇穴住居7出土遺物



第26図 壇穴住居8(1/80)

第27図 壇穴住居8出土遺物

## 壇穴住居8

第1調査区の北西部、第2調査区との境付近に位置する。掘り方の西半部が削平を受け規模は不明瞭であるが、残存部分から隅丸方形の形態と想定される。住居の掘り込みもかなり削平を受けており深さ10cm程と浅い。住居床面には恐らく中央と見られる位置に、直径50cm、深さ20cmを測る中央穴と見られる土壙と直径15cmの柱穴が認められるのみである。

時期は、出土遺物が細片のため確定し難いが、弥生時代後期の範中であろう。

### 段状遺構

#### 段状遺構1、2

第1調査区中央の5号住居の南に連続するほぼ同規模の段状の遺構で、南側を

1、北側を2とする。

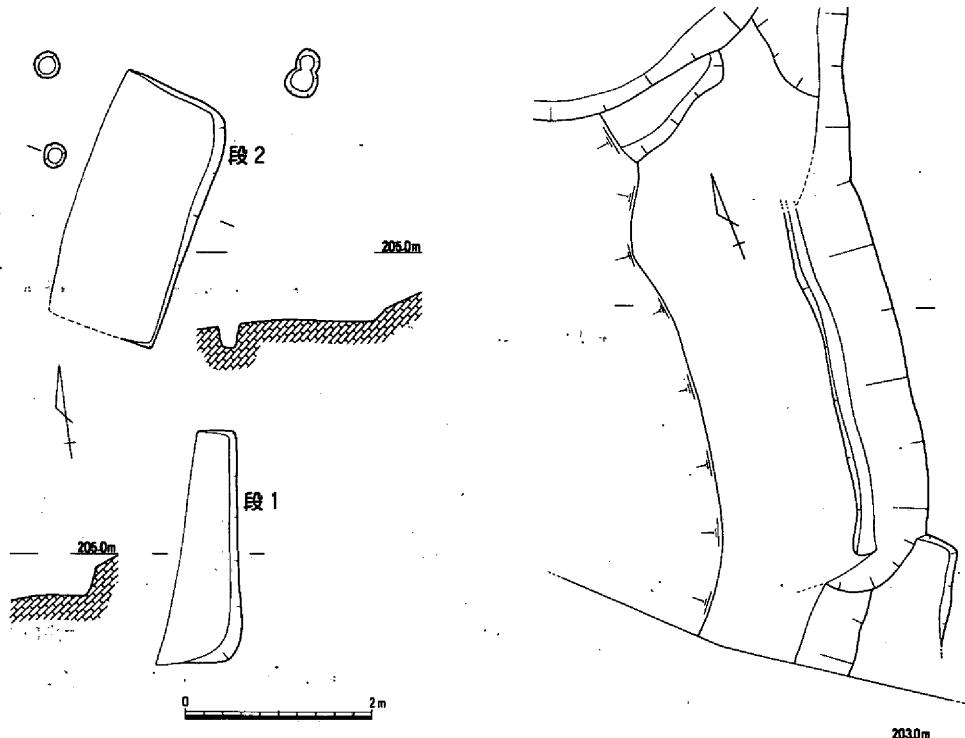
段状遺構1は、段状遺構

2の南側に1mの間隔を置き位置する。掘り方は、南北長さ2.45mを測り、最大幅60cmの平坦面を成している。平坦部に何等の遺構は認められない。

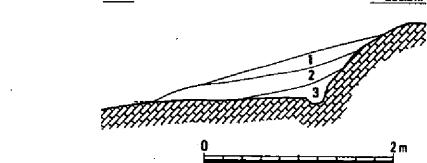
段状遺構2は、南北長さ2.65mのコ字形の掘り方をなし、現存幅最大1.2mの平坦面を成している。掘り方のやや西側と北東部に柱穴が認められたが、直接伴うものか不明瞭である。

出土遺物は、段2より若干古相をしめす高杯片が出土しているが細片と少量のため確定し難く、周辺の遺構と同時期の弥生時代の後期の範中としておきたい。

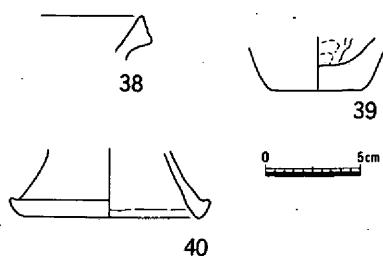
### 段状遺構3



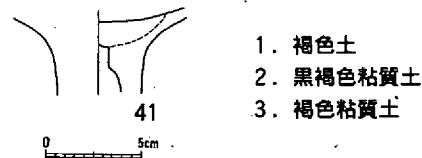
第28図 段状遺構 1、2 (1/80)



第29図 段状遺構 3 (1/80)

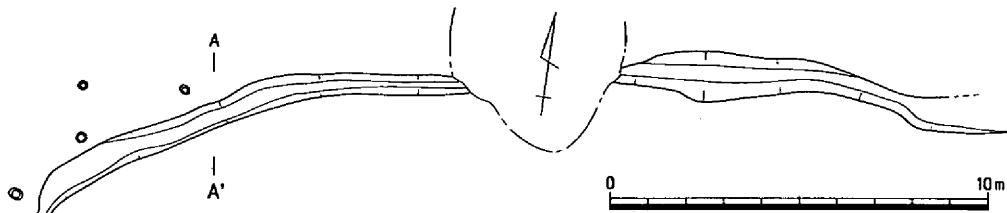


第30図 段状遺構 1、2 出土遺物

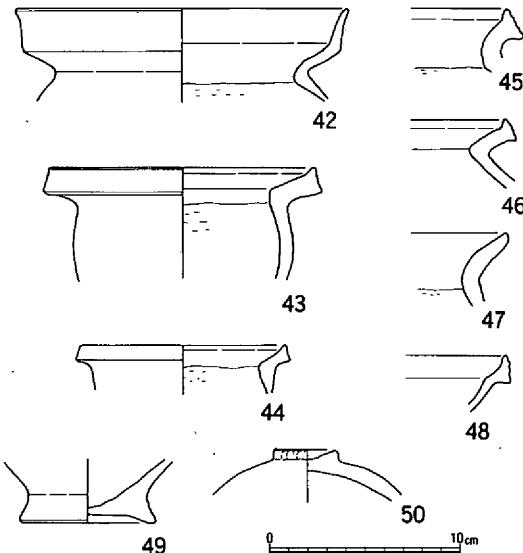


第31図 段状遺構 3 出土遺物

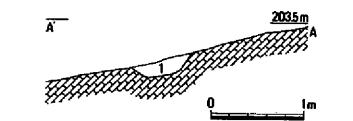
第1調査区中央の堅穴住居3より南に連続する段状の遺構である。調査区外にも掘り方は若干続くようであるが未掘である。ほぼ南北方向に掘り方を持つ中央の段状部分は、南北4.5m、最大深さ80cmを測り、幅1.6m程の平坦面を有す。掘り方下端には、幅20cm程の小溝を設けて



第32図 溝 (1/200)



第34図 溝出土遺物



第33図 溝(断面). (1/80)

いる。なお、平坦部には柱穴等は認められなかった。

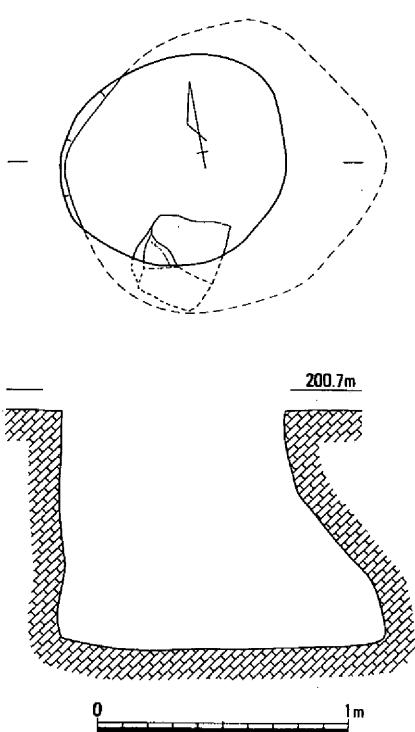
埋土は、3層に分離可能で、第2層の黒褐色粘質土には土器、炭化物をやや多く含んでいる。

時期は、出土遺物が少量でしかも細片のため確定し難いが、弥生時代後期であろう。

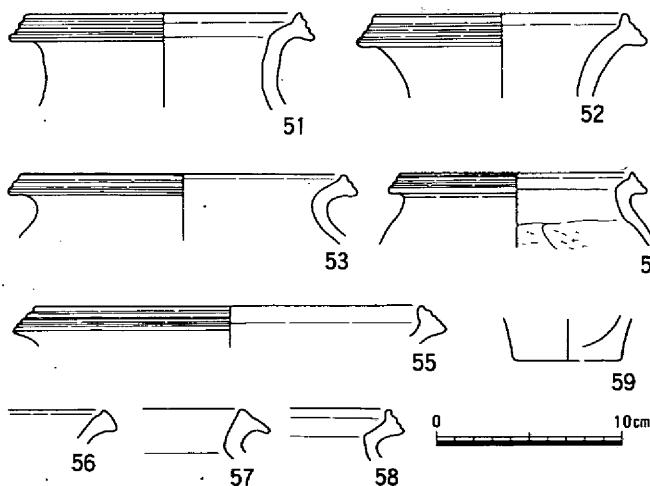
#### 溝状遺構

第1調査区中央部の竪穴住居5、6の北側に位置する溝状の遺構で一部削平を受けているものの検出長23mを測る。掘り込みは、3号住居の東側から標高202.5mの等高線に平行して東端の調査区外に延びる。幅は、平均50~70cmで最大1.4mを測る。掘り方断面は皿状もしくは段状を呈し、暗褐色の比較的均一な埋土である。

時期は、出土遺物に弥生時代中期後半から後期後半と時期差が認められるが、周辺の遺構との比較等から弥生時代後期後半期が遺構の中心をなす時期と考えられる。遺構の性格については、等高線に平行する状況や配置等から道の可能性が強い。



第35図 土壙1 (1/30)



第36図 土壙1 出土遺物

**土壙****土壙1**

第1調査区北西部の丘陵鞍部の11号墳の周溝内に位置する袋状の土壙である。土壙周辺は、かなり削平をうけており、11号墳の墳丘自体は無いものの土壙の残りは良好である。平面規模は、上面で橢円形をなし、長径95cm×短径80cm、底面ではやや不整形な円形をなし、長径1.28m×短径1.1mを測る。掘り方断面は、袋状をなし、深さ95cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。

出土遺物は、かなり摩滅しているものの、壺、甕等の器種がみられる。時期は出土遺物の諸特徴や土壙の形状から弥生時代後期の前半期であろう。

**土壙7**

第1調査区北西部の南斜面にかかる場所に12号墳と重複しているやや大形の貯蔵用の土壙である。平面規模は、上下ともやや

不整形な円形をなし、上面で長径1.8m×短径1.6m、底面で長径1.35m×短径1.18mを測る。掘り方断面は、若干袋状を呈し、深さ1.48mを測り、ほぼ水平な底面をなす。出土遺物は、いずれも埋土中のもので、高杯、壺の器種がある。

時期は土壙の形状や埋土、出土遺物等から弥生時代後期前半と考えられる。

**土壙8、10、11**

第1調査区北西の11号墳と

2：元定古墳群

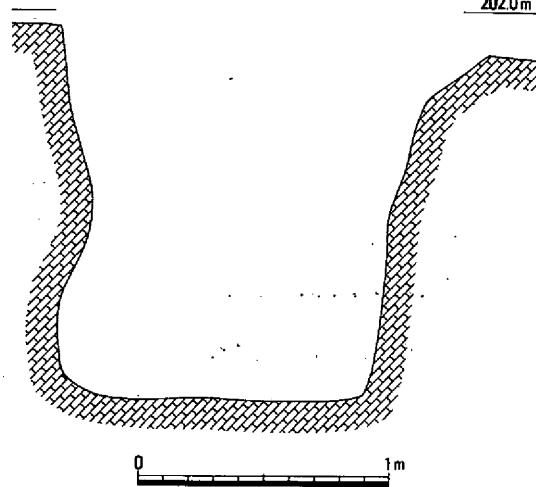
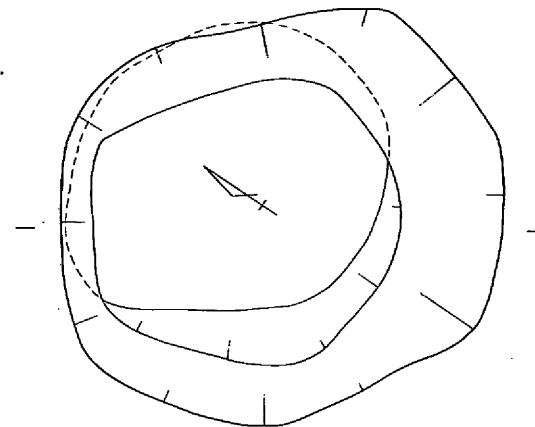
12号墳の間に位置する大形の土壙8とこれと重複する2基の土壙である。

土壙8は、平面規模が上下とも円形をなし、上面で直径2.45～2.5m、下部で1.85～2.05mを測る。掘り方断面は、逆台形状をなし、深さ73cmを測る。底面は、やや東よりも15cm深く掘り込まれている以外はほぼ水平面を保つ。

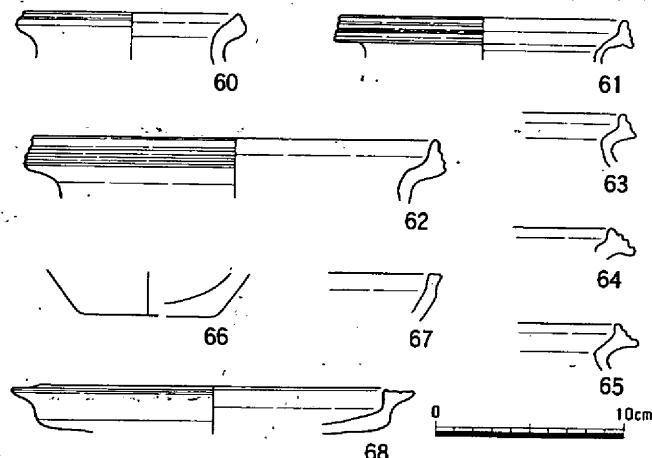
出土遺物は、埋土中から石包丁の未製品と弥生土器の各器種が認められる。時期は、出土遺物等から弥生時代後期前半と考えられる。

土壙10は、土壙8の完掘後に北西壁面に掘り方を確認したもので土壙8との新旧については不明瞭で、土壙8に付属する可能性も否定できない。土壙8による削平を受けた袋状土壙の一部と想定すると現存する底面の形状より長辺93cm×短辺推定50cm程のやや不整形な長方形の形状が想定される。深さは、現状で70cmを測る。

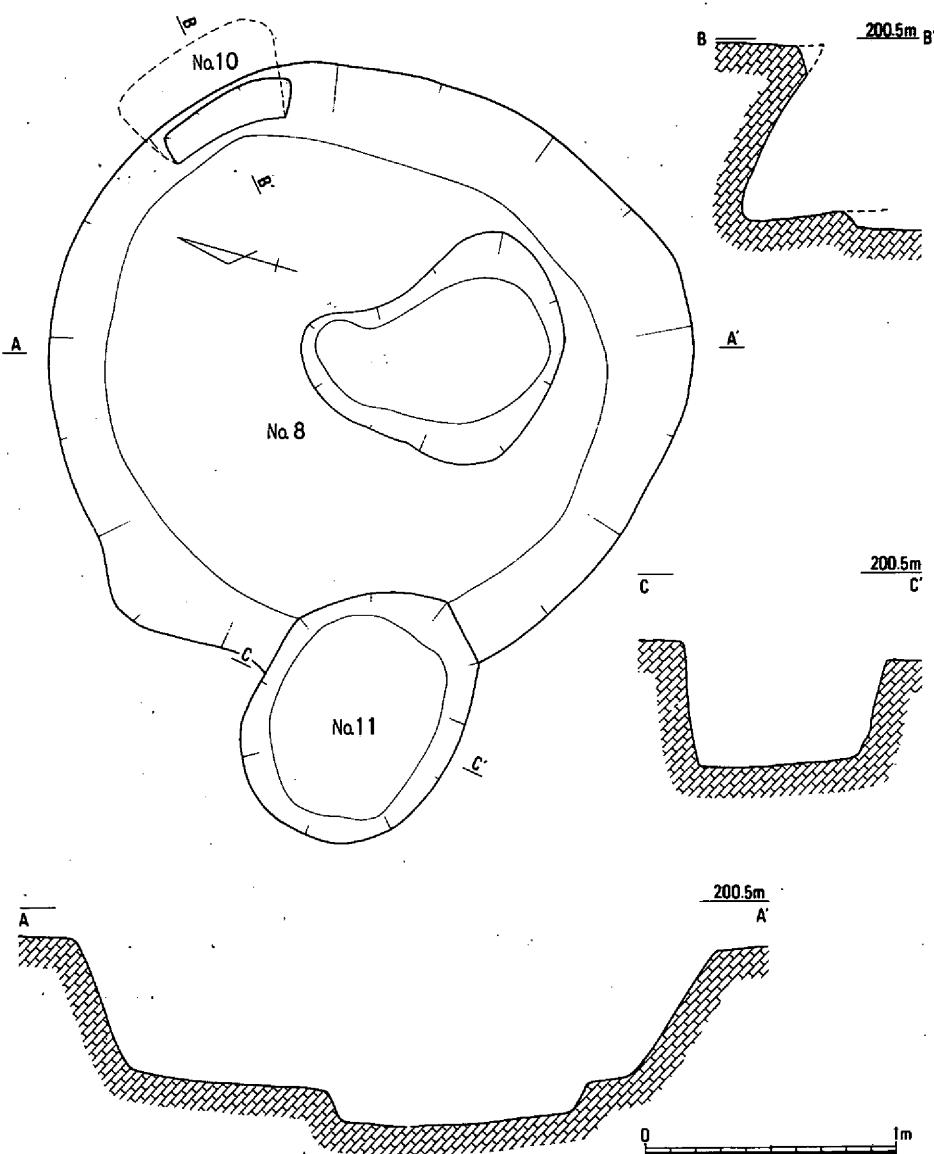
出土遺物が細片のため時期の確定はしがたいが、埋土や形状、切り合ひ等から弥生時代後期の集落に伴うものであ



第37図 土壙7 (1/30)



第38図 土壙7 出土遺物

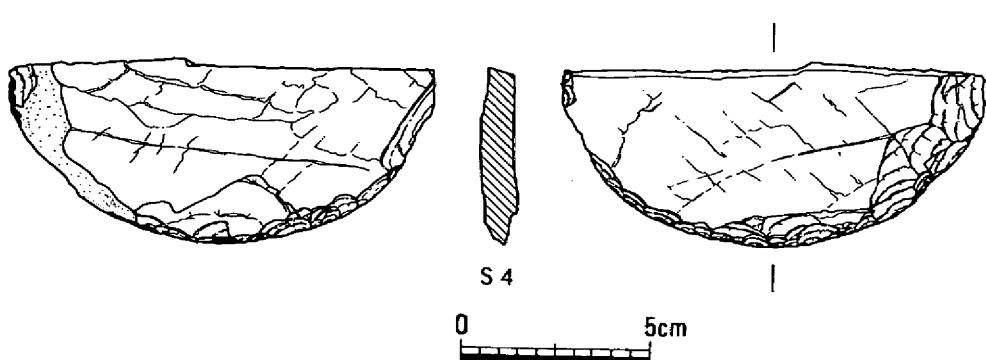


第39図 土壙8、10、11(1/30)

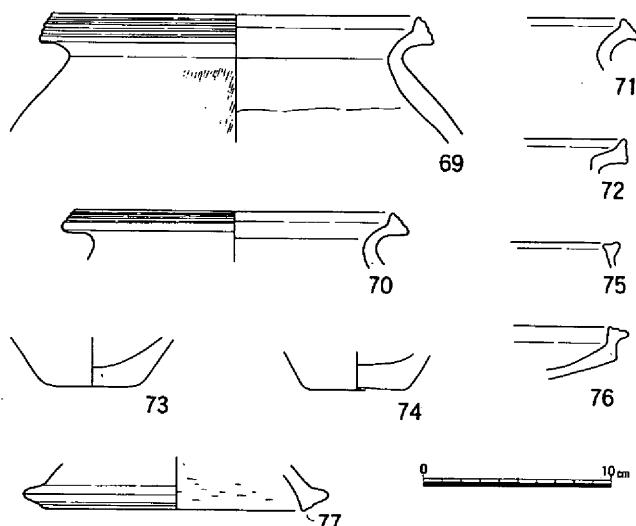
ろう。

土壙11は、土壙10と同様に土壙8の完掘後に南東壁面に掘り方を確認した後に平面プランを追求したため遺構の新旧については不明瞭である。

平面規模は、上下とも橢円形をなし上面で長径1.05m×短径82cm、底面で長径80cm×短径64



第40図 土壌8出土遺物1



第41図 土壌8出土遺物2

cmを測る。掘り方断面は、逆台形状を呈し、深さ50cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。出土遺物が細片のため時期については、確定し難い。

#### 土壌9

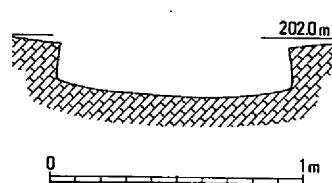
第1調査区北西部の東端に位置する。現建物の基礎により土壌の北端が削平を受け全貌は不明瞭である。平面規模は、残存部より上

下ともやや不整形な長方形の形状と推察され、上面で長辺93cm×短辺推定50cmを測る。掘り方断面は、台形状をなし、深さ18cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。

第43図 土壌9出土遺物

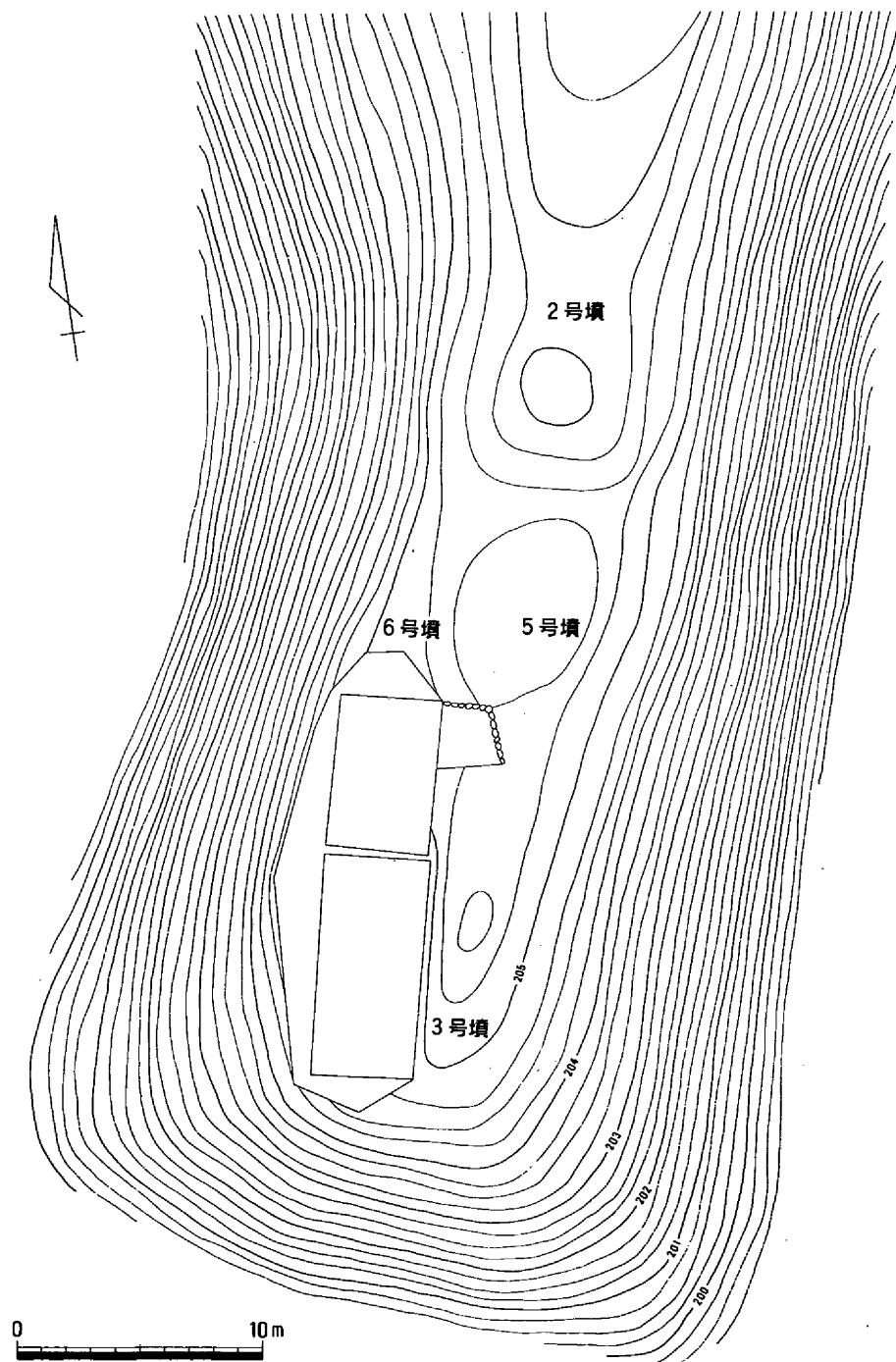


時期は、出土遺物が細片のため確定し難いが、掲載した口縁部の形状や体部内面のヘラケズリ調整等から弥生時代後期の前半期と想定される。



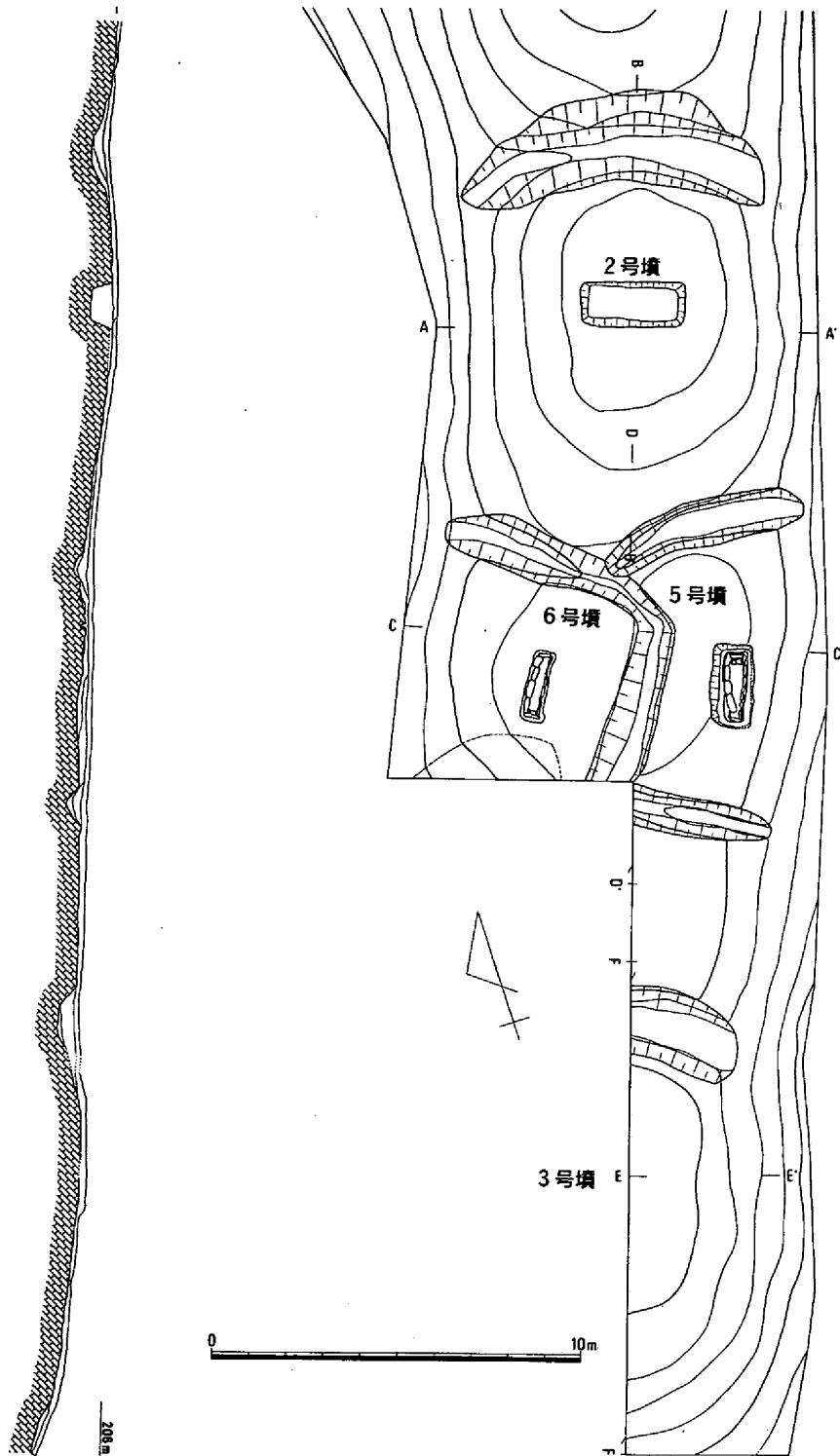
第42図 土壌9 (1/30)

## 2. 古墳時代の遺構・遺物



第44図 2、3、5、6号墳調査前測量図 (1/300)

2. 元定古墳群



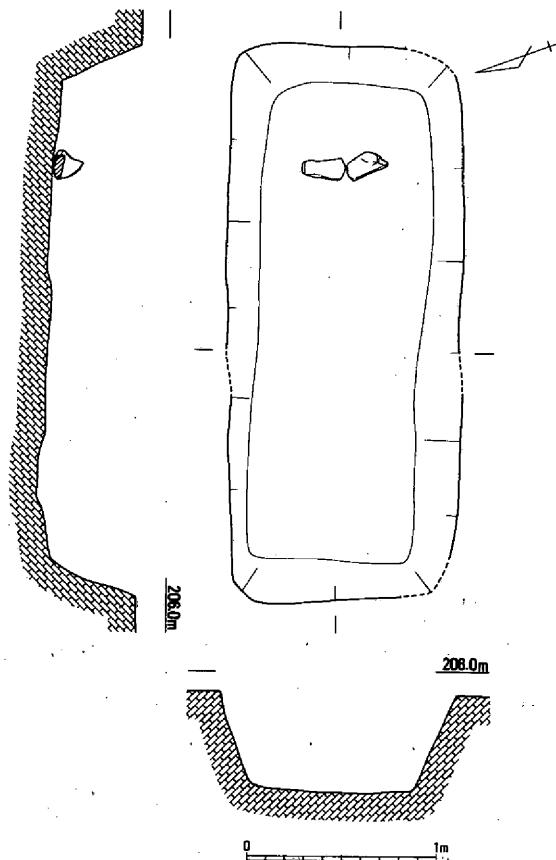
第45図 2、3、5、6号墳墳丘測量図 (1/200)

## 古墳

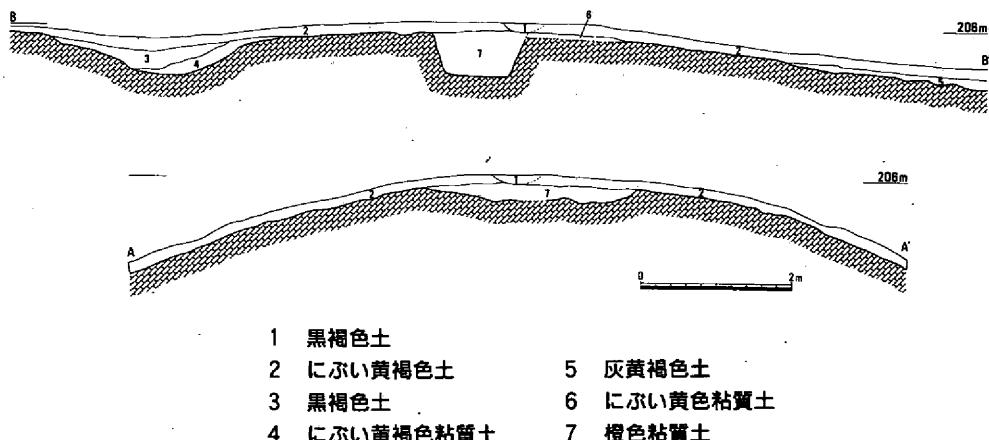
## 2号墳

第1調査区の南に延びる尾根上に位置する4基の古墳群の1基である。当遺跡の調査開始時には、未発見で1号墳調査中に付近の踏査により3号墳とともに確認したものである。調査開始前には、付近は栗畠となつており樹間を通してわざかに高まりが認められる状況であった。

墳丘は、尾根北側を最大幅2.5m、長さ8.3m、深さ40cmのわずかに弧をえがく溝により切断している。墳丘南側は当初5、6号墳の北側溝を2号墳と共有の溝と想定していたが、溝の掘り下げの結果からはやや無理があるようである。現状では5、6号墳と接していることから5、6号墳の築造時に当墳の溝が削平され

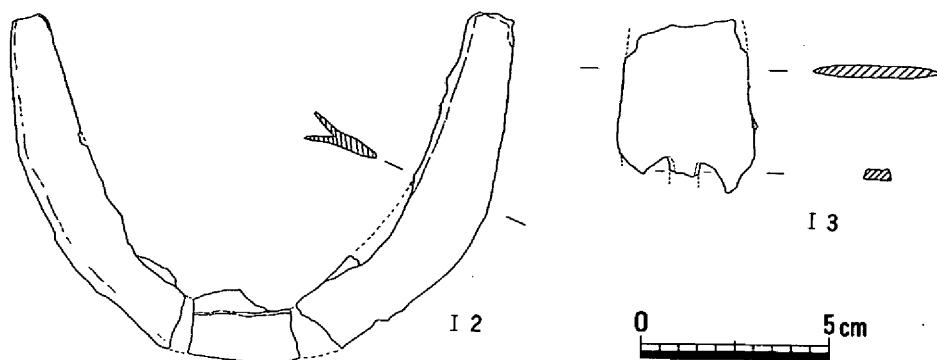


第46図 2号墳主体部 (1/40)



第47図 2号墳墳丘断面 (1/100)

## 2. 元定古墳群

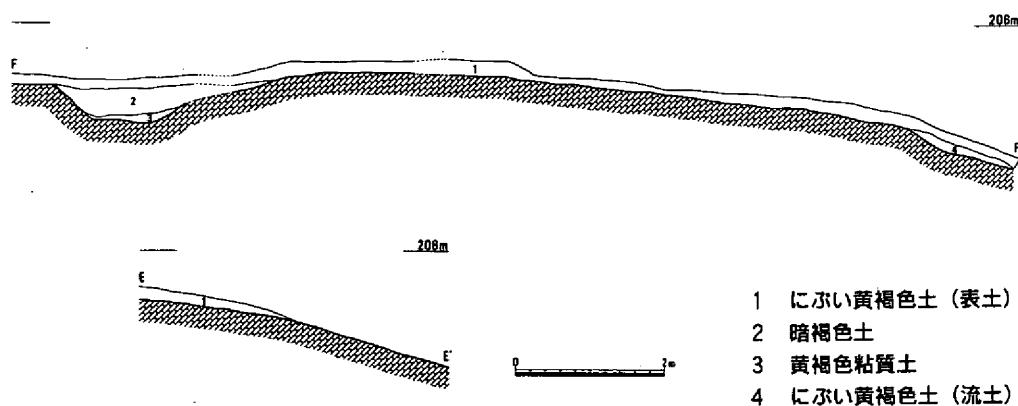


第48図 2号墳出土遺物

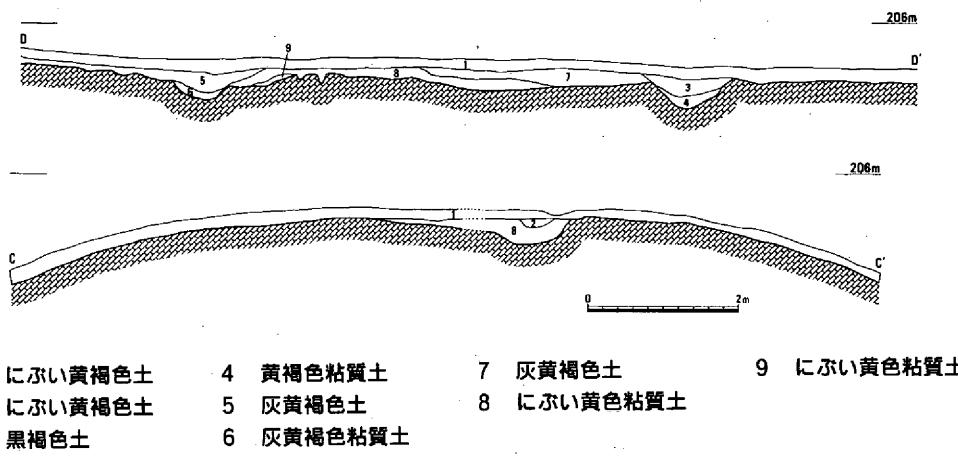
たものかもしくは当初より明確な溝を巡らさなかったものか不明瞭である。従って墳丘規模は、現存する北側溝や主体部や5、6号墳の位置等から南北長9m、東西8.5m程度、現存高80cmのややいびつな方形墳が想定される。ただ北側の尾根の切断溝が若干弧をえがくことから円墳の可能性もある。墳丘盛り土は、わずかに南北の土層断面の観察から盛り土の一部らしき土層を認められる程度でほとんどが流失している。

主体部は、墳丘中央に、尾根に直交する方向に、長辺2.9m×短辺1.25mの長方形の土壙を設けている。掘り方は、深さ50cmの逆台形状をなし、ほぼ水平は底面をなす。長軸方位はN-70°Wを測る。土壙内埋土は、橙色の粘質土の単一層である。木棺等の痕跡は認められないが、土壙底面東端に長径20cmほどの石材2点を配置した枕石が認められる。主体部内の副葬品等は皆無である。

その他の出土遺物は、図示できなかつたが北側の周溝底より土師器の小形壺が1点と墳丘の



第49図 3号墳墳丘断面図 (1/100)



表土中より鉄製鍬先と鉄鏟が出土している。鉄器については、共伴の有無は確定し難いが周溝底からの土師器は、く字の口縁を有し丸底の壺に近い器種でおそらく古墳の築造時期に近い古墳時代の中頃のものと考えられる。

### 3号墳

第1調査区南尾根の古墳群中の最南端の1基で2号墳と同様に付近の踏査中に確認したものである。調査前の状況は、墳丘西半を墓地の造成により削平されており、東半部の墳丘の高まりがわづかに確認される状況であった。

墳丘は、墓地造成部が未調査のため、不明瞭であるが、墳丘北側に尾根を切断する幅2m、検出長3mのわづかに弧を描く溝を確認している。溝断面は、U字形を呈し、深さ60cmである。墳丘盛り土は、すでに削平されており、地山の削り出し整形部分のみである。墳丘規模は、北側の溝や地山整形の状況等から一辺9m程度、現存高80cmの方墳の可能性が強い。

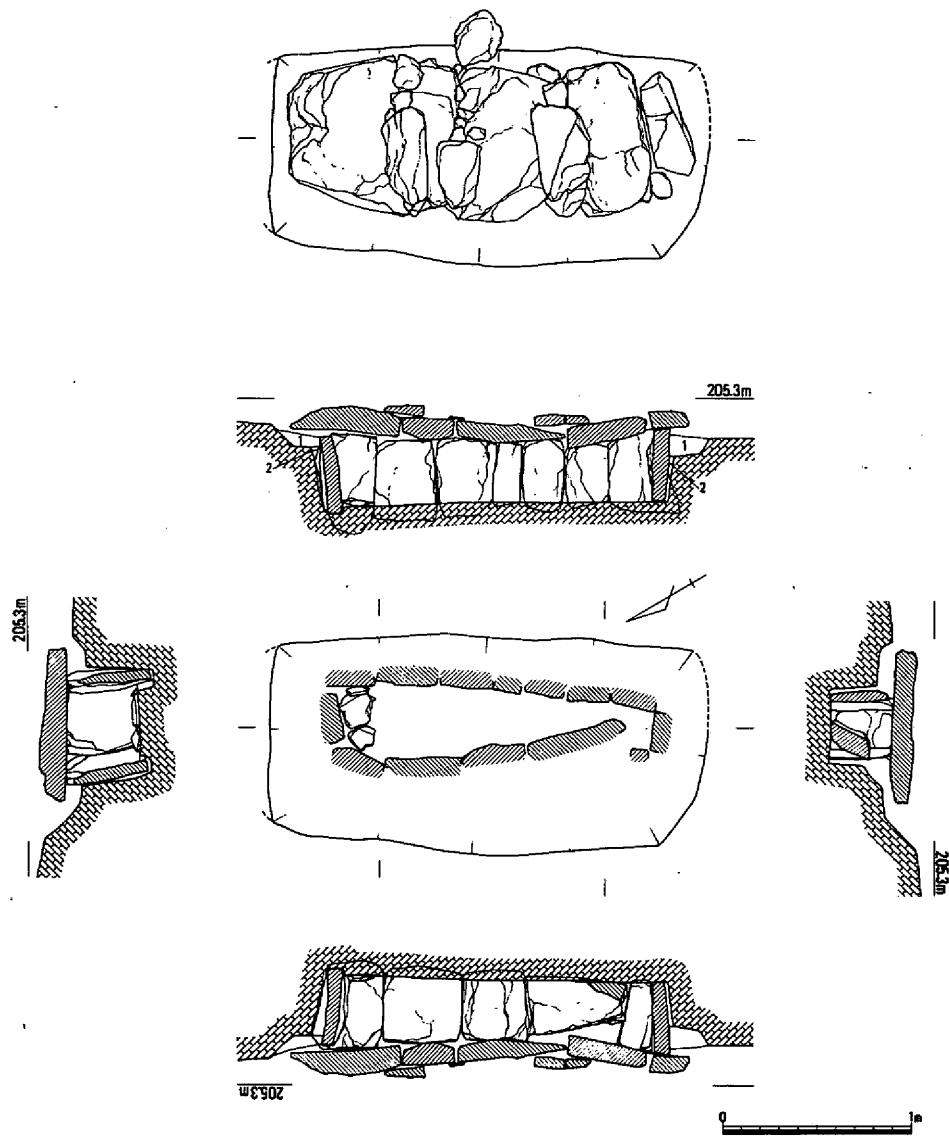
主体部は、調査地区では確認できなかったことから未調査の墓地部分にあたると考えられるが墓地造成によりすでに削平された可能性が強い。なお、墳丘中央の墓地造成の法面付近から、箱式石棺の板石らしき偏平な石材の出土が複数認められた。

出土遺物は、皆無で時期の確定はしがたいが、2、5、6号墳と一連のものと考えられるところから古墳時代の中頃の築造が想定される。

### 5、6号墳

第1調査区南端の尾根上に位置する4基の古墳群の内、中間の東西に一部重複して築造された2基の古墳である。付近の踏査時には、2、3号墳は、認識できたものの5、6号墳の墳丘部についてはほとんど平坦で古墳の存在は想定できなかった。その後、2号墳の調査中に墳丘

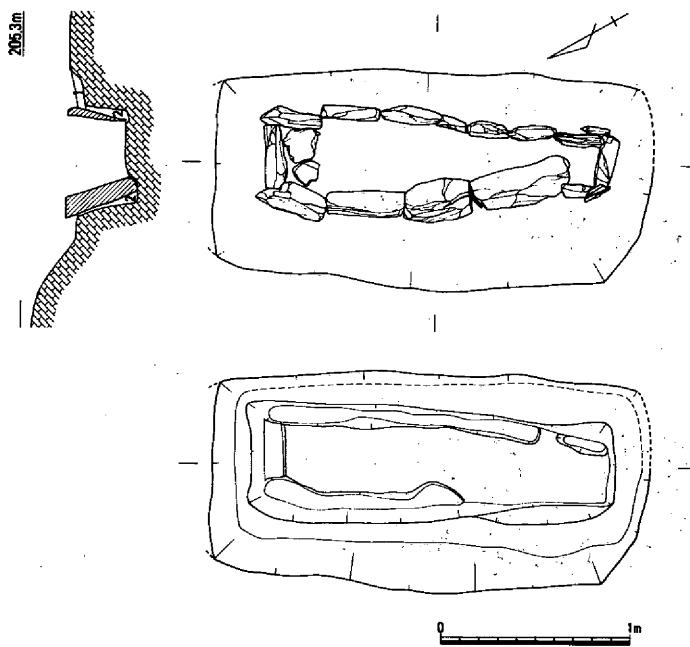
2. 元定古墳群



第51図 5号墳主体部 1 (1/40)

南側に検出した溝を当初2号墳の南側を画する溝と想定していたものの形状がややいびつで、方向も南側を画するように検出したこと等から2、3号墳間についても拡張を行った結果、石材の検出等があり新たに2基の古墳の存在が明らかになった。

5号墳は、南北方向の尾根に墳丘の一部が若干重複しながら東西に位置する2基の古墳の東側である。墳丘盛り土は、すでに完全に流失しているものの、墳丘北および南側は、尾根を切断する溝が良好に残っている。東側墳端は、狭い尾根の急斜面にあたっているため不明瞭であ



第52図 5号墳主体部2 (1/40)

周溝より深く掘削されている。

5、6号墳とも墳丘盛り土がなく墳丘での、新旧の切り合いがつかめないものの、5号墳周溝が西側に掘削されてなく6号墳周溝と接する位置にて終了し、しかも20cmほど深く位置していることや溝の土層断面等から判断して、6号墳が先行して築造され、後にある程度周溝が埋まつた段階で5号墳が6号墳の周溝を埋めて、5号墳の墳丘を意識しながら東側に接して築かれたものと考えられる。

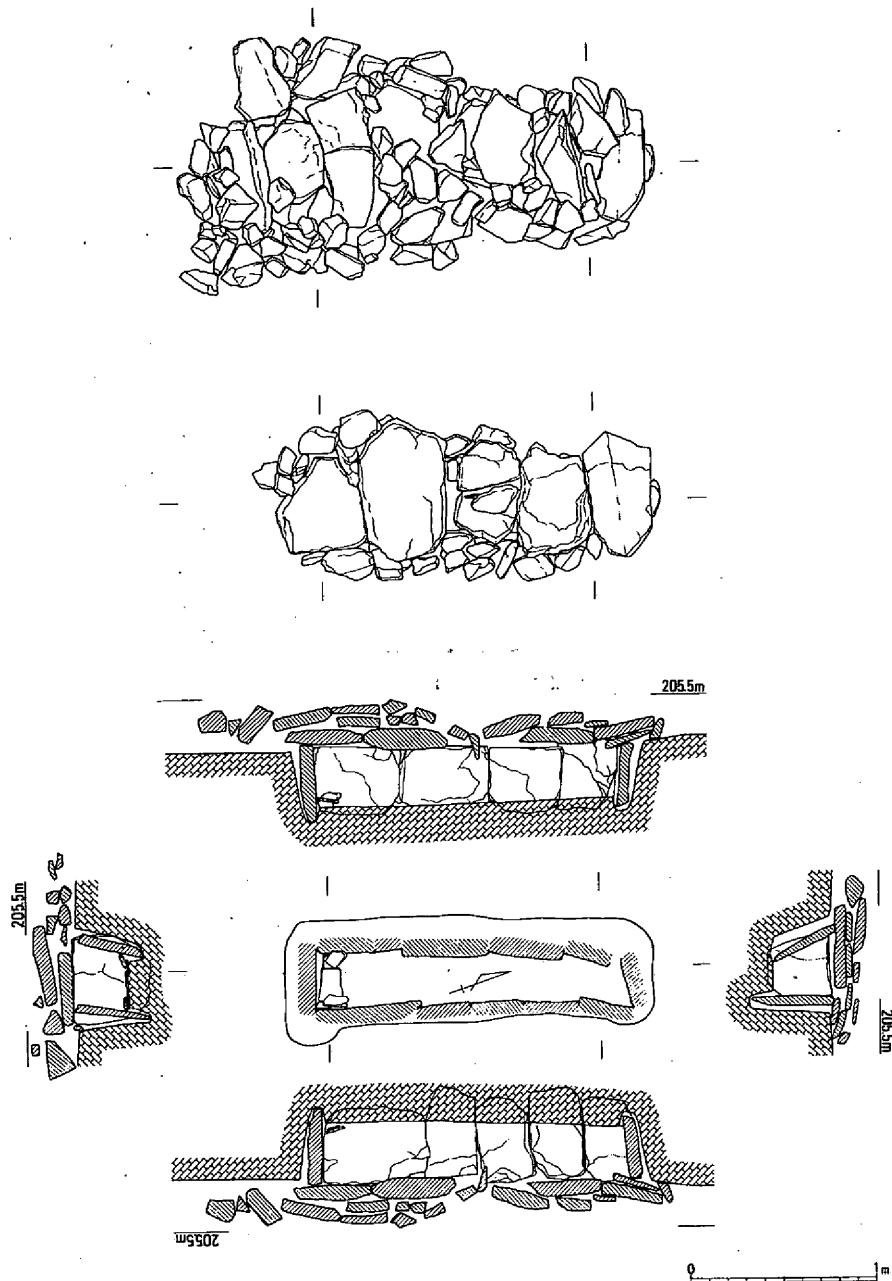
墳丘規模は、南北6.5～8.5m、東西については、立地や6号墳の位置、溝等から推察して6m程のややいびつな方墳で、高さは、周溝底から計測して現存高35cm程である。

主体部は、墳丘のほぼ中央に長軸を南北に向ける完存する箱式石棺で、長軸方位は、N-28°Wを測る。墓壙は、2段掘りをなし、上段で長辺2.3m、短辺1.15m、最大深さ40cm、下段で長さ1.93m、北側幅33cm、南側幅20cm、最大幅38cmを測る。底面北端には、偏平な石材2個を配し枕石としている。蓋石は、大きめの偏平な石材4点を置き、その間に小振りな石材を充て、完全に密封している。ただ、石棺材のうち南側壁の南半が土圧により内側にかなりずれ込んでいる。

出土遺物は、石室内および周溝中からも皆無で、時期の確定がしがたいが、2、3号墳と相い前後して築造された一連の古墳群と考えられる。

る。若干南にカーブする北側溝は、全長5.7m、最大深さ40cmを測る。南溝は、一部未掘部分があるものの現存長4m、深さ50cm程を測る。溝断面は、南北いずれもU字形を呈し、上層に黒褐色、下層に黄褐色の粘質土が堆積している。5号墳を画する溝は、西側の6号墳と接する位置には設けてなく、6号墳の周溝と接合する位置にて終了している。溝底部レベルは、いずれも20cmほど5号墳

2. 元定古墳群



第53図 6号墳主体部1 (1/40)

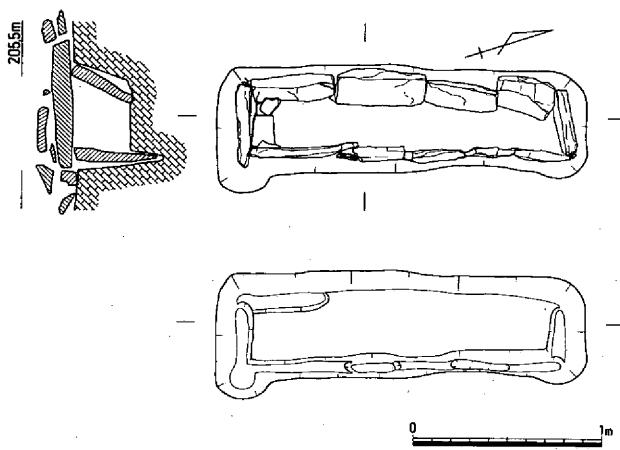
6号墳は、5号墳と相接して尾根西側に検出した古墳である。墳丘盛り土は、5号墳と同様にすでに完全に流失していた。北および東側にL字状に古墳を画する溝を検出したものの南側は、墓地造成の未調査区であり、全貌は、定かでないが恐らくコ字形に配置したものと推定さ

## 2 落合地域の調査

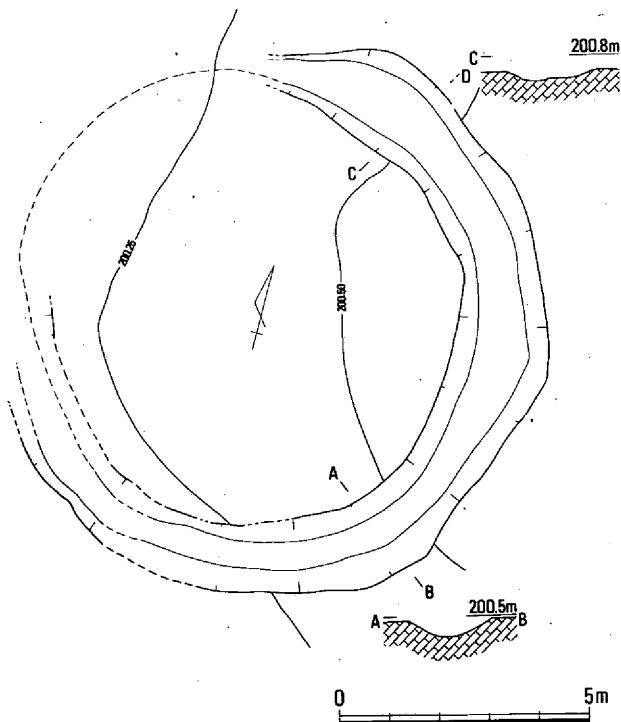
れる。溝は、検出全長11m、最大幅1.4m、深さ30cmを測り、断面U字形の掘り方を成し、灰黄褐色の流入土が認められる。

墳丘規模は、主体部を墳丘の中心と想定すると一辺6mの方墳が考えられ、高さは、周溝底から計測して現存高30cmを測る。

主体部は、墳丘のほぼ中央に長軸を尾根とほぼ平行させる箱式石棺ではほぼ完存している。石棺長軸方位は、N-17°Eを測る。墓壙は、北側小口部分が若干広く掘り込まれた長方形を呈し、長辺1.95m、短辺57cm、深さ30cmを測る。墓壙内に設けた箱式石棺は、内法で全長1.65m、北幅30cm、南幅22cmを測り、底面の北端には、偏平な石材2個を配置し5号墳と同様に枕石としている。蓋石は、5枚のやや大きめの石材を使用し、その間を小振りの石材にて充填している。頭部付近は、特に丁寧で2重、3重に石



第54図 6号墳主体部2 (1/40)

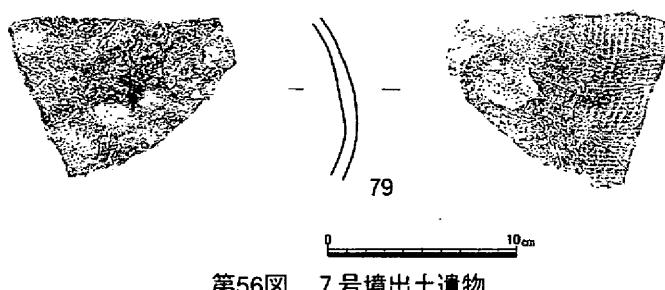


第55図 7号墳 (1/150)

材を重ねていた。ただ、蓋石のうち中央のものが破損し内側に落ち込んでいた。

出土遺物は、石室内および周溝中からも皆無で時期の確定が乏しいが、2、3号墳と一連の築造と考えられる。

## 2. 元定古墳群



第56図 7号墳出土遺物

### 7号墳

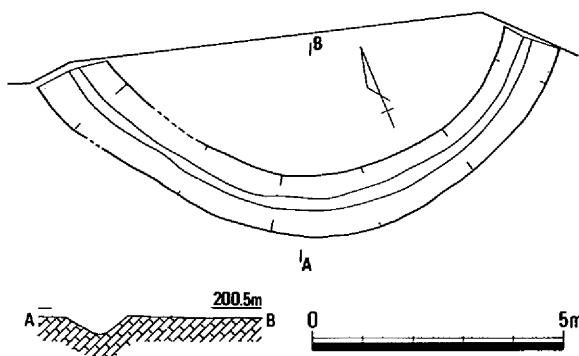
第1調査区北西端の第2調査区との境付近に位置する古墳群の1基である。当古墳は、従前より周知された古墳ではなく、第1調査区の表土剥ぎ後の検出作業により周溝を検出したため

に古墳の存在を確認したものである。古墳は、ちょうど第1調査区と第2調査区の尾根と北東にもう1本延びる尾根との接合部分にあたる標高200m付近のやや平坦な地形に築造されている。

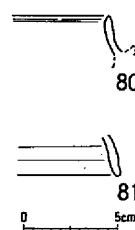
調査前には、この付近は造成され家畜舎がつくられていたため、墳丘の盛り土は、すでに削平され古墳の痕跡すら認められなかった。造成面の排土後にわざかに全体の2／3程度の周溝が残存しているのが確認されたのみであった。周溝は、平均幅1.5m、深さ20cmを測り、断面皿状～U字形の形状を成し、底部レベルは、北端を最高とし、南西側で40cmほど低下している。周溝内流入土は、比較的均一な黒褐色の粘質土である。墳形は、残存周溝から直径9m程の円墳であると想定される。

主体部もその痕跡すら認められず、完全に盛り土とともに造成により削平されたものと思われる。

出土遺物は、周溝内から古墳に関連ある遺物として須恵器の甕の体部細片が出土している。明確には確定し難いが、内面の圧痕や精製粘土等から古式の須恵器の可能性が強い。時期については、主体部の削平により明確ではないが、古墳周溝の遺物や横穴式石室の採用以前の古墳群であること等を考慮して、一応の下限を6世紀代の前半として置きたい。



第57図 8号墳 (1/150)



第58図 8号墳出土遺物

**8号墳**

7号墳と同様に、第1調査区の北端に位置する古墳群の1基で、表土剥ぎ後に検出した新規の古墳である。調査区内には1/3程度で残りは調査区外で未調査である。

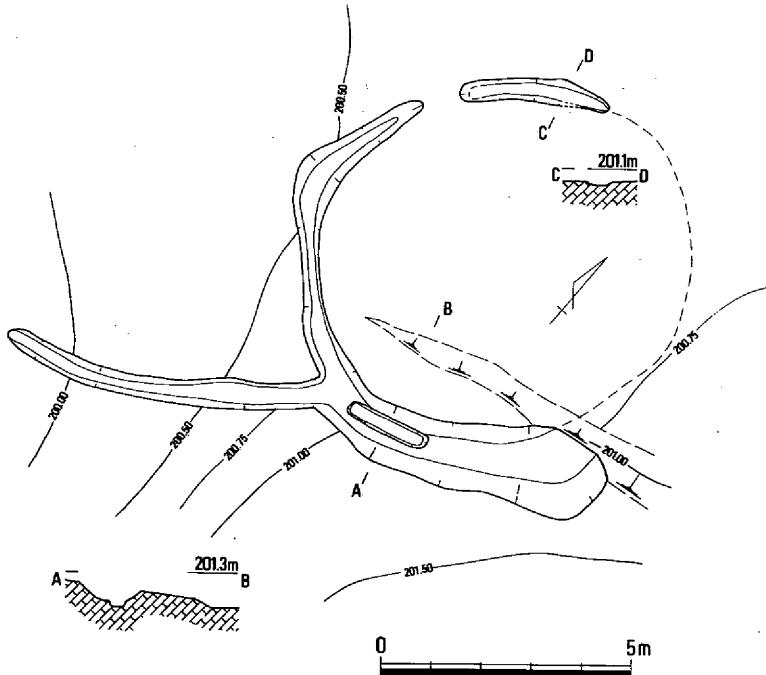
墳丘盛り土は、造成によりすでに削平され確認できなかったが、幅1.1~1.4m、深さ40cmの周溝を半円形に確認している。周溝は、V字形に近い断面を呈し流入土は、黒褐色の粘質土である。墳丘規模は、検出周溝から想定して直径10m程度の円墳と想定される。

主体部は、墳丘規模の1/3程の調査であったために、調査区内では検出できなかったことから調査区外に残存する可能性もある。ただ墳丘盛り土の完全に削平された状況等からすでに消失している可能性が強い。

周溝内からの出土遺物のうち古墳に関連ある遺物を2点掲載した。細片であるものの形状等からやや時期差が認められるようである。時期については、主体部の未検出や周溝中の出土遺物のみでは古墳築造時期の確定は困難であるが、古墳の配置等から7号墳等と相い前後して築造された古墳であることは確かであろう。

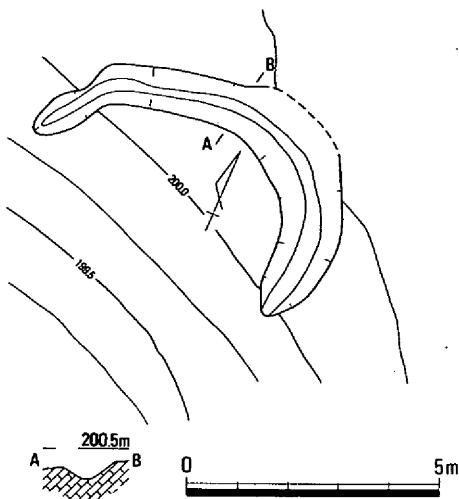
**11号墳**

第1調査区北端に新たに検出した5基の古墳群のうちの東端に位置する1基である。墳丘は、家畜舎の造成による削平が著しく、盛り土は完全に無く、周溝も東半では消失し、西半でも一



第59図 11号墳 (1/150)

## 2. 元定古墳群



第60図 12号墳 (1/150)

墳墓状の掘り方が確認したが出土遺物等は皆無で土壙墓とは断定しがたい。また、周溝の南西部から西に延びている全長6m、幅50cm、深さ10~15cmを測る一見排水溝状の溝の機能についても確定し難い。

墳丘規模は、残存周溝から推定して直径7m程の円墳と推定される。主体部は、削平により完全に消失したものと思われ、痕跡すら認められない。

出土遺物は、周溝内から弥生土器等の出土は認められたものの、当古墳に直接伴う遺物については皆無で時期の決定に乏しいが、古墳の配置等から7、8号墳と相い前後して築造されたと思われることからほぼ同時期と推察される。

### 12号墳

第1調査区北端に新たに検出した5基の古墳群のうちの1基で、最も南端に位置する。標高200m前後の南面する斜面変換点付近にあたり、7号墳と2m、11号墳と3.5mの間隔を置く。すでに墳丘盛り土ではなく、周溝も北側にわづかに半分ほど残存しているのみである。残存周溝は、最大幅1.4m程、最大深さ35cmを測る。掘り方断面は、U字形を呈し、周溝内には、黒褐色の粘質土が堆積している。

墳丘規模は、残存周溝から推定して直径6m程の小規模な円墳と考えられる。主体部は、すでに削平され不明である。

出土遺物は、周溝内より弥生土器の出土が認められたものの、直接当古墳に伴う遺物については皆無で時期の確定に乏しいが7、8号墳と相い前後して築造されていると推察されることからほぼ同様の時期が考えられる。

部周溝も途切れるほど削平を受けており、残存周溝も幅50cm前後、深さ10cm程と浅い。ただ唯一、南東部の周溝付近がかろうじて造成による削平を免れていたため、最大幅1.7m、深さ50cmと良好な残りを成している。周溝断面は、皿状を呈し、周溝内の流入土は、黒褐色の粘質土層である。周溝底部レベルは、最も良好な残りをなす南西端付近を最高所とし、ここより西側に向かって徐々に低下し最大差で60cmを測る。

なお、周溝内南端の底面には、全長1.7m、幅35cm、最大深さ15cmを測る土

### 3. その他の遺構・遺物

#### 土壙2

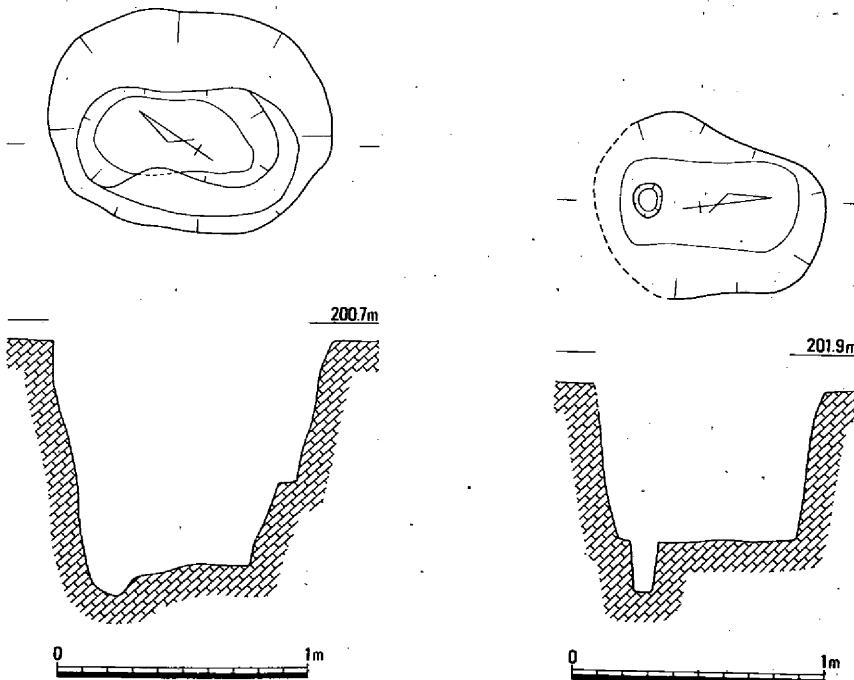
第1調査区北西部の丘陵鞍部に4基並んで位置する縄文時代の落とし穴遺構の1つである。平面規模は、上面で楕円形を呈し、長径1.18m×短径87cm、底面では不整形な長楕円形をなし、長径67cm×短径30cmを測る。掘り方断面は、逆台形状をなし、深さ1.03mを測り、ほぼ水平な底面をなす。

底面に通常認められる柱穴が認められないものの、掘り方の形状や出土遺物を含まない埋土等から、落とし穴遺構と考えられる。

#### 土壙4

第1調査区北西部の丘陵鞍部に4基並んで位置する縄文時代の落とし穴遺構の1つである。平面規模は、やや不整形な楕円形を呈し、長径95cm×短径75cm、底面では、隅丸長方形を呈し、長径72cm×短径35cmを測る。掘り方断面は、筒状をなし、深さ62cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。底面のやや南よりには、長径13cm、深さ20cmの柱穴を設けている。

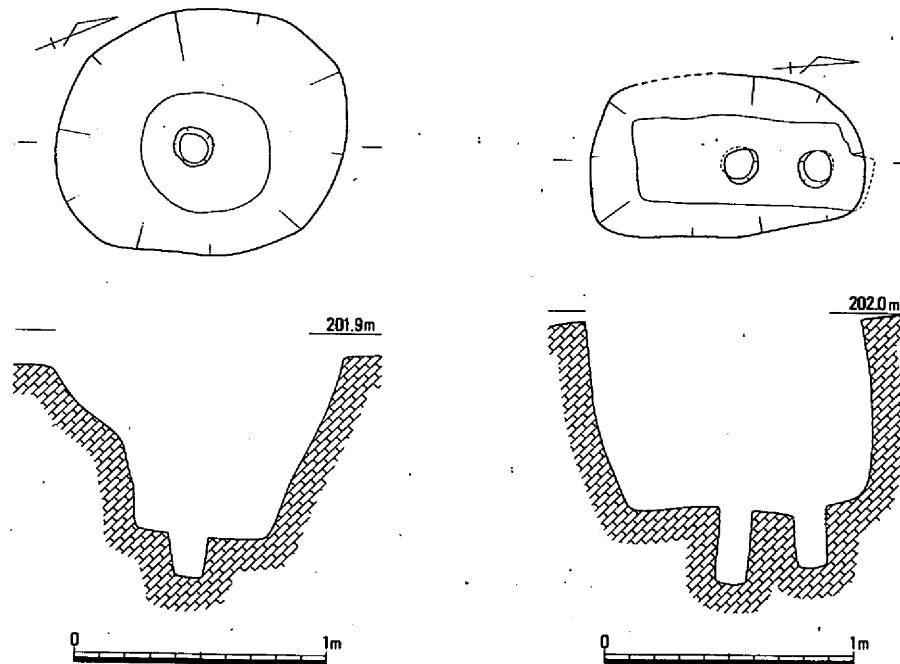
出土遺物が皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や形状等から縄文時代の落とし穴遺構と考えられる。



第61図 土壙2 (1/30)

第62図 土壙4 (1/30)

## 2. 元定古墳群



第63図 土壙5 (1/30)

土壙5

第1調査区北西部の丘陵鞍部に4基並んで位置する縄文時代の落とし穴遺構の1つである。平面規模は、上面で楕円形を呈し、長径1.25m×短径1.0m、底面で円形をなし、直径48~55cmを測る。掘り方断面は、逆台形状を呈し、深さ74cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。底面中央には、直径15cm、深さ18cmの柱穴を設けている。

出土遺物が皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や形状等から縄文時代の落とし穴遺構と考えられる。

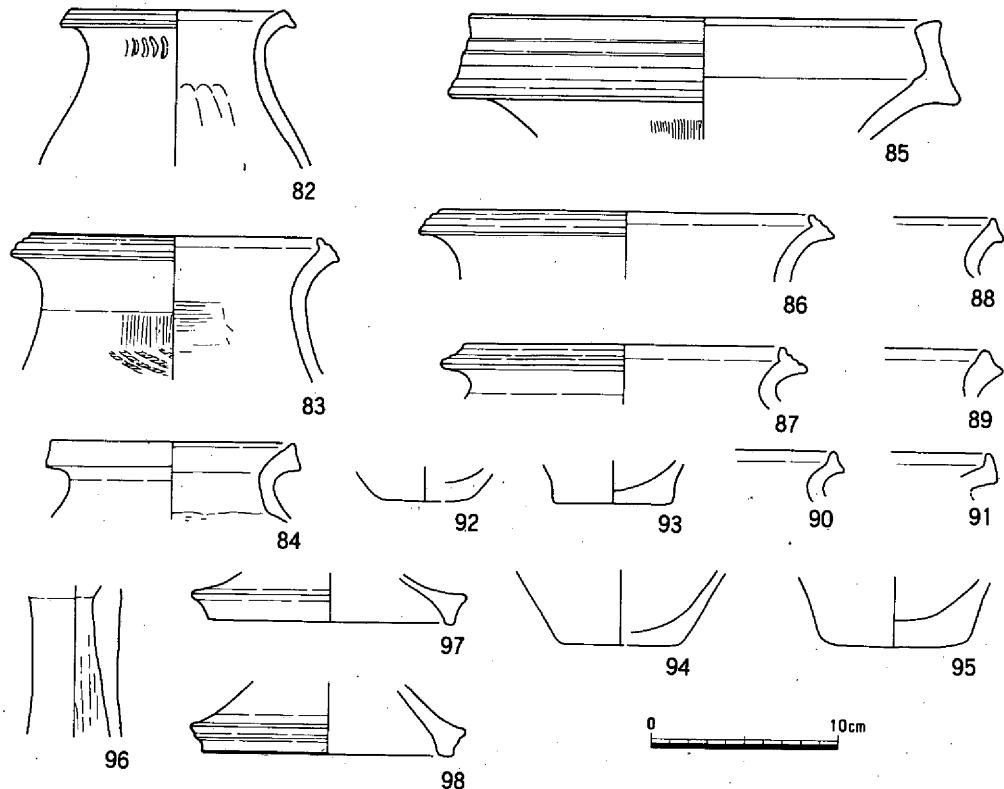
土壙6

第1調査区北西部の丘陵鞍部に4基並んで位置する縄文時代の落とし穴遺構の1つである。平面規模は、上面で隅丸長方形を呈し長径1.13m×短径66cm、底面では、やや不整形な長方形で長径98cm×短径36cmを測る。掘り方断面は、筒状をなし深さ80cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。底面には、ほぼ中央とやや北よりに直径15cm、深さが中央で30cm、北側で25cmを測る2本の柱穴を設けている。

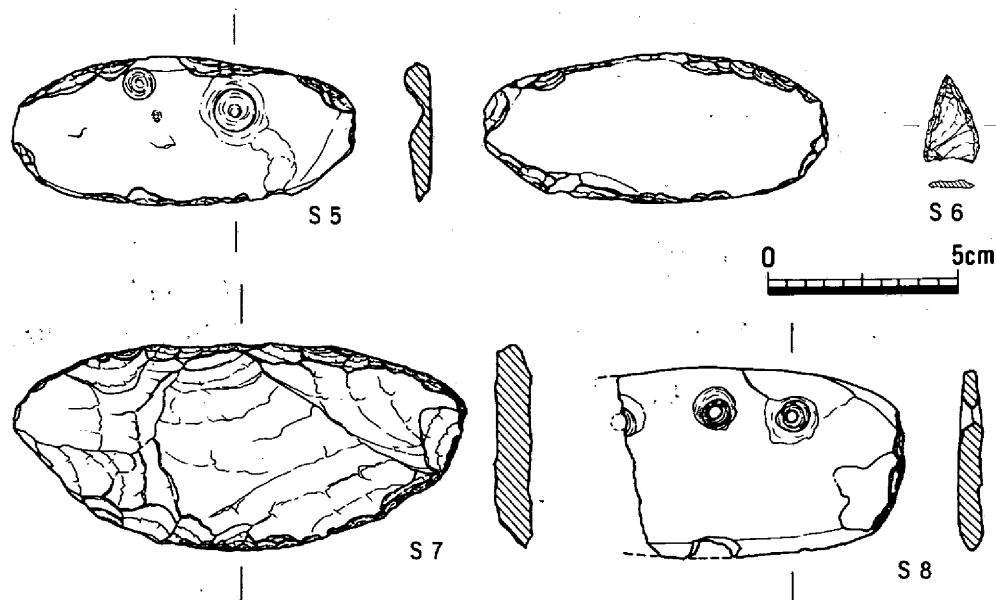
出土遺物が皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や形状等から縄文時代の落とし穴遺構と考えられる。

第64図 土壙6 (1/30)

土壙6

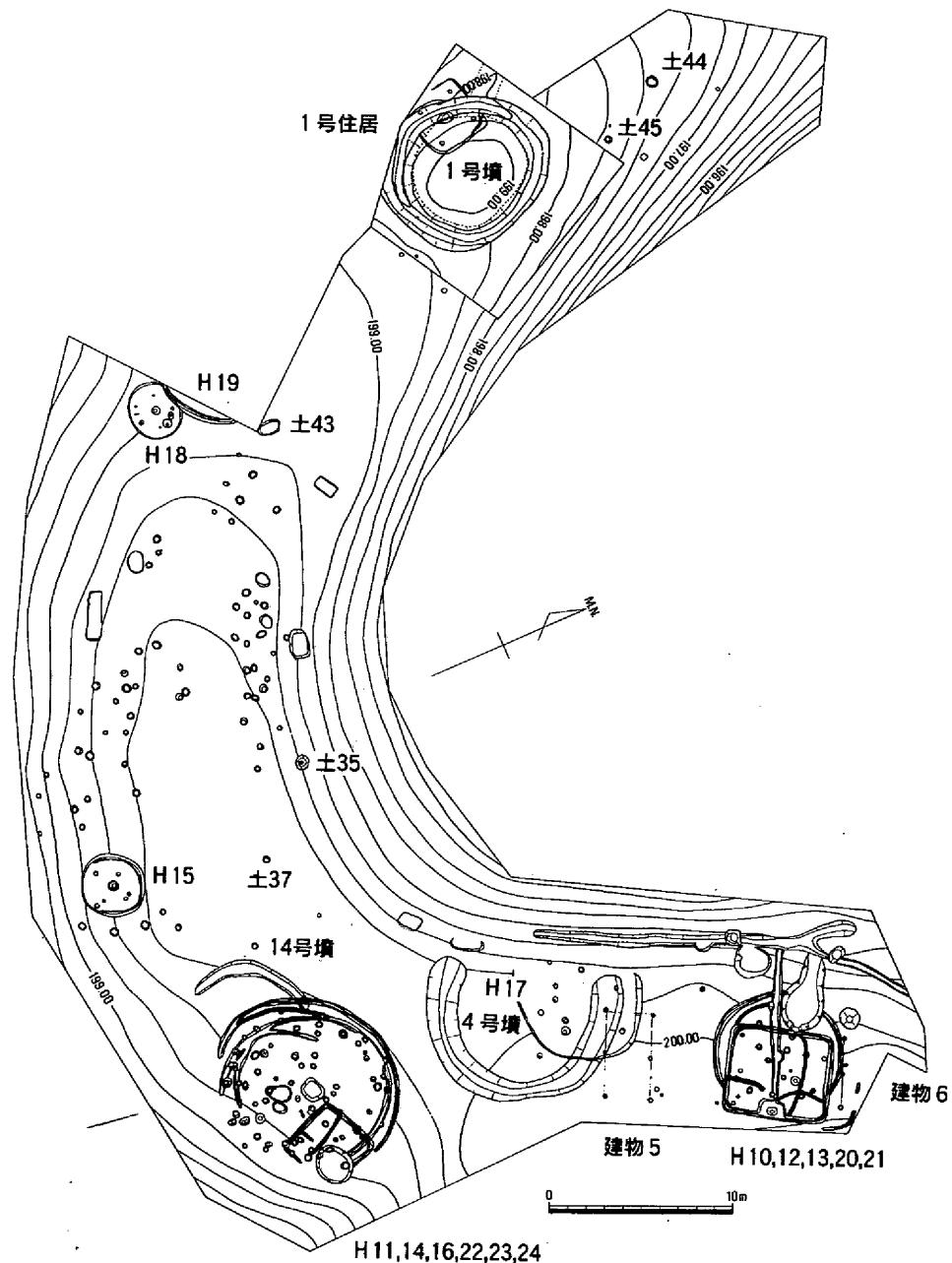


第65図 その他の出土遺物 1



第66図 その他の出土遺物 2

2. 元定古墳群



第67図 2区全体図 (1/400)

### 3. 第2調査区

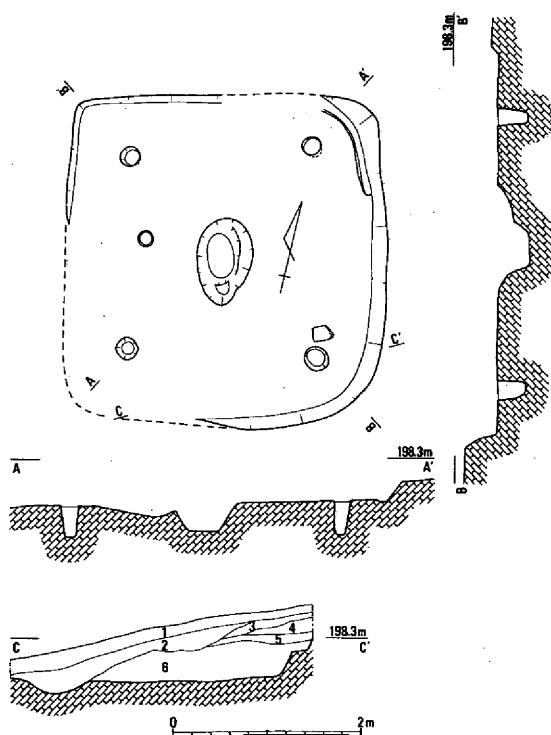
#### 1. 弥生時代の遺構、遺物

##### 竪穴住居

###### 竪穴住居1

第2調査区丘陵先端部の元定1号墳の墳丘盛り土下部に位置するやや小形の竪穴住居である。墳丘の土層断面の観察中に掘り込みを確認する。古墳の周溝により住居の中央付近と南西隅が削平を受けているが住居の形態はほぼ確認できる。

平面規模は、東西3.4m、南北3.5mのほぼ方形を呈す。掘り方は、東側の墳丘下で最も残りがよく最大深さ35cm、西側では、浅く10cm程である。埋土は、黄褐色粘質土の単一層である。



- |                |            |
|----------------|------------|
| 1. オリーブ褐色土     | 4. 明黄褐色粘質土 |
| 2. 暗オリーブ褐色弱粘質土 | 5. 黒褐色粘質土  |
| 3. にぶい黄色粘質土    | 6. 黄褐色粘質土  |

第68図 竪穴住居1 (1/80)

柱穴は、掘り方のコーナーを結ぶ対角線上に4本の主柱穴が位置している。規模は、直径20~25cm、深さ30~35cmを測るほぼ同形同大である。柱間寸法は、1.9m~2.25mである。中央穴は、掘り方のほぼ中央に位置し橢円形の形状で、上面で長径90cm×短径60cm、底面で長径46cm×短径28cmを測る。

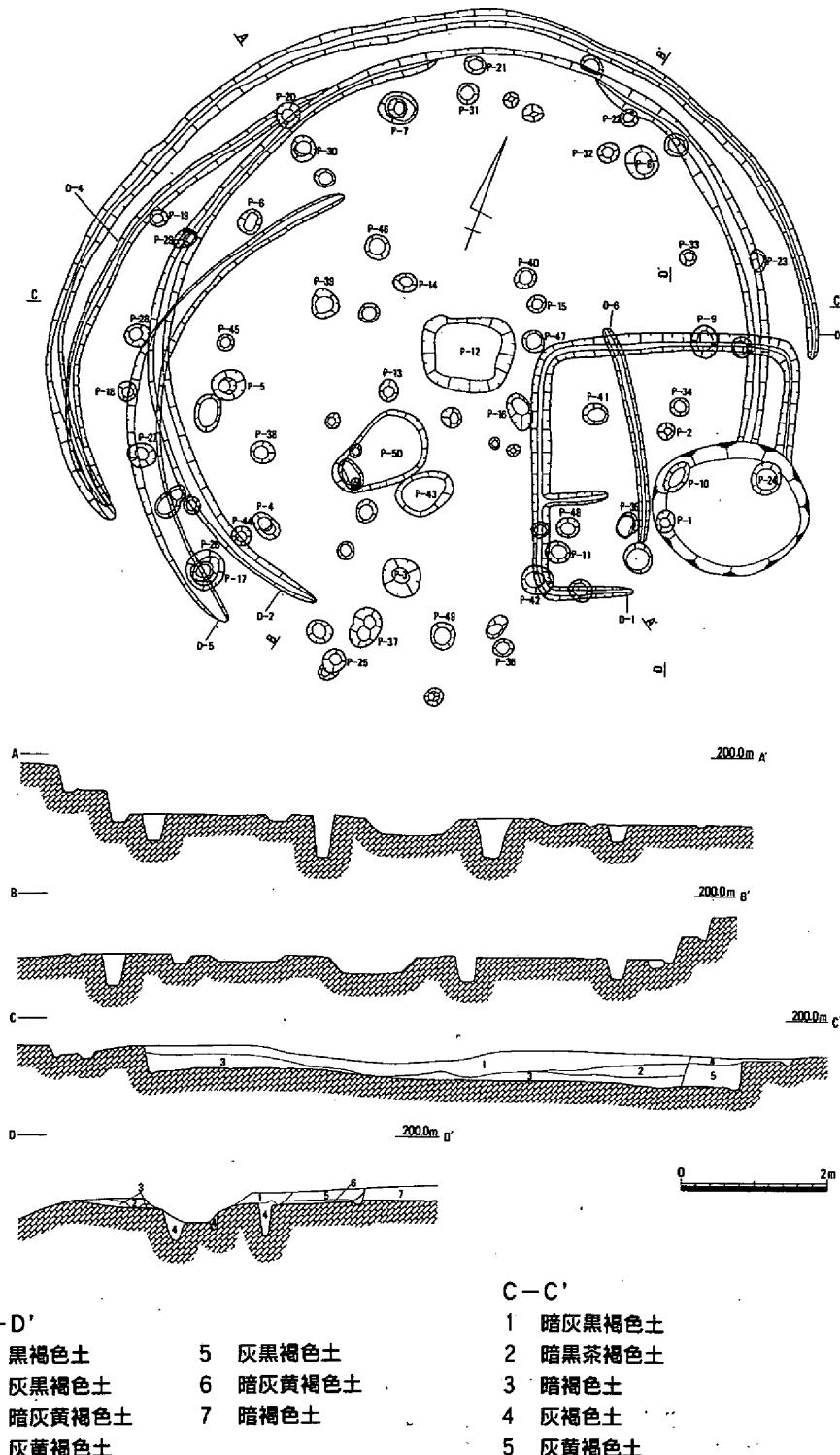
出土遺物は、南東の主柱穴近くの床面に直径20cm程の作業台と見られる石材が位置しているのみで時期の確定はしがたい。

###### 竪穴住居11、14、22、23、24

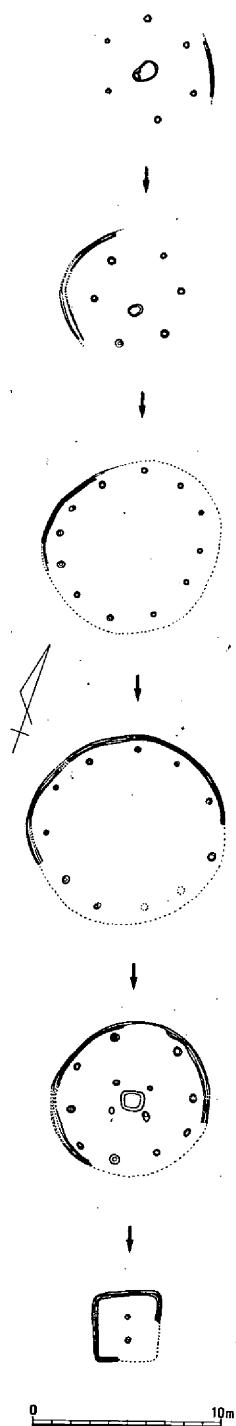
第2調査区南東端の1区との境付近に位置する。最終住居の住居16を含めて最低6回の建て替えが行われている竪穴住居である。なお、当遺跡内では最大規模の住居14も含む。

住居の新旧は、最も古いものが住居24、続いて住居23、住居22、住居

2. 元定古墳群



第69図 穫穴住居11、14、16、22、23、24 (1/100)



第70図 住居新旧図(1/400)

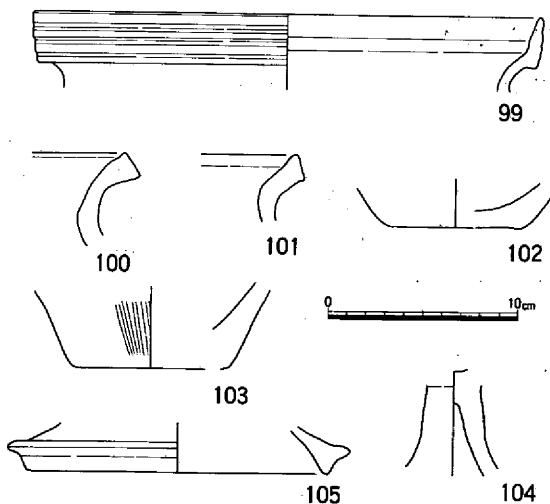
14、住居11、最終が住居16で、最終の住居16を除き平面形はいずれも円形と考えられる。このうち最も良好な住居11は、直径9mの円形を呈し、掘り込みの深さは、最大40cm程を測る。床面中央に位置する中央穴は、長方形の形状をなし長辺1.25m×短辺1.05m、深さ30cmを測り、逆台形状の断面をなす。

柱穴は、壁面より60~130cm内側に2~2.5mの間隔に位置する直径25~40cm、深さ30~57cmを測る合計9本が主柱穴と考えられる。さらに、中央穴周囲には、直径25~30cm、深さ37~58cmの柱穴4本を棟持ち柱状に配置し、合計13本の柱で構成されている。

当遺跡内で最大規模をなす14号住居は、南半が削平を受けて掘り方や柱穴の一部が不明瞭であるもののほぼ円形を呈し、直径10.5mを測る。

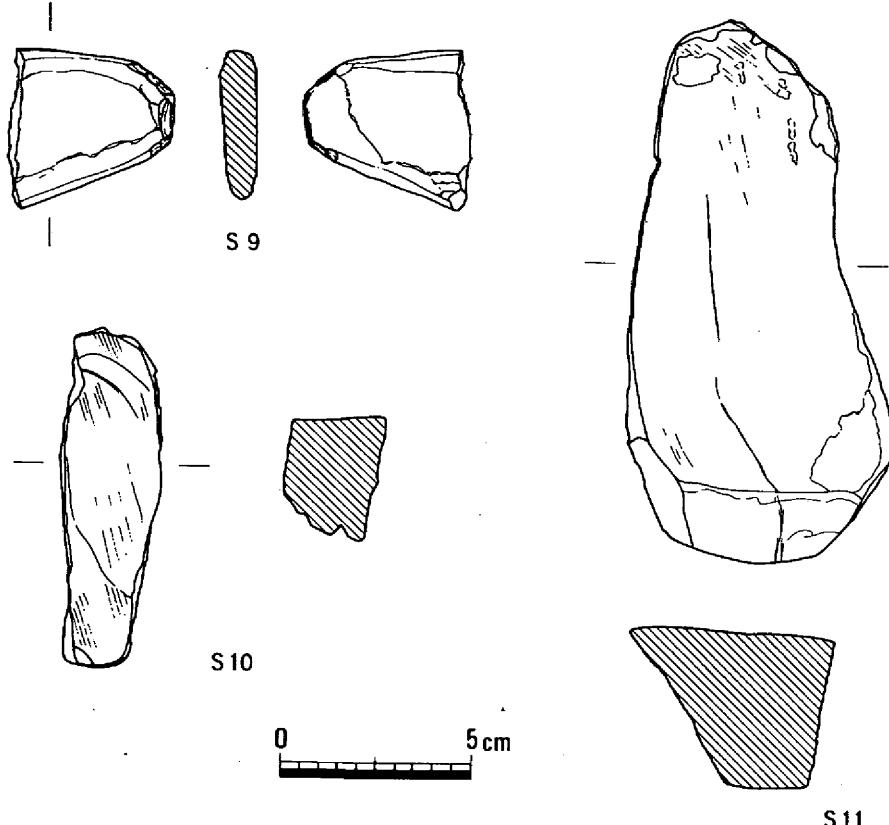
柱穴は、壁面より内側60~100cmに2.3~3mの間隔で位置する直径20~40cm、床面よりの深さ30~40cmを測る合計11本ほどが想定される。なお、中央穴周囲にも住居11と同様に配置されたものと考えられるが住居11との重複により不明瞭である。

出土遺物は、竪穴住居11の埋土中より弥生土器片、石器、



第71図 竪穴住居11出土遺物

2. 元定古墳群



第72図 竪穴住居11、14 出土遺物

住居14より砥石が出土している。住居11の時期は、弥生時代後期の前半と考えられる。

竪穴住居16

第2調査区東端の尾根上に住居11、14、22、23、24と重複する最終の竪穴住居である。掘り方南東隅と床面東側が削平と近世土壠により不明瞭である。平面形は、一辺が3.6mの方形を呈す。掘り方は、最大40cm程である。柱穴は、床面中央に1.3mの間隔を置き南北に位置するP1、2の2本が主柱穴である。規模は、直径25cm、深さ25cm前後である。

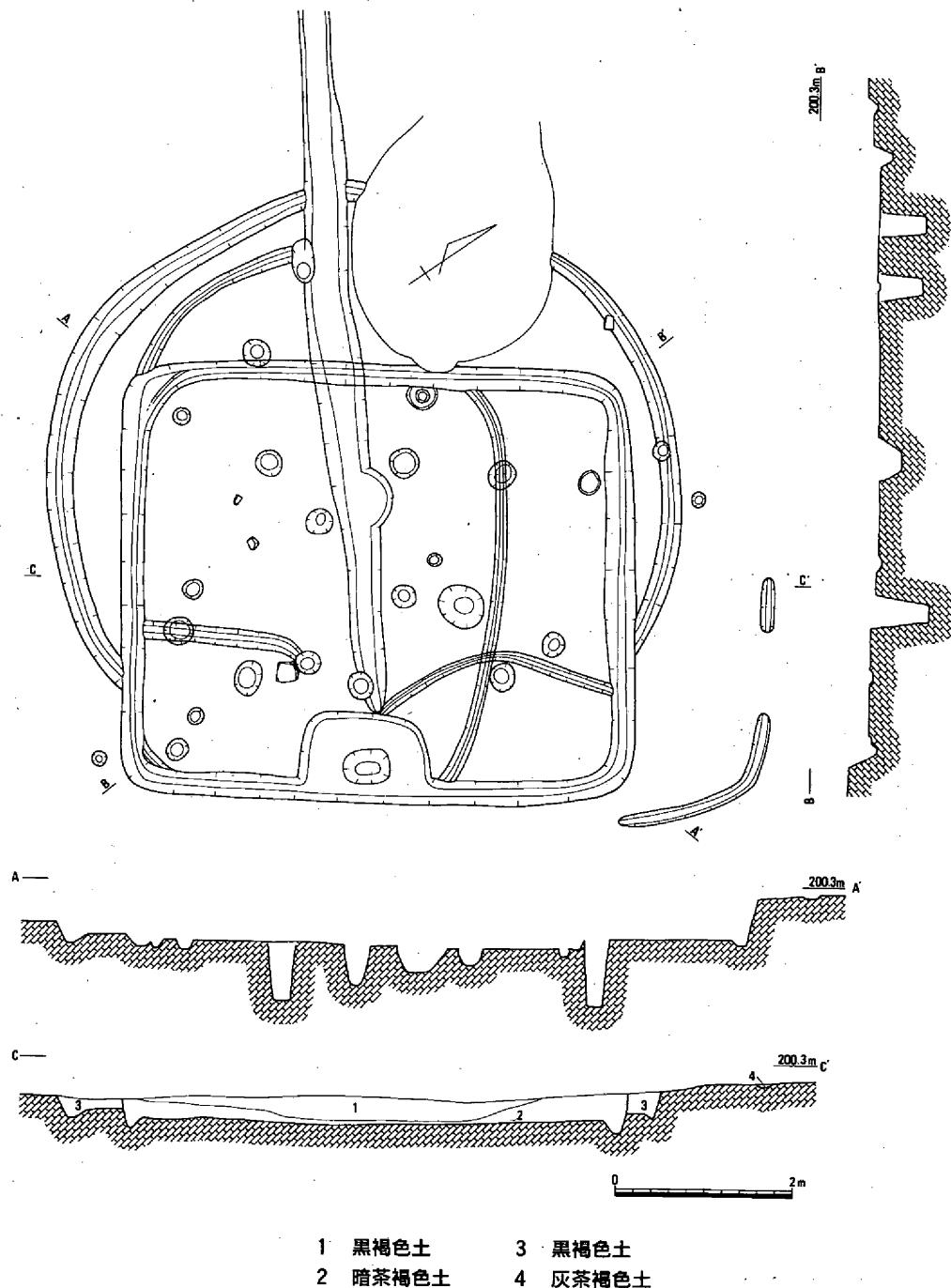
出土遺物は、埋土中より若干の土器片が出土している。時期は、出土遺物の特徴や遺構の切り合いから古墳時代の前半と考えられる。

竪穴住居10、12、13、20、21

第2調査区北東端の第1調査区境に位置する5基の重複する竪穴住居である。

住居の新旧は、周溝の一部と柱穴のみの住居21が最も古く、続いて住居13、住居12、住居20、最終が住居10である。住居の形態は古い2基が円形をなし、新しい3基は方形をなす。

このうち最も規模の大きい住居13は、一部削平を受けているものの直径7.2mを測る円形を



第73図 壙穴住居10、12、13、20、21 (1/80)

## 2. 元定古墳群

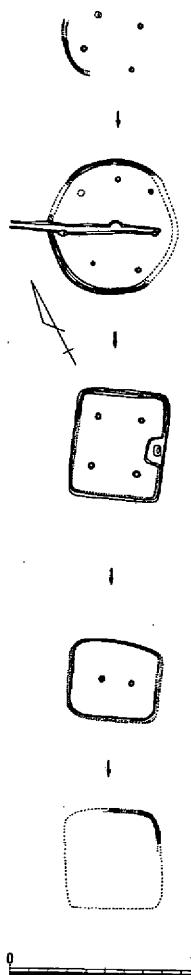
呈し、最大深さ25cm程の残存状況である。床面には、中央を東西に縦断し掘り方外に延びる検出長8m、幅35~55cm、深さ30cmの溝を設けている。

主柱穴は、検出した直径15~30cm、最大深さ50cm程度のもの6本と配列等から現代の炭窯に削平された位置に1本を想定すると合計7本の配列が考えられる。

最も良好な残りの住居12は、長辺5.8m×短辺4.95mの方形を呈し、床面まで最大深さ35cmを測る。東側壁面に接し、長辺1.5m×短辺1m、深さ68cmの長方形の土壙を設けている。

柱穴は、掘り方のコーナーを結ぶ対角線上に4本の主柱穴を配置している。規模は、直径30cm、深さ50~70cmを測る。

住居12と掘り方の三辺を共有する住居20は、長辺4.95m×短辺4.35mの長方形を呈する。柱穴は床面中央に1.6mの間隔を置き位置する2本である。規模は、直径30cm前後、深さ34cmと41cmである。

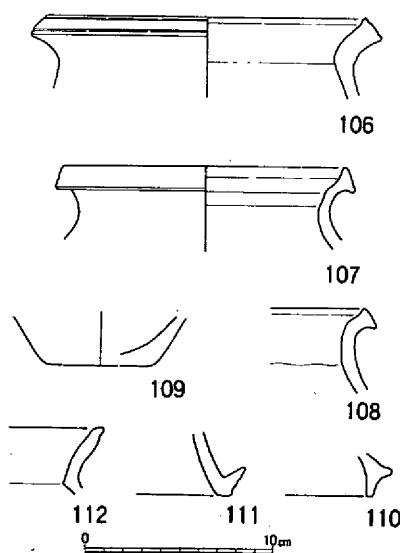


第74図 住居新旧図 (1/400)

出土遺物は、住居12の埋土中より混入とみられる弥生土器、土師器、石器が出土している。時期は、遺構の切り合いや出土遺物から住居13、21が弥生時代後期前半期、住居12、20が弥生時代終末~古墳時代前半期であろう。住居10については、不明瞭である。

## 竪穴住居15

第2調査区中央やや南よりに位置する小形の竪穴住居である。



平面形は、ほぼ円形を呈し直径3.4mを測る。掘り方は、床面まで北端で最大45cmと良好に残存していた。柱穴は床面に合計6本検出している。このうちP1~P4が直径20cm前後、深さ10~14cmを測り、主柱穴と考えられる。ただ、P3、4の柱穴には、同規模の柱穴が接して認められることから柱の

第75図 竪穴住居12出土遺物1

建て替えが行われたことが窺われる。

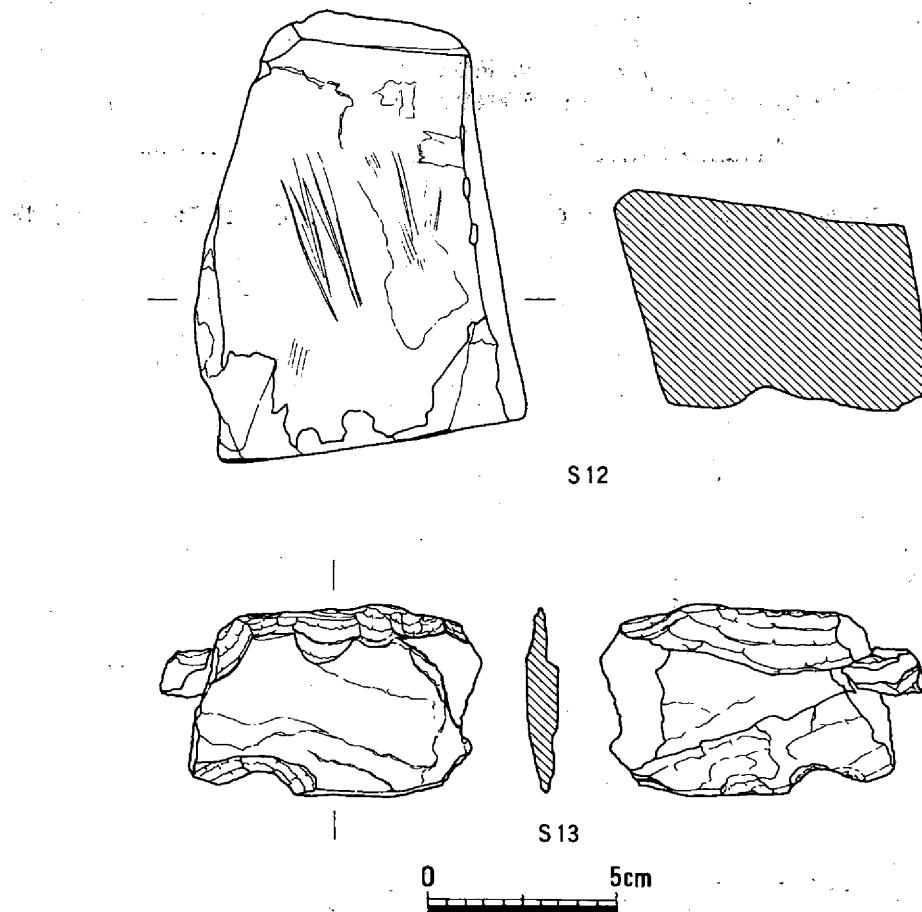
床面のほぼ中央には、直径55cm、深さ21cmの中央穴を設けている。

遺物は、図化できなかったが埋土中から若干の土器片が出土している。時期は、出土遺物の諸特徴から弥生時代後期であろう。

#### 竪穴住居17

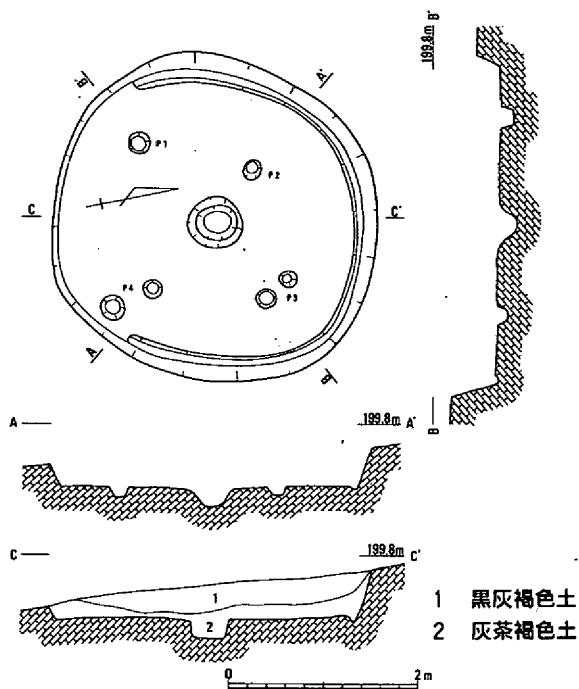
第2調査区東端の第1調査区境に建物5、4号墳と重複する竪穴住居状の遺構である。住居掘り方の西半は、床面も削平を受けている。検出最大幅7m、最大深さ30cmを測る。埋土は、暗褐色の単一層である。柱穴は、建物5の2本を除いて合計9本検出したが主柱穴の配列は不明瞭である。

遺物は、埋土中から若干の土器片が出土している。時期は、出土遺物の諸特徴から弥生時代後期であろう。



第76図 竪穴住居12出土遺物2

2. 元定古墳群

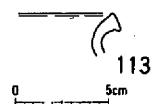


第77図 壇穴住居15 (1/80)

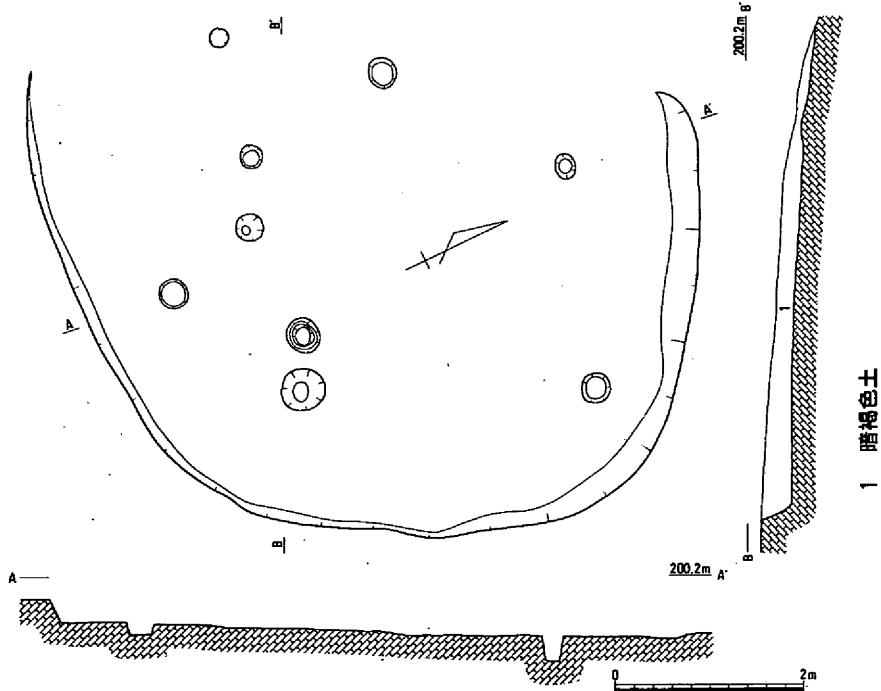
壇穴住居18

第2調査区の南西端近くに位置し、住居19に掘り方の一部を削平された小形の壇穴住居である。規模は、長径3.15m×短径2.75mのほぼ円形に近い形状を呈す。掘り方は、東端で最大30cm程の深さである。埋土は、黒褐色土を呈す第1層と2層以下とに大別できる。

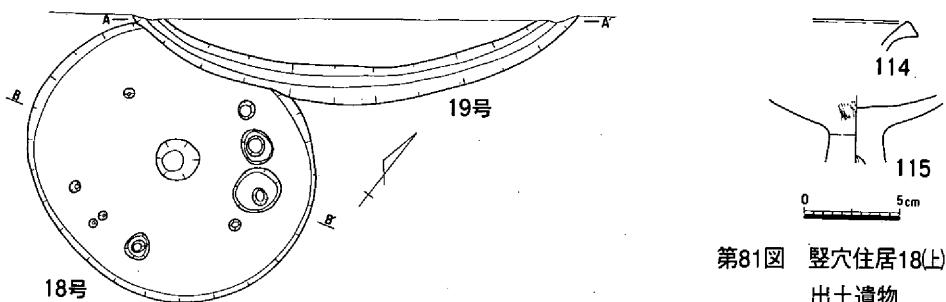
柱穴は、床面に合計9本検出したものの主柱穴の配置は不明瞭で



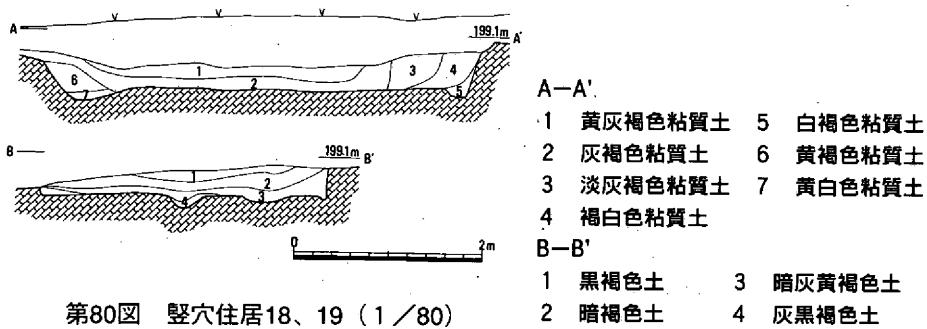
第79図 壇穴住居17出土遺物



第78図 壇穴住居17 (1/80)



第81図 竪穴住居18(上)、19(下)  
出土遺物



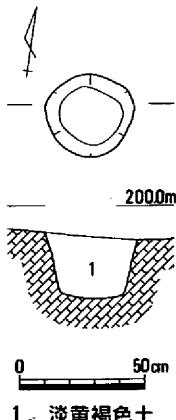
第80図 竪穴住居18、19 (1/80)

ある。住居のはば中央に設けられた中央穴は、円形を呈し直径45cm、深さ15cmである。

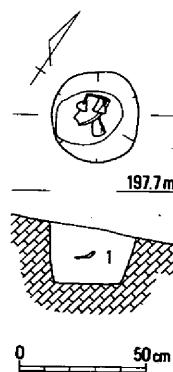
遺物は、埋土中より若干の土器片が出土している。時期は、出土遺物や切り合いから弥生時代後期の前半であろう。

### 竪穴住居19

住居18の掘り方の一部を切り込んで北側に位置する。北西側の大半が墓地のため未調査である。掘り方の形状から推察して直径7m程度の円形をなすものと思われる。床面は、ほぼ平坦面をなし壁面下には、幅30~40cm、深さ5cm程度の溝が明瞭に巡っている。柱穴は検出範囲で

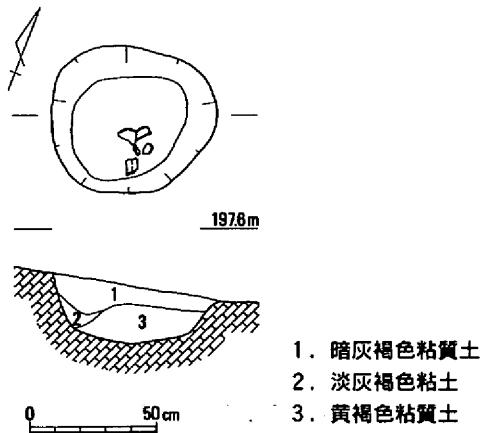


第82図 土壌37 (1/30)

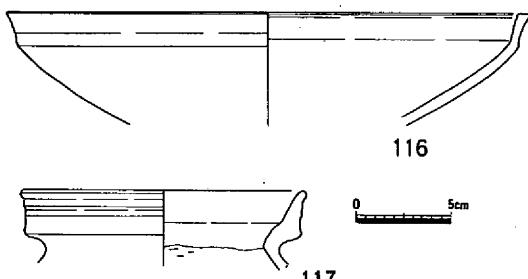


第83図 土壌45 (1/30)

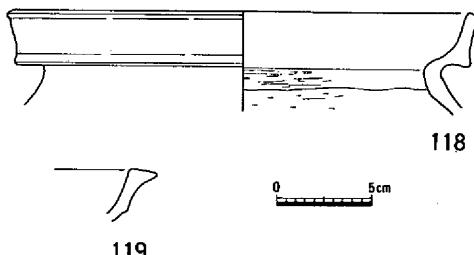
## 2. 元定古墳群



第84図 土壙44 (1/30)



第85図 土壙45出土遺物



第86図 土壙44出土遺物

面で橢円形を呈する。規模は、上面で直径35cm、底面で長径27cm×短径20cmである。掘り方断面は、逆台形状をなし深さ25cmを測る。

埋土は、炭化物と土器片を含む淡灰黄色粘質土の単一層である。時期は、出土遺物等から弥生時代後期前半であろう。

は認められなかった。

遺物は、埋土中から若干の土器片が出土している。時期は、出土遺物の特徴や構造の切り合い等から弥生時代の後期後半であろう。

### 土壙37

第2調査区の中央に位置する土壙45と同様の小形の土壙である。平面形は円形を呈し、上面で直径35cm、底面で直径21～25cmである。掘り方断面は逆台形状をなし深さ25cmを測る。

埋土は、土器と炭化物を含む淡黄褐色土の単一層である。時期は、出土遺物に細片が多く確定し難いが器形の特徴等から弥生時代の後期であろう。

### 土壙44

第2調査区の北西端に位置する。平面規模は、円形に近い形状をなし上面で長径65cm×短径60cm、底面で長径50cm×短径40cmを測る。掘り方断面は、U字形をなし深さ27cmを測る。

埋土は、3層に分離でき第1層の暗灰褐色粘質土に土器片を多く含んでいる。時期は、出土遺物等から弥生時代後期の前半であろう。

### 土壙45

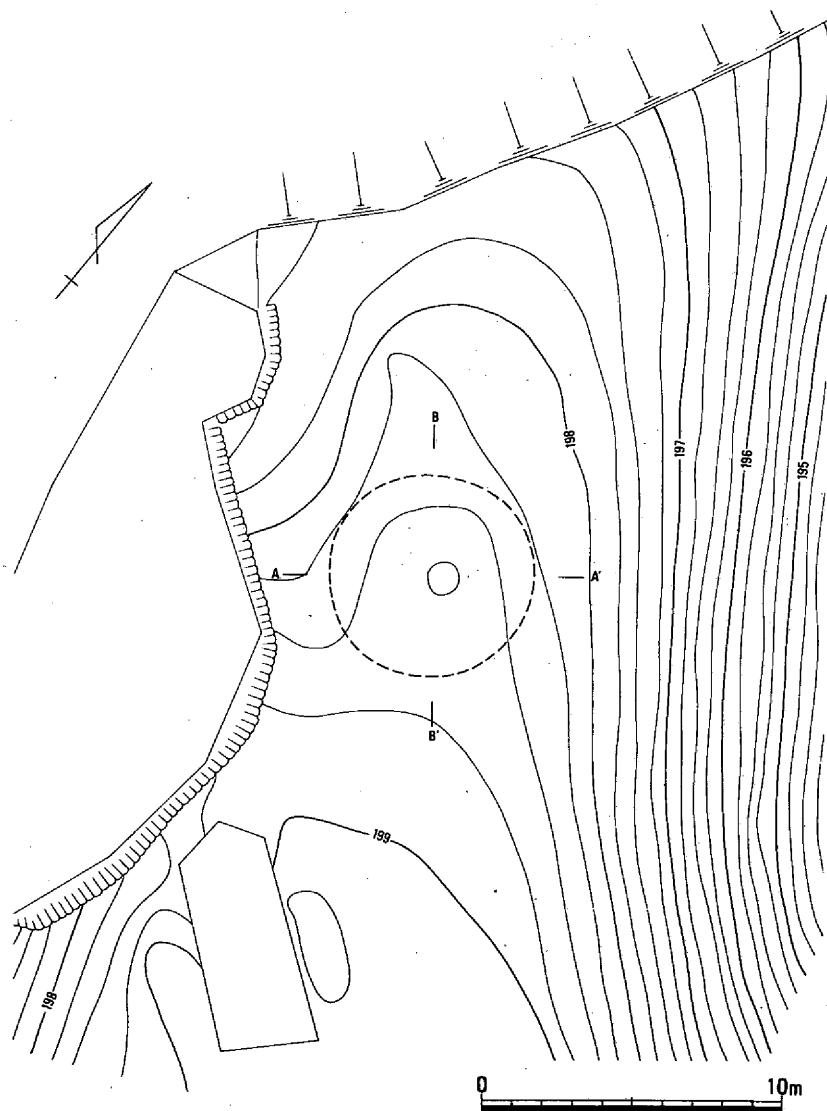
第2調査区の北西端に位置する小形の土壙である。平面形は、上面で円形、底

## 2. 古墳時代、その他の遺構、遺物

### 古墳

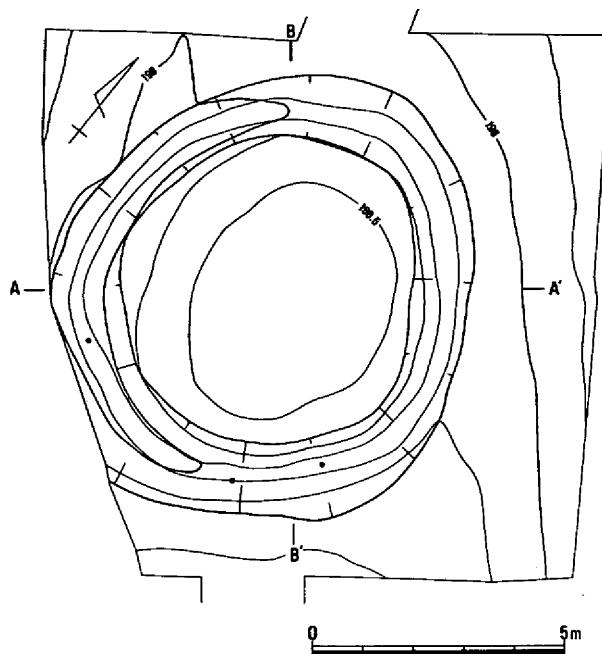
#### 1号墳

第2調査区の北方に延びる尾根の先端近くに位置する従前より周知されている古墳で、当初の



第87図 1号墳調査前測量図 (1/250)

## 2. 元定古墳群



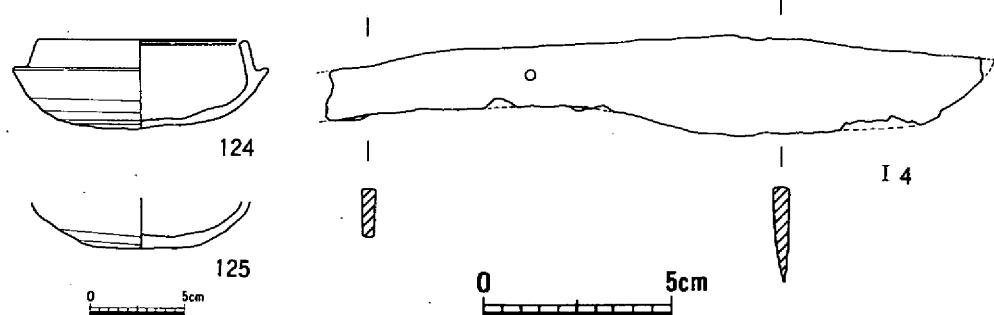
第88図 1号墳 (1/150)

～黄褐色の粘質土が使用されている。なお、A-A'の土層断面の西側の地山の掘り込みは、1号住居の掘り方である。周溝は、最大幅1.9m、平均で1m前後、最大深さ30cmを測り、皿状の断面を呈し、全周している。周溝内の流入土は、暗オリーブ褐色の弱粘質土である。溝底面は、北西付近を最高所として両側に徐々に下降し南西側で40cm程差が認められる。墳丘規模は、周溝下端の状況から南北7m、東西6.7mの小規模な円墳である。

唯一の調査対象であった。

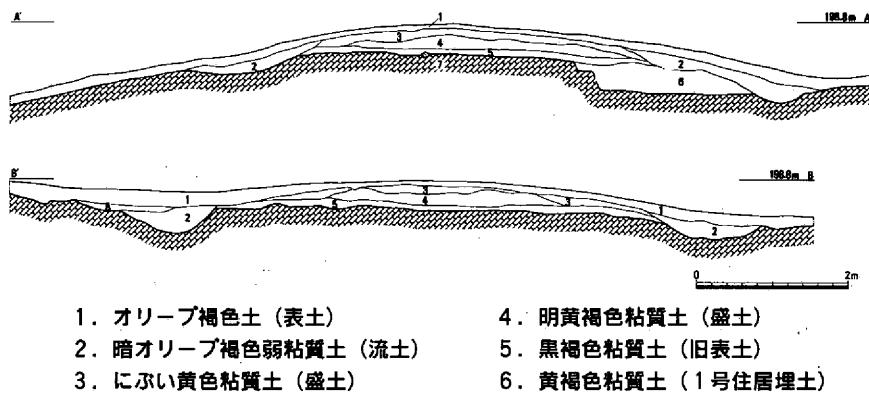
調査前の付近の状況は、尾根東側が栗林、西側が墓地と檜の植林で、当墳は、墓地を西側の境とし、ほぼ全体が栗林中に位置している状況であった。ただ、下草が繁茂している中での事前の踏査では、古墳位置がなかなか把握できない程の低い墳丘を持つ古墳であった。調査前の墳丘測量図からもわずか50cmの高まりが確認できるにすぎなかった。

調査の結果、墳丘盛り土は、黒褐色の旧表土の上に中心部で厚さ40cm程の黄色



第89図 1号墳出土遺物 1

第90図 1号墳出土遺物 2



主体部は、充分に精査したにもかかわらず確認できなかった。恐らく、墳丘の低さや周溝中から主体部に伴うと思われる遺物の出土が見られることから、すでに主体部は、削平されたものと見られる。

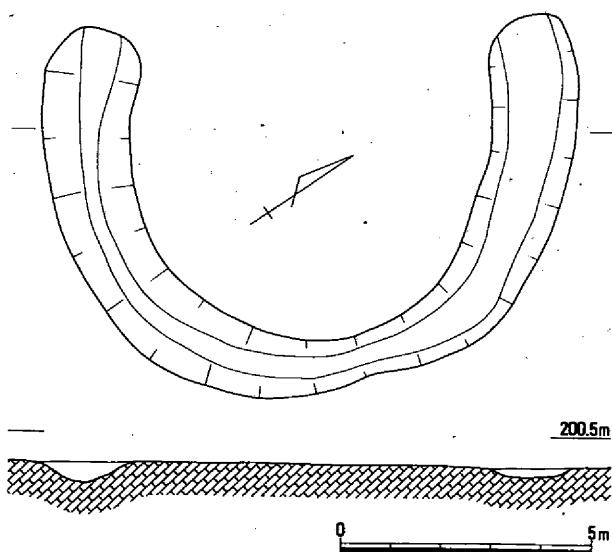
出土遺物は、北側周溝内の流入土からおそらく主体部の副葬品とみられる須恵器の杯身と底部片、鉄器が出土している。時期は、主体部がすでに消失していて明確な副葬品がないことか

ら定かでないが、周溝出土の主体部からの流入と考えられる須恵器の特徴から、5世紀代の後半期が考えられる。

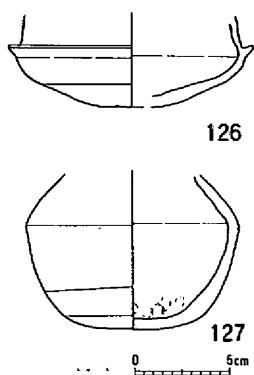
#### 4号墳

第2調査区の東端に確認調査により検出した古墳である。墳丘盛り土、主体部とともに削平されわずかに馬蹄形に周溝が残存するのみである。残存周溝は、平均幅1.5~1.6m、最大深さ45cmである。

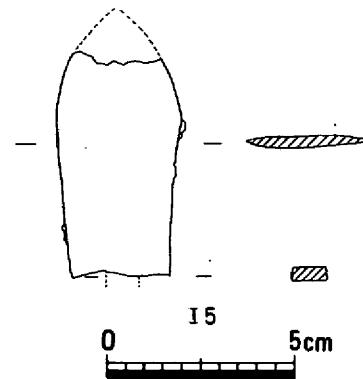
掘り方断面は、皿状から



第92図 4号墳 (1/150)



第93図 4号墳出土遺物 1



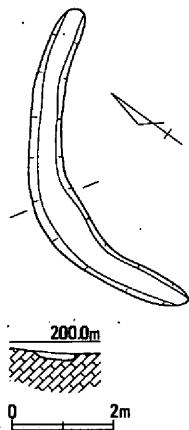
第94図 4号墳出土遺物 2

U字形を呈し2～3層の堆積層を成す。墳丘規模は、残存周溝から推定して直径約9mの円墳と考えられる。

出土遺物は、周溝中からの須恵器片と鉄器である。古墳の時期は、確定し難いが、周溝出土の遺物等を考慮すると6世紀初頭前後であろう。

#### 14号墳

第2調査区中央やや東よりに弥生時代の11号住居と一部重複し検出した。墳丘盛り土、主体部ともなく、わずかに弧状に周溝が残存するのみである。残存周溝は、全長7m、最大幅90cm、深さ15cmほどである。掘り方断面は、皿状をなし、灰茶褐色土の単一層の堆積である。墳丘規模は、残存周溝から推定して直径約7mほどの円墳と考えられる。



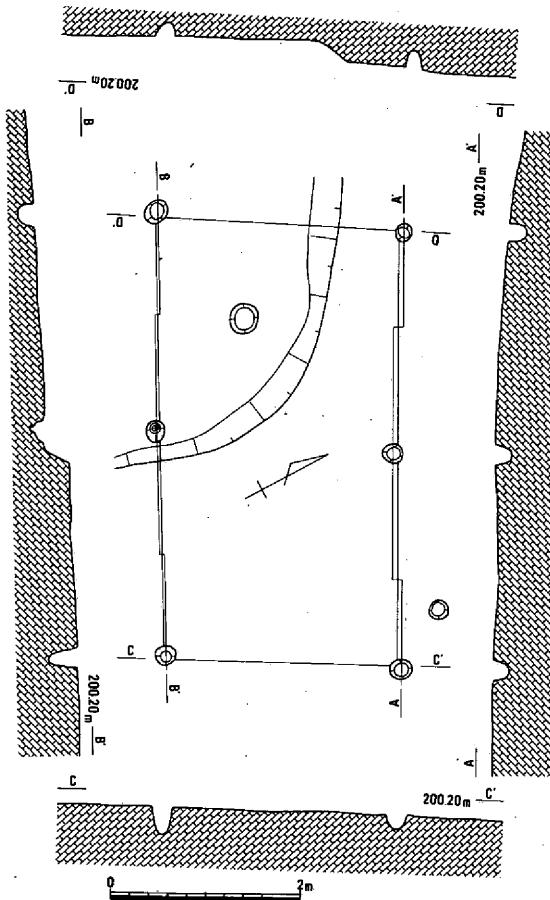
第95図 14号墳 (1/150)

出土遺物が皆無で時期の確定はしがたいが、検出した周辺部の古墳から5世紀後半から6世紀代のものであろう。

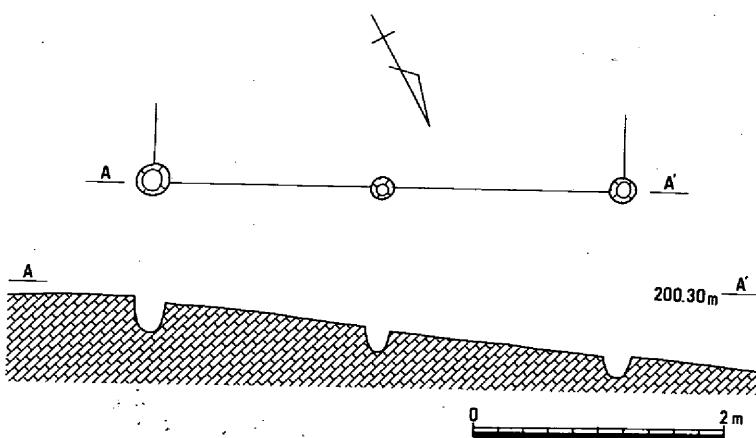
#### 建物5

第2調査区北東端の第1調査区との境付近に竪穴住居17と重複して検出した。規模は、桁行き2間(4.7m)×梁行き1間(2.6m)を測る掘立柱建物である。建物の棟方向は、磁北より63度西で建物6と同方向である。建物の床面積は12.2m<sup>2</sup>である。柱間寸法は2.3から2.6mを測る。柱穴は、直径20cm程度の小形のものでほぼ同形同大をなし、深さも最大30cm、平均20cm程と浅い。

出土遺物は、柱穴内より古墳時代の土器の細片が出土している。建物の時期は、出土遺物や埋土等から古墳時代後半であろう。



第96図 建物 5 (1/80)



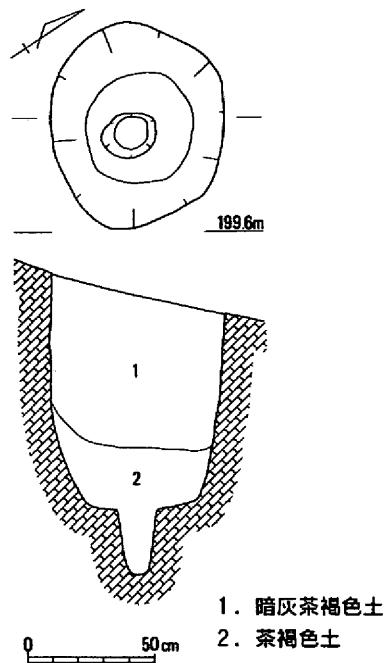
第97図 建物 6 (1/60)

## 建物 6

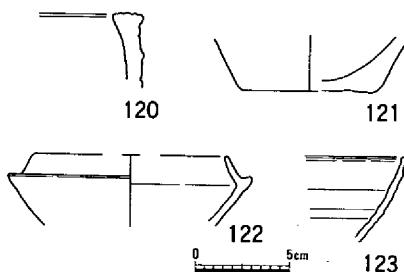
第2調査区北東端に検出した桁行き2間(3.8m)のみ検出の掘立柱建物である。恐らく建物5と同様の梁行き1間が想定される。建物の棟方向は磁北より62度西で建物5と同方向である。柱穴は、直径20~25cm、深さ15~25cmである。

建物の時期は、柱穴内より出土の土器や埋土、建物5と同方向をなすこと等から古墳時代後半であろう。

## 2. 元定古墳群



第98図 土壌35 (1/30)



第99図 その他の出土遺物

## 3. その他の遺構、遺物

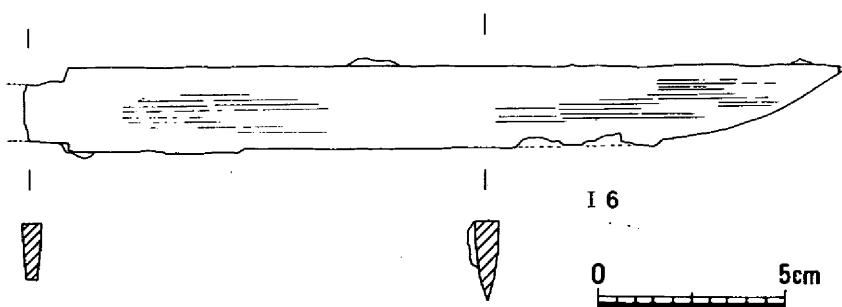
### 土壌35

第2調査区の中央に位置する。平面形は、上面、底面とも円形を呈し、上面で直径68cm×80cm、底面で42cm×45cmである。掘り方断面は、筒状を呈し深さ64cmを測る。底面はほぼ水平面をなし、底面中央には直径20cm、深さ26cmの柱穴を設けている。

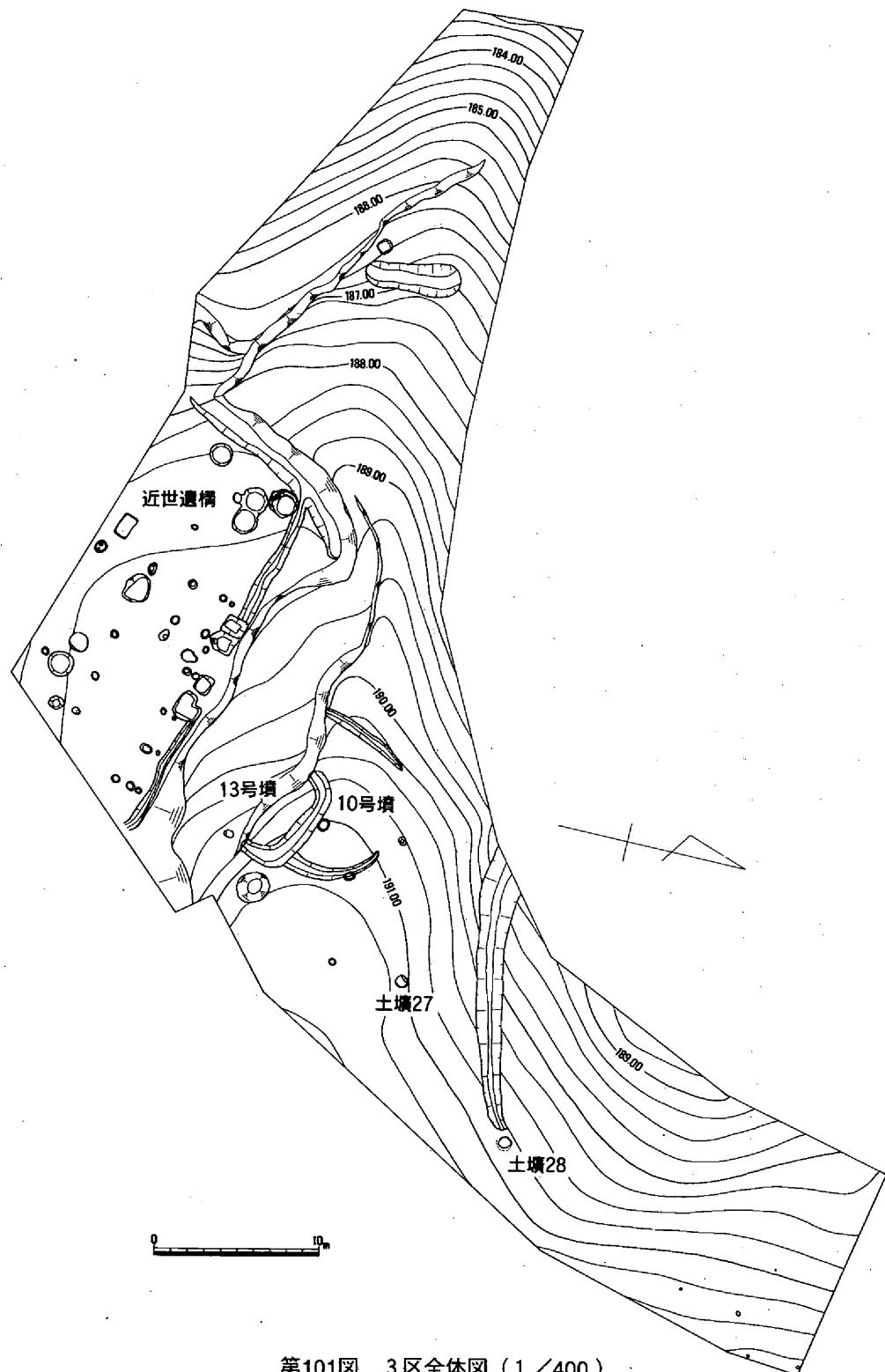
埋土は、上層の暗茶褐色土と下層の茶褐色土の2層に分離できる。出土遺物が皆無のため時期の確定はしがたいが、埋土や形状から縄文時代の落とし穴遺構であろう。

### その他の遺物

調査区内の遺構に伴わない遺物を掲載した。このうち(120)は、弥生時代中期後半の高杯もしくは台付き鉢の口縁端部である。(123)は、遺構の検出は行っていないがロクロ目が顕著な中世の勝田焼きの椀の口縁部である。(S 6)は、調査区のやや北よりで検出した近世土壌墓からの出土である。



第100図 土壌43近世墓出土遺物



第101図 3区全体図 (1/400)

## 4. 第3調査区

### 1. 弥生時代の遺構、遺物

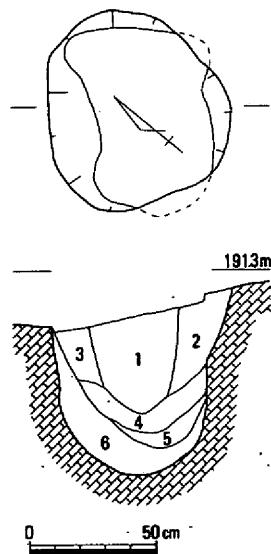
#### 土壤27

調査区中央やや東よりに検出した土壤である。平面形は、上面、底面とも不定形な形状を呈す。規模は、上面が長径73cm×短径70cm、底面が長径74cm×短径44cm、深さ73cmを測る。掘り方断面は、U字形を呈す。

埋土は、6層に分離でき、第1層の褐色土中より土器片が出土している。時期は、埋土中の遺物等から弥生時代後期のものであろう。

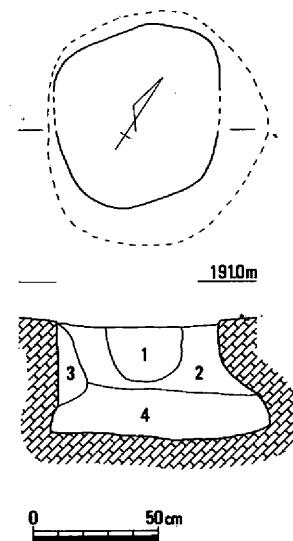
#### 土壤28

調査区東側のやや北側斜面に検出した貯蔵用の土壤である。平面形は、上面、底面ともほぼ円形を呈す。規模は、上面が直径67cm、底面が長径92cm×短径87cm、深さ45cmを測る。断面は、袋状を呈しほぼ水平な底面をなす。埋土は、4層に分離でき、最下層の黒黄褐色粘質土は水平な堆積をなす。時期は、埋土中の遺物等から弥生時代後期であろう。



- |              |          |
|--------------|----------|
| 1. 褐色土（土器含む） | 4. 暗褐色土  |
| 2. 灰黄褐色土     | 5. 暗赤褐色土 |
| 3. 淡灰黄褐色粘質土  | 6. 暗赤褐色土 |

第102図 土壌27 (1/30)



- |          |                 |
|----------|-----------------|
| 1. 黒黄褐色土 | 3. 暗黄褐色土と黄褐色土混り |
| 2. 暗黄褐色土 | 4. 黑黄褐色粘質土      |

第103図 土壌28 (1/30)

## 2. 古墳時代の遺構、遺物

### 10、13号墳

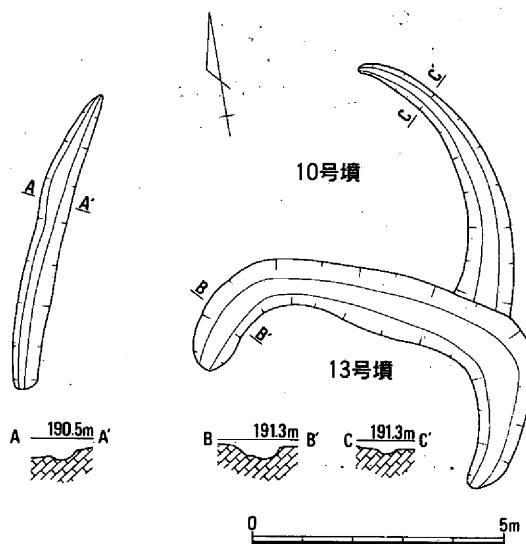
第3調査区のほぼ中央に検出した2基の重複した古墳である。第1次の確認調査で周溝の一部の検出と須恵器片が出土している。いずれの古墳も南半は、近世の造成により、墳丘盛り土、主体部は削平により消失し、周溝のみである。

2基の古墳のうち、コ字状に検出した13号墳は、一辺が約5mの方墳で10号墳周溝を切っていることが確認された。残存周溝は、最大幅1.3m、深さ38cm前後を測る。掘り方断面は、浅いU字形を呈し、周溝内には、褐色粘質土が堆積している。

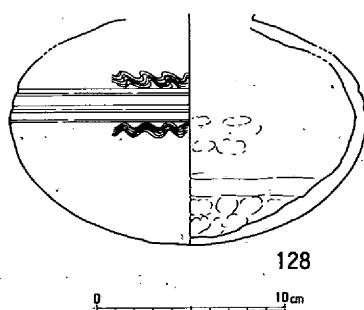
直接当古墳に伴う遺物が皆無で時期の確定に乏しいが10号墳との切り合いから13号墳の出土須恵器以降であろう。

10号墳は、13号墳と切り合いのある検出長5mの弧をえがく溝と8mほど西側に検出した溝No.6を残存周溝と想定すると直径約8.5mの円墳と想定される。残存周溝は、最大幅1m、深さ12~20cmを測る。掘り方断面は、浅いU字形を呈し、暗褐色の粘質土が堆積している。

出土遺物は、10号墳周溝中から古式の須恵器片(128)が出土している。器形は、体部中央に2本の沈線と2条の櫛描き波状文を施す短頸の壺形土器とみられる。胎土もきめ細かく、非常に堅緻なつくりである。時期は出土遺物から10号墳が5世紀の後半期と想定され、13号墳は切り合いからそれ以降であろう。

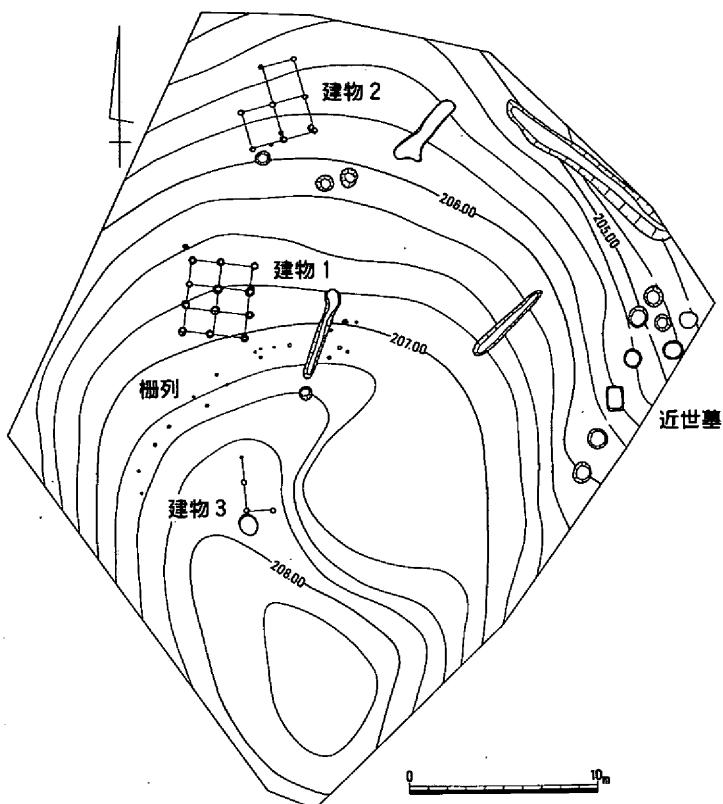


第104図 10、13号墳 (1/150)



第105図 10号墳出土遺物

## 5. 第4調査区



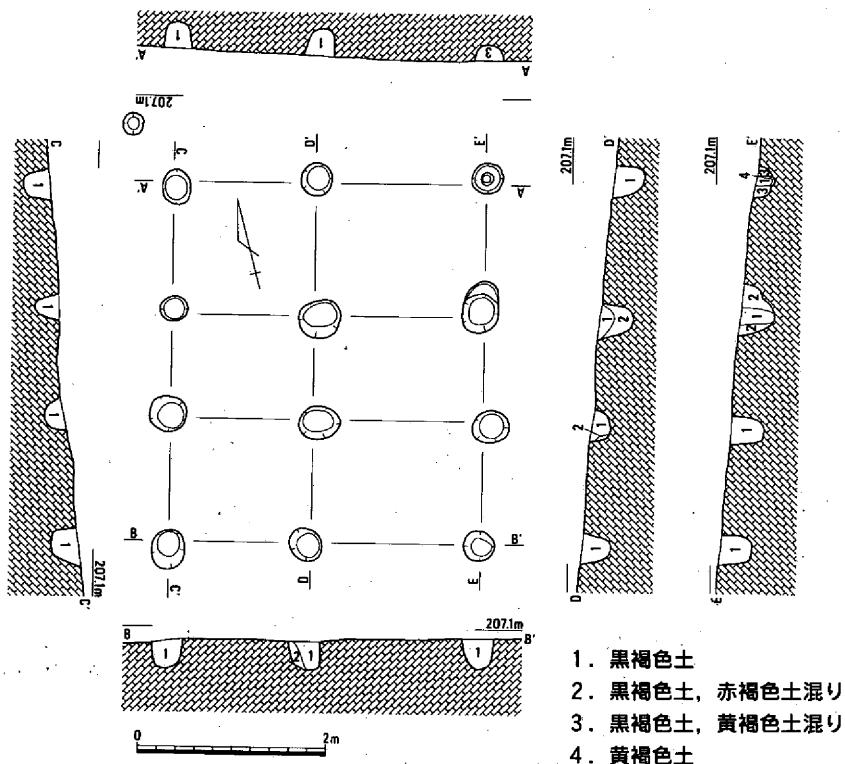
第106図 4区全体図 (1/400)

### 1. 弥生時代の遺構、遺物

#### 建物 1

調査区の中央やや西よりに検出した桁行き 3間 (3.9m) × 梁行き 2間 (3.3m) を測る総柱の掘立柱建物である。建物の棟方向は、磁北より 15 度東に偏る。柱間寸法は、梁行きの西側が 1.5m、東側が 1.7~1.8m、桁行きはやや間隔が狭く 1.2~1.4m を測る。柱穴は、いずれもほぼ円形をなし直徑 30~40cm、深さ 20~35cm である。建物床面積は 12.9m<sup>2</sup> を測る。

柱穴内より弥生時代後期の土器細片が出土していることや埋土の特徴等から弥生時代の遺構と考えられる。



第107図 建物1 (1/80)

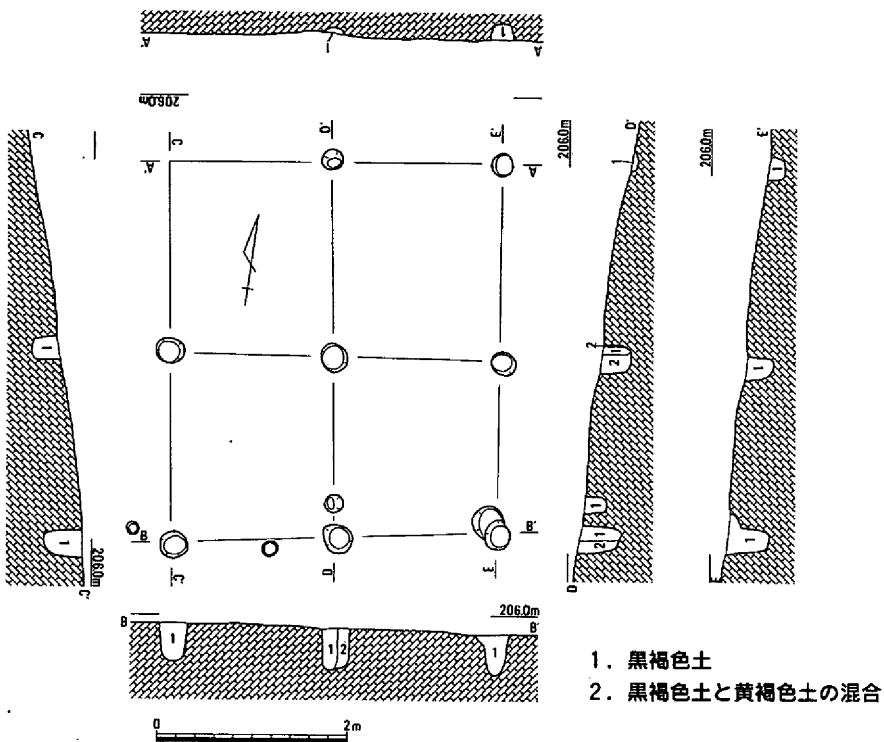
### 建物2

調査区の北端に検出した桁行き2間(4m)×梁行き2間(3.5m)を測る建物1と同様の総柱の掘立柱建物である。北西隅の柱穴は削平を受け消失している。建物の棟方向は、磁北より8度西に偏る。柱間寸法は、梁行きが1.7~1.8m、桁行きが1.9~2.1mを測る。柱穴は、いずれも円形をなし直径20~30cm、深さは南側の良好なもので40cmを測る。建物床面積は、14m<sup>2</sup>と想定できる。

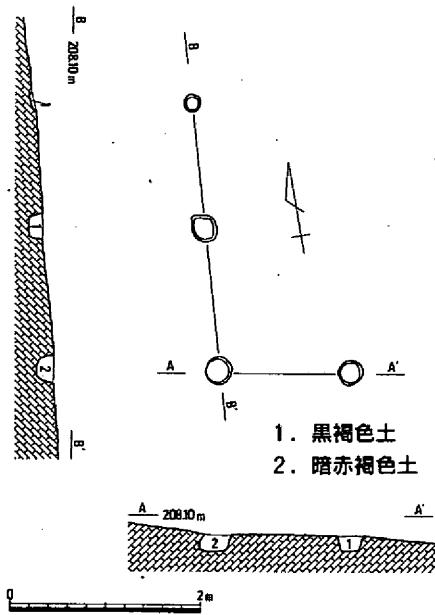
柱穴内より弥生後期の土器片が出土していることや埋土の特徴等から弥生時代後期の遺構であろう。

### 建物3

調査区の中央やや南よりにL字に検出した掘立柱建物の一部である。検出長は、南北が2間(2.9m)×東西が1間(1.4m)を測る。建物の棟方向を南北とすると、磁北より7度ほど東を向く。柱間寸法は、梁行き、桁行きとも1.4~1.5mである。柱穴は、いずれも円形をなし良好なもので直径20~25cm、深さ20cmである。



第108図 建物2 (1/80)



第109図 建物3 (1/80)

時期は、柱穴内の出土遺物や埋土の特徴等から建物1、2と同様の弥生時代後期であろう。

#### 柵列

建物1と建物3の間に全長16m程にわたり柵状の柱穴列を検出した。柱穴は、20cm前後と建物と比較し小規模で、深さも10~20cmのものが中心を成す。柱間も不揃いで、一部では2列に並ぶ柱穴も認められるが、全体としては等高線に平行するように緩くカーブしている。

時期は、柱穴内の出土遺物や埋土等から建物と同様の弥生時代後期であろう。

## 6. 小 結

調査は、当初一基の古墳のみが調査対象であった。その後の踏査や確認調査により最終的には、縄文時代から近世にいたる長期間の遺跡であることが判明した。以下、主要遺構である古墳群の特徴を記述しまとめとしたい。

古墳時代の遺構は、合計13基の古墳の検出を行った。当初の対象古墳であった1号墳を含め大半がすでに墳丘が削平され、主体部の検出もできなかつたものが多い。わずかに残存していた周溝から墳形は、円墳か方墳を呈し、いづれも一辺もしくは直径が5~10m程の小規模墳であることが判明した。検出した主体部は、木棺直葬と箱式石棺であるが、削平を受けた古墳も墳丘の残存状況等から横穴式石室採用以前の時期と考えられる。

古墳の出土遺物は、主体部の完存する2、5、6号墳のいづれも副葬品が皆無でわずかに、2号墳周溝中から土師器片と1、4、7、8、10号墳の周溝中からの須恵器や鉄器片が出土しているのみである。これらの出土遺物は、いづれも元位置を保つものではなく直接古墳の時期を決める資料としては乏しいものの、1、4号墳周溝中の遺物が主体部からの転落した副葬品の可能性や2号墳周溝中の土師器や7号墳周溝中の古式の須恵器などは供獻用の遺物の可能性が考えられる。これらの断片的な資料や副葬品の少ない古墳の特徴等から類推すると当古墳群は、久世地域で調査を行った中原古墳群ほど良好なありかたや残りを示さないものの5世紀代から6世紀前半のいわゆる古式の群集墳ととらえることができる。

当古墳群の検出した状況を最近の論考である安川豊史『古墳時代における美作の特質』のありかたと対比してみると、1区先端部の4基の古墳が、やや独立した占地をなし、若干不明瞭であるが方形墳が中心で、3基に箱式石棺を有し、須恵器を伴わない特徴などは、美作における方墳の特徴とよく合致することから、当古墳群の先駆をなすものといえよう。

また、1、2区に集中して検出した7基の古墳群の特徴は、いづれも円墳の形態をなし、主体部は削平を受け認められなかつたものの周溝内や周辺から副葬遺物と見られる須恵器の出土が認められていることである。なお、わずかに盛り土の残存する1号墳の周溝内や付近には石棺材が認められなかつたことから主体部が木棺である可能性がある。出土品した、須恵器が、TK23型式以降と考えられることや方形墳の断絶等、良好な資料ではないものの群小古墳の第2段階とする特徴を有しているといえる。

### 3. 元定散布地、信実散布地

#### 3. 元定散布地、信実散布地

##### 元定散布地

元定古墳群の調査地点から北に400m付近に、事前の分布調査により中世とみられる土器片の散布が認められたことにより調査の対象となった地点である。ただ散布の中心が路線外東側の谷の口から水田であったために用地内の調査対象地点を北西に延びる尾根に定め、集落跡もしくは墳墓を想定した確認調査を実施した。

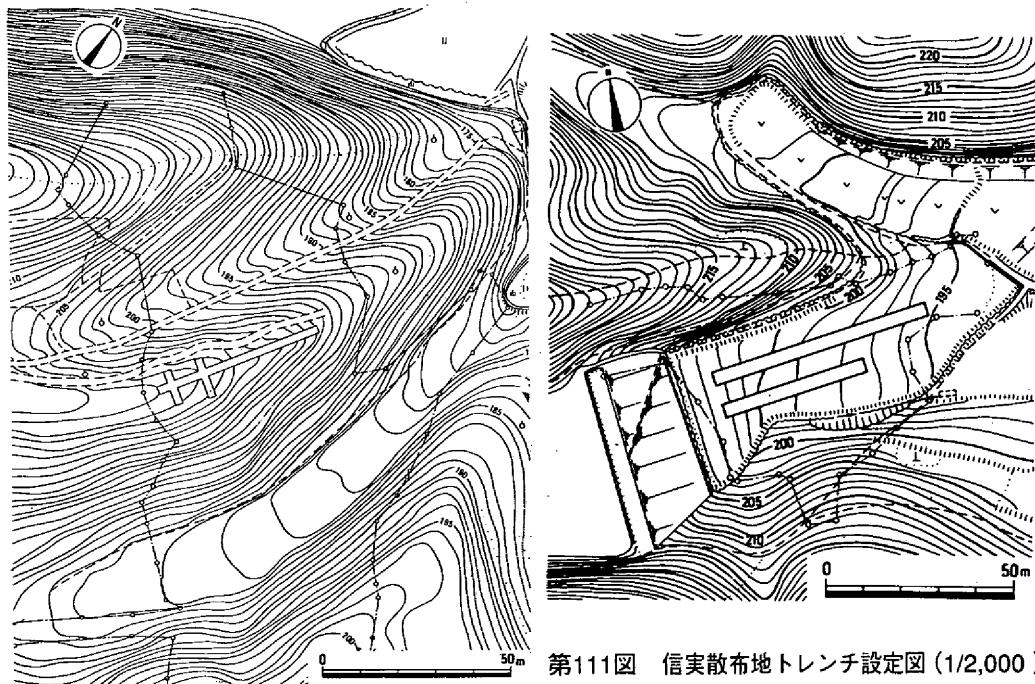
元定古墳群の調査と並行しながら幅2mのトレンチを3本設定し、総面積120m<sup>2</sup>程の調査を行った。各トレンチとも岩盤まで掘り下げを行ったが、遺構、遺物とも検出できなかった。

##### 信実散布地

若林山地の東山麓に開析された谷の一つで旭川の支流である河内川の上流域を前面に望む位置にあたる。事前の分布調査から谷及び斜面に中世を中心とした遺物の散布が認められていた。

確認調査は、散布範囲のうち用地内の調査対象地が谷部であったために重機により幅4m、長さが40mと60mの2本のトレンチを設定し深さ最大1.5mまで掘り下げを行った。

調査の結果は、少量の弥生土器片を採集しただけで、湧水が著しく遺構は検出できなかった。



第110図 元定散布地トレンチ設定図(1/2,000)

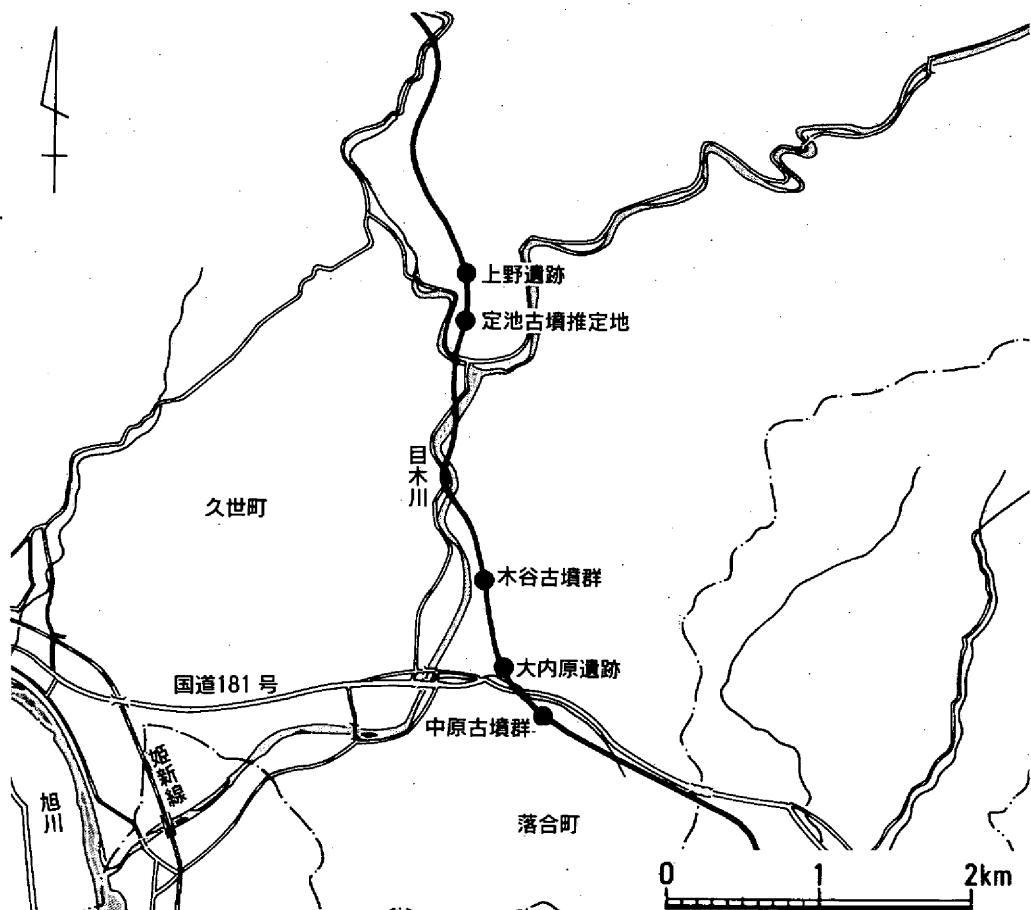
第111図 信実散布地トレンチ設定図(1/2,000)

### 3 久世地域の調査

#### 1. 調査の経過

横断道の本格的な発掘調査の第2年次にあたる平成元年度は、3班6名の調査体制で久世、湯原、川上の各々3地域で調査を開始した。このうち、久世地域についての調査は、当初上野遺跡、木谷古墳群（第2分冊）をおもな調査対象に予定していた。

上野遺跡については、久世町内初の横断道関連の調査として4月より開始した。当遺跡は、富村より南流する東西目木川の合流点の北側の丘陵上に位置し、弥生時代の集落が想定され、一角でかつて平安期の火葬墓も発見されている。今回、道路が遺跡の西端を通過する状況となった。調査の結果、弥生時代後期後半を中心とする竪穴住居、貯蔵用土壙等の集落跡が予想以



第112図 久世地域位置図 (1/50,000)

## 1 調査の経過

上の広がりを成し、また、新たに2基の古墳の検出も加わり、当初予定より遅れ平成2年1月下旬にようやく終了した。

この間、定池の古墳推定地の確認調査と、上野遺跡南側の尾根上の確認調査も併せて行った。前者については、遺構は無く、後者についても、弥生時代の墳墓等の遺構は認められなく、落とし穴状の遺構を1基検出したのみで終了した。

上野遺跡の調査終了後、第1班は、中世の土器片の散布が認められた大内原散布地（遺跡）の第1次の確認調査に入り、引き続き中原古墳群（第2分冊）の調査を実施した。

なお、木谷古墳群については、湯原地域の調査が、予定より早く終了したため、9月より湯原担当の班が、新たに久世地域の第2班として調査に入った。予想以上の遺構の広がりと弥生時代の集落跡も加わったが平成2年度の5月にて終了し、6月よりは、大内原遺跡の第2次調査に入った。7月以降については、第1班と分担し中原古墳群の調査を実施した。

## 日 誌 抄

### 上野遺跡

平成元年

- 4月5日 発掘機材準備。  
11日 発掘機材搬入。  
13日 上野遺跡調査開始（第1班）。  
14日～28日 1区、住居、土壙の掘り下げ。  
5月 先月に続き1区の各遺構の掘り下げ、  
実測。  
22日 今日より補助員仁木君参加。  
6月1日～19日 主に住居3、5の掘り下げ。  
20日 対策委員会開催。  
7月 1区、住居2、4、土壙掘り下げ。  
17日～21日 2区の排土作業。  
29日 2区の検出作業開始。  
8月 1区の各遺構の掘り下げ、実測。  
8日～22日 2区、土壙、住居、建物掘り  
下げ。  
23日 3区の排土作業開始。  
9月 主に3区の遺構の掘り下げ、2区の  
写真、実測。  
11日 4区の排土作業開始。  
25日 4区の一部検出開始。  
25日～27日 2区土壙写真、実測。  
10月2日～6日 住居4、7の写真、実測。  
12日～17日 航空写真撮影のため清掃作業。  
18日 航空写真、及び遠景の撮影。  
21日 現地説明会。

24日 4区の検出と遺構の掘り下げ開始。

11月1日～6日 1～3区の補足調査、4区  
の遺構掘り下げ。

7日 4区の南側尾根のトレンチ調査開始。

14日 対策委員会。

### 定池古墳推定地

27日 古墳推定地にトレンチ実施。

### 上野遺跡

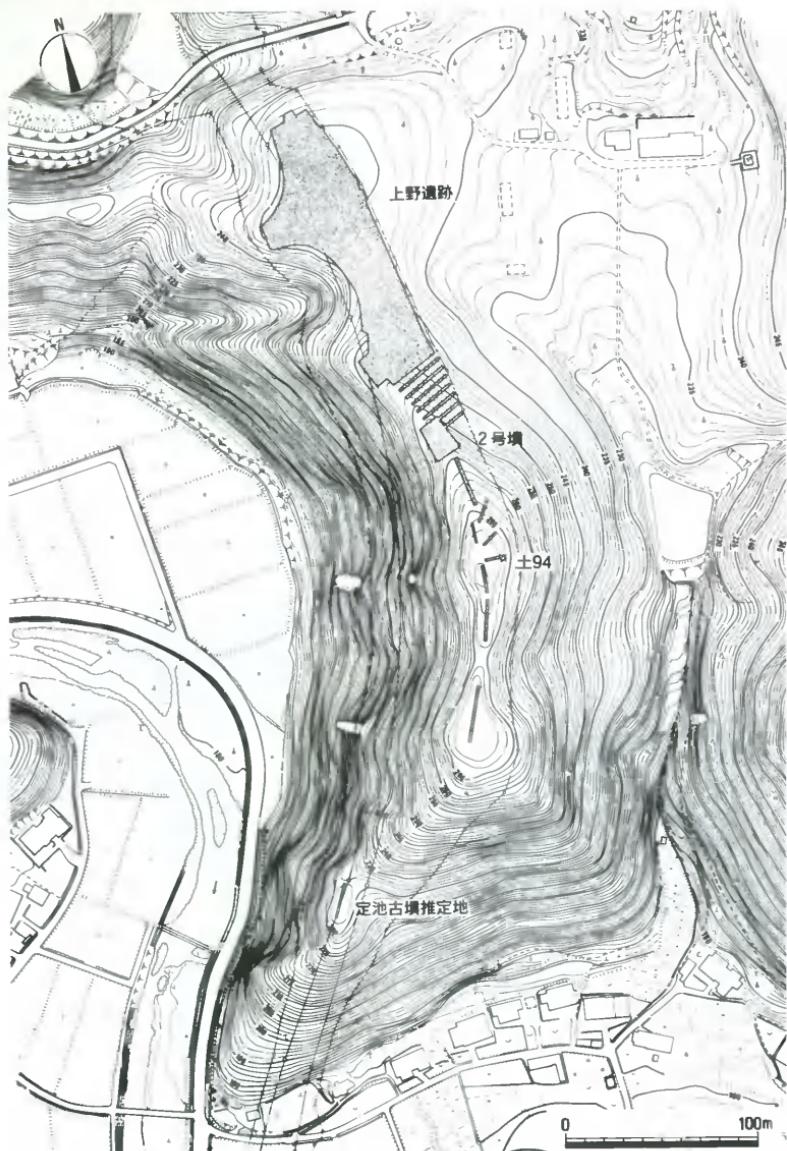
12月 1～3区の補足調査、と4区の各  
遺構掘り下げ。  
13日 1号墳の周溝掘り下げ。  
22日 2号墳表土除去開始。

### 平成2年

1月 4区各遺構の掘り下げ、写真、実測。  
23日 1、2号墳写真、実測。  
2月 4区、1、2号墳の補足調査を実施。

### 大内原遺跡

1月23日 大内原遺跡調査の準備、整備（第  
1班）。  
26日 トレンチ調査開始。  
2月1日 №5、6トレンチ掘り下げ、中原  
古墳群の調査も並行。  
15日 トレンチ掘り下げほぼ終了。  
3月3日 遠景写真撮影。  
8日 補足調査終了。  
6月1日 大内原遺跡の第2次調査を第2班  
が実施する。



第113図 上野遺跡周辺図 (1/3,000)

## 2 地理的、歴史的環境

### 1. 地理的環境

久世町は、中国山地に源を発し岡山県のほぼ中央を南流する旭川の上流域に形成された人口1万2千人余の山間部の町である。昭和30年、旧久世町と美和村の合併により現在の町域が確定した。面積75.12km<sup>2</sup>で、81%が山林である。気候は比較的温暖で雪は少なく、台風や地震等の自然災害はほとんどない。

地形的には、旭川とその支流である目木川が形成した川底平野を中心に、北は中国山地、南は吉備高原の一部が域内に含まれる。北部の中国山地は高く急峻で、町内最高所である三坂山の標高903mを筆頭に、摺鉢山で879mに達し、その南面は多くの深い谷に開析されている。急峻な山地の麓には、標高200m～300mの低い山地ないしは丘陵が横たわり、川底平野との境をなしている。一方、川底平野は極めて平坦となっており、久世町の中心地として商工業の集積が進んでいる。

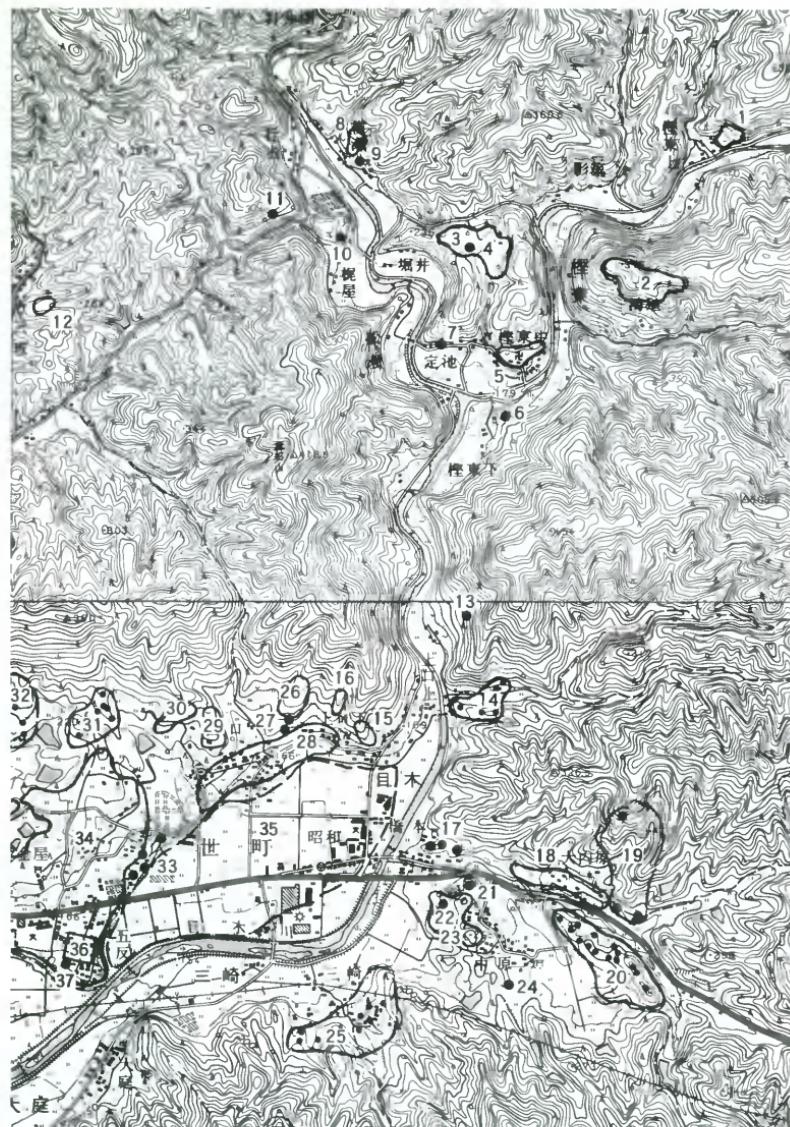
現在の市街地の形成は、江戸時代以前に遡ると考えられ、古くからこの地域の商業の中心地として栄えていたといわれる。実際、中世には大炊寮領として設定されていた久世保では、公用錢の進納に関連して中央の商人の関与があり、また戦国期にはすでに市場の形成が認められている。こうした、流通、商業活動の拠点としての性格は、江戸期になっても高瀬舟の発着地として、また牛馬市の成立と相まってますます他所の商人達の移住が進み、今日の久世町＝商業の町としての基礎が形づくられていった。

近年、内陸工業団地や計画中の県北流通センターの立地等により、工業及び流通の拠点としての再構築が計られている。

### 2. 歴史的環境

久世町における人間の営為の痕跡は、縄文時代に遡る。最古の遺物としては、楕円の押型土器が大旦遺跡、上野遺跡で出土しており、早期に位置づけられる。また、上野遺跡ではその後の継続的な生活の痕跡が認められている。なお、目木川流域の江森遺跡では中期の土器が、旭川流域の宮芝遺跡、旭川の支流である三坂川流域の三榮神社裏山遺跡では後期の土器が、目木川流域の五反遺跡では晩期の土器がそれぞれ出土しているが量的には少なく、縄文期におけるこの地域の人々の自然に依拠した生活のあり方を窺い知ることができる。

弥生時代になると、前記の五反遺跡では前期の土器が出土しており、久世町における最古の弥生集落として注目される。中期から後期になると集落の数は著しく増加する。前記の大旦遺



第114図 遺跡分布図 (1/25,000)

## 2 地理的、歴史的環境

跡や目木川流域の旦山遺跡など平野部周辺に大規模な集落が形成される一方、目木川など中小河川の上流域の小平野を望む丘陵上などにも小規模な集落が成立する。上野遺跡は、こうした集落の一つである。

古墳時代になると、農業生産力の向上を背景にして首長が出現するが、久世町においては現在までのところ初現期の古墳ないしはそれに先行する弥生墳丘墓は未確認である。また、前期の大形の前方後円（方）墳も認められず、全長24mの前方後方墳である宮ノ山1号墳や全長約28mの前方後円墳であるアタゴ山5号墳などが知られているのみである。5世紀中頃になると、久世町域でも造墓活動が活発となり中原古墳群や羽庭古墳群などの古式の群集墳が形成される。いずれも低平な墳丘をもつ方墳や円墳で構成され、前時代墓制の伝統が色濃く認められる。さらに、後期になると、基本的には現在の大学単位の一つ程度の群集墳が形成されるようになる。大正期に発掘された、富尾古墳群中の丸山12墳（小倉見古墳）からは環頭柄頭が出土しており注目される。

白鳳期に入ると、この地にも仏教文化が盛行するようになり、五反廃寺が造営される。現在までのところ周辺に礎石が散在しているほか、軒丸瓦7型式、軒平瓦6型式、鷗尾等が出土しているが、出土した軒丸瓦の意匠から高句麗との関連性が指摘されており注目されている。なお平成5年度より久世町教育委員会による発掘調査が予定されており、その成果が期待される。また、五反廃寺東方平野部には、条理制遺構が残存しており、五反廃寺との関係が想定されるが、現状では施行時期については鎌倉期までしか遡ることができず、今後の研究追究がまたれるところである。なお、条理制遺構北側の山裾に位置する西口遺跡では、近年、墨書き土器とともに陶製円面鏡や獸足壺（？）の脚部等が出土しており、大庭郡の郡衙の可能性が指摘できる。

1. 大平遺跡
2. 神上城跡
3. 上野遺跡
4. 上野火葬墓
5. 善住寺裏山遺跡
6. アタゴ山古墳
7. 定池古墳
8. 横瀬遺跡
9. 横瀬古墳群
10. カジヤ古墳
11. ゴマガ山古墳
12. 三栄神社裏山遺跡
13. イ方平古墳
14. 木谷古墳群
15. 引屋敷遺跡
16. 上ノ山遺跡
17. 宮の山古墳群
18. 大内原遺跡（惣田遺跡）
19. 大内原古墳群
20. 中原古墳群
21. 古墳
22. 旦山古墳
23. 旦山遺跡
24. 銅々古墳
25. 三崎古墳群
26. 戸坂遺跡
27. 戸坂古墳
28. 西口遺跡
29. 多田須遺跡
30. 細シ遺跡
31. 新池古墳群
32. 多田古墳群
33. 金屋古墳群
34. 五反遺跡
35. 目木埋没条理
36. 五反廃寺跡
37. 若宮古墳

### 3. 上野遺跡

#### 1. 遺跡の概要

本遺跡は、久世町大字樅西の標高約240～250mの丘陵上に所在する。この地は、中国横断自動車道横瀬パーキングエリア建設予定地の南東に隣接している。

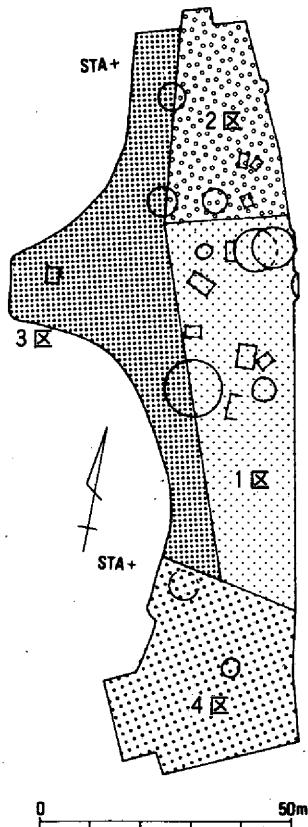
事前の現地踏査により、弥生時代の集落跡の存在が予想されたため、平成元年度の4月より全面調査及び一部地域の確認調査を実施した。全体の調査面積は、約6,600m<sup>2</sup>である。

調査の結果、約30～50cmの厚さの黒ボク層を除去したソフトロームの上面で、縄文時代から古墳時代にかけての多数の遺構を検出した。

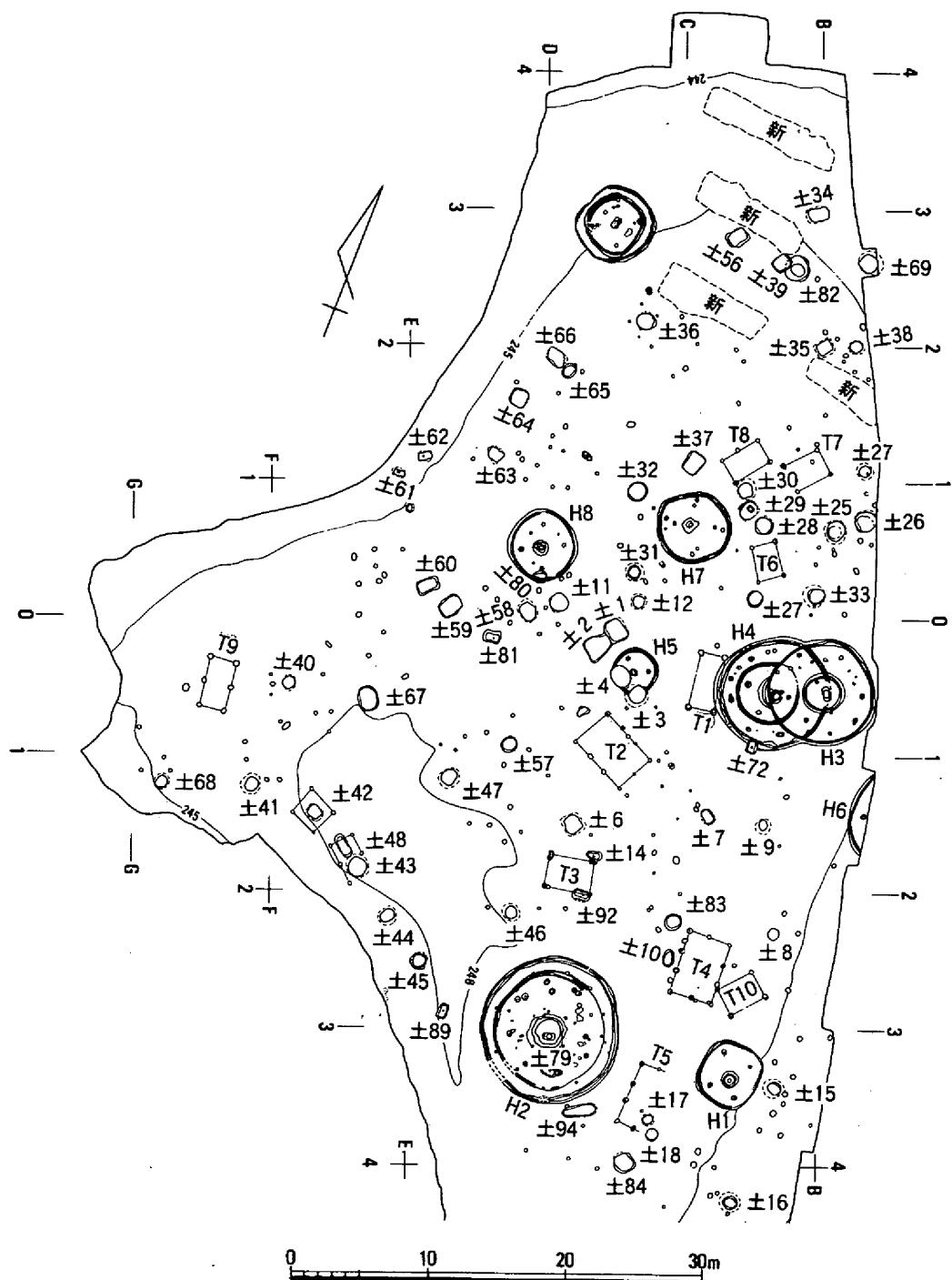
縄文時代では、調査区西よりをほぼ南北方向に伸びる稜線付近を中心として、18基の土壙を検出した。その大半は、長辺が約1m前後の隅丸長方形のプランを呈し、若干の例外を除き、底部に直径20cm程度の小ピットを有している。遺物としては、若干の縄文土器が出土している。今日、この種の遺構の性格としては、動物捕獲用の「落し穴」と考えられている。なお、この他にも縄文時代後期後半（彦崎KⅡ式）の土器と共に、打製石斧等の石器類が出土した土壙なども検出されている。

弥生時代後期から古墳時代の初頭にかけての遺構としては、竪穴住居跡12軒、掘立柱建物9軒、貯蔵穴58基などが検出されている。このうち、後期前半の遺構は少なく、大部分が後期後半から古墳時代初頭にかけての遺構である。後期後半の竪穴住居跡のうちの2軒は焼失住居であり、多量の炭化材が出土している。また、調査区西側の緩斜面で検出された貯蔵穴には、開口部を中心にはぼ方形（1間×1間）に配置された柱穴を有するものが複数認められており、覆屋等の上部施設の存在が想定される。

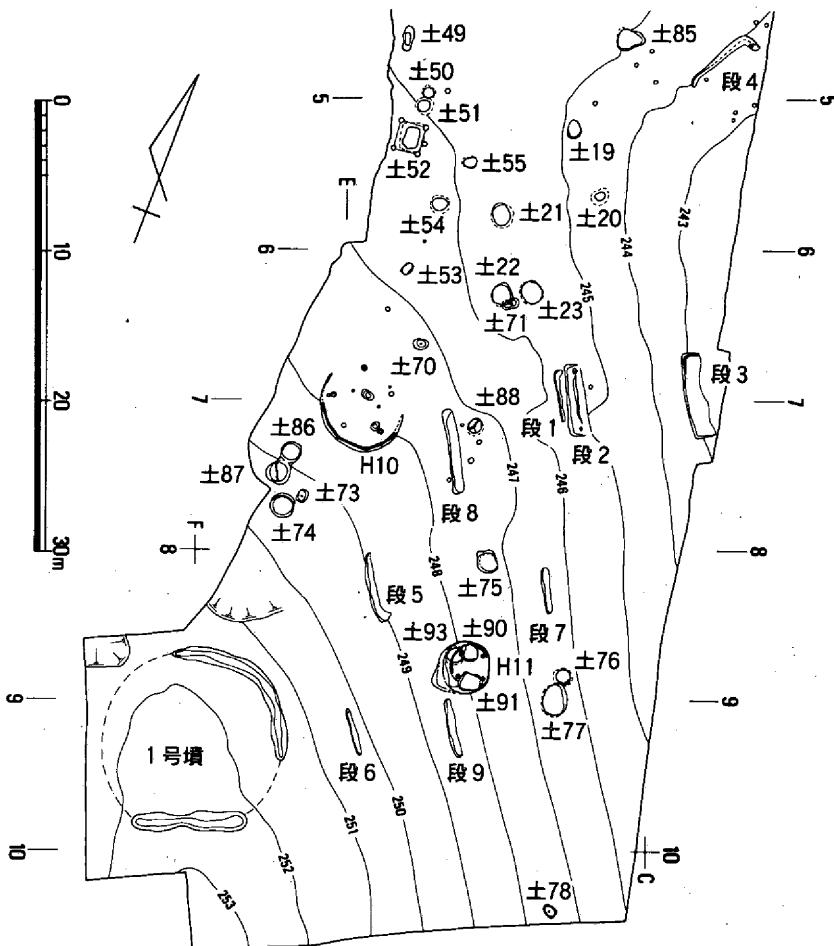
なお、本遺跡では、2基の古墳が検出されている。1号墳は、墳丘が流失しており、部分的



第115図 調査区図 (1/1,500)



第116図 上野遺跡全体図 1 (1/500)



第117図 上野遺跡全体図2 (1/500)

に周溝のみが残存していた。2号墳は、内部主体に割竹形と考えられる木棺を検出したが、出土遺物が全くなかったことから築造時期については不明である。

本遺跡の出土遺物は、縄文時代のものとしては縄文土器、打製石斧、切目石錐、石鏃などがあげられる。また、弥生時代から古墳時代初頭のものとしては弥生土器、土玉、石庖丁、磨製石斧、砥石、鉄器類などがある。

#### 定池の古墳推定地

事前の現地踏査において、上野遺跡が所在する丘陵の南端に古墳状の高まりが認められたため、上野遺跡の調査と並行して確認調査を実施した。

調査の結果、丘陵の基盤をなしている岩盤の風化度の違いによって生じた残丘と判明した。

## 2. 繩文時代の遺構、遺物

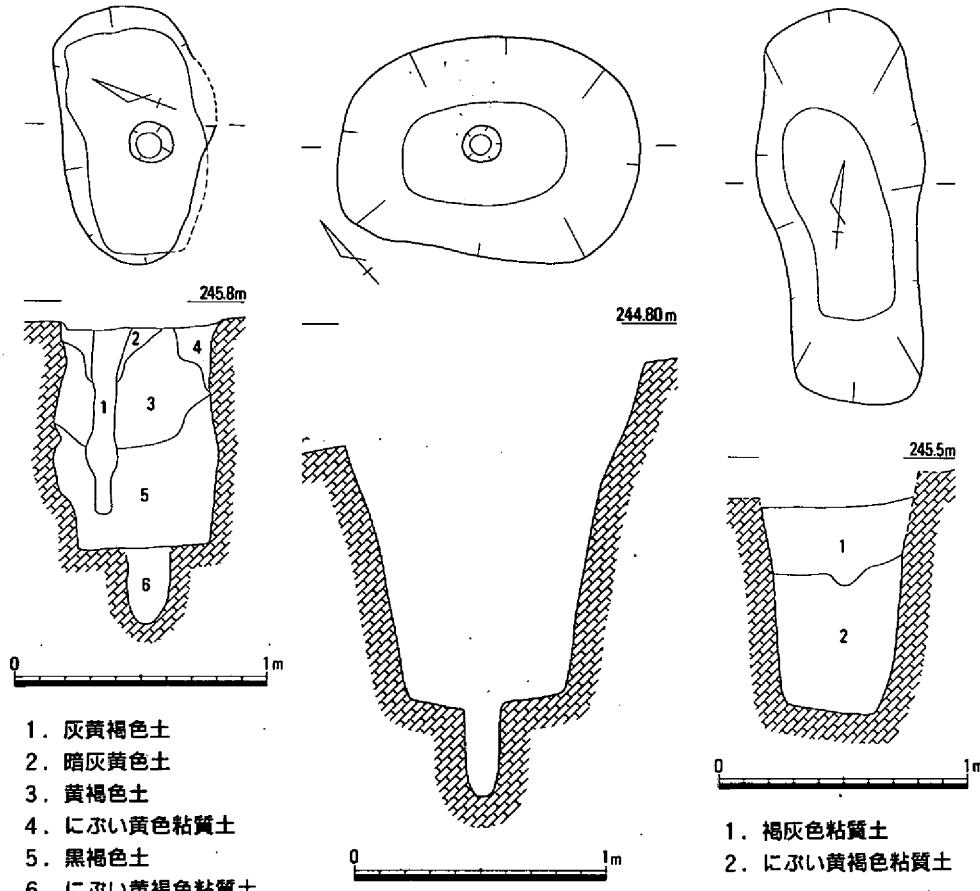
### 土壤14

第1調査区の北西に位置し、建物4の北東隅柱穴と重複している。規模は、上面が長径1.06m×短径60cmのやや長めの楕円形をなし、底面では、長辺92cm×短辺48cmの隅丸長方形に近い形状を呈す。断面は、ほぼ垂直な掘り込みをなし深さ94cmを測る。底面は、ほぼ水平をなし、中央に直径18cm、深さ32cmの柱穴を設けている。埋土は、断面の中央に木の根の痕跡が残りやや変色が認められるものの、上下2層に大きく分層可能である。

遺構の性格については、土壤の形状や埋土からの縄文土器片の出土等から縄文時代の落とし穴と考えられる。

### 土壤20

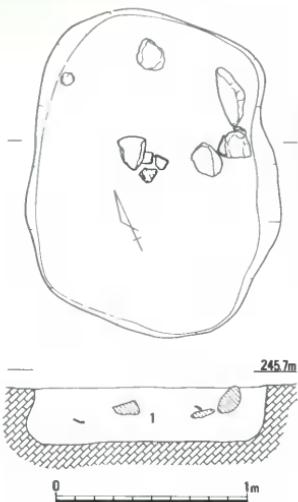
第1調査区の東側緩斜面に位置する。平面形は、上下とも隅丸長方形を呈し、上面で長辺



第118図 土壌14 (1/30)

第119図 土壌20 (1/30)

第120図 土壌49 (1/30)



1. 灰黄褐色土  
第121図 土壌59 (1/30)

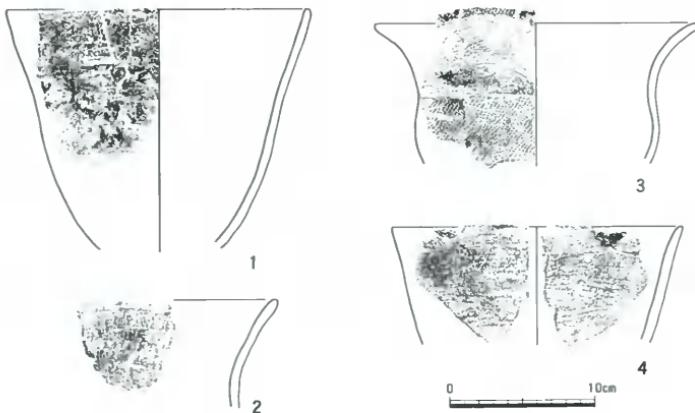
1.17m × 短辺89cm、底面で長辺64cm × 短辺45cmを測る。断面は、急角度の掘り方をなし深さ1.38mを測る。底面は、ほぼ水平面をなし底面中央に直径15cm深さ38cmの柱穴を掘り込んでいる。埋土は、大きくは上下の2層に大別でき、このうち下層の第5層にあたる黒褐色土中には20cm大の礫が数個堆積していた。

出土遺物が皆無のため時期の確定はしがたいが、埋土や形状等から縄文時代の落とし穴であろう。

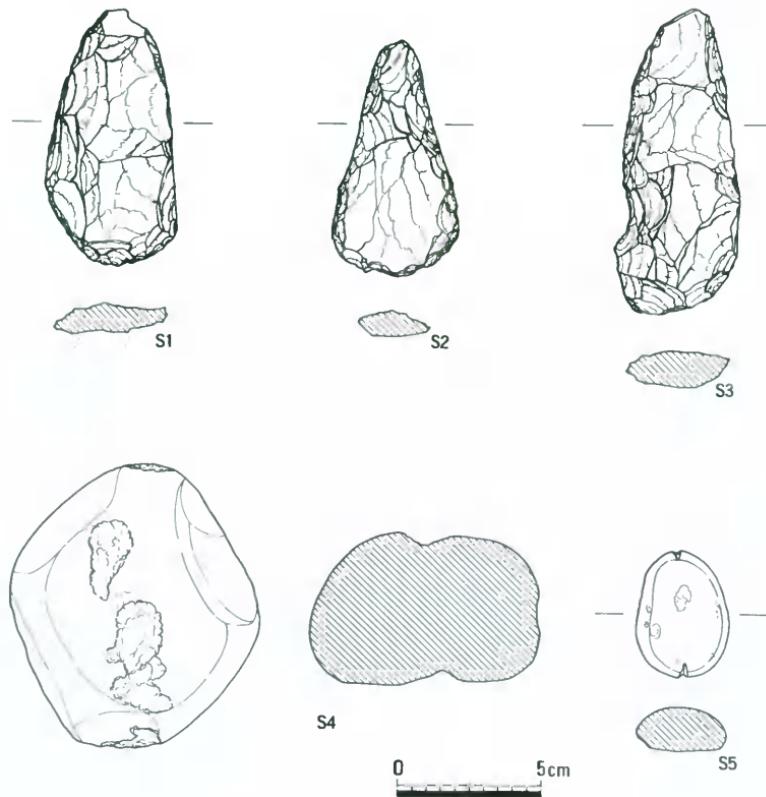
#### 土壤49

第3調査区南半の尾根鞍部付近に位置する土壤である。平面規模は、上面及び底面ともやや不整形な長方形を呈し、上面で長径1.58m × 短径70cm、底面で長径87cm × 短径36cmを測る。掘り方断面は、ほぼ垂直に近く深さ1.0mを測り、水平な底面をなす。

埋土は、上層が褐灰色、下層がにぶい黄褐色



第122図 土壌59出土遺物 1



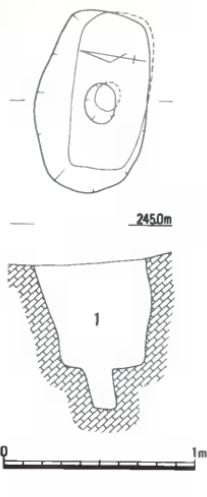
第123図 土壌59出土遺物 2

に分離を行ったが、ほぼ同質の粘質土の堆積である。出土遺物が皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や形状等から縄文時代の落とし穴の一種と思われる。

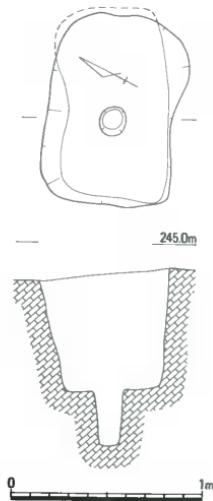
#### 土壤59

第3調査区の中央やや北よりに位置する。平面規模は、隅丸の長方形をなし、上面で長辺1.7m×短辺1.33m、底面で長辺1.65m×短辺1.15mを測る。掘り方断面は、垂直に近い部分も認められるが、やや椀状を呈し、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、灰黄褐色のややすえた感じの土層である。埋土中には、10~20cm大の礫が土壤内に



1. 灰黄褐色粘質土  
第124図 土壌61 (1/30)



1. 灰黄褐色粘質土

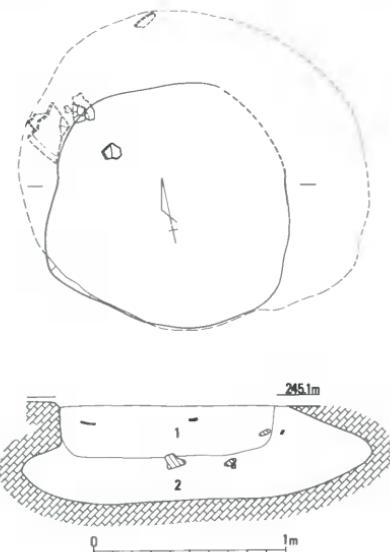
第125図 土壌62 (1/30)

落ち込んだように、掘り方の北東部に多く認められる。また、埋土の中層付近には縄文土器片を多く含んでいる。時期は、出土遺物等から当遺跡内では縄文時代の後期の明瞭な遺構の一つである。

#### 土壌61

第3調査区北西斜面に位置する落とし穴遺構である。平面規模は、上下とも長方形の形状をなし、上面で長辺95cm×短辺60cm、下部で長辺83cm×短辺42cm、底面までの深さ60cmを測る。掘り方断面は、垂直に近い形状をなし、ほぼ水平な底面をなす。底面には、中央より若干北側に直径20cm、深さ20cmの柱穴を設けている。

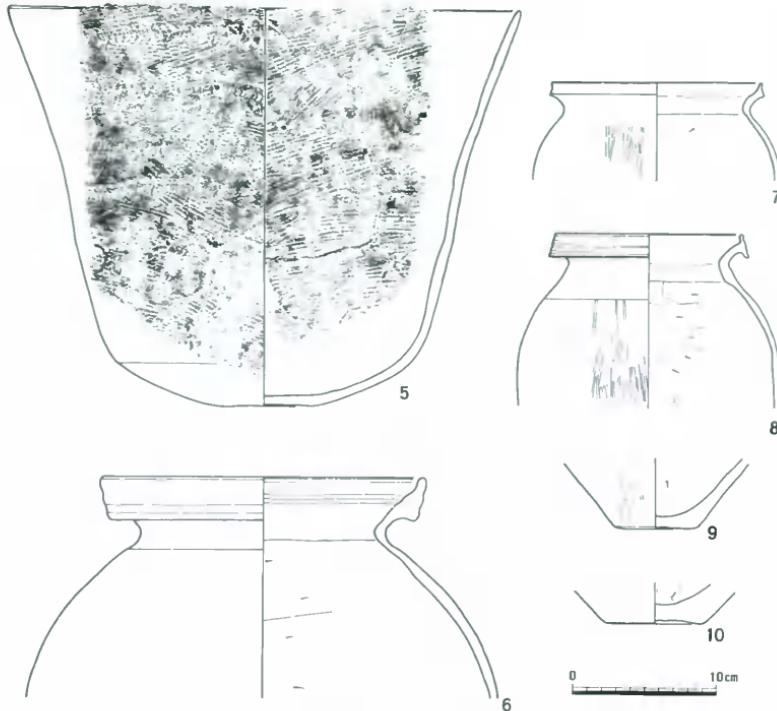
埋土は、灰黄褐色粘質土の単一層である。時期は、出土遺物が無く確定し難いが、埋土や形状等から縄文時代の遺構と考えられる。



1. 黒色土(黒ボク)  
2. 灰黄褐色微砂質土

第126図 土壌69 (1/30)

3 上野遺跡



第127図 土壌69出土遺物

**土壌62**

第3調査区北西斜面に土壌61と並列して位置する落とし穴遺構である。平面規模は、ややいびつな長方形をなし、上面で長辺1.0m×短辺72cm、底面で長辺1.0m×短辺68cmを測る。掘り方断面は、ほぼ筒状をなし深さ65cmを測り、水平な底面をなす。底面のほぼ中央には、直径15cm、深さ22cmの柱穴を設けている。

埋土は、灰黄褐色粘質土の單一層である。時期は、出土遺物が無く確定し難いが、埋土や形狀等から土壌61と同様の縄文時代の遺構と考えられる。

**土壌69**

第2調査区北東の調査区東端部に位置する。上部平面形は、やや不整形な円形を呈し長径1.3m×短径1.26m、底面は、円形にちかく長径1.8m×短径1.66mを測る。掘り方断面は、南側がほぼ垂直を示す以外は袋状の形狀なし、深さ55cmを測る。床面は、周囲が盛り上がっている。

埋土は、上層の黒ボコの堆積と下層の灰黄褐色の微砂質土に分離できる。遺物は、下層より縄文時代後期の深鉢が、上層からは弥生時代終末期の土器が出土している。時期は、下層の出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

#### 土壤70

第4調査区北端に位置する。平面規模は、楕円形を呈し、上面で長径1.0m×短径70cm、底面で長径67cm×短径53cm、深さ75cmを測る。掘り方断面は、台形状を呈し、底面中央に直径16cm、深さ26cmの柱穴を設けている。

埋土は、灰黄褐色の粘質土の単一層である。出土遺物が皆無で時期の決定に乏しいが、底面中央に柱穴を有す形態や埋土の状況等から縄文時代の落とし穴の遺構と考えられる。

#### 土壤71

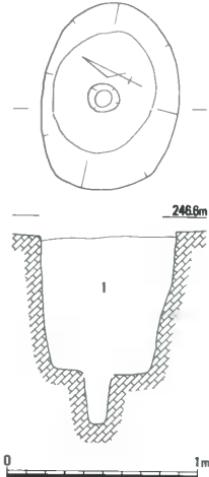
第1調査区の北端近くに、土壤22と重複する落とし穴遺構である。平面規模は、掘り方の北西部を土壤22により削平を受けているものの、残存部から隅丸の長方形と推定され、上面で長径約1.05m×短径約60cm、底面で長径87cm×短径42cmを測る。掘り方断面は、深さ52cmの台形状を呈し、水平な底面の中央に直径19cm、深さ35cmの柱穴を設けている。

埋土は、灰黄褐色の粘質土の単一層である。出土遺物は、縄文の土器片と土壤22からの混入の弥生土器片がある。時期は、埋土や出土遺物、形状等から縄文時代の遺構と考えられる。

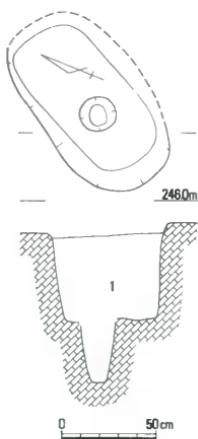
#### 土壤72

第1調査区北端で竪穴住居4と北側の一部が重複する落とし穴遺構である。平面規模は、長方形を呈し上面で現存長辺97cm×短辺75cm、底面で長辺81cm×短辺50cmを測る。掘り方断面は、深さ1.0mの筒状を呈し、ほぼ水平な底面をなす。底面中央には、直径18cm、深さ25cmの柱穴を設けている。

埋土は黒ボコ土の単一層で、下層が若干粘質を帶びている。時期は、埋土中に縄文土器片を含んでいることや形状等から縄文時代の遺構と考えられる。



1. 灰黄褐色粘質土

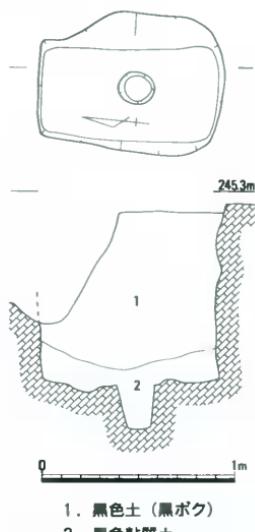


1. 灰黄褐色粘質土

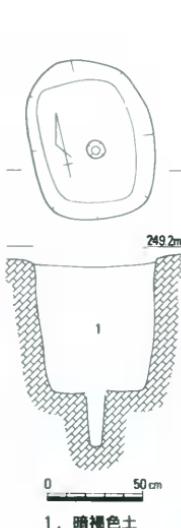
第128図 土壌70 (1/30)

第129図 土壌71 (1/30)

### 3 上野遺跡



第130図 土壌72 (1/30)



第131図 土壌73 (1/30)

### 土壌73

第4調査区北西部の土壌74と隣接する位置にある土壌である。平面規模は、隅丸長方形を呈し、上面で長辺85cm×短辺67cm、底面で長辺65cm×短辺48cmを測る。掘り方断面は、深さ72cmの筒状を呈し、ほぼ水平な底面をなす。底面中央には、直径8cm、深さ30cmの柱穴を設けている。

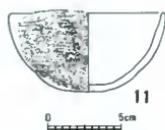
埋土は、暗褐色土の単一層のみの堆積である。遺物は埋土中から縄文時代後期の楕形土器の完品が出土している。時期は、土壌の形

状や出土遺物から縄文時代の落とし穴遺構と考えられる。

### 土壌78

第4調査区南東端の斜面上に位置する落とし穴遺構である。平面規模は、ほぼ椭円形の形状を呈し、上面で長辺93cm×短辺68cm、底面で長辺85×短辺53cm、深さ55cmを測る。掘り方断面は、筒状をなし、水平な底面をなす。底面中央には、直径13cm、深さ38cmの柱穴を設けている。

第132図 土壌73出土遺物



埋土は、褐色のしまった感じの単一層である。出土遺物が皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や形状等から縄文時代の遺構であろう。

### 土壌79

第1調査区の竪穴住居2の床面下部に位置する土壌である。平面規模は、隅丸長方形を呈し、上面で長辺1.05m×短辺61cm、底面で長辺90cm×短辺49cmを測る。掘り方断面は、筒状をなすものの、竪穴住居により削平を受けており最大深さ38cmと浅い。床面は、ほぼ水平をなし、床面中央のやや北よりに、直径12cm、深さ37cmの柱穴を設けている。

埋土は、鈍い黄褐色の粘質土の単一層である。時期は、土壌の形状や出土遺物等から縄文時代の落とし穴遺構と考えられる。

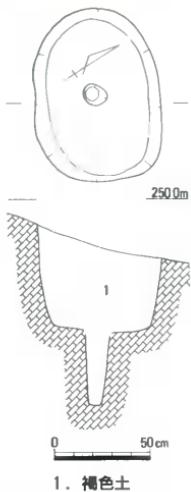
**土壤80**

第2調査区南西隅の堅穴住居8と重複する土壌である。平面規模は、上面で梢円形をなし、長径1.04m×短径84cm、底面ではやや長めの梢円形をなし、長径81cm×短径36cm、深さ95cmを測る。掘り方断面は、途中まで傾斜をもち、下半部ではほぼ垂直に近い掘り込みをなし、ほぼ水平な底面をなす。

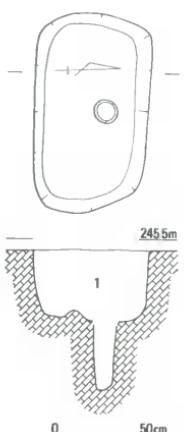
埋土は、鈍い黄橙色の單一層で、出土遺物は、皆無である。底面に小柱穴を伴わないものの、埋土や掘り方の形状等から縄文時代の落とし穴遺構と考えられる。

**土壤81**

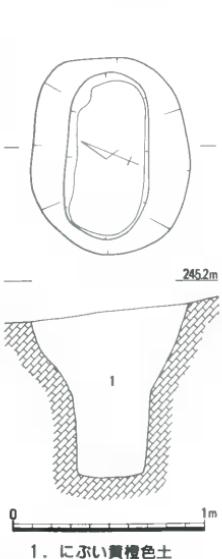
第3調査区中央付近で補足調査中に確認した落とし穴遺構である。平面規模は、上端、下端とも隅丸長方形を呈し、上面で長辺1.3m×短辺88cm、下端で長辺94cm×短辺54cm、深さ68cmを測る。掘り方断面は、下半部で筒状をなし、ほぼ水平な底面をなす。底面中央には、直径11cm、深さ32cmの小柱穴を設けている。



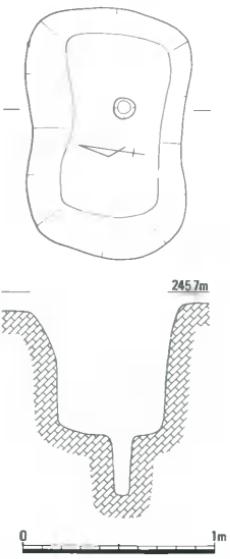
第133図 土壌78 (1/30)



第134図 土壌79 (1/30)

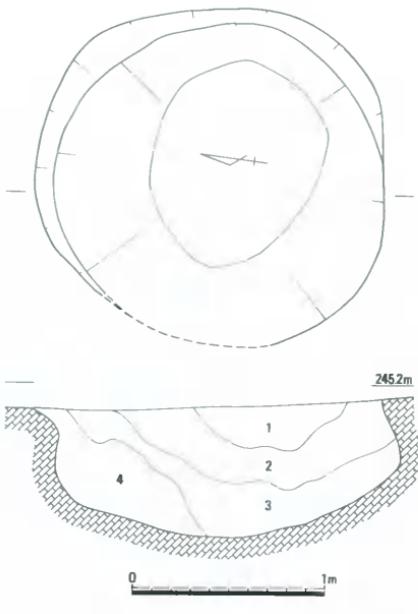


第135図 土壌80 (1/30)



第136図 土壌81 (1/30)

### 3 上野遺跡



1. 黒褐色土(黒ボク) 3. にぶい黄褐色土  
2. 黒色土(黒ボク) 4. 褐色土

第137図 土壌82 (1/30)

### 土壤84

第1調査区のはば中央付近の建物5の南側に位置する。平面規模は、不整形な形状をなし、上面で長径1.45m×短径1.42m、底面で長径1.53m×短径1.25m、深さ50cmを測る。掘り方断面は、一様でなく一部では抉り込んだ場所も見受けられるが、底面ではほぼ水平面をなす。

埋土は、にぶい黄褐色の粘質の單一層で、中層以下に10cm前後の礫を若干含んでいる。時期は、出土遺物に少量の縄文土器片を含んでいることや埋土の状況等から縄文時代の遺構と考えられる。

### 土壤89

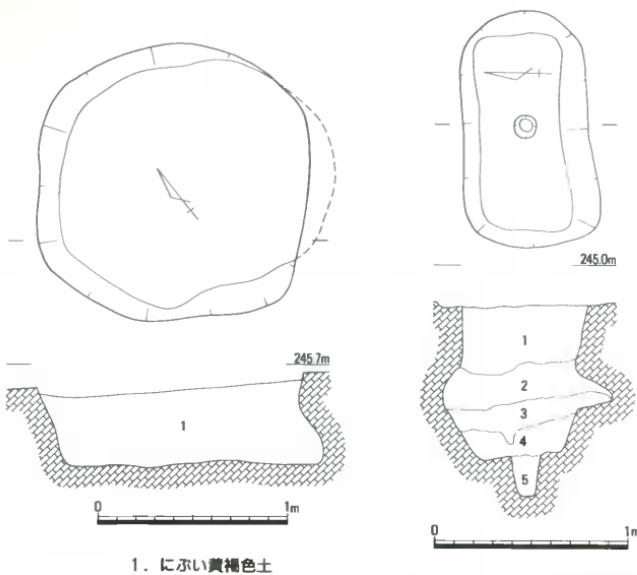
第3調査区の竪穴住居2の西側で補足調査中に検出した土壤である。平面規模は、長方形を呈し上面で長辺1.02m×短辺62cm、底面で長辺91cm×短辺49cm、深さ25cmを測る。掘り方断面は、逆台形状を呈し、底面では水平面をなす。底面中央には、直径15cm、深さ42cmの柱穴を設

埋土は、1層のみで、比較的均一な黒褐色の粘質土である。時期は、出土遺物が皆無で確定し難いが、埋土や土壤の形状等から縄文時代の遺構と考えられる。

### 土壤82

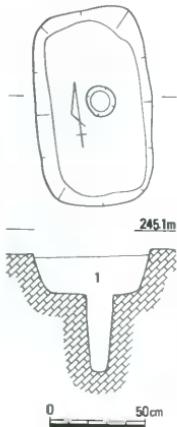
第2調査区の北端で、土壤39に一部削平を受けている土壤である。平面規模は、上面、底面ともほぼ円形を呈し、上面で長径1.85m×短径1.8m、底面で長径1.1m×短径88cmを測る。掘り方断面は、底部の周囲が盛り上がる椀状をなし、深さ最大73cmを測る。

埋土は、1、2層が黒ボク土、2、4層が褐色を基調とする。時期は、遺物に縄文土器の細片が出土地していることや縄文土器出土の土壤69と形状が類似することと切り合い等から縄文時代の遺構の可能性が強い。



第138図 土壌84 (1/30)

1. にぶい黄褐色土	1. 黒褐色土	4. にぶい黄褐色粘質土
2. 黄褐色土	2. 黄褐色土	5. にぶい黄褐色粘質土
3. 黒色土	3. 黒色土	



第139図 土壌89 (1/30)

第140図 土壌92 (1/30)

けている。

埋土は、均一でよくしまったにぶい黄褐色土の単一層である。時期は、出土遺物が皆無で確定し難いが、埋土や形状等から縄文時代の落とし穴遺構と考えられる。

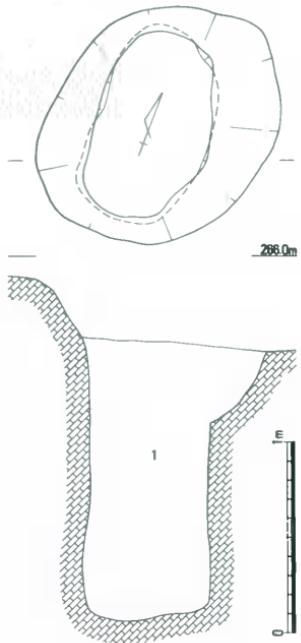
#### 土壌92

第3調査区の竪穴住居2の北側の補足調査中に確認した遺構である。平面規模は、上面で隅丸長方形を呈し長径1.23m×短径72cm、底面では長方形を呈し長径1.02m×短径48cmを測る。掘り方断面は、ローム層の一部が抉り込まれているものの深さ86cmの垂直に近い形状を呈し、水平な底面をなす。底面のほぼ中央には、直径14cm、深さ23cmの小柱穴を設けて

いる。

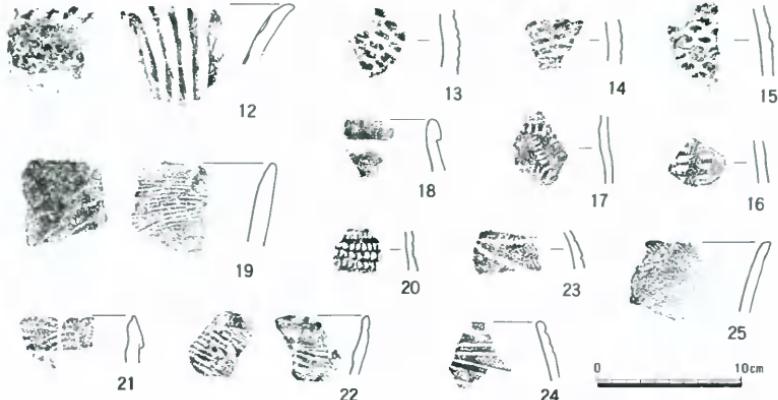
埋土は、5層に分離可能で、途中の第3層には黒ボコ土が

### 3 上野遺跡



1. にぶい黄褐色粘質土

第141図 土壌95 (1/30)



第142図 その他の出土遺物

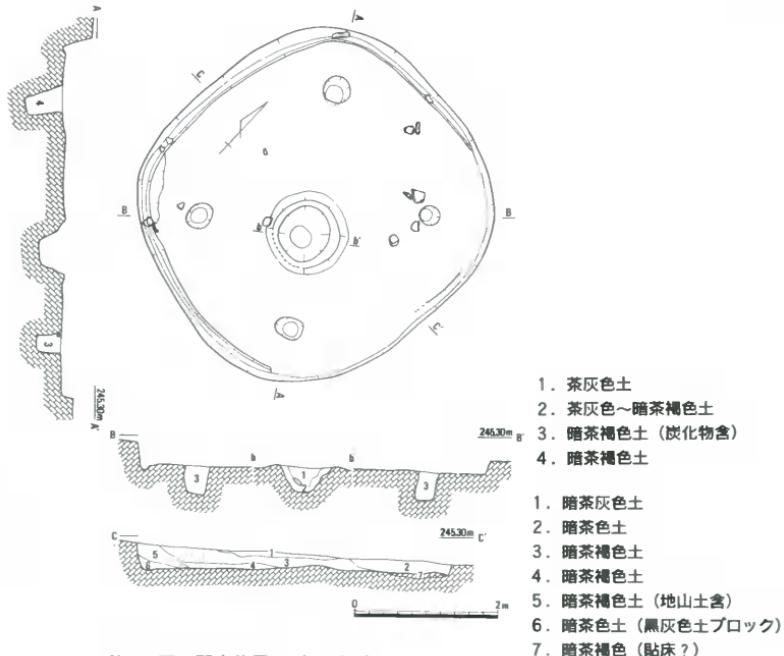
### 3. 弥生時代の遺構、遺物

#### 竪穴住居

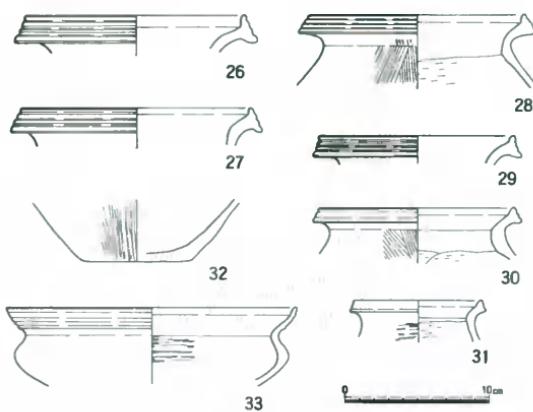
##### 竪穴住居1

第1調査区のほぼ中央の平坦部に位置する竪穴住居である。規模は、一辺が南北4.4m、東西4.4mの隅丸方形を呈し、長辺がほぼ南北方向を指す。掘り方は、西壁付近で深さ35cm、東側の最も浅い所で15cm程度である。埋土は、暗褐色土に黄褐色の地山をブロック状に含む土層が大半を占める。

柱穴は、掘り方のコーナーを結ぶ対角線上に4本の主柱穴が位置している。規模は、直径25~40cm、深さ35~55cmを測り、北西隅柱穴が他より若干深く掘り込まれている。柱間は、東西が2.1m、南北が2.5mである。中央穴は、住居中央よりやや南よりに設けられ直径78cm×70cm、



第143図 竪穴住居1 (1/80)



第144図 竪穴住居1出土遺物1

深さ37cmを測り、中央穴の周囲が若干盛上り、土手状をなす。中央穴の埋土は、炭、灰の堆積や加熱による赤変した場所も認められなく、掘り方周囲にも灰のかき出した跡等も認められない。

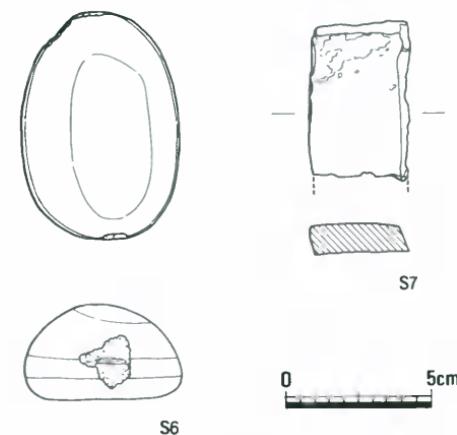
出土遺物は、掘り方南東部の埋土中から、安山岩製の敲石1点と南西隅付近の壁面に接し小形の鉢型土器の完品が出土している。(33)は、山陰

系土器の影響を受けた器形であろう。この他に、床面の北西付近と周溝及び中央穴の南西位置にこぶし大程度の石材がいずれも床面近くから出土しているが、使用痕跡の明瞭なものは認められない。

時期は、出土遺物等から弥生時代後期の前半期と考えられる。

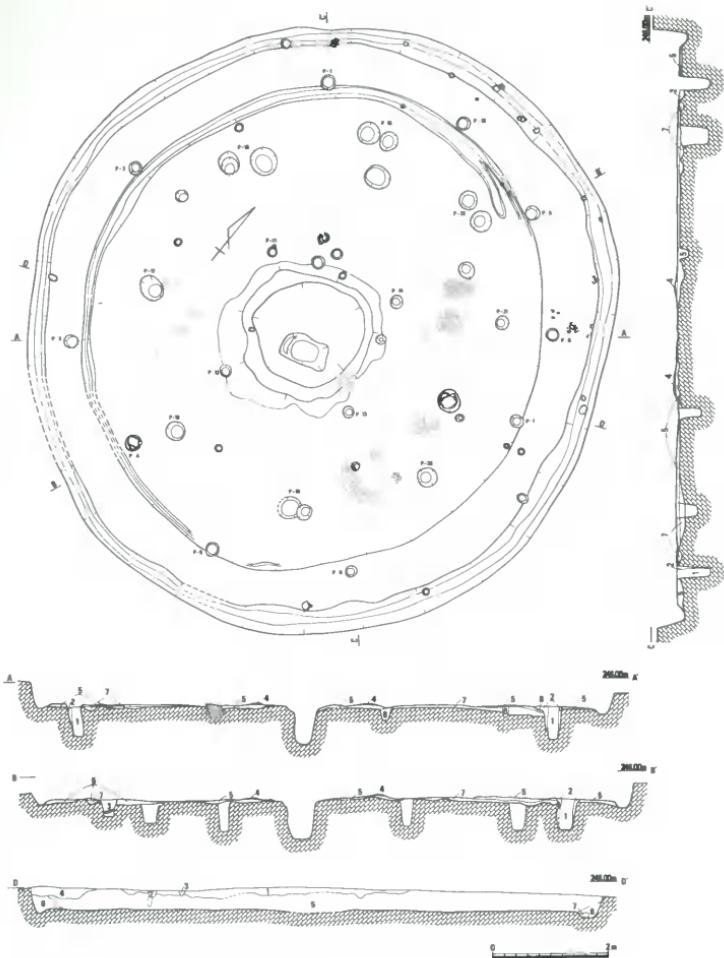
#### 竪穴住居2

第1調査区中央の西端から第3調査区にかけて位置する遺跡内最大の竪穴住居である。当住居は、大規模な建て替えを1回と小規模なものが少なくとも2回程度行われており、床面下に旧住居の多数の柱穴と周溝を確認している。



第145図 竪穴住居1出土遺物2

最終住居は、長径10.63m×短径9.8mを測るほぼ円形の形態で遺跡内最大規模であることはもとより、県内の過去に検出された住居のうちでも最大級のものである。掘り込みの深さは30～40cmと比較的良好な残りをなし、埋土は大半がにぶい黄褐色の比較的均質な土層で占められ

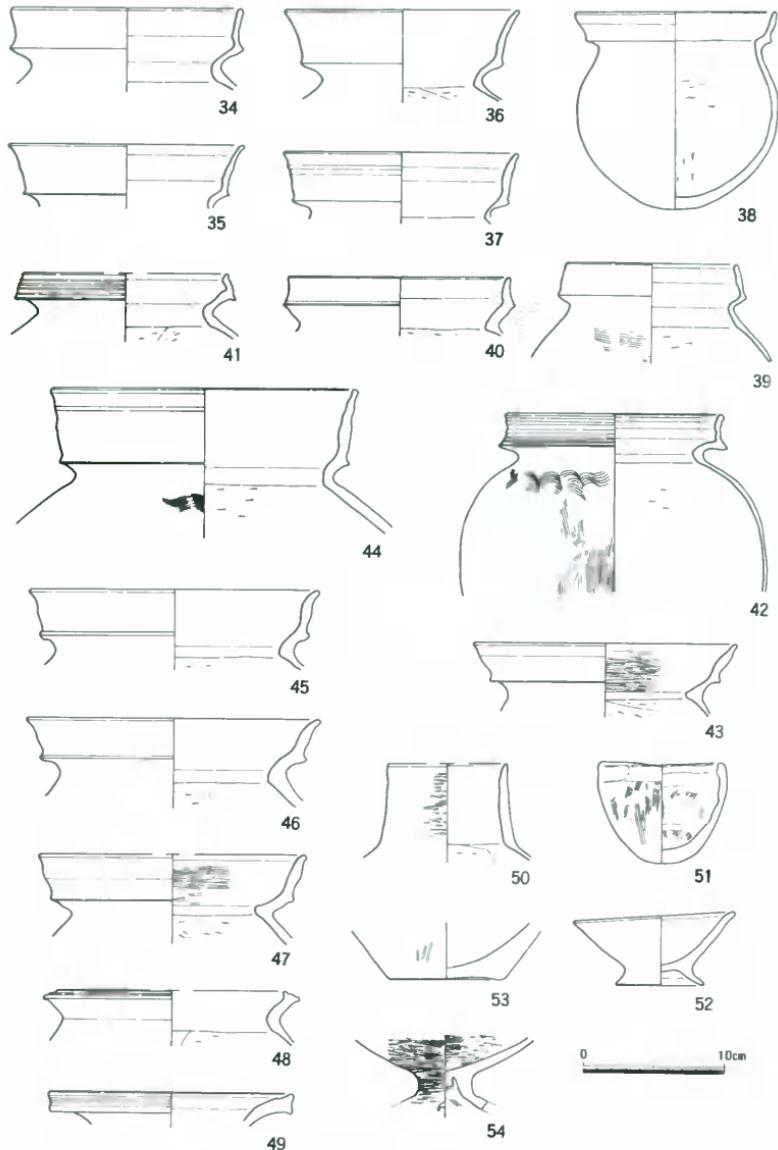


- D-D'
1. 黒褐色土
  2. 黒色土
  3. にぶい黄褐色土
  4. 灰黄褐色土

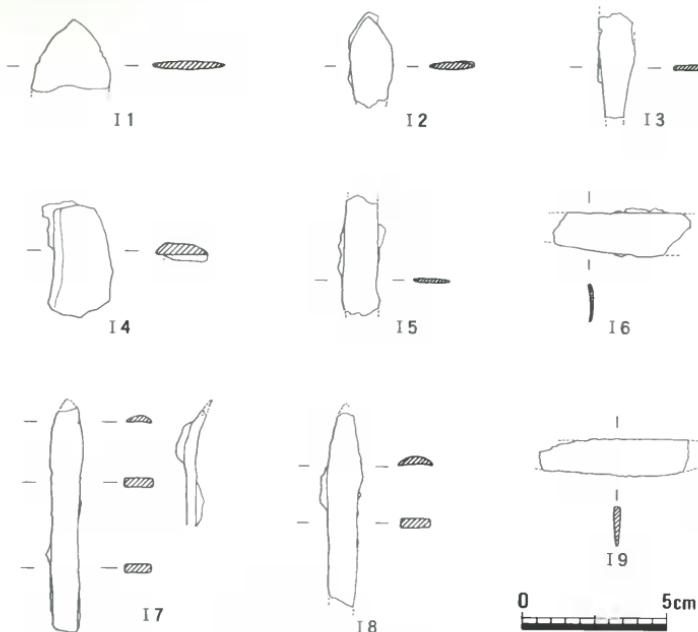
5. にぶい黄褐色土
6. 黒色土
7. 明黄褐色粘質土

- 柱穴断面
1. 黒色粘質土
  2. 明黄褐色粘質土
  3. にぶい黄褐色粘質土
  4. 棕色粘質土
  5. 黑色粘質土
  6. 褐灰色粘質土
  7. 黑色粘質土

第146図 壇穴住居2 (1/100)



第147図 竪穴住居2出土遺物1

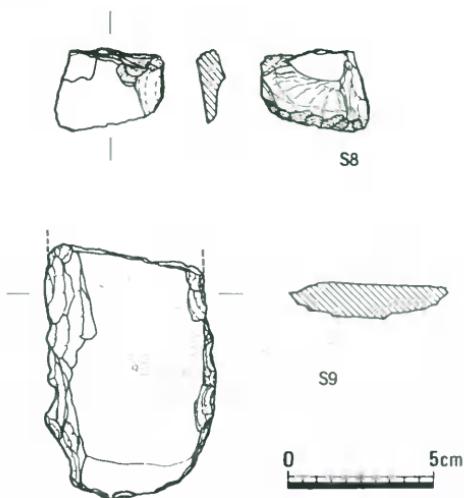


第148図 窪穴住居2出土遺物2

ている。床面は中央に位置する中央穴は、長方形に近い形状をなし、長辺82cm×短辺50cm、深さ68cmとかなり深い掘り込みをなす。中央穴は、埋土に炭化物や灰は含まず、焼上面も認められない。中央穴の周囲には、長径2.8m×短径2.6mの範囲に最大高さ5cm程度の浅い土手状の高まりを設けている。住居床面は、ほぼ平らで、床面には中央穴の東側と西側の合計9ヶ所に焼土面が認められる。壁面下の周溝は全周している。

柱穴は、壁面から1.0m前後内側に位置する直径20~25cm、深さ60cm前後の柱穴（P1~P10）の10本が主柱穴をなす。さらに中央穴周囲には、直径20cm程度、深さ30~50cmの柱穴（P11~14）の4本を棟持柱状に配置する総合計14本で構成されている。

貼床面除去後には、最終面より内側に長径8.6m×短径7.83mのはば円形の旧住居の周溝と堀方が認められる。中央穴は、新旧共有のようで造り替えは認められない。柱穴は、P15~P22までの8ヶ所の柱穴がこの住居の主柱穴と考えられる。柱穴規模は、平均で直径30cm、最大直径50cm程度を測り、深さ30~50cmである。ただ旧住居の周溝が北側の一部で重複している場所



第149図 穫穴住居2出土遺物3

は、長径7.93m×短径7.67mのほぼ円形に近い形状をなし、床面まで最大深さ60cmとかなり良好な残りである。竪穴住居4との切り合いは、いずれも類似した埋土をなしていたため、土層断面の観察以外では、竪穴住居の輪郭が不明瞭で、上端にいたっては、識別が不可能であった。

柱穴は、壁面から1.0m程度内側に位置するP1からP8とP4・5間の1本との合計9本が主要な柱穴である。このうち東西の端に位置する柱穴P7・8とP3・4、南北端に位置するP1とP5がいずれも相対する位置にあり、しかも柱穴規模が直径30cm前後、深さ30~40cmと同規模をなす。他の柱穴が、直径20cm前後で深さも若干浅いことからみて、これらの6本が当住居の主柱穴と考えられる。

床面中央には、上面で長辺98cm×短辺54cmの長方形をなし、底面で長辺58cm×短辺38cmの梢円形をなす中央穴を設けている。掘り方断面は、逆台形状をなし、深さ55cmを測る。中央穴の埋土には若干の炭化物は認められるものの、明瞭な炭、灰の堆積層や加熱による赤面した場所

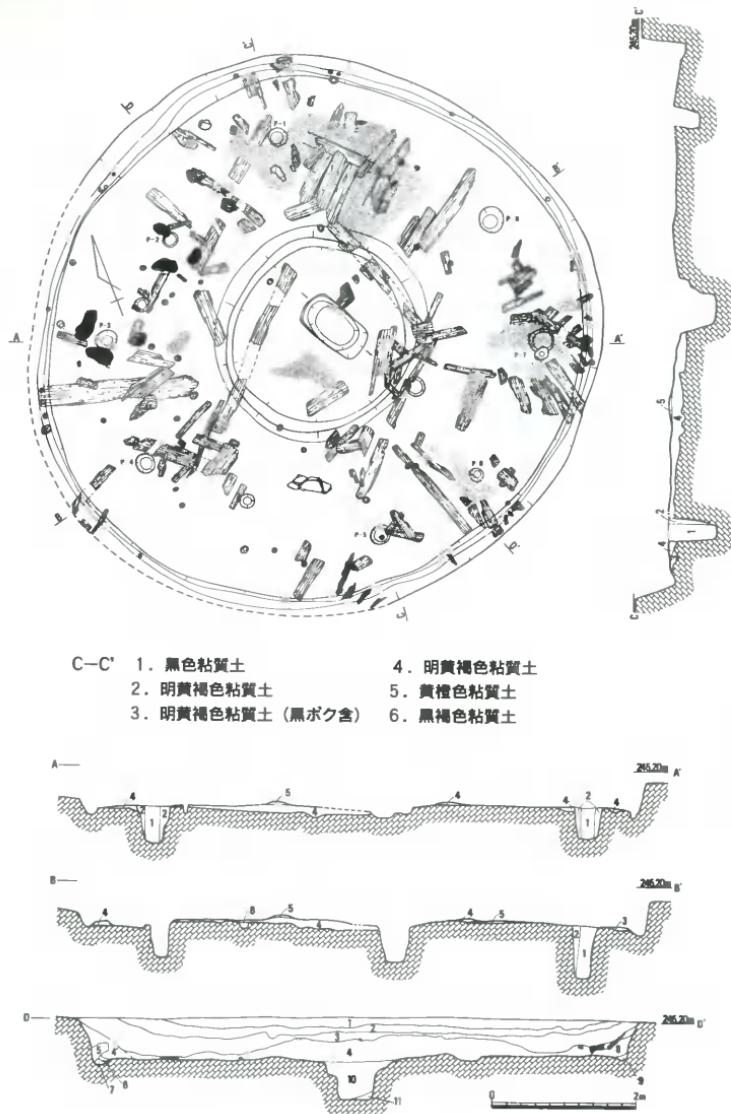
が見受けられることや、柱穴のP15、16、19、22がいずれも複数であること等から、さらにもう一回程度の建て替えを行っているようである。

出土遺物は、埋土中や床面近くから、鉄器9点、石包丁末製品、スクレイパー等がある。出土土器には、壺、甕、高杯等の器種が認められる。時期は、住居の形態や出土遺物等から弥生時代終末期と考えられる。

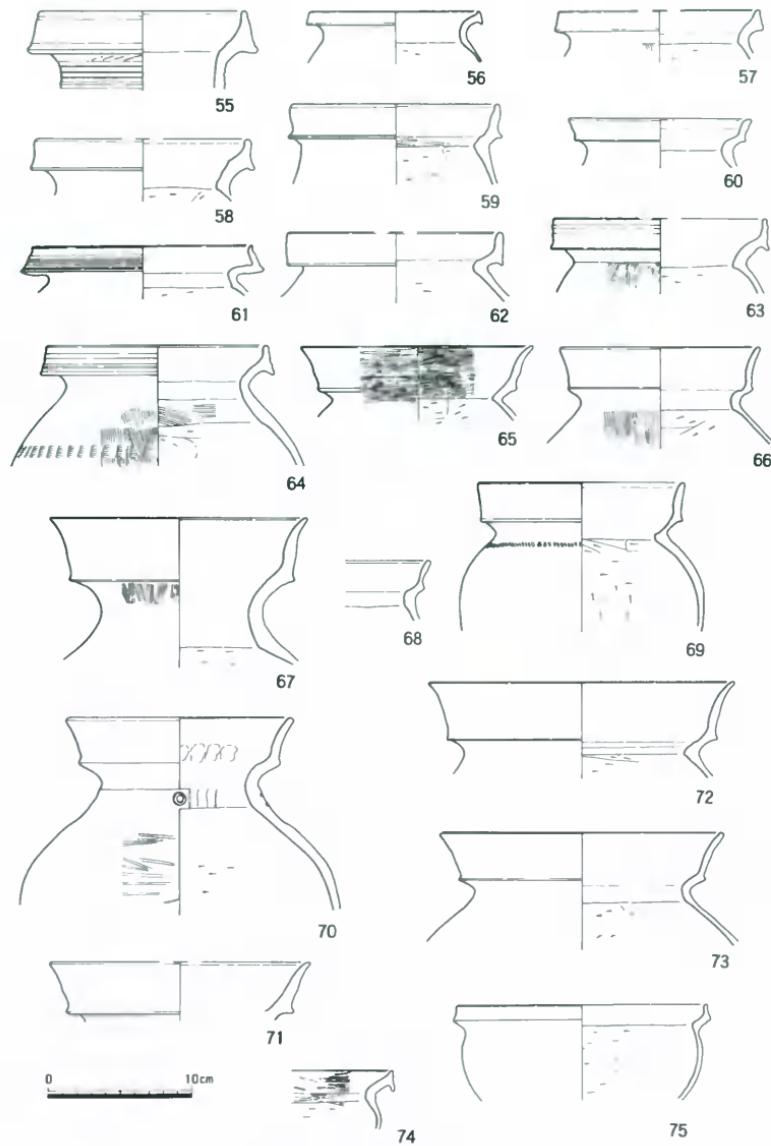
#### 竪穴住居3

第1調査区の北西端に竪穴住居4と重複して位置する火災による焼失住居である。平面規模

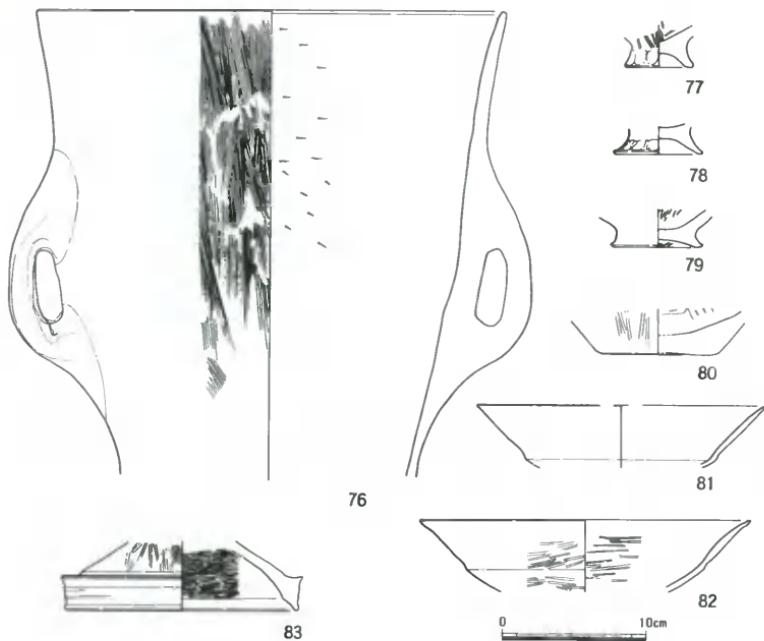
- |      |            |              |             |
|------|------------|--------------|-------------|
| A-D' | 1. 黒褐色土    | 5. にぶい黄褐色粘質土 | 9. 黄褐色粘質土   |
|      | 2. にぶい黄褐色土 | 6. 明黄褐色      | 10. 暗褐色土    |
|      | 3. 反黄褐色土   | 7. 黒色粘質土     | 11. 黒色土(炭含) |
|      | 4. 黑褐色粘質土  | 8. 黑褐色土      |             |



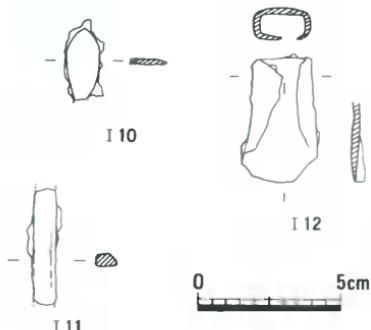
第150図 穫穴住居3 (1/80)



第151図 穂穴住居3出土遺物1



第152図 竪穴住居3出土遺物2

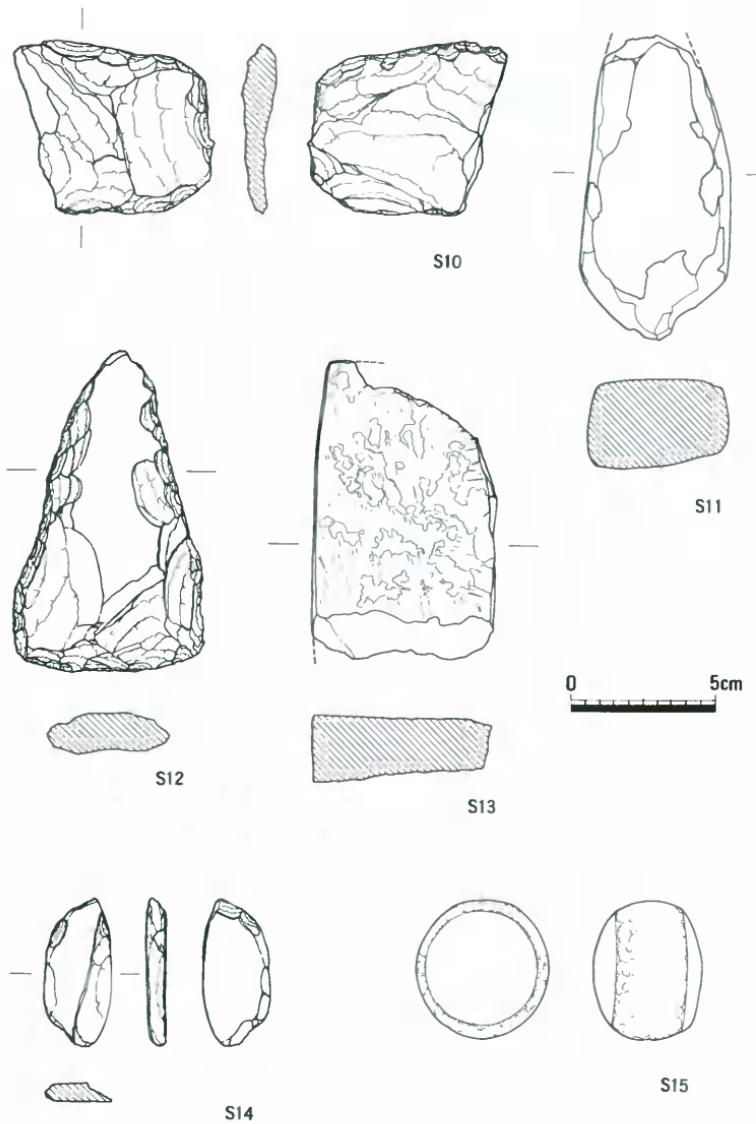


第153図 竪穴住居3出土遺物3

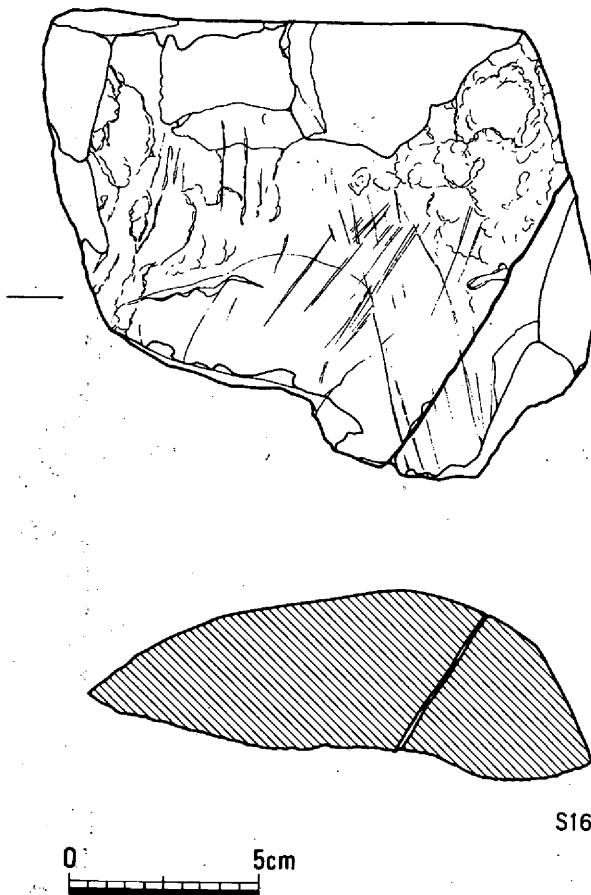
も認められない。また、中央穴の周囲には、直径3m程の範囲に最大高さ5cm程の浅い土手状の高まりを設けている。床面は中央穴周囲以外はほぼ平坦面をなし、壁下の溝も明瞭に全周している。

炭化した家屋構造材は、かなり良好に残っており、直径15cmを測る主柱穴と見られるものも出土している。炭化材の出土状況は、掘り方の周囲では、中央穴に向った放射状の配列をなし、住居の中央

3 上野遺跡



第154図 穂穴住居3出土遺物4



第155図 竪穴住居3出土遺物5

では、井桁状に交差する状況も認められる。恐らく周囲の放射状の炭化材は、垂木や壁材、中央のものは、棟持柱の部材の落下したものと考えられる。その他に屋根材に使用したと思われるカヤ状の炭化物も出土している。

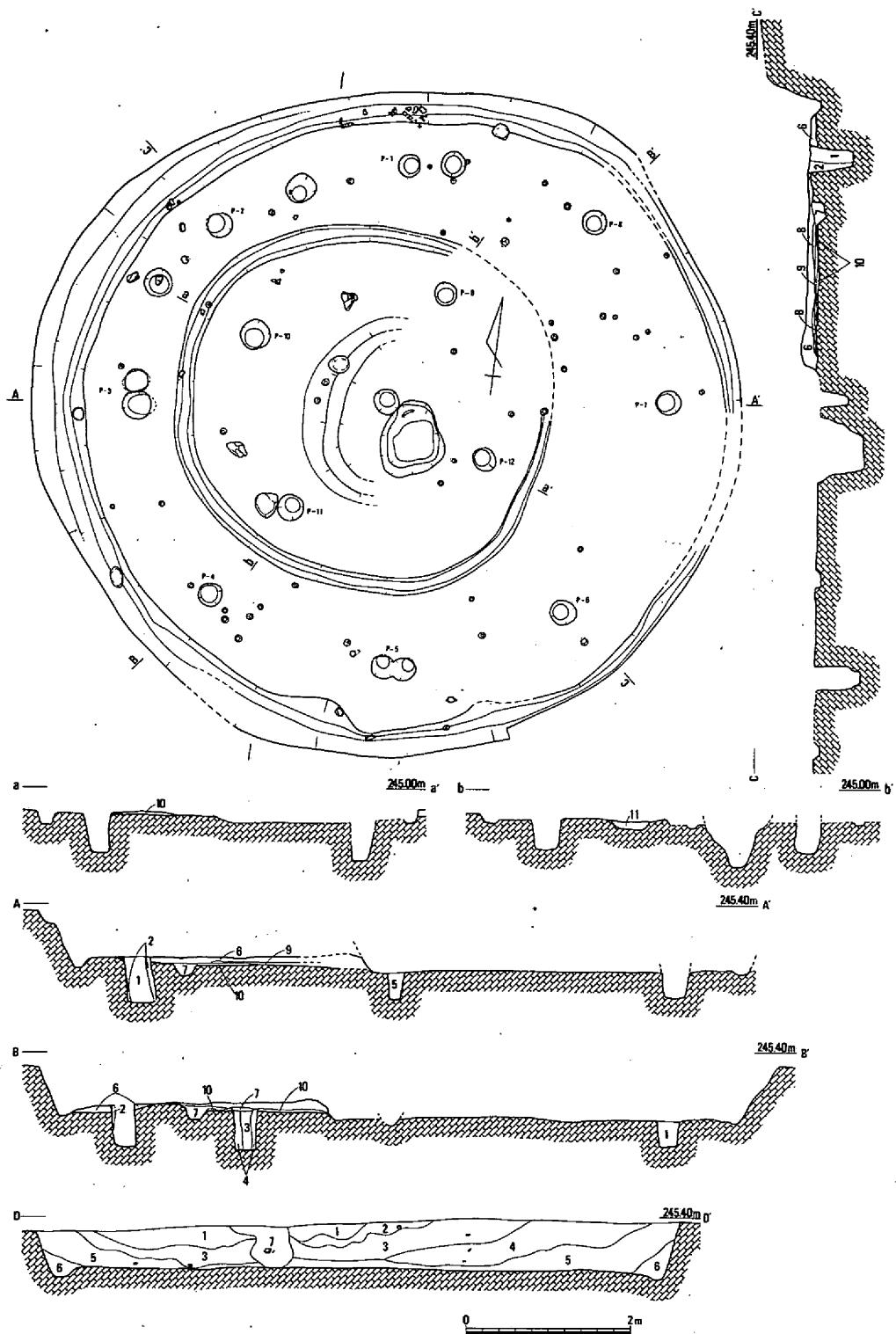
焼土もかなり認められ、特にP1・7付近では、特に厚く堆積している。住居内埋土は、南北方向の土層断面では、10層に分層が可能である。炭化材の出土は、第4層以下が中心をなし、この第4層の炭化材を含む、土層は、住居の中央付近でやや盛り上った堆積をなしている。

出土遺物は、P4・5間

のやや東よりの床面から火災により細かくだけているものの長径60cm×短径18cm程の扁平な作業台とみられる石材が1点出土している。これ以外には床面密着の顯著な出土遺物は無く、炭化を行った遺物は、大半が埋土中からの出土である。器種は壺、甕、高杯等が認められるが、このうち(76)は、山陰系の特徴を持つ甑・形の土器である。その他に、砥石、打製石鋤、敲石の石製品、斧、刀子の鉄製品が出土している。当住居の出土遺物には、火災に遭遇したにもかかわらず床面からの顯著な出土遺物が、1点もなく、出火の直前に持出していないのであれば、住居の火災廃棄の可能性も考えられる。時期は、出土遺物の諸特徴や遺構の切り合い等から弥生時代終末期のものと考えられる。

#### 竪穴住居4

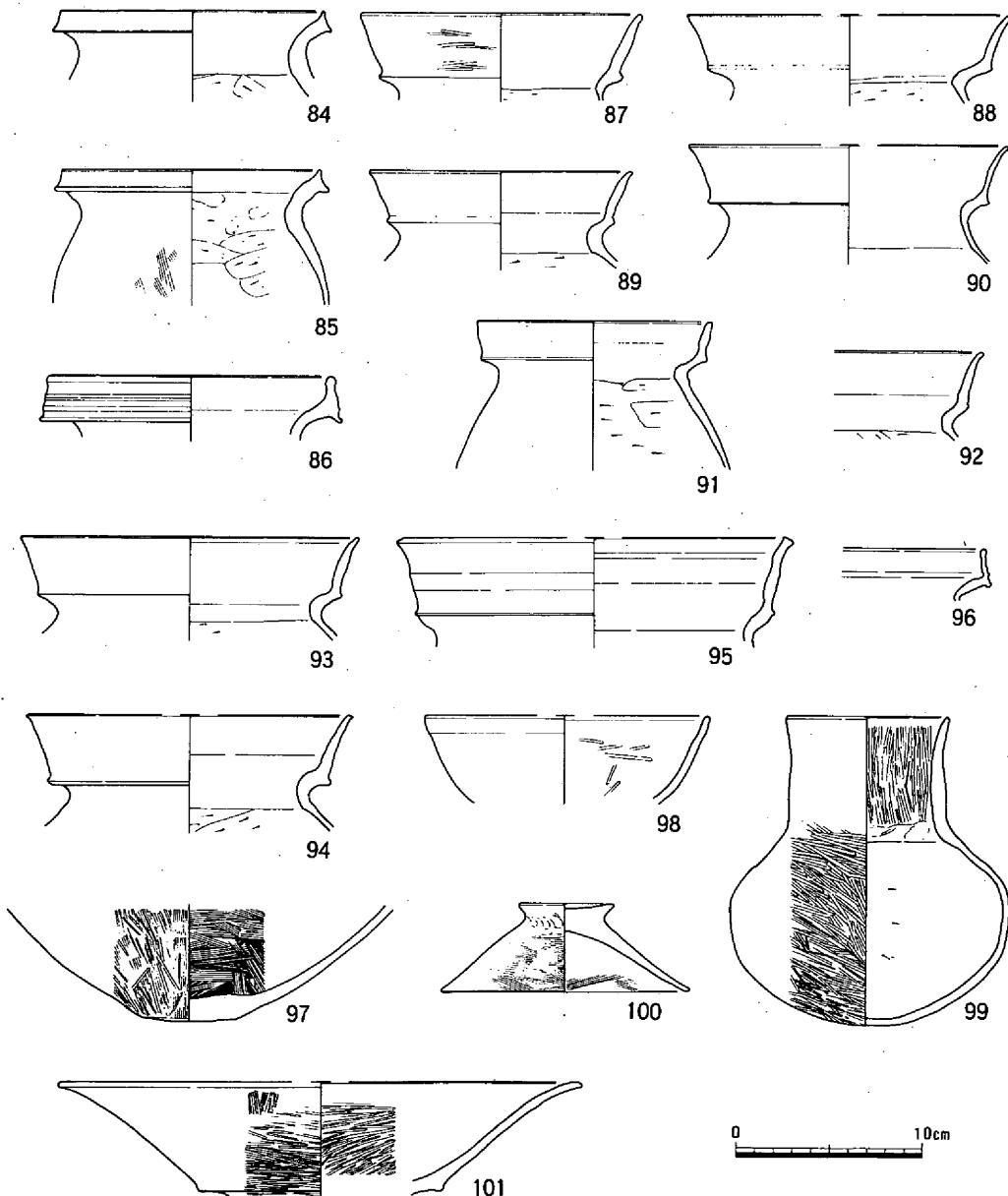
第1調査区北東端で竪穴住居3と重複し、床面下にもやや小形の旧住居が位置する新旧2基の竪穴住居である。新住居の平面規模は、長径8.45m×短径8.05mのほぼ円形を呈し、床面ま



第156図 竪穴住居4 (1/80)

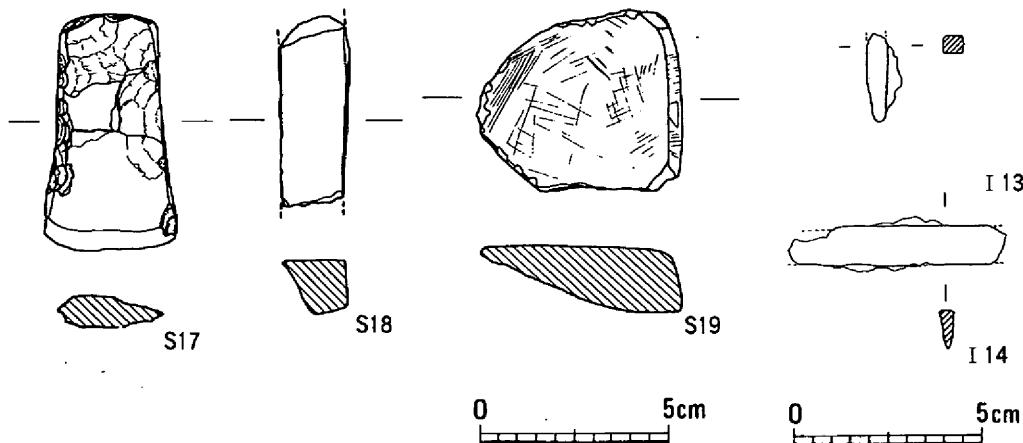
- |           |                |               |
|-----------|----------------|---------------|
| 1. 黒色粘質土  | 5. 浅黄橙色粘質土     | 9. 明黄褐色微砂質土   |
| 2. 橙色粘質土  | 6. 明黄褐色粘質土(貼床) | 10. 明黄褐色粘質土   |
| 3. 黑褐色粘質土 | 7. 黒色土         | 11. にふい黄橙色粘質土 |
| 4. 黄橙色粘質土 | 8. 明黄褐色粘質土(貼床) |               |

- |           |                |
|-----------|----------------|
| 1. 黒褐色    | 5. 暗褐色粘質土      |
| 2. 黑褐色粘質土 | 6. 黑褐色粘質土      |
| 3. 黑褐色粘質土 | 7. 灰黄褐色土(木の根?) |
| 4. 暗褐色粘質土 |                |



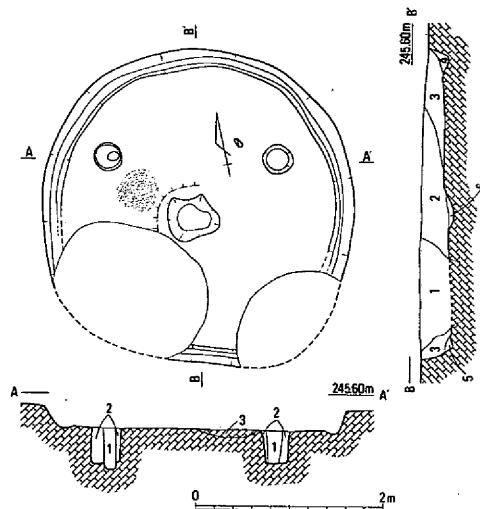
第157図 壺穴住居4出土遺物1

3 上野遺跡



第158図 竪穴住居4出土遺物2

第159図 竪穴住居4出土遺物3



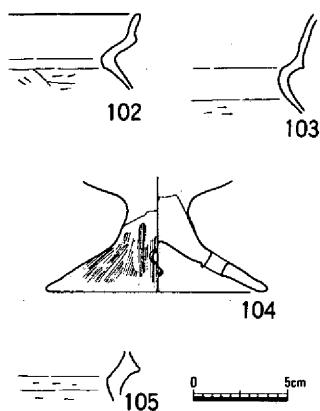
- |                  |           |
|------------------|-----------|
| 1. にぶい黄褐色粘質土     | 1. 暗茶褐色土  |
| 2. 灰黄褐色粘質土       | 2. 暗茶色土   |
| 3. 灰黄褐色粘質土（黒ボク含） | 3. 黒茶色土   |
|                  | 4. 暗黄褐色土  |
|                  | 5. 黄褐色粘質土 |
|                  | 6. 暗黄褐色土  |

第160図 竪穴住居5 (1/80)

住居内埋土は、7層に分離できるものの、基本的には中央に向って落ち込む、自然堆積をなし、大半が黒褐色から暗褐色土を主体とする土層が占める。

出土遺物は、東半の周溝中から鉄製刀子、埋土中から小形の磨製石包丁、砥石や壺、甕等の

での最大深さで60cmを測る。柱穴は、壁面から内側の1.0m前後付近に直径30cm程度、深さ40~50cmの主柱穴P1~P8の8本を確認している。ただP1~P3付近やP5の柱穴周辺にはいずれも複数の柱穴が認められることから小規模な建て替えが行なわれていることが窺われる。床面中央に位置する中央穴は、やや不整形な形状をなし、上面で長径90cm×短径45cm、床面で長径57cm×短径48cmを測る。掘り方断面は、逆台形に近い形状をなし、深さ55cmを測る。また、中央穴周囲には、竪穴住居3と同様に直径2.4m程度で、高さが5cm程度の浅い土手状の高まりを設けている。床面は、中央穴周囲を除いてほぼ平坦面をなし、壁面下が溝を全周している。

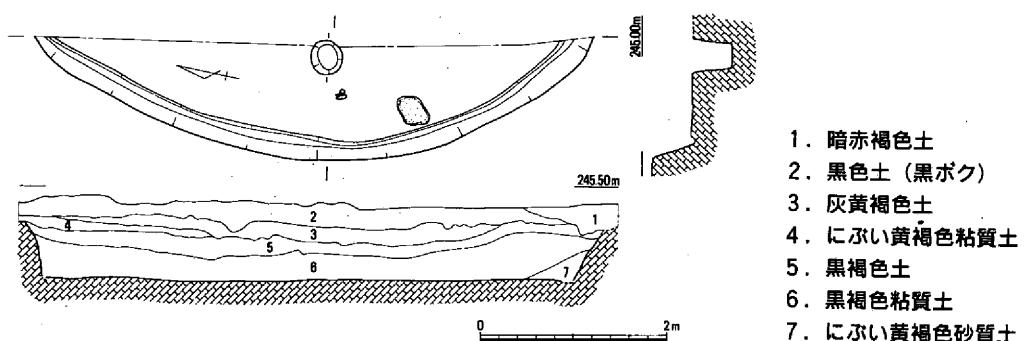


第161図 竪穴住居5出土遺物

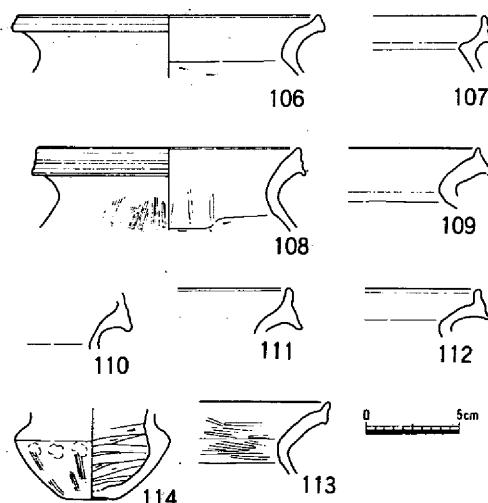
器種の土器が出土している。時期は、これらの出土遺物の諸特徴から弥生時代後期後半であろう。

一方、旧住居は、新住居のはば中央の貼床面下に位置する直径4.46~4.42mを測る円形のやや小形の竪穴住居で、一部床面が削平を受けているもののほぼ完存する。主柱穴は、直径25~30cm、深さ40~50cmを測るP 9~P 12の4本を等間隔に配置している。柱間がP 9・10、P 12・11間がやや長く2.3~2.35m、P 9・12とP 10・11間が若干狭く2.0~2.1mを測る。

中央穴は、中央のやや東よりに新住居のものが位置し



第162図 竪穴住居6(1/80)



第163図 竪穴住居6出土遺物

ている以外に認められず、新住居の位置に共存していたにしては、位置が、偏ることから本来設けていなかったか、もしくは、浅かった可能性が強い。周溝は一部削平を受けている以外は明瞭に残存している。

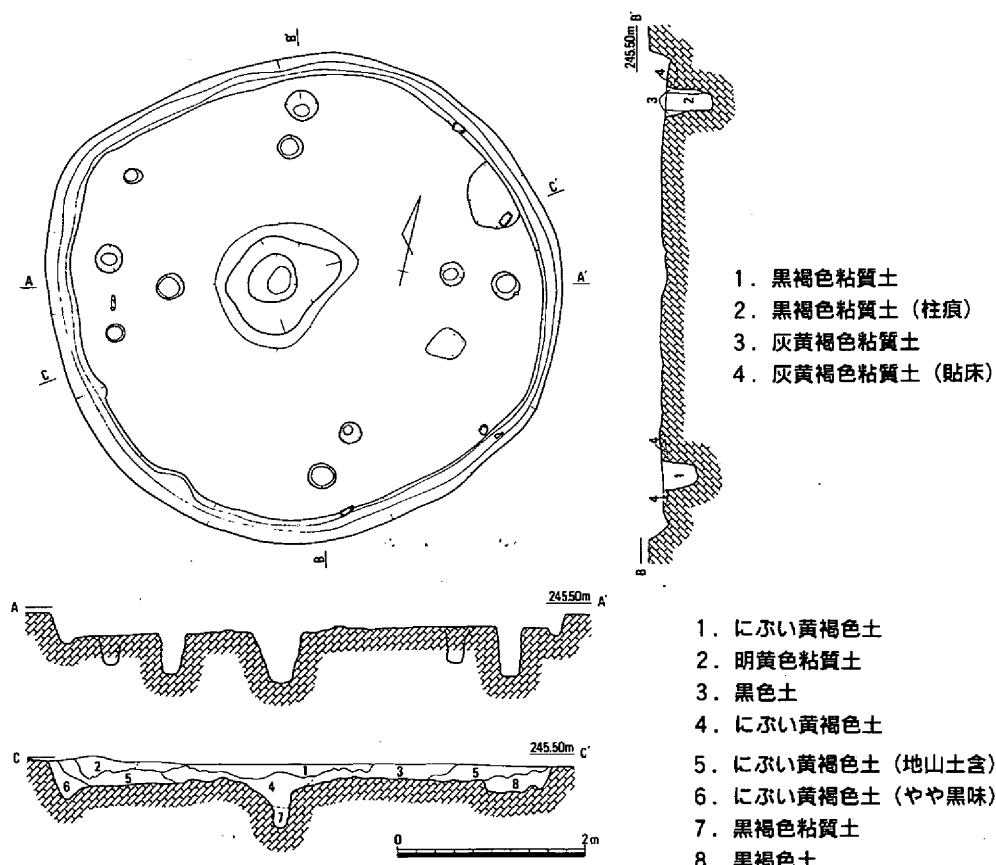
時期は、出土遺物に細片が多く、確定しがたいが竪穴住居3・4との切り合いや重複等から、これらの遺構のうちでは最も古く位置づけされること等から弥生時代の後期後半期と考えられる。

竪穴住居5

### 3 上野遺跡

第1調査区北端に位置し、土壌3、4により一部削平を受けている小形の竪穴住居である。平面規模は、南半の掘り方の一部が不明瞭であるもののほぼ円形に近い形状をなし直径3.3～3.35mを測る。柱穴は直径30cm、深さ35～45cmのものを床面北半部に1.8mの間隔を置き東西に2本確認している。位置から本来4本の主柱穴で構成されていたものの、南側の2本が土壌により削平を受けている状況である。中央穴は掘り方のほぼ中央に位置し、やや不整形な形状をなし、長径54cm×短径44cmを測る。掘り方断面は、浅く皿状をなし深さ8cm程で、赤色に変化した面も認められなく、埋土中には、炭、灰も堆積していない。ただ中央穴の西側には、直径40cm程の明瞭な焼土面が認められる。中央穴の周囲は、図面に明瞭に表現できなかったものの、わずかであるが、土手状に盛り上っている。床面は中央穴の周囲を除きほぼ平坦で、壁面下の溝も土壌による削平を受けている場所以外では明瞭に認められる。

出土遺物は、少量で、床面からの出土遺物がほとんどなく、確定しがたいものの、埋土や、



第164図 竪穴住居7 (1/80)

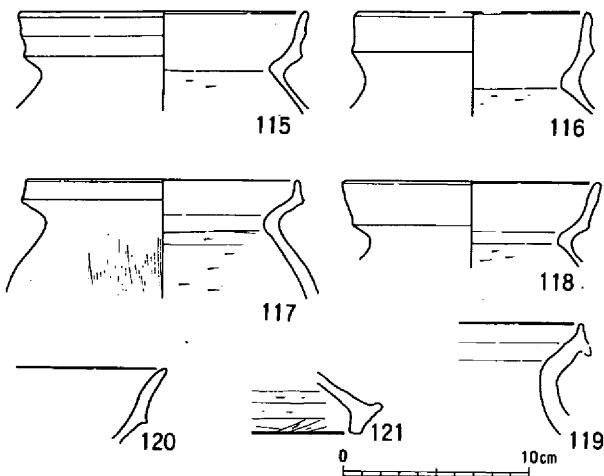
### 3 久世地域の調査

出土土器の器形特徴や、土壌との切り合い等から弥生時代後期後半期と考えられる。

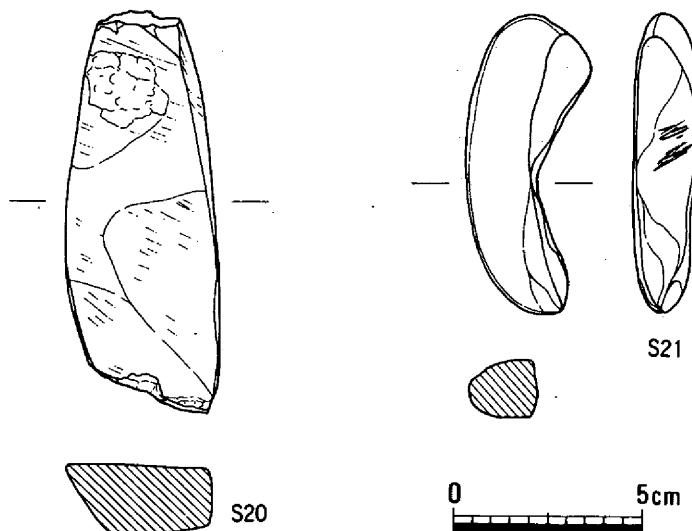
#### 竪穴住居 6

第1調査区北東隅の東端に位置するため、大半が調査対象外で未調査である。平面規模は、掘り方の形状から推察して、8.0m前後の円形をなすものと思われる。埋土は、上下2層に大別可能で、下層の炭化物や土器を含む黒褐色の粘質土が住居

埋土の大半を占める。床面は、ほぼ平坦面をなし、壁面下には、幅10cm、深さ3~4cmの溝が明瞭に巡っている。柱穴は、掘り方の中央付近の壁面から1m程内側に、直径35cm、深さ40cmの主柱穴の1本と思われるものが位置している。床面南よりの壁ぎわには、作業台とみられる最大直径40cmの扁平な石材が位置している。遺物は少ないが、床面に接し、(106) が出土



第165図 竪穴住居 7 出土遺物 1

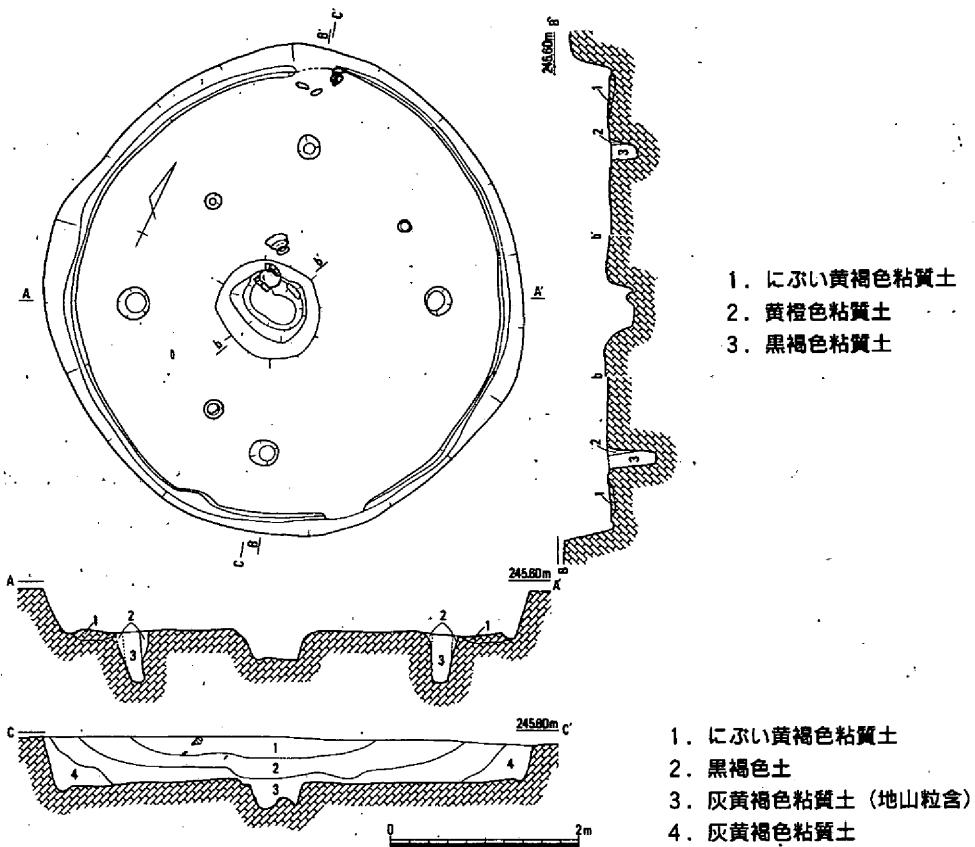


第166図 竪穴住居 7 出土遺物 2

している。時期は、出土遺物等から、弥生時代後期の前半期である。

#### 竪穴住居 7

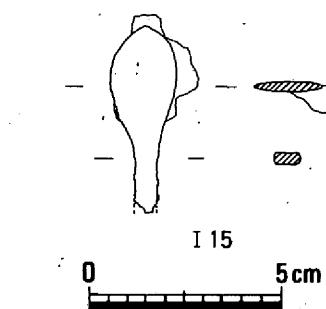
第2調査区の南端に位置する完存の竪穴住居である。平面形は、やや癖があるもののほぼ円形を呈し、直径5.1~5.4mを測る。柱穴は、床面および床面下を含めて合計9本確認している。このうちP1~P4が直径30cm、深さ30~50cmを測り、掘り方壁面から内側に60cm程度と同位



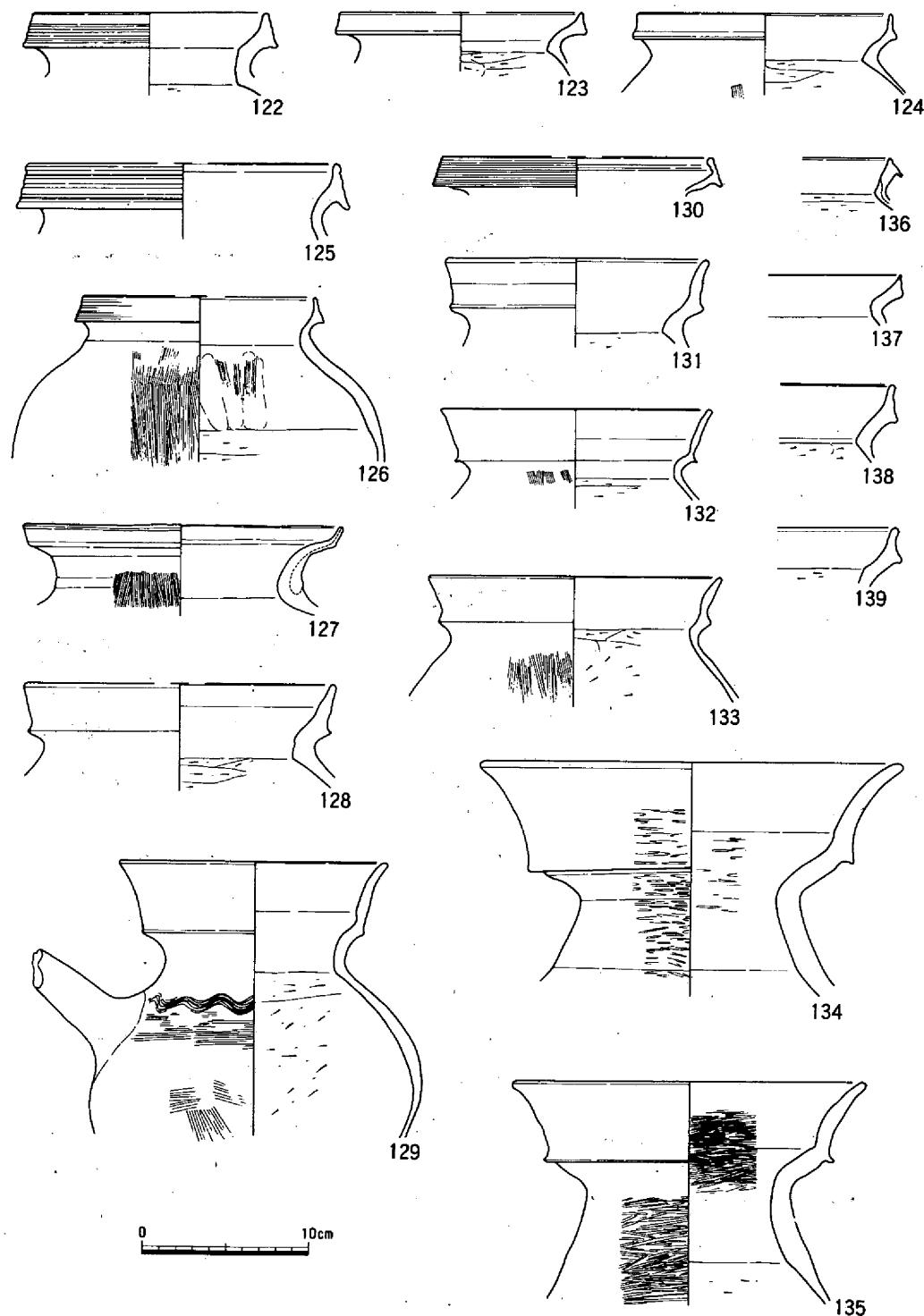
第167図 竪穴住居 8 (1 / 80)

置にあることから、これらの4本が当住居の主柱穴と想定される。これらの主柱穴の内側の床面下部にそれぞれ同規模の旧柱穴を確認しており柱穴の建て替えが行われたことが窺われる。

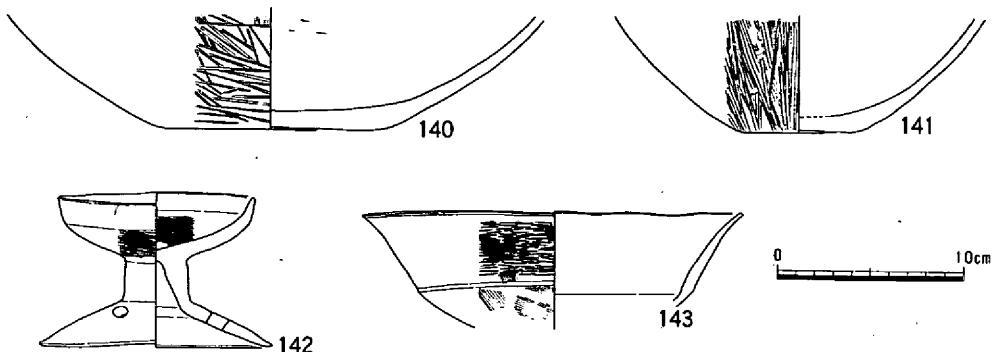
床面のほぼ中央に位置する中央穴は、やや不整形を円形をなし長径55cm×短径48cm、深さ55cmを測る。埋土中には、炭、灰等の炭化物を含まず、焼土面も認められない。中央穴の掘り方周囲には、長径1.5m×短径1.3mの範囲に土手状の浅い高まりを設けている。柱穴P1とP2の間の床面には直径40cm程度の作業台と考えられる偏



第168図 竪穴住居 8 出土遺物 1 平な石材を設置している。



第169図 積穴住居8出土遺物2



第170図 竪穴住居8出土遺物3

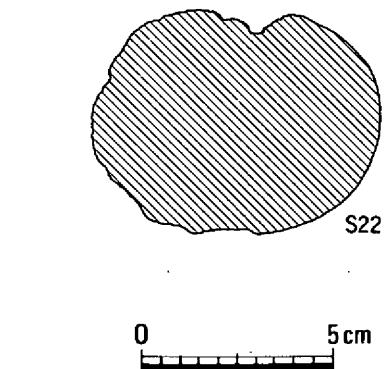
遺物は、埋土中から甕、壺等の土器と砥石が出土している。時期は、出土遺物の諸特徴から弥生時代の終末期と考えられる。

#### 竪穴住居8

第2、3調査区境に位置し、床面まで平均50cmと良好な残りを示す。南端では、縄文時代の落とし穴構造である土壙80を切り込んでいる。平面規模は、若干隅丸方形を意識した円形をなし、直径4.88~4.9mを測る。

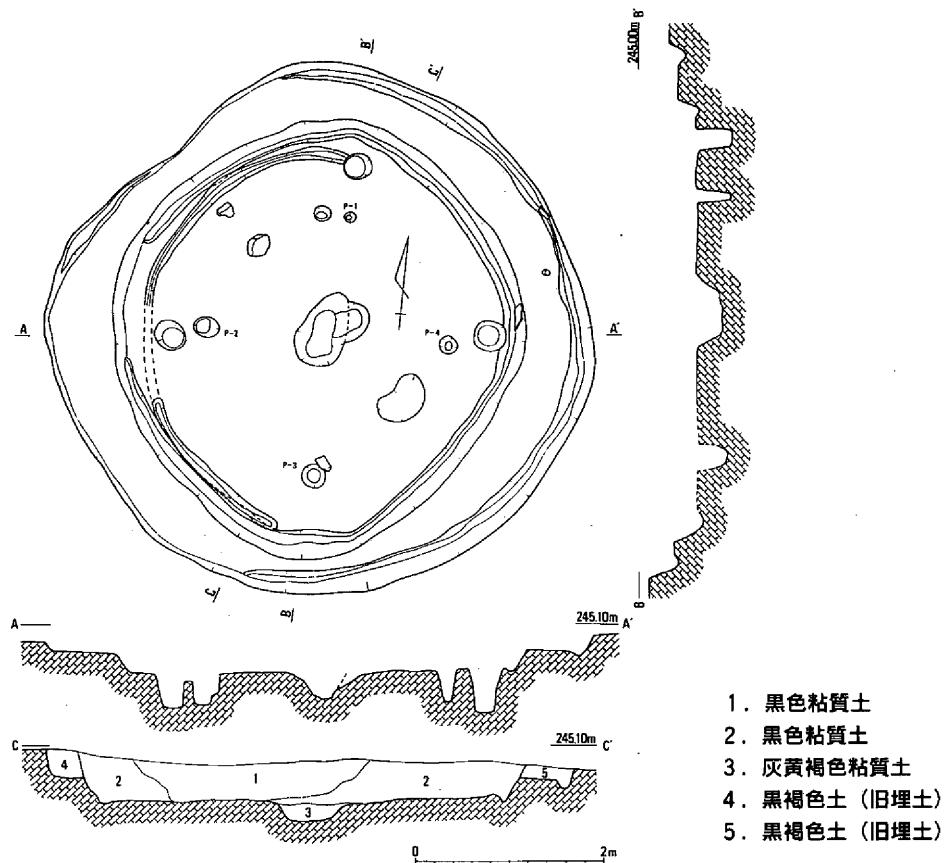
埋土は、4層に分離可能であるが、堆積層が掘り方中央にむかってくぼんだ自然堆積の状況をなしている。上層の1、2層には、遺物を多く含み、特に、第2層の黒ボコを基調とする土層には大形の土器片を多く包含しており、平面図に記載した遺物もこの層からのものである。

壁下を巡る溝は、北側と南東側の2カ所で途切れ全周はしていない。柱穴は、若干方形をなす掘り方のコーナーを結んだ対角線上に直径25~30cm、深さ30~50cmの4本の主柱穴が位置している。その他、西側と北側の主柱穴の間には、直径15cm前後の補助的な柱穴を配置している。柱間は、主柱穴の東西が2.1m、南北が2.4mを測る。



第171図 竪穴住居8出土遺物4

中央穴は、ほぼ住居の中央にあり長径67cm×短径53cm、深さ30cmのやや不整形な形状をなす。



第172図 竪穴住居 9 (1/80)

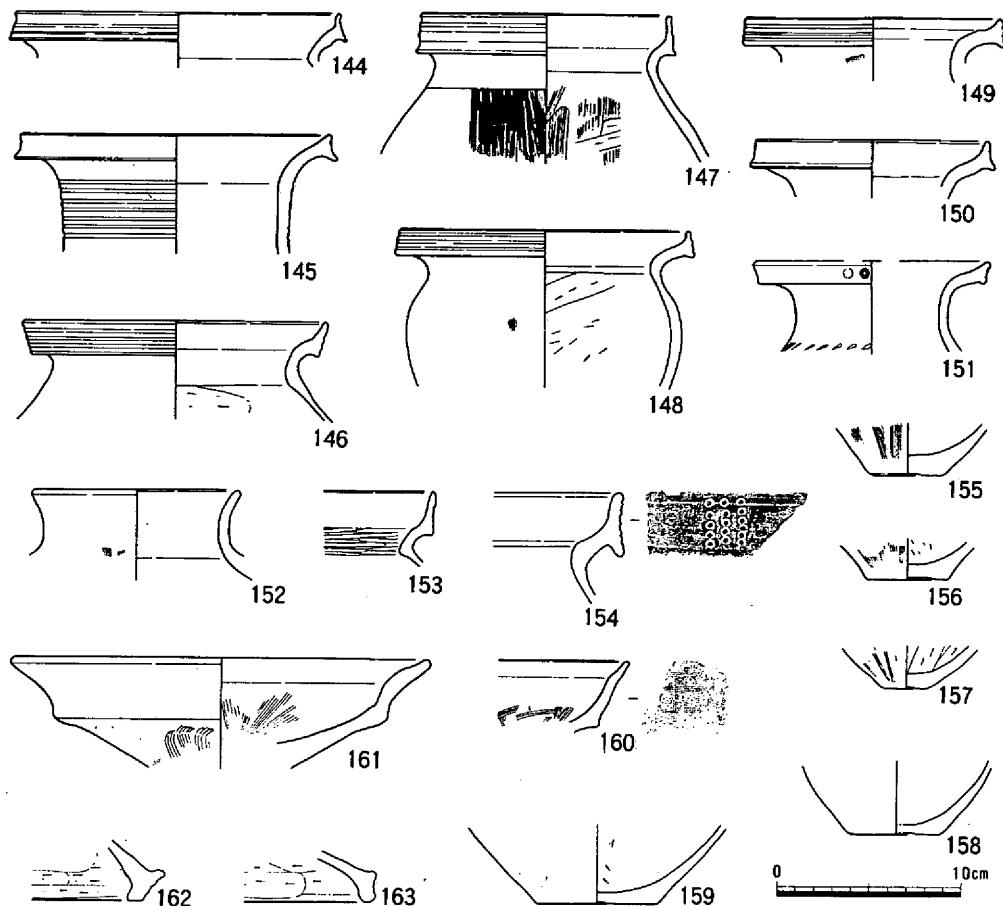
埋土は、住居の下層埋土と同様の堆積をなし、灰、炭は認められなく、また、焼土面もない。中央穴の周囲は、直径1.0mの範囲に土手状の高まりを設けている。

床面からの出土遺物は、北端コーナー付近に拳大の礫が集中している以外には少なく、大半の出土遺物は上層の遺物包含層中からのものである。

住居の廃棄時期は、下層出土遺物の器形特徴から弥生時代後期の後半を示し、上層出土の遺物から最終埋土の時期が弥生時代終末期と考えられる。

#### 竪穴住居 9

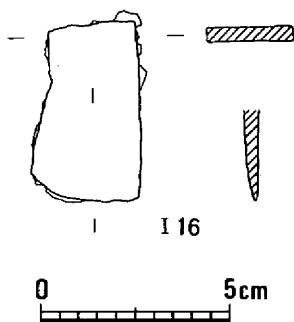
上野遺跡の最北端の第2、3調査区境に位置し、新旧3回の建て替えの重複する竪穴住居である。住居の新旧の切り合いは、土層断面の観察によると外側の最も大きいものが古く、この住居を切り込んで一段深く内側に縮小した新住居が掘り込まれている。さらに内側の住居の床面下部には、周溝の一部が西半部に認められることからもう一回の建て替えが行われているこ



第173図 竪穴住居 9 出土遺物 1

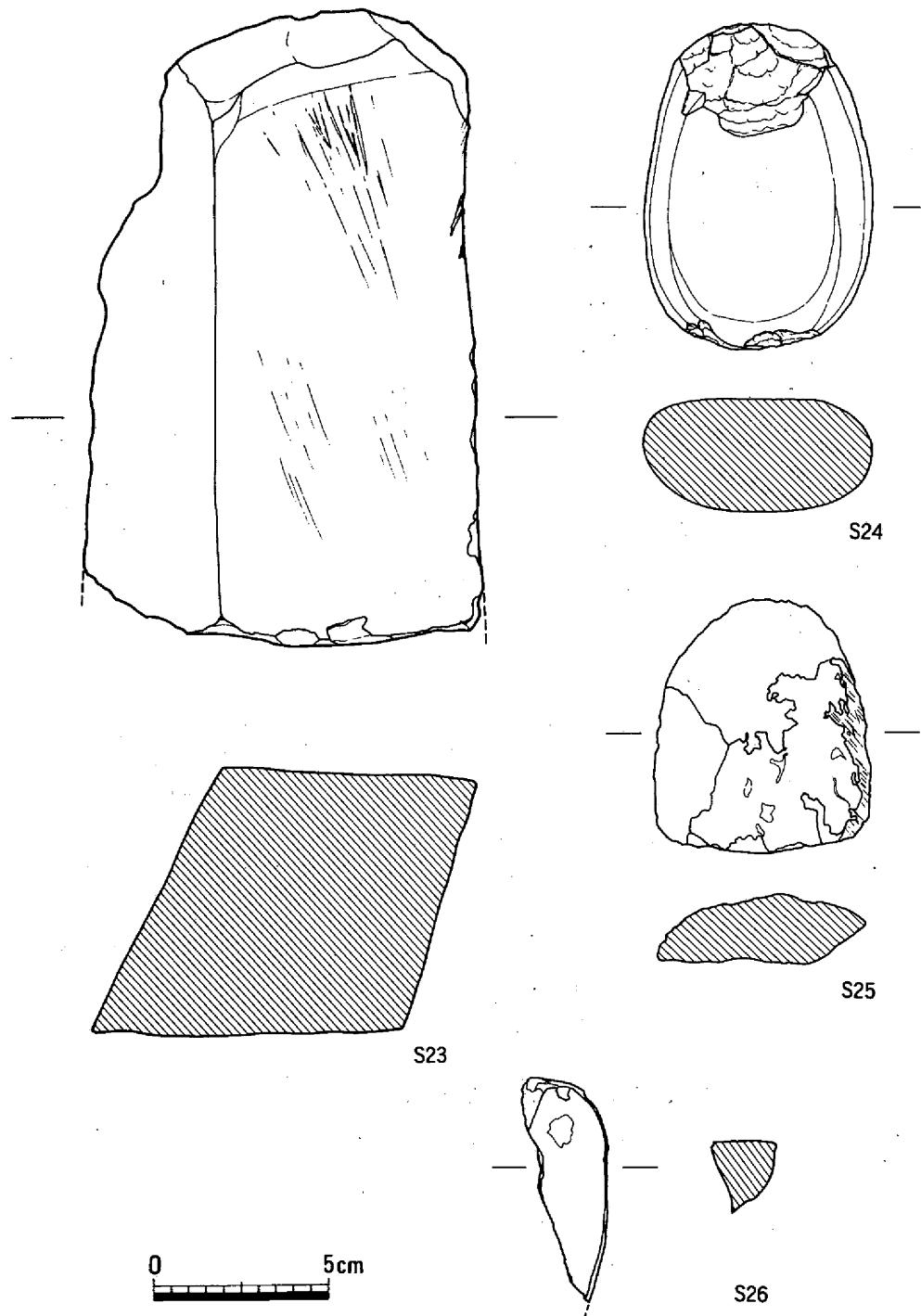
とが窺われる。すなわち、新旧の関係は、一番外側の住居から内側の床面下部の最小の規模に縮小し、さらにもう一回、若干の拡張を行ったものが最終面である。

最終面の主柱穴は、直径20~30cm、深さ30cm前後を測るP 1からP 4の4本がこれにあたる、外側の旧住居も平面形は、わずかに隅丸方形の形状をなし、主柱穴は、その配置等から新住居の主柱穴P 1、2、4のいずれも外側に位置する4本と考えられる。ただし、P 3の位置については、木の根の攪乱が著しく不明である。

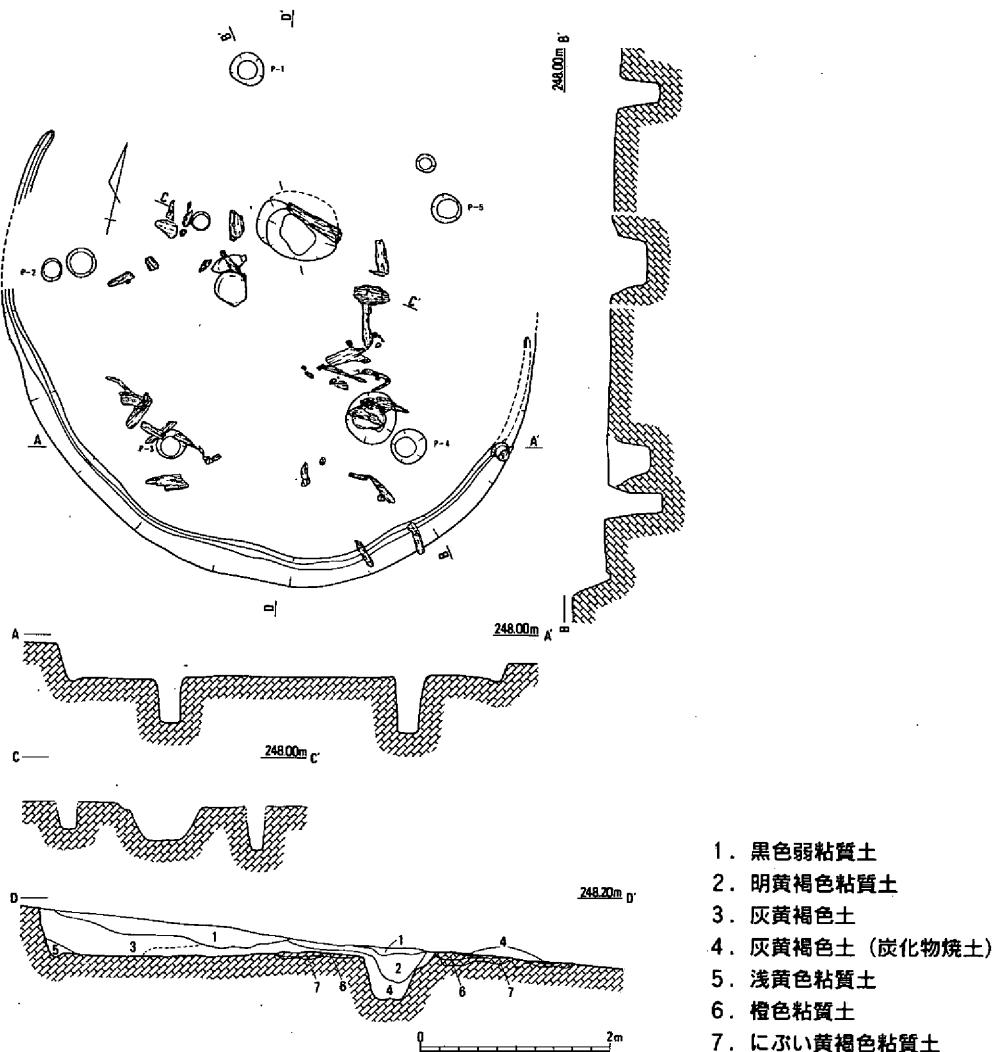


第174図 竪穴住居 9 出土遺物 2

中央穴は、住居掘り方のほぼ中央に位置し、新旧2基



第175図 積穴住居 9 出土遺物.3



第176図 穫穴住居10 (1/80)

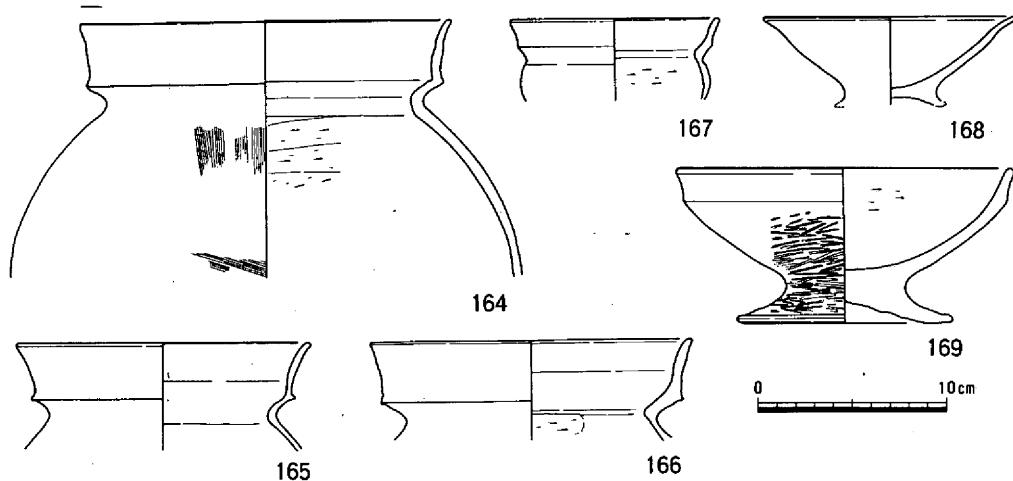
が重複している。新しい中央穴は、長径82cm×短径50cmのやや楕円形をなし、深さ30cmを測る。埋土中に炭、灰を含まず、焼土面もみあたらない。

出土遺物は、壺、甕の各器種が認められる以外に、砥石、叩石、鐵鎌がある。

時期は、出土遺物や切り合い等から最終床面の住居は、弥生時代後期後半と考えられる。旧住居については、出土遺物が少量で確定しがたいが弥生時代後半の範中であろう。

#### 竪穴住居10

第4調査区北端に位置する焼失住居である。遺跡南端の尾根斜面にかかる位置にあたってい

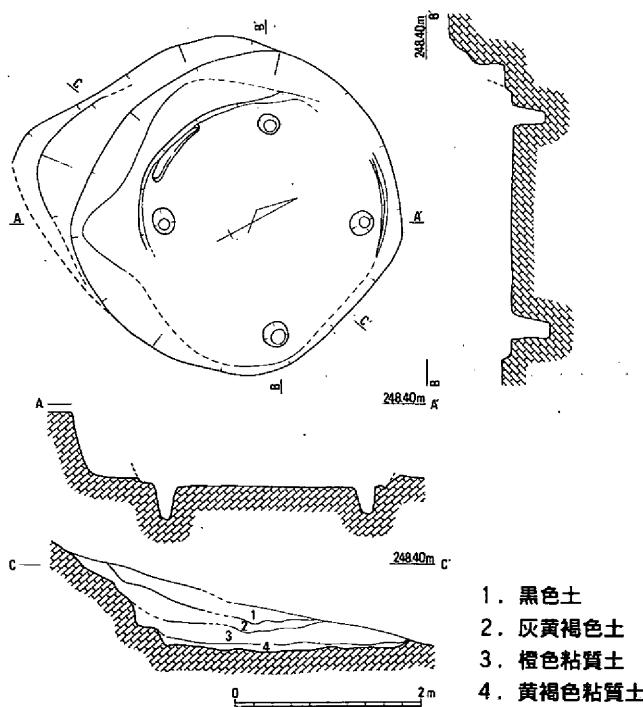


第177図 竪穴住居10出土遺物

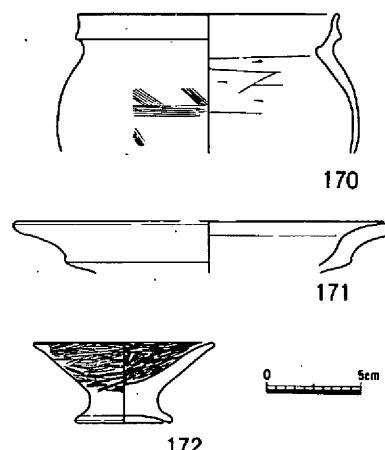
るため北半の床面が削平を受けており、床面の残りは2／3程度である。平面形は、残存部位の形状から長径6.3m×短径5.5m程度のやや楕円形と推定される。

柱穴は、床面下のものを含めて合計10本確認しているが、主柱穴は、掘り方の壁面から70~80cm内側に位置するP1~P5の配列がこれにあたり、さらに、中央穴の東西の直径15~20cmの小規模な2本の柱穴が棟持柱の可能性が考えられる。P1~P5の周囲には別の柱穴が認められることから住居の建て替えが想定される。

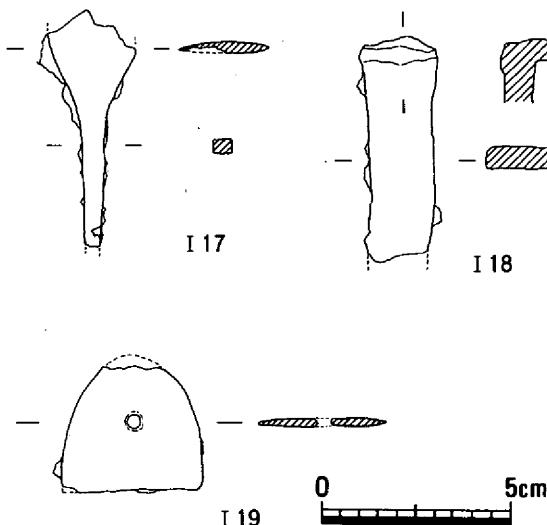
中央穴は、住居の若干北よりに位置し、やや楕円形の形状をなし、長径75cm×短径50cm、深さ45cmを測る。炭化材



第178図 竪穴住居11 (1/80)



第179図 壇穴住居11出土遺物 1



第180図 壇穴住居11出土遺物 2

は、あまり良好な残りをなしていないが、南東側の一部には壁面に垂れ下った状況も認められる。

中央穴の南側及びP 4 の西には、いずれも直径35cm程度の作業台とみられる扁平な石材が出土している。土器は、掘り方東端の壁面に接し、完形の台付碗が出土している。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期と考えられる。

#### 壇穴住居11

第4調査区東斜面のほぼ中央部に位置し、上野遺跡全体の壇穴住居としては最も南端にあたる。当住居は、土壙90・91・93と3基の土壙と重複し

ている。遺構の新旧は土層断面や検出の状況から土壙93を削平して壇穴住居11を掘り込み、さらに、壇穴住居の廃棄後の整地した面より土壙90・91を切り込んでいる。平面形は一部土壙90・91により削平を受け、掘り方や周溝の一部も消失しているが、やや小形の隅丸方形の形状を残す。上面掘り方は、南西部の一部を拡張しているものの、基本的には長辺3.4m×短辺3.1mの規模を有し、下端の周溝残存付近では一辺2.6m程度をなす。

柱穴は、直径20~25cm、深さ30~40cmの4本の主柱穴を確認している。中央穴や焼土面等は床面に認められな

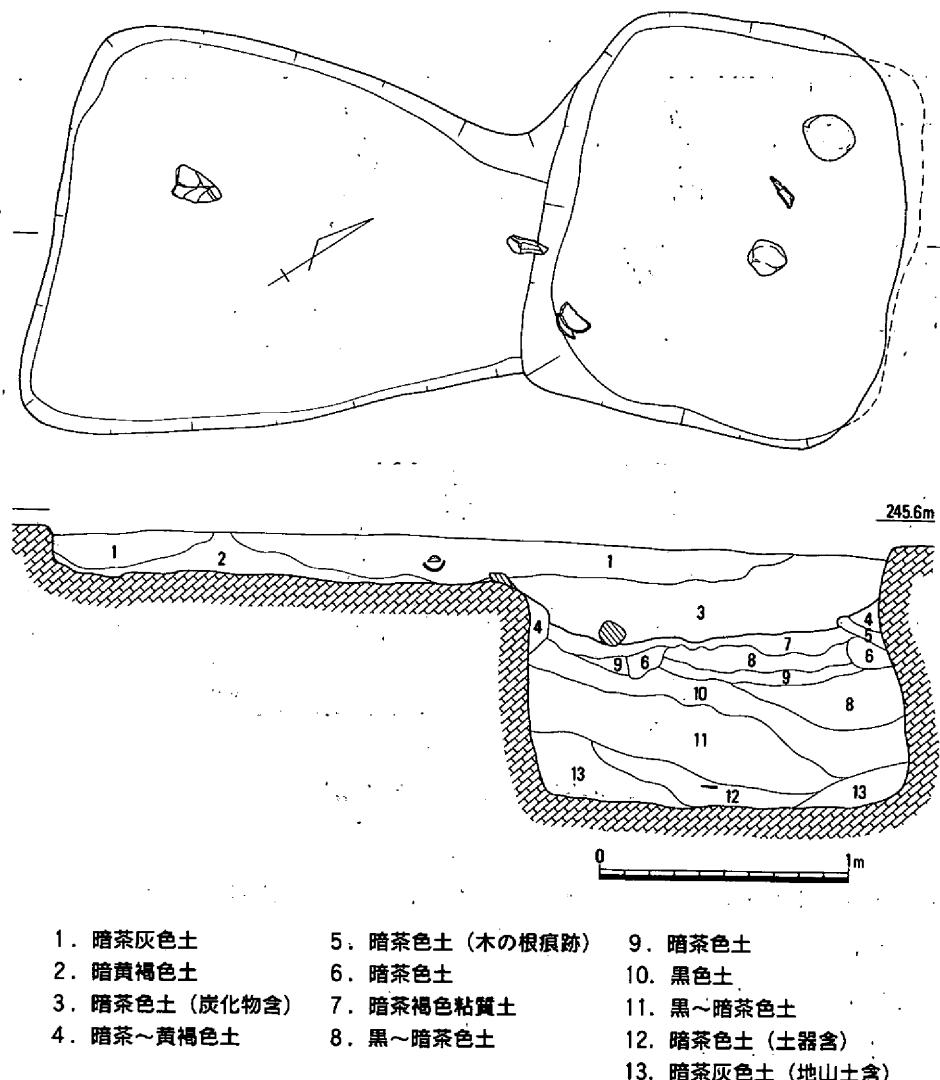
い。出土遺物は、埋土中から叩石と鉄鎌と少量であるが甕、壺の器種がある。

時期は、遺構の切り合いや出土遺物等から弥生時代後期の後半であろう。

## 土 壙

### 土壙1、2

第1調査区のほぼ中央に位置する重複した2基の土壙である。北側の土壙1は、明瞭な掘り

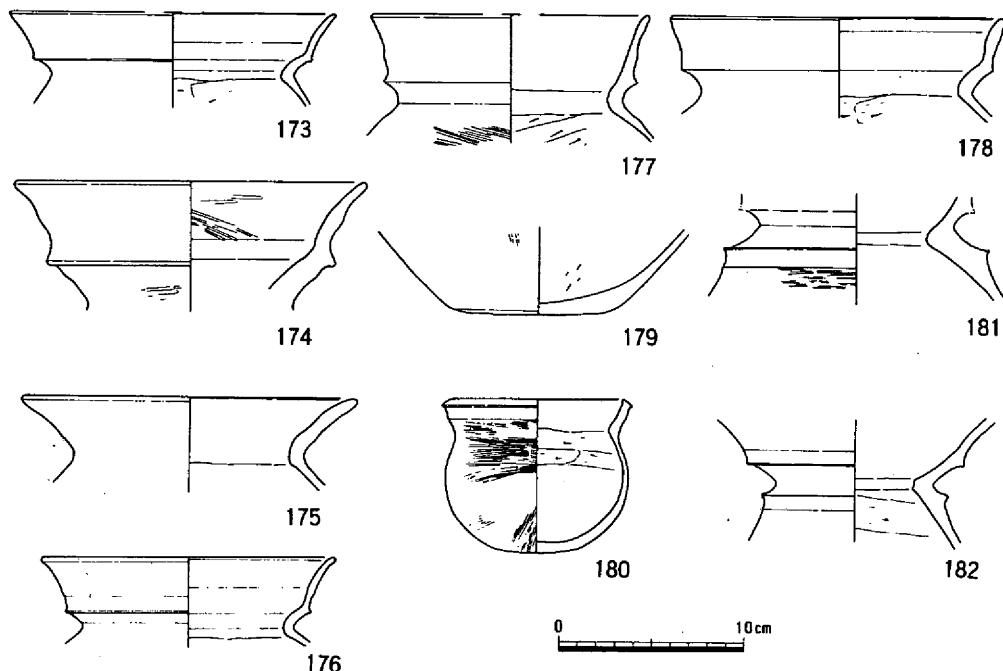


第181図 土壙1、2 (1/30)

方を示し、上面、底面ともほぼ同様で方形の形状を呈す。規模は、上面が長辺1.67m×短辺1.48m、底面が長辺1.55m×短辺1.32mである。掘り方断面は、垂直に近く、深さ1.08mを測り、平坦な底面をなす。

一方、土壙2は、平面形が長辺1.90m×短辺1.68mの台形を呈し、深さが最大20cmと浅く、土壙1に伴うテラス状をなしている。

土壙内の埋土は、第7層上面に焼け石が認められることや土色も大きく異なることから、第3層の暗黄褐色土までを上層に区分できる。最上層の埋土は、土壙1、2を覆うような堆積を



第182図 土壌1、2出土遺物

なしており同一遺構の可能性を強く示唆している。第7層以下も詳細に観察すると、7～8層の水平な堆積とそれ以下の斜めの堆積をなす土層に分層可能である。

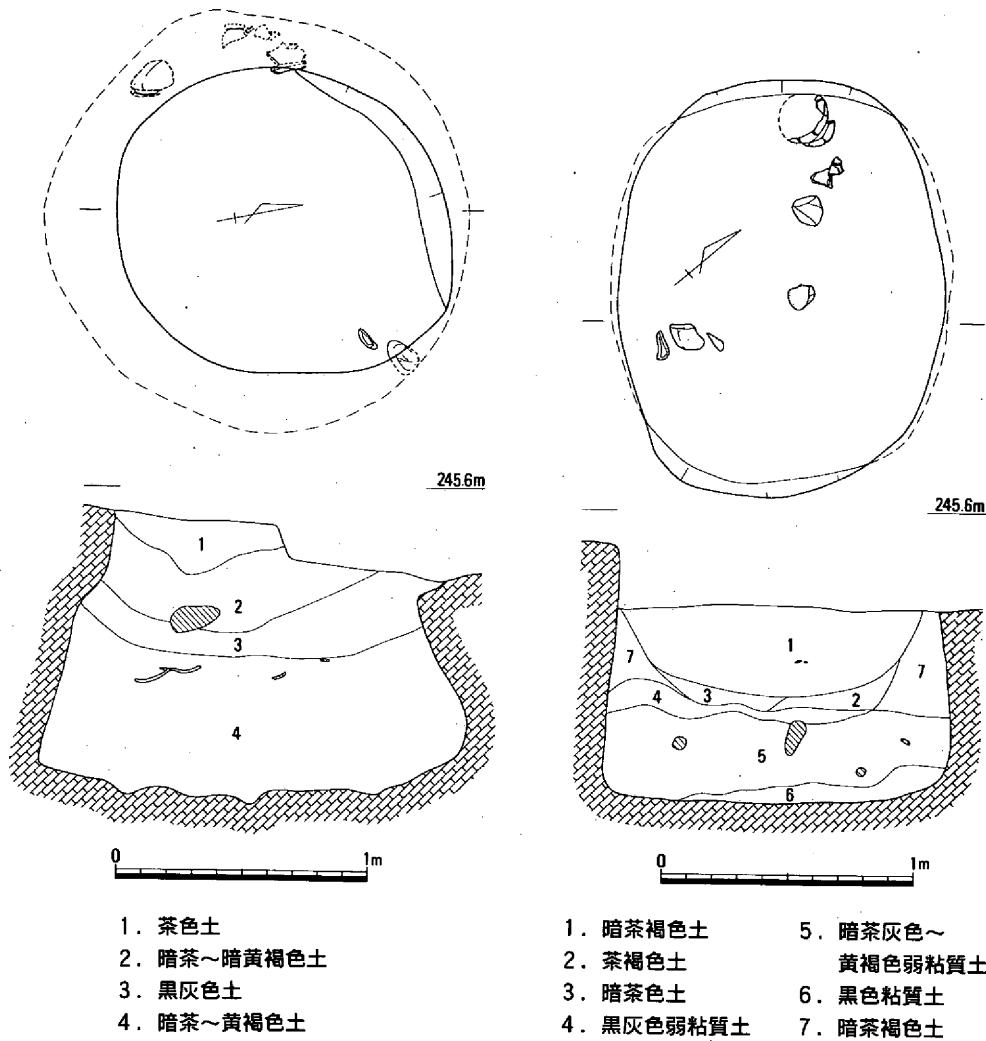
出土遺物は、第11、12層に比較的多く認められた以外は少ない。時期は、出土遺物等から弥生時代後期の終末期であろう。

### 土壤3

第2調査区北端で竪穴住居5と重複した2基の土壤のうちの東側の1基である。竪穴住居5との切り合いはいずれも黒ボコの堆積で不明瞭であるが、土壤内の埋土に貼り床等の竪穴住居の床面が認められなかったことから、土壤が新しいようである。

平面規模は、上面が長径1.44m×短径1.25m、底面が直径1.66m～1.67mのほぼ円形を呈す。掘り方断面は、袋状を呈し、深さ1.2mを測る。底面は、ほぼ水平である。

埋土は、大きく4層に大別でき下層の第4層に当たる暗茶褐色土には土器片を多く含んでいる。時期は、出土土器に若干古相のものも認められるが切り合い等から弥生時代の終末期であろう。



第183図 土壙3 (1/30)

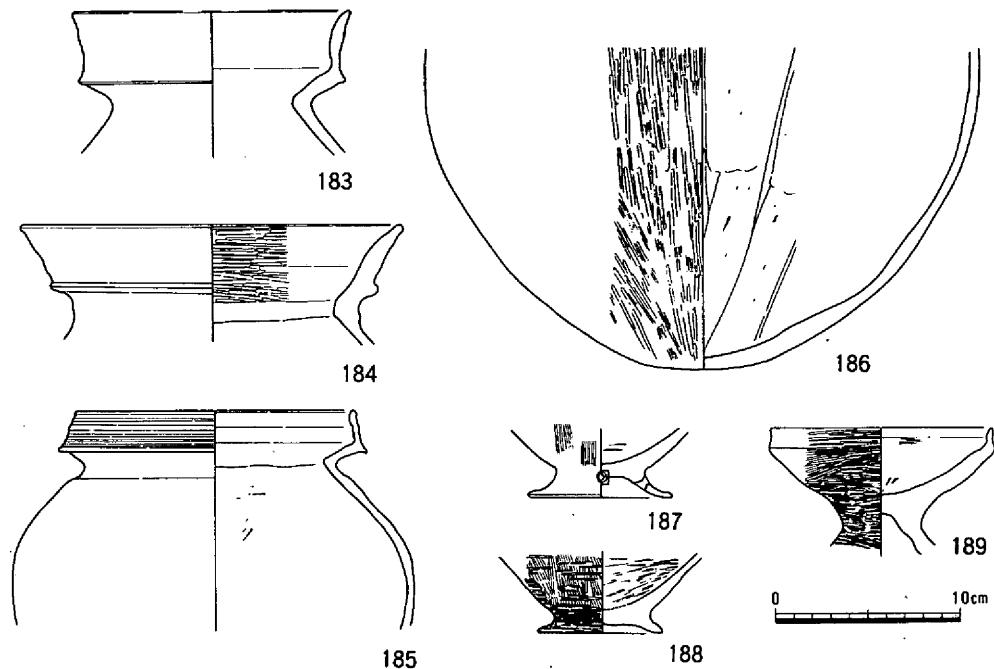
第184図 土壙4 (1/30)

#### 土壙4

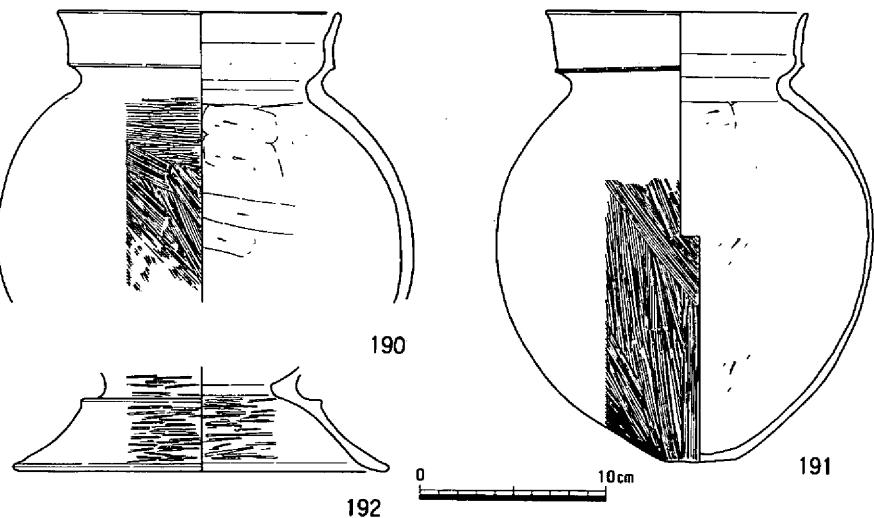
堅穴住居5と重複した土壙の一基で、土壙3の東側に接するように位置する貯蔵用の土壙である。平面形は、上面、底面ともほぼ同形で楕円形を呈す。規模は、上面で長径1.65m×短径1.32m、底面で長径1.54m×短径1.36m、深さ1.05mを測る。断面は、袋状をなしほぼ水平な底面である。

埋土は、上、下の2層に大別可能で、上層は黒色土を主体とし、下層では黄色の地山ブロックの混入が顕著な特色を示す。出土遺物は、掘り方の西側壁ぎわの上層から甕形土器が出土している。

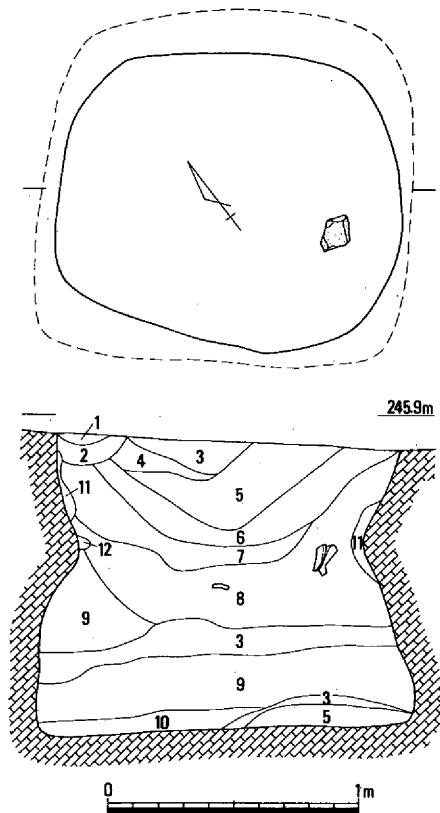
時期は、堅穴住居との切り合いや出土遺物から弥生時代終末期である。



第185図 土壌3出土遺物

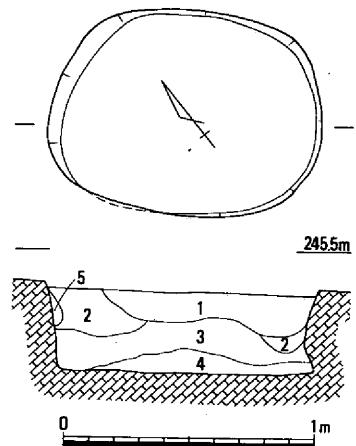


第186図 土壌4出土遺物



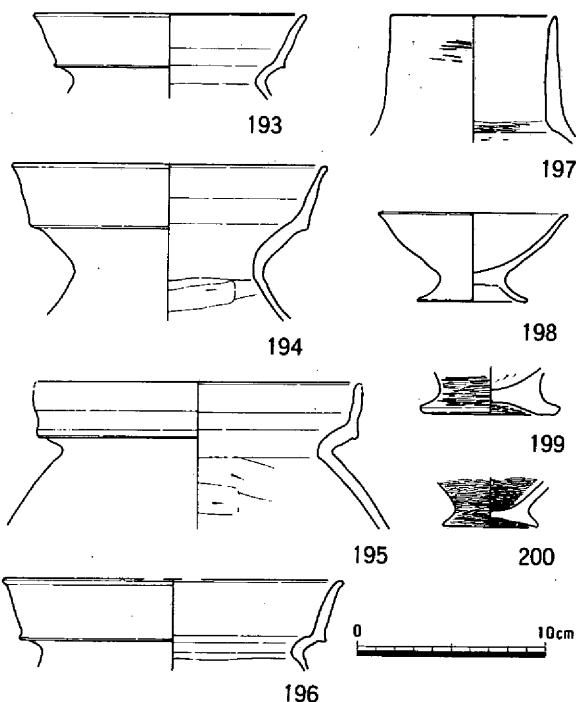
1. 黒灰～  
暗茶色弱粘質土
2. 茶灰色土
3. 黑灰色土
4. 暗茶色土
5. 暗茶灰色土
6. 暗茶色弱粘質土
7. 暗茶色土
8. 暗茶色土  
(土器多く含)
9. 暗茶褐色土
10. 暗茶褐色粘質土
11. 暗黄褐色土
12. 黄褐色土

第187図 土壌6 (1/30)

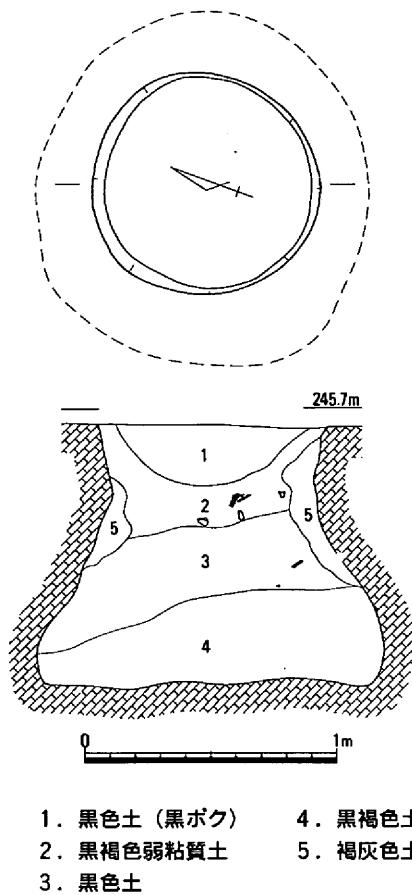


1. 暗灰褐色土
2. 黒色土
3. 暗茶色弱粘質土
4. 黒色土 (地山粒含)
5. よごれた黄褐色土

第188図 土壌7 (1/30)



第189図 土壌6 出土遺物



第190図 土壌 8 (1/30)

**土壌 6**

第1調査区北半の建物3の北側に位置する貯蔵用の土壌である。平面形は、上面及び底面とも隅丸方形を意識した掘り方をなす。規模は、上面が長辺1.38m×短辺1.21m、底面が長辺1.5m×短辺1.45m、深さ1.25mを測る。断面は、袋状を呈しほぼ水平な底面をなす。

埋土は、上、下層に大きく分層ができ、このうち10層以下の下層では水平な堆積をなし、上層ではレンズ状の堆積をしている。第8、9層には比較的多くの遺物を含んでいる。時期は、埋土中の遺物などから弥生時代終末期である。

**土壌 7**

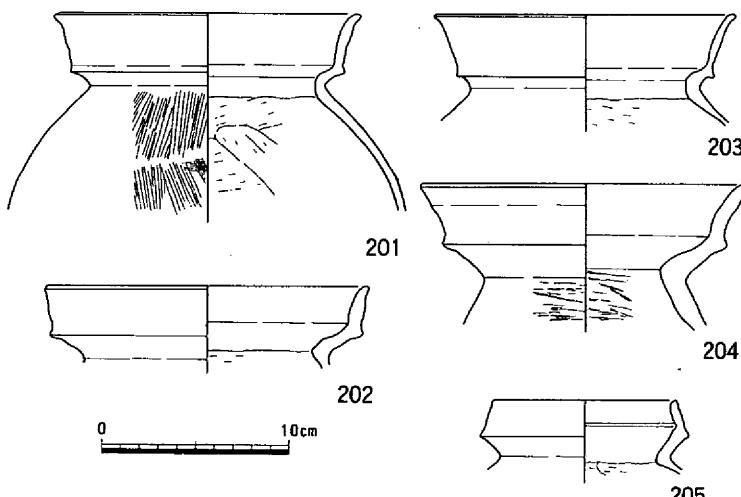
第1調査区の北半に位置する。平面規模は、橢円形に近い形状を呈し長径1.1m×短径85cm、深さ35cmを測る。掘り方断面は、ほぼ垂直に近く、水平な底面をなす。

土壌内埋土は、下層の3、4層が中央にやや盛り上がった堆積をなしている。時期は、埋土中の

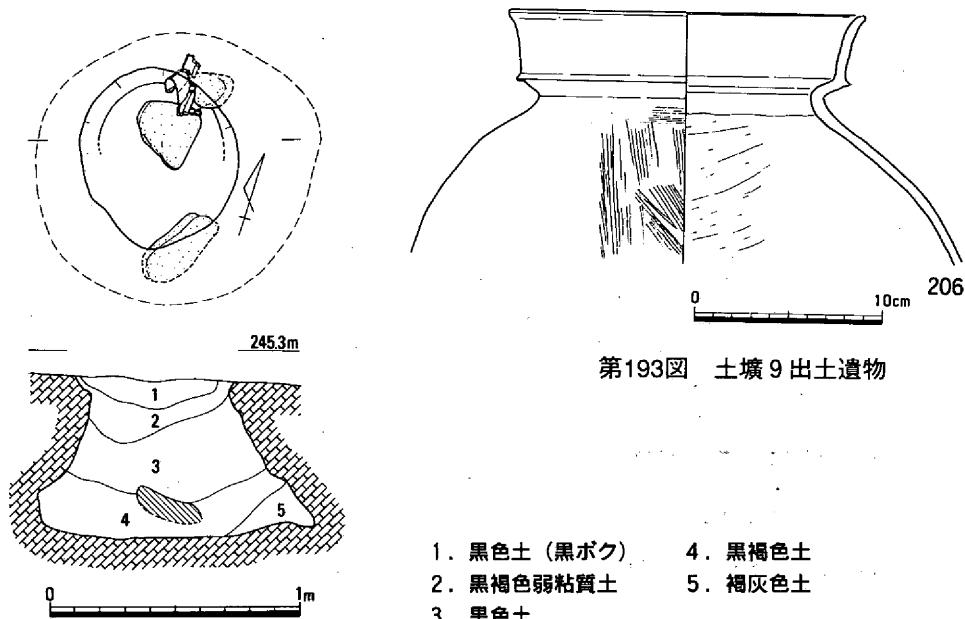
出土遺物から弥生時代終末期であろう。

**土壌 8**

第1調査区北東の建物4の東側に位置する顕著な袋状を呈す貯蔵穴である。規模は、検出面が直径95cm、底面が直径1.35m～1.4mのいずれも円形を呈し、深さ1.1mを測る。掘り方断面は、途中か



第191図 土壌 8 出土遺物



ら著しく袋状を呈し、ほぼ水平な底面をなす。

掘り方内埋土は、上層の1、2層と下層の3、4層に大別可能である。5層は、壁面の崩壊による混じり土である。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期である。

### 土壌9

第1調査区北東の堅穴住居3、4の南側に位置する顕著な袋状貯蔵穴である。規模は、上面ではやや不整形な円形をなし長径73cm×短径63cmを測る。底面では、直径1.17m×1.1mのほぼ円形である。掘り方断面は、袋状を呈し、深さ68cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。

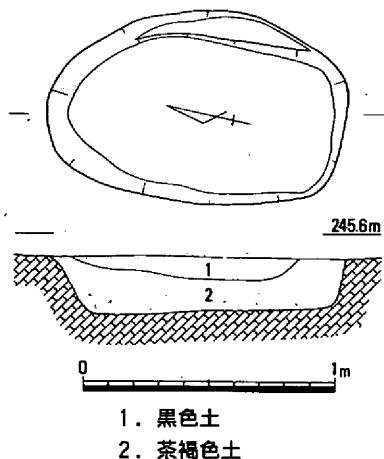
埋土は、黒色もしくは黒褐色を中心とする土層でほぼ5層に分層できるがいずれも自然堆積をなすようである。埋土中には、堅穴住居の台石とみられる偏平な石材が数点出土している。土器は、細片が多く図化不可能なものが多い。時期は、出土遺物から弥生時代終末期であろう。

### 土壌10

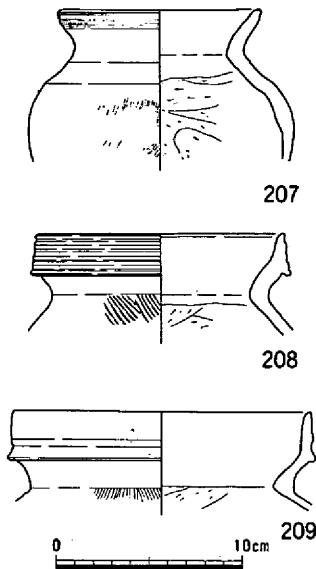
第1調査区ほぼ中央の建物4の西側に接するように位置する土壌である。平面規模は、橢円形に近い形状を呈し長径1.17m×短径79cmを測る。断面は逆台形を呈し深さ23cmを測る。掘り方底面はほぼ水平である。

埋土は、上層の黒色土と下層の茶褐色土の2層に分層可能である。時期は、出土遺物などから弥生時代終末期である。

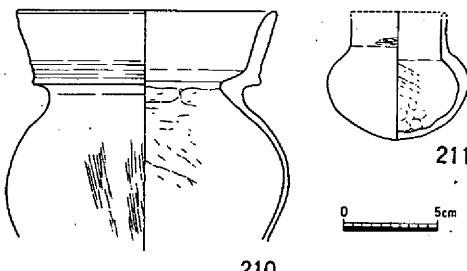
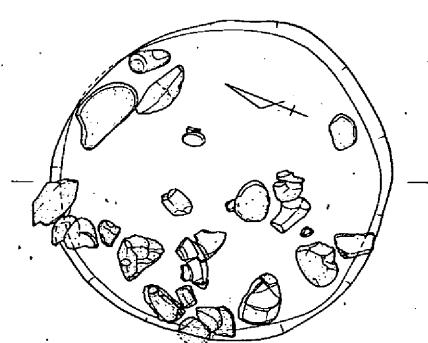
### 土壌11



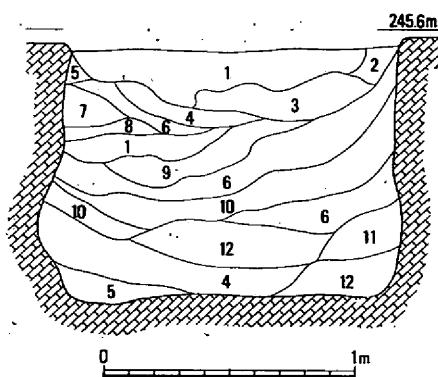
第194図 土壌10 (1/30)



第195図 土壌10出土遺物

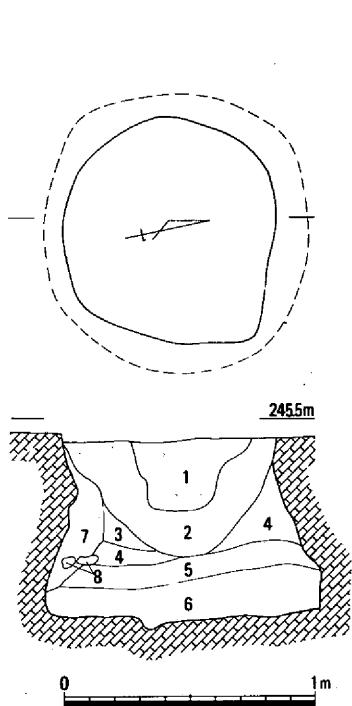


第197図 土壌11出土遺物



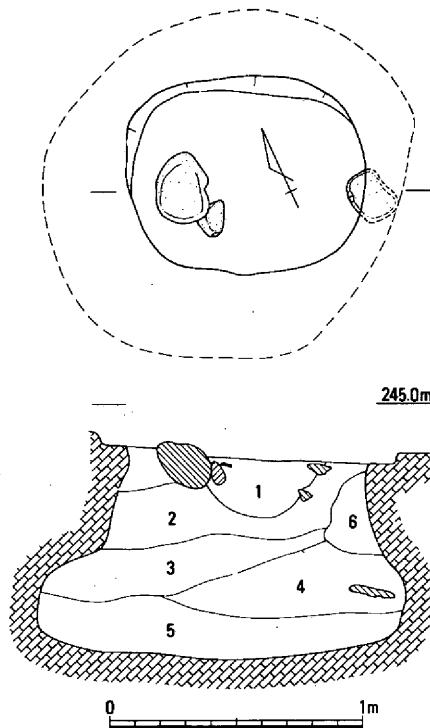
第196図 土壌11 (1/30)

- |               |                    |
|---------------|--------------------|
| 1. にぶい黄褐色弱粘質土 | 7. にぶい黄褐色土         |
| 2. 灰黄褐色砂質土    | 8. 灰黄褐色土           |
| 3. 黑褐色土       | 9. 灰黄褐色土<br>(黒ボク含) |
| 4. 灰黄褐色土      | 10. 棕灰色粘質土         |
| 5. にぶい黄褐色粘質土  | 11. 黑色粘質土          |
| 6. ノ (地山ブロック) | 12. 黑褐色土           |



- |          |              |
|----------|--------------|
| 1. 黒色土   | 5. 暗灰黄色砂質土   |
| 2. 黒褐色土  | 6. 黒褐色土      |
| 3. 暗灰黄色土 | 7. にぶい黄褐色粘質土 |
| 4. 黑褐色土  | 8. 黄橙色土      |

第198図 土壌12 (1/30)



- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1. 黒色土 (土器含) | 4. 黑褐色土       |
| 2. 黒褐色土      | 5. 黑褐色土 (土器含) |
| 3. 黒色土       | 6. 明黄褐色粘質土    |

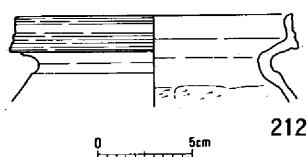
第199図 土壌15 (1/30)

第1調査区北西隅に位置する貯蔵用の土壌である。規模は、上面で長径1.35m×短径1.3m、底面で長径1.24m×短径1.05mの円形を呈す。掘り方断面は、垂直に近く筒状をなし深さ1.05mである。

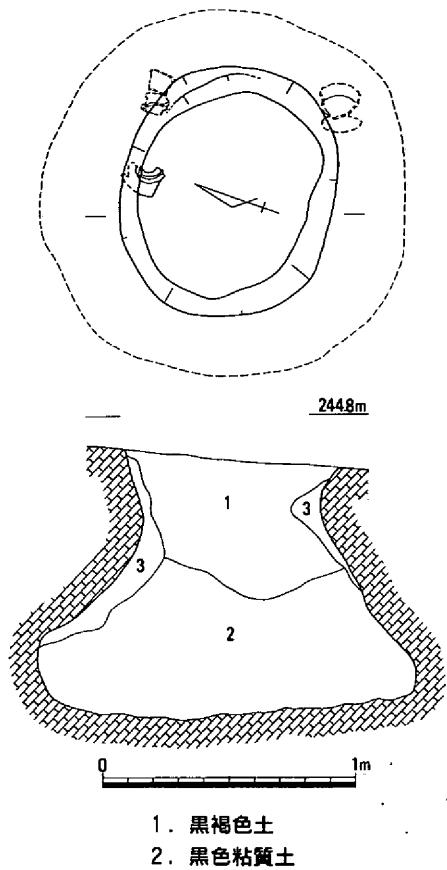
埋土は、黒色土を中心とする土層と黄褐色を中心とする土層の互層の堆積をなし、中央に向かってやや落ち込んだ状況をなしている。時期は、出土遺物に細片が多く確定しがたいが器形の特徴などから弥生時代終末期であろう。

### 土壌12

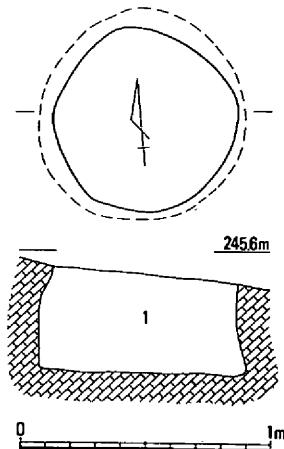
第1調査区の北端に位置する貯蔵用の土壌である。規模は、上面で長径90cm×短径85cmのやや不整形な円形を呈し、底面では長径1.1m×短径1.09mの隅丸方形に近い形状を呈す。掘り方断面は、袋状を呈し深さ78cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。



第200図 土壌15出土遺物



第201図 土壙16 (1／30)



第202図 土壙17 (1／30)

埋土は、上下2層に大別でき、このうち下部2層は水平に近い堆積をなしている。出土遺物が無く時期の確定はしがたいが、埋土や形状等から弥生時代後半か終末のいずれかであろう。

#### 土壙15

第1調査区のほぼ中央の竪穴住居1の東側に位置する貯蔵用土壙である。規模は、上面で

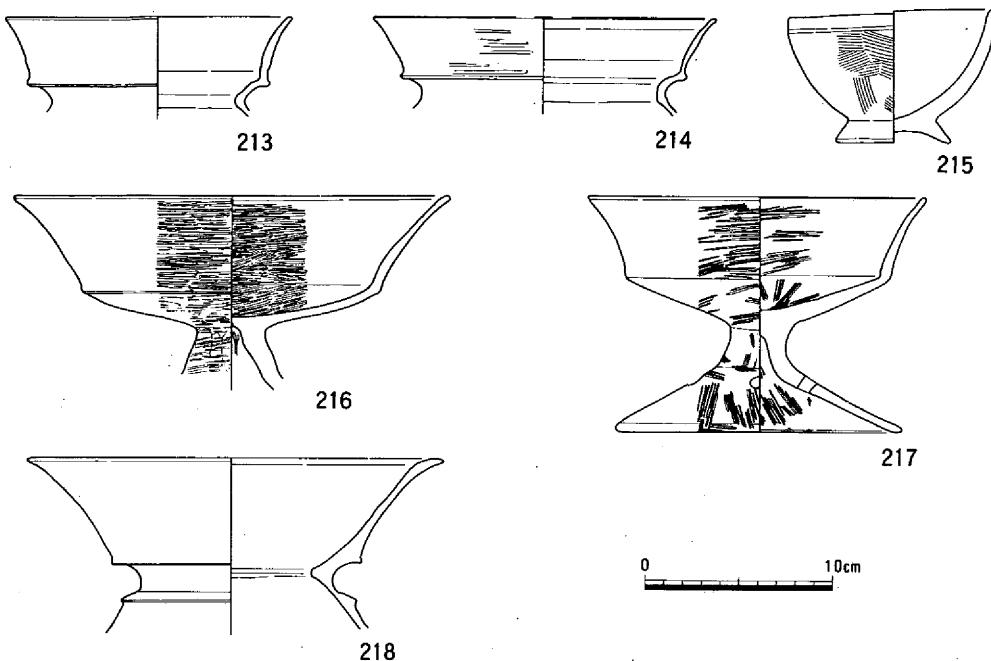
長辺95cm×短辺80cmを測る隅丸台形に近い形状をなし、底面では長径1.53m×短径1.35mの楕円形を呈す。掘り方断面は、顯著な袋状を呈し深さ90cmを測り、底面では周囲が若干高くなっている。

埋土は、6層に分層可能で、上面の第1層には河原石や土器を比較的多く含んでいる。時期は、出土遺物や形状等から弥生時代終末期である。

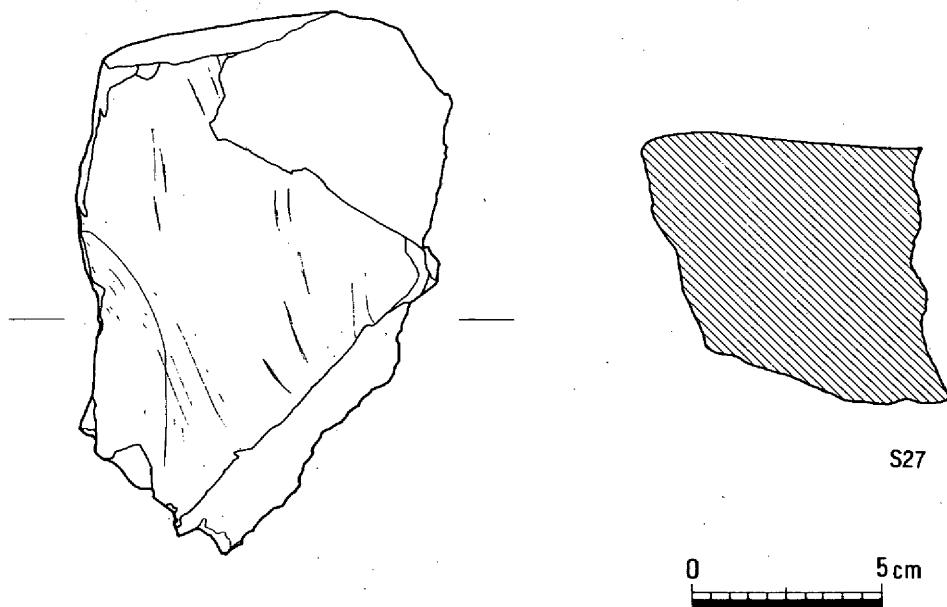
#### 土壙16

第1調査区中央やや南よりに、単独で位置する貯蔵用土壙である。平面形は、検出面で長径1.02m×短径88cmを測る楕円形を呈し、底面では長径1.48m×短径1.46mの円形を呈す。掘り方断面は、顯著な袋状をなし深さ1.12mを測り、ほぼ水平な底面をなす。

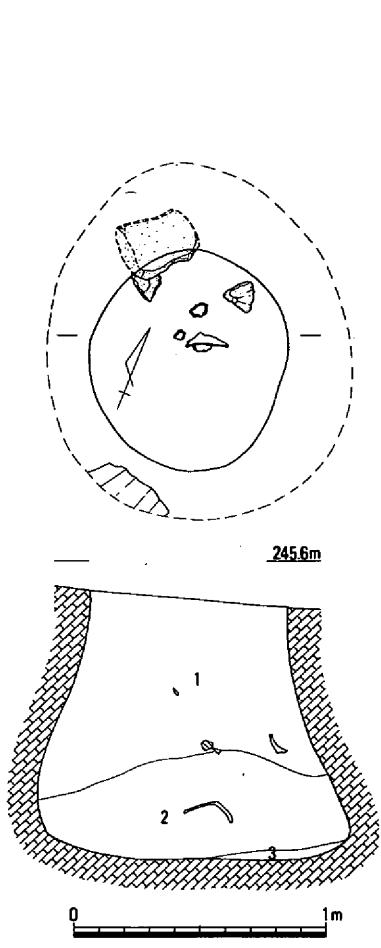
埋土は、いずれも黒ボコの堆積層であるが大きく上下2層に分離できる。出土遺物は、底面近くからやや大形の土器片がまとまって出土している。時期は、底面近くの出土遺物や土壙の形状等から弥生時代終末期である。



第203図 土壌16出土遺物 1

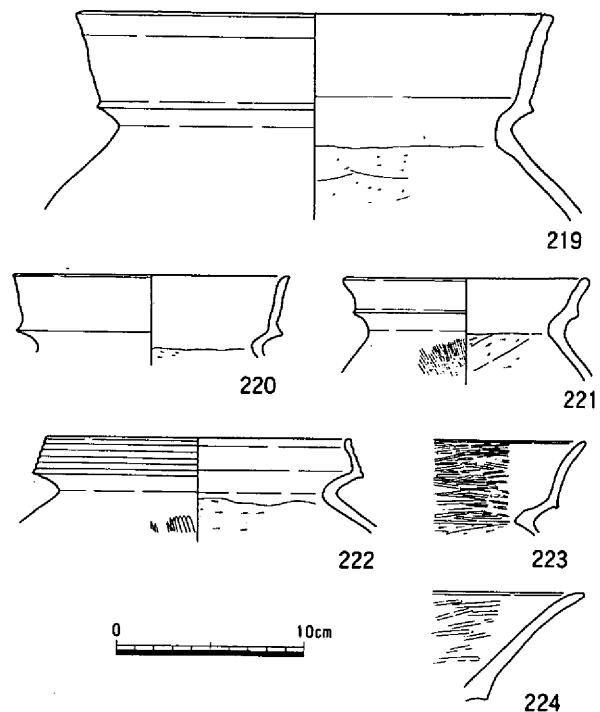


第204図 土壌16出土遺物 2

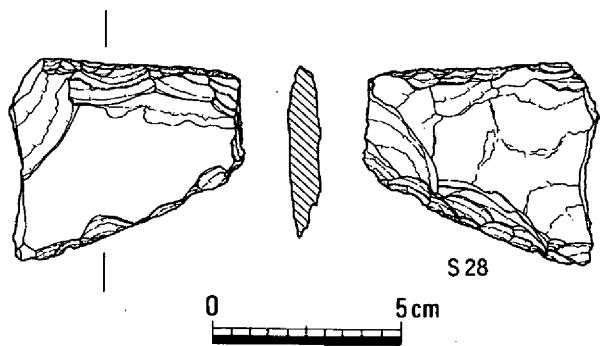


1. 黒褐色土  
2. 黒色粘質土  
3. にぶい黄褐色粘質土

第205図 土壌18 (1/30)



第206図 土壌18出土遺物 1

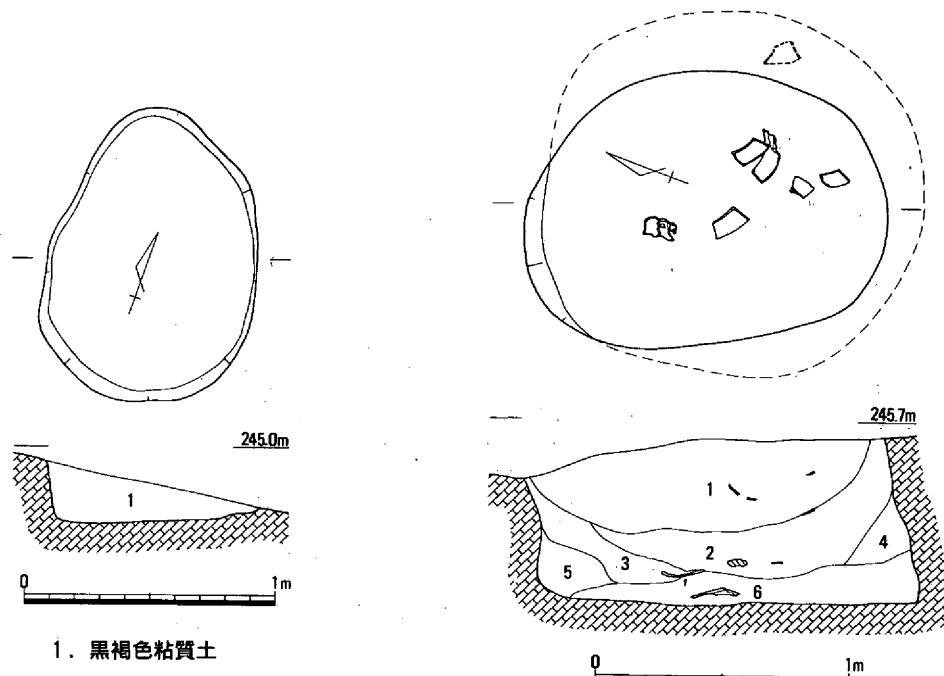


第207図 土壌18出土遺物 2

### 土壤17

第1調査区のほぼ中央で、建物5と重複する位置にあるやや小形の土壌である。平面規模は、上面で長径73cm×短径70cm、底面で長径87cm×短径80cmを測るほぼ円形に近い形状を呈す。掘り方断面は、底面が若干広い台形状をなし、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、黒褐色粘質土の単一層である。時期は、出土遺物に細片が多く確定し難いが器形の特徴等から弥生時代終末期であろう。



第208図 土壙19 (1/30)

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1. 黒褐色土      | 4. にぶい黄褐色弱粘質土 |
| 2. 暗褐色弱粘質土   | 5. にぶい黄橙色粘質土  |
| 3. にぶい黄褐色粘質土 | 6. 黒褐色粘質土     |

第209図 土壙21 (1/30)



### 土壙18

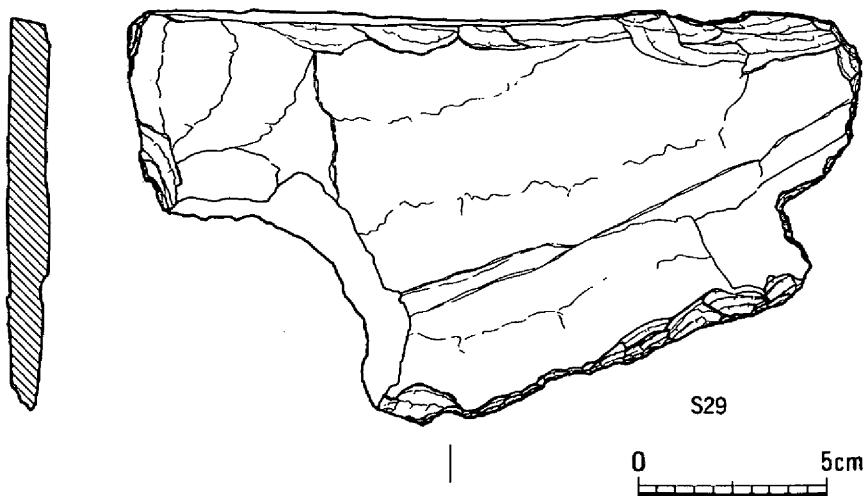
第1調査区中央の建物5の東側に、土壙17と並列して位置する貯蔵用土壙である。規模は、上面、底面とも円形を呈し、上面で長径89cm×短径79cm、底面で長径1.41m×短径1.23mを測る。掘り方断面は、明瞭な袋状を呈し、底面では周囲が若干高くなっている。なお底面の南側に、一部露岩の掘り残しが見られる。

埋土は、1層と2、3層に大別可能で、2層の黒色粘質土は中央がやや盛り上がった堆積をなしている。遺物は、埋土の下層から偏平な石材とやや大型の土器片が比較的まとまって出土している。時期は、出土遺物から弥生時代終末期である。

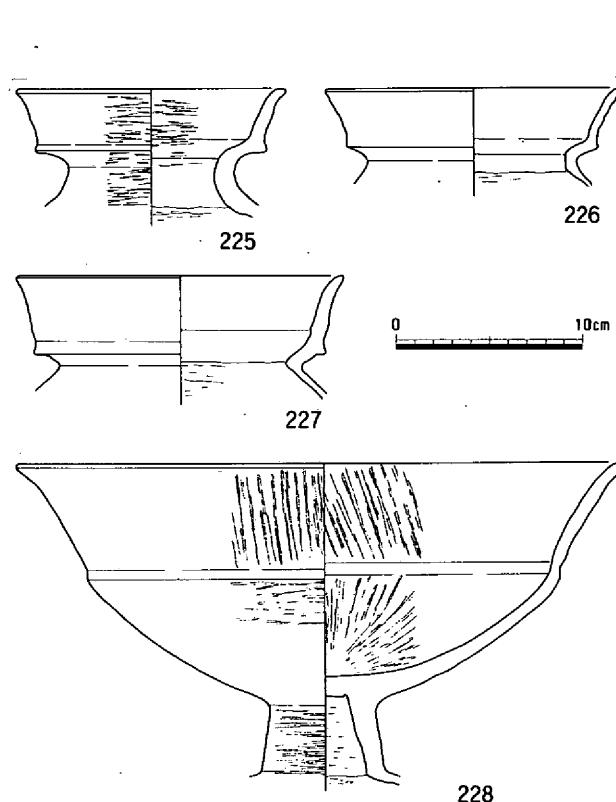
### 土壙19

第1調査区南端の南東斜面に位置する。土壙東側は、斜面に位置するため削平を受け掘り方の残りが悪い。現存規模は、長径1.17m×短径85cm、深さ25cmを測る不整形な梢円形を呈す。底面は、ほぼ水平をなす。

埋土は、黒褐色の粘質土の単一埋土である。時期は、出土遺物に細片が多いが器形の特徴等から弥生時代終末期であろう。



第210図 土壌21出土遺物 1

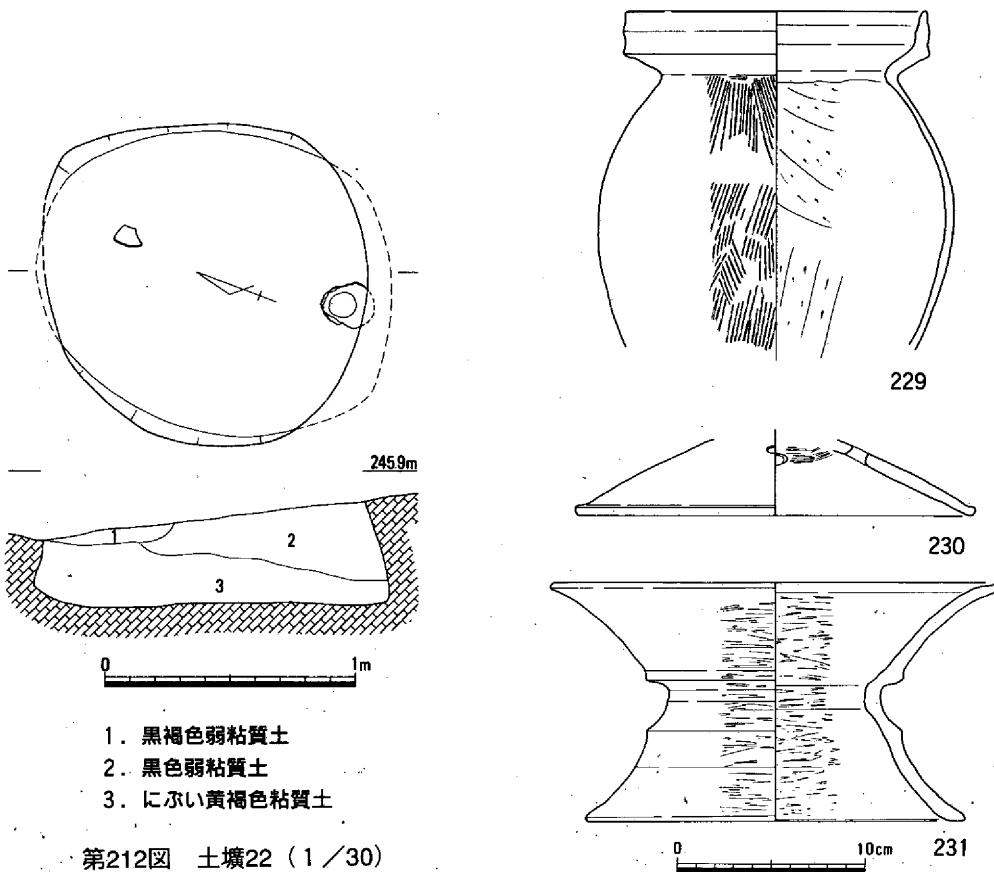


第211図 土壌21出土遺物 2

#### 土壌21

第1調査区南端の尾根鞍部に位置し、縄文時代の落とし穴である土壌71を切り込んでいる。規模は、上面、底面ともほぼ円形を呈し、上面で長径 $1.45\text{m} \times$ 短径 $1.12\text{m}$ 、底面で長径 $1.5\text{m} \times$ 短径 $1.47\text{m}$ 、深さ $67\text{cm}$ を測る。掘り方断面は、袋状を呈し、ほぼ水平な底面である。

埋土は、最下層の黒褐色の粘質土が水平な堆積をなしている。出土遺物は、高杯や体部の肩口に櫛描波状文を施す甕等が出土している。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期である。



第213図 土壌22出土遺物

### 土壌22

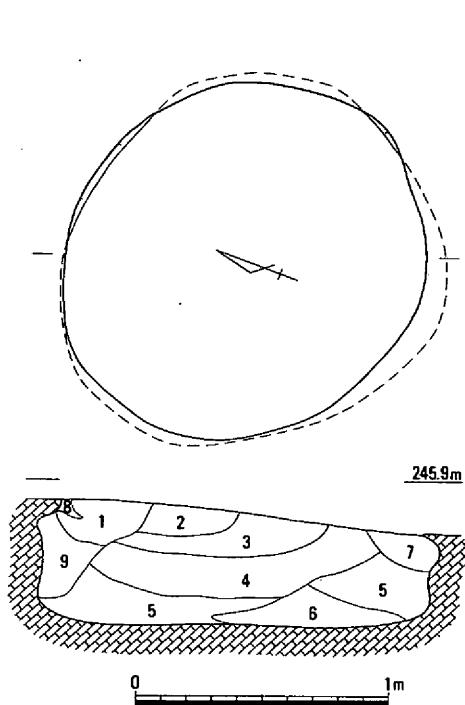
第1調査区南端の鞍部に位置する貯蔵用土壌群のうちの一基である。規模は、上面で長径 $1.44\text{m} \times \text{短径 } 1.33\text{m}$ 、底面で長径 $1.48\text{m} \times \text{短径 } 1.23\text{m}$ を測り、ほぼ円形を呈す。掘り方断面は、袋状を呈し深さ42cmを測り、水平な底面をなす。

埋土は、3層に分離可能であるが、いずれも黒色の粘質土である。出土遺物は、第2層中から甕の口縁部が出土している。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期である。

### 土壌23

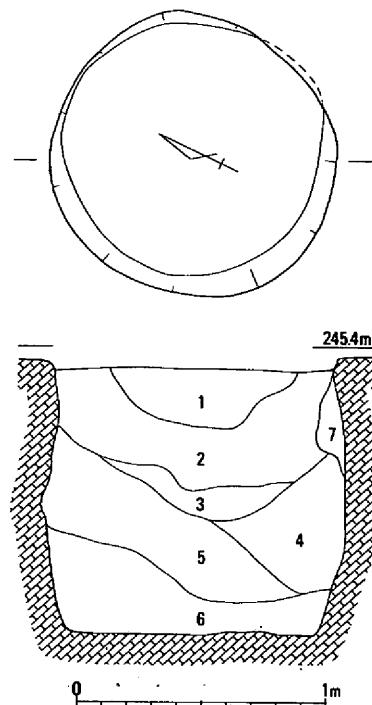
第1調査区南端の土壌22の東側に位置する。規模は、ほぼ円形を呈し、上面で長径 $1.54\text{m} \times \text{短径 } 1.37\text{m}$ 、底面で長径 $1.62\text{m} \times \text{短径 } 1.43\text{m}$ を測る。掘り方断面は、ほぼ垂直で、平坦な底面をなす。

埋土は、上層にあたる1~3層に焼土を含んでいる。時期は、出土遺物に細片が多く確定し難いが埋土や土器の器形特徴から弥生時代終末期であろう。



- |              |             |
|--------------|-------------|
| 1. 灰黄褐色土     | 6. 黑褐色土     |
| 2. にぶい黄褐色粘質土 | 7. 灰黄褐色粘質土  |
| 3. 橙色粘質土     | 8. 明黄褐色粘質土  |
| 4. 黑褐色粘質土    | 9. 灰黄褐色弱粘質土 |
| 5. にぶい黄褐色粘質土 |             |

第214図 土壌23 (1/30)



- |            |                        |
|------------|------------------------|
| 1. 黑褐色土    | 5. 灰黄褐色粘質土<br>(地山プロック) |
| 2. 黑褐色土    | 6. 黑色粘質土               |
| 3. 褐灰色弱粘質土 | 7. 黑色～にぶい<br>黄褐色粘質土    |
| 4. 黑色土     |                        |

第215図 土壌24 (1/30)

なお、当土壌の北端は風倒木痕を切り込んで設けている。

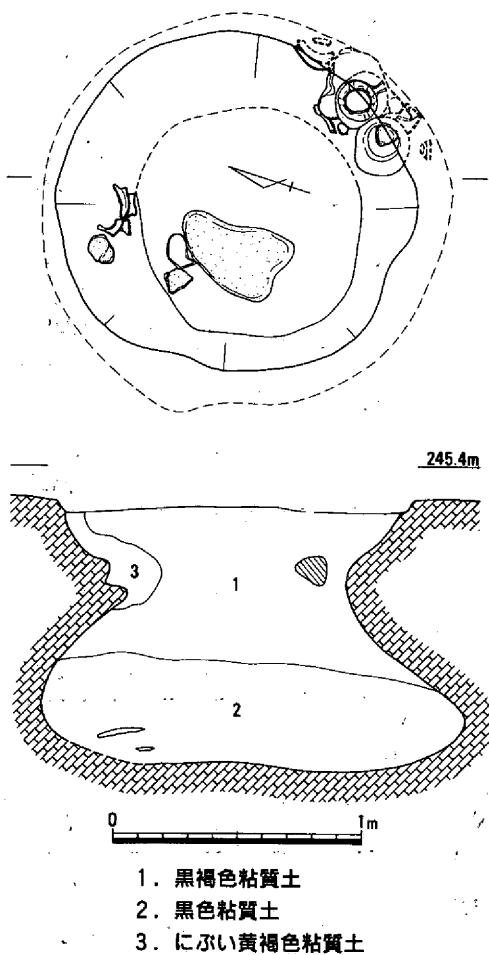
#### 土壤24

第2調査区南端の建物6の南側に位置する。平面規模は、円形を呈し上面で長径1.15m×短径1.08m、底面で長径1.03m×短径1.02m、深さ1.1mを測る。掘り方断面は、筒状を呈し、水平な底面をなす。埋土は、7層に分層できるもののいずれも自然堆積によるものと思われる。

時期は、出土遺物に細片が多いが器形の特徴や土壤の形状等から、弥生時代終末期と思われる。

#### 土壤25

第2調査区の南東隅に土壤26と隣接して位置する貯蔵用土壤である。規模は、上面で長径95cm×短径88cm、底面で長径1.6m×短径1.58mを測り、ともにほぼ円形である。掘り方断面は、顕著な袋状を呈し、深さ1.07mを測る。底面は、ほぼ水平を呈すが、周辺部が若干盛り上がって



第216図 土壙25 (1/30)

である。平面規模は、上面で長径94cm×短径85cmの円形をなし、底面で長径1.27m×短径1.07mの隅丸方形をなし、深さ38cmを測る。掘り方断面は、袋状を呈し、ほぼ水平な底面をなす。埋土は、上下2層に分層でき、第2層には多くの炭化物と20cm大の河原石を含んでいる。掲載した出土遺物のうち(247)は、土壙26内出土の土器片と接合する。時期は、出土遺物や土壙の形状から弥生時代終末期と考えられる。

#### 土壙28

第2調査区南半の堅穴住居7の東側に土壙29、30とともに並列している3基のうちの1基である。平面形は、上面でほぼ円形を呈し長径1.20m×短径1.18m、底面では隅丸方形の形状をなし長辺1.2m×短辺1.1mを測る。掘り方断面は、筒状をなし深さ1.1mを測り、ほぼ水平な底面をなす。

いる。

埋土は、上下2層に大別でき、下層の黒色粘質土から比較的多くの土器片が出土している。なお、土壙26と出土遺物が接合するものがある。時期は、下層の出土遺物等から弥生時代終末期である。

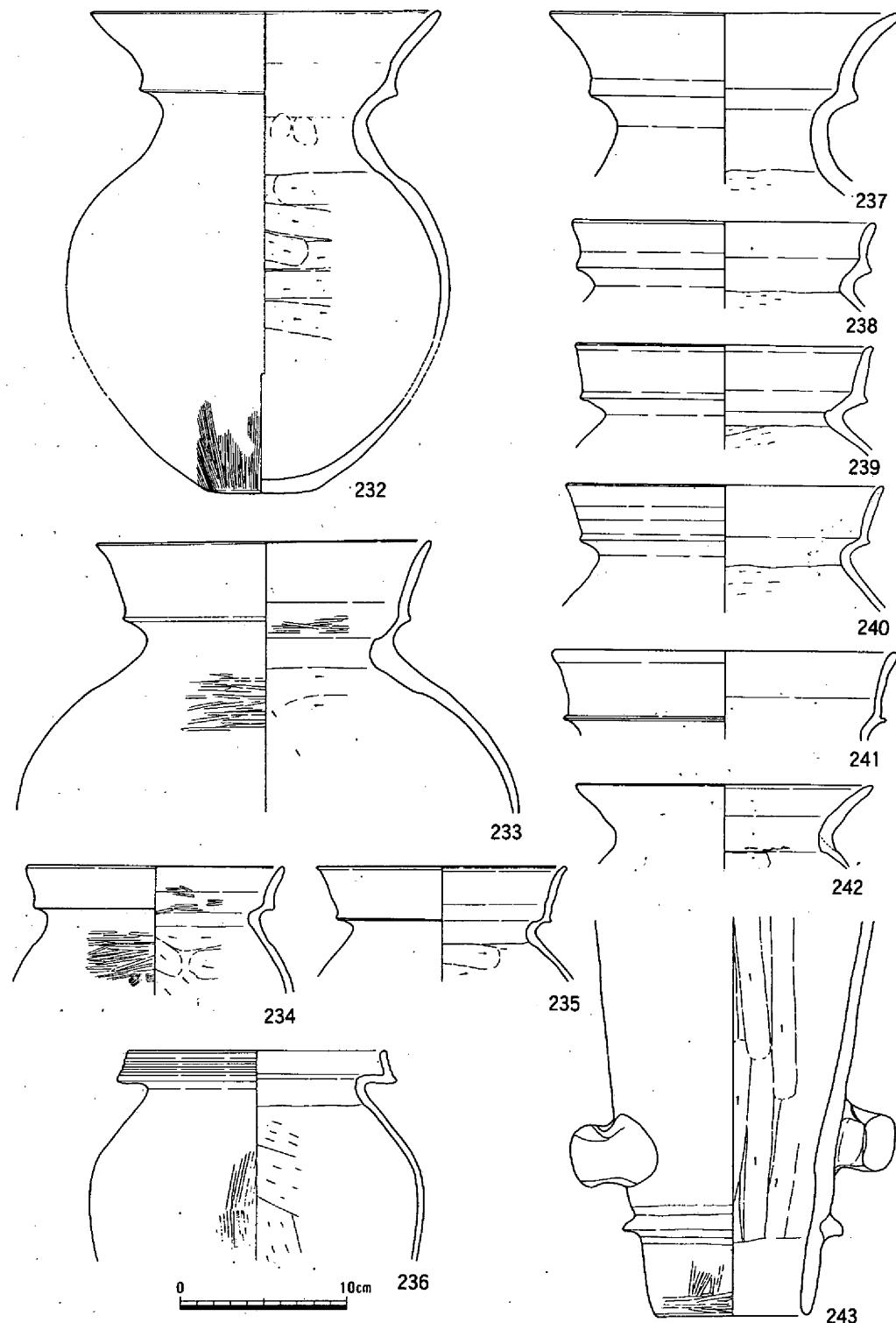
#### 土壙26

第2調査区の南東隅に土壙25と隣接し、東側に位置する貯蔵用土壙である。規模は、上面で長径1.05m×短径1.0mのやや不整形をなし、底面で長径1.65m×短径1.55mの円形を呈している。掘り方断面は、顕著な袋状を呈し深さ1.02mを測り、ほぼ水平な底面をなす。

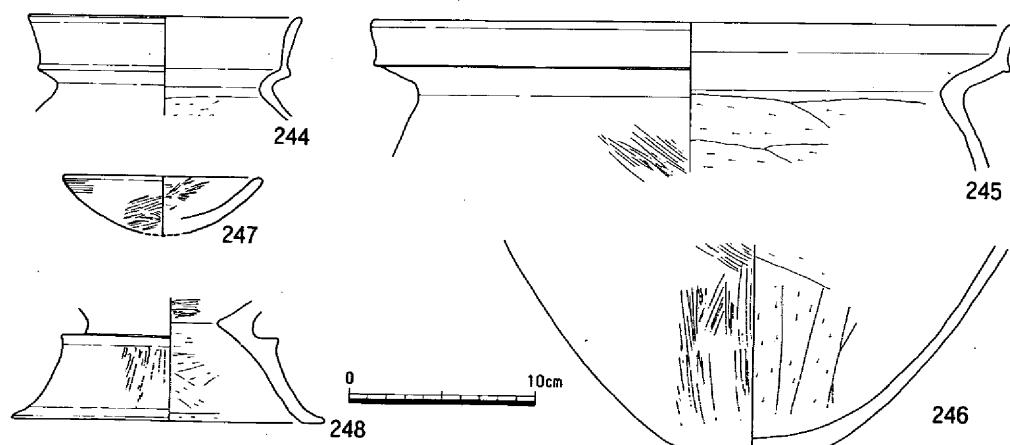
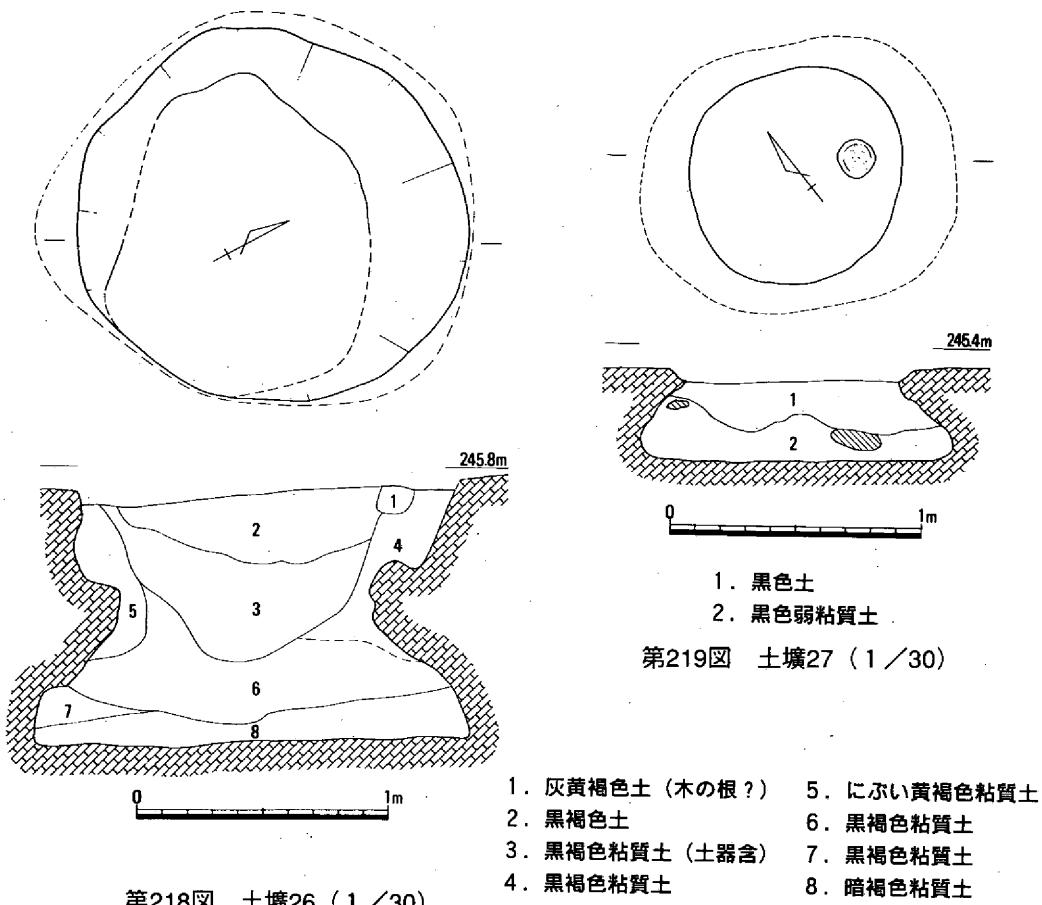
埋土は、下層の暗褐色粘質土の水平な堆積とそれ以外の堆積に大別できる。出土遺物に土壙25と接合するものがある。時期は、土壙25と同様に弥生時代の終末期である。

#### 土壙27

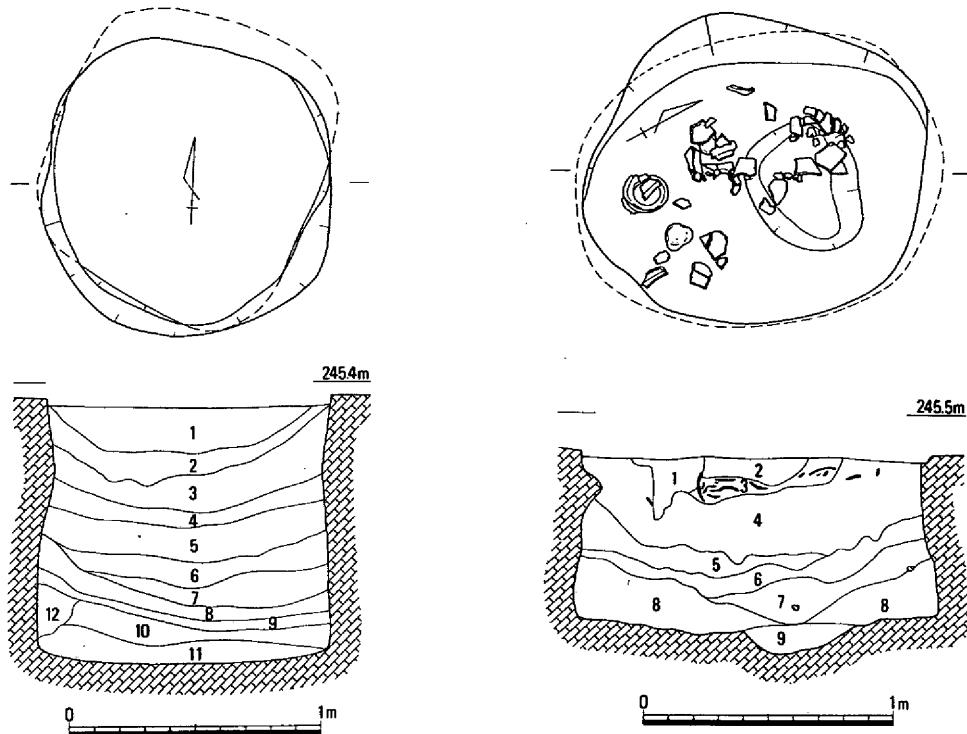
第2調査区東端に位置する貯蔵用土壙



第217図 土壌25出土遺物



第220図 土壌26・27出土遺物



1. 灰黄褐色粘質土 7. 黒褐色土  
 2. 黒色粘質土 8. 黒褐色土  
 3. 黒褐色粘質土 9. 明黄褐色～灰黄褐色粘質土  
 4. 黒褐色弱粘質土 10. 黒色粘質土  
 5. 黒褐色粘質土 11. 黒褐色粘質土  
 6. 黒色弱粘質土 12. にぶい黄橙色粘質土

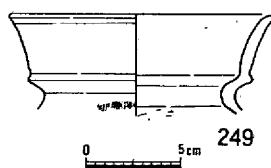
第221図 土壌28 (1/30)

1. 暗褐色土 6. 黒色粘質土  
 2. にぶい黄橙色粘質土 7. 黒褐色粘質土  
 3. 褐灰色土 8. 暗褐色粘質土  
 4. にぶい黄褐色弱粘質土 9. 暗黄褐色粘質土,  
 5. 黒色粘質土 黒色粘質土混り

第222図 土壌29 (1/30)

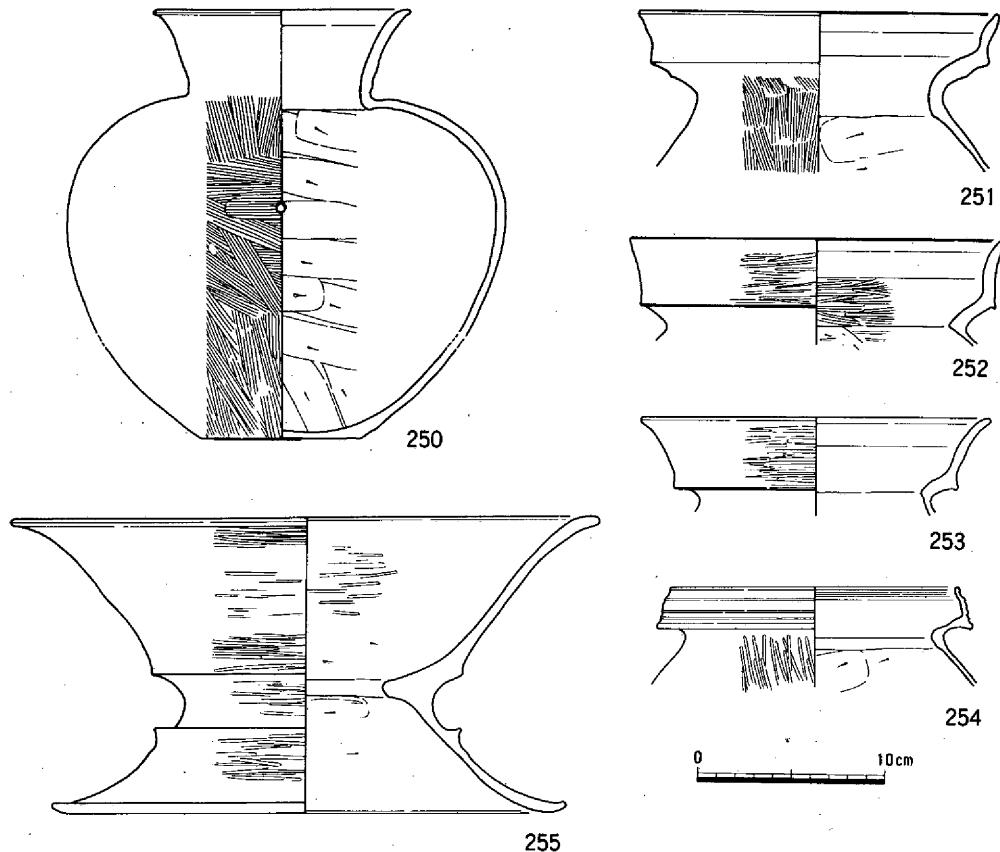
埋土は、12層に細分が可能であるがいずれも人為的な堆積の可能性が強い。特に、第5層の黒褐色粘質土は、大変よくしまっており突き固めたようである。時期は、掲載した出土遺物や土壤の形状等から弥生時代終末期であろう。

土壤29



第223図 土壌28出土遺物

第2調査区の南半、竪穴住居7の北東に3基並列した貯蔵用土壌の中央の一基である。平面規模は、上面で長径1.3



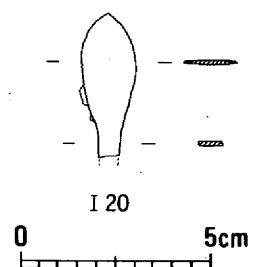
第224図 土壌29出土遺物 1

m × 短径1.25mのやや不整形な方形をなし、底面で長辺1.4m × 短辺1.17mの隅丸方形を呈す。掘り方断面は、若干袋状をなし、深さ75cmである。

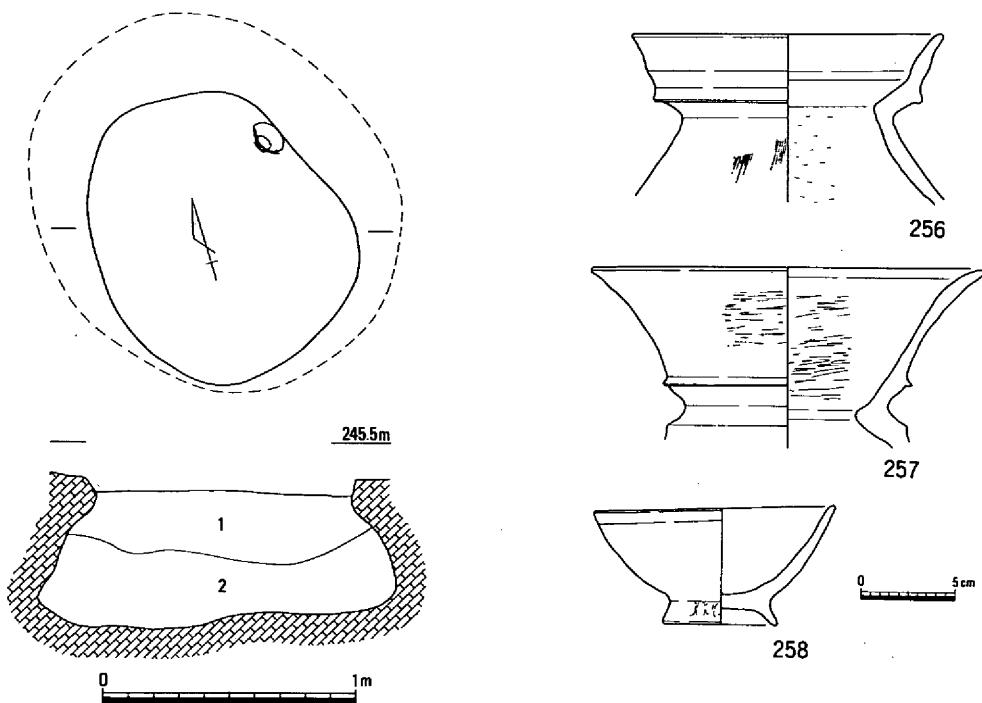
埋土は、中央がややくぼんだ堆積の状況をなしている。出土遺物は、第3層上面に廃棄された状態で多量の土器片が認められた。平面図に記載の出土遺物は、この上層面での出土状況である。時期は、掲載した土器等から弥生時代の終末期である。

#### 土壤30

第2調査区南半の堅穴住居7の東側に土壤28、29とともに並列して位置する貯蔵用土壤である。平面形は、上面で不整円形を呈し長径1.17m × 短径1.0m、底面では円形をなし長径1.55m × 短径1.4mを測る。掘り方断面は、袋状をなし、深さ60cmを測り、若干凹凸のある底面をなす。



第225図 土壌29出土遺物 2



第226図 土壌30 (1/30)

1. 黒褐色土
2. 黒色粘質土

第227図 土壌30出土遺物 1

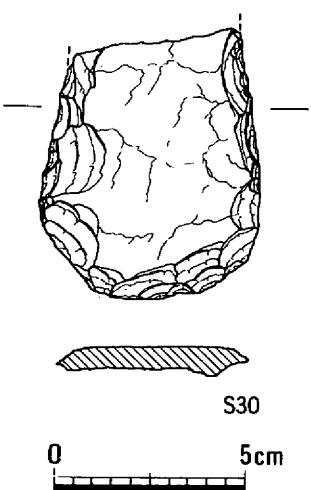
埋土は、上層の黒褐色土と下層の土器を含む黑色粘質土に分離できる。時期は、掲載した土器や土壌の形状等から弥生時代終末期であろう。

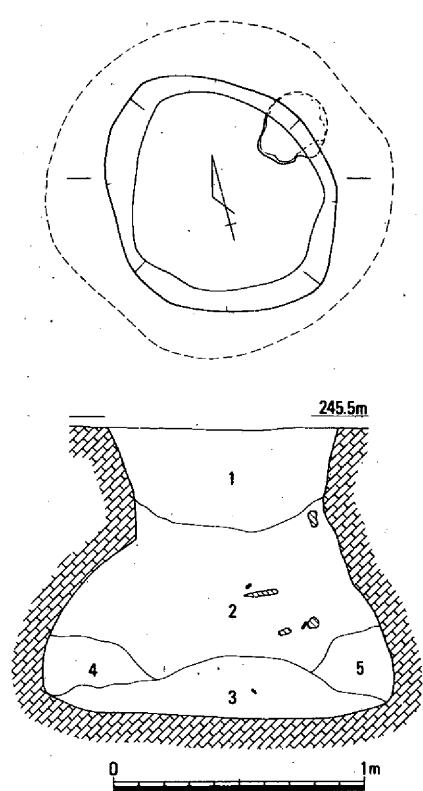
#### 土壤31

第2調査区南西端の竪穴住居7、8の間に位置する貯蔵用土壌である。平面規模は、上面で不整円形の形状をなし長径1.06m×短径92cmを測り、底面では隅丸方形に近い形状を呈し長径1.34m×短径1.32mを測る。掘り方断面は、顕著な袋状を呈し、深さ120cmを測る。底面は、周囲が若干盛り上がっている。

埋土は、黒色～黒褐色を呈し5層に分離可能である。出土遺物は、第2、3層の黒色土中に比較的多く、山陰系の特徴を持つ瓶形土器もみられる。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期であろう。

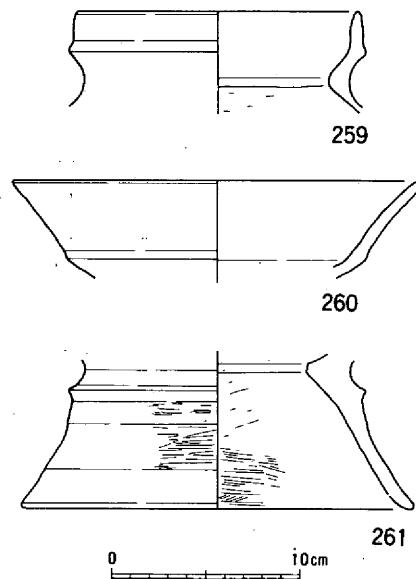
第228図 土壌30出土遺物 2



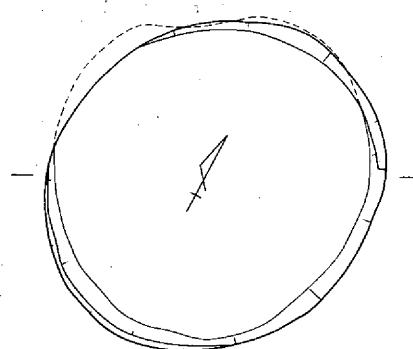


- 1. 黒褐色土
- 2. 黒色土
- 3. 黒色弱粘質土
- 4. 黒褐色土
- 5. 黑褐色土

第229図 土壌31 (1/30)

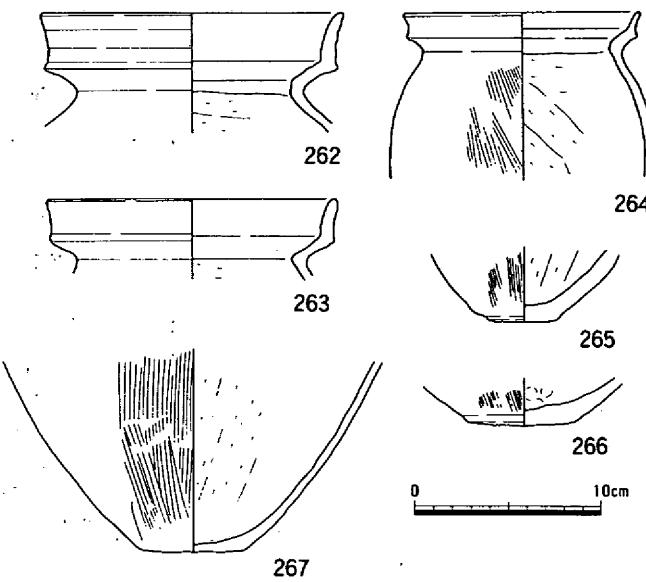


第230図 土壌31出土遺物

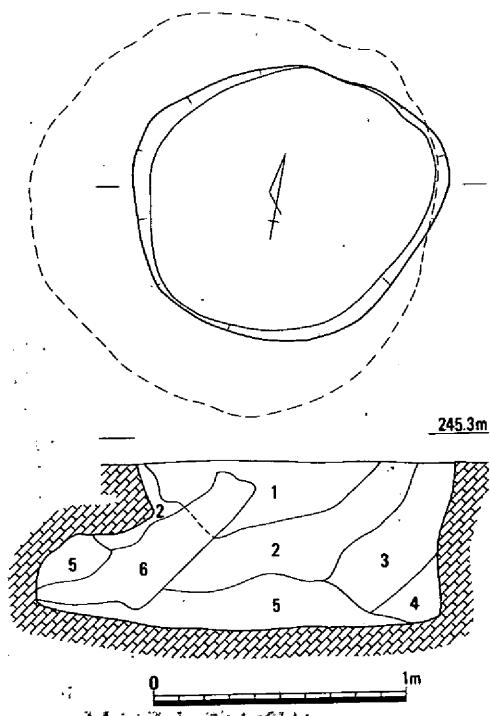


- 1. 黒褐色土
- 2. 黒褐色粘質土
- 3. 黑褐色粘質土
- 4. にぶい黄褐色粘質土
- 5. 褐色粘質土
- 6. 灰黃褐色土
- 7. 黑褐色土
- 8. 灰黃褐色土

第231図 土壌32 (1/30)



第232図 土壌32出土遺物



第233図 土壌33 (1/30)

## 土壌32

第2調査区北側の豊穴  
住居7と8の間に位置している。平面規模は、上面、底面とも円形を呈し、上面で長径1.42m×短径1.25m、底面で長径1.35m×短径1.26mを測る。掘り方断面は、筒状をなし深さ1.09mを測り、水平な底面をなす。

埋土は、下層の7、8層が水平な堆積をなし、1、2層ではレンズ状の堆積をなす。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期であろう。

## 土壌33

第2調査区南東端に位置する貯蔵用土壌である。平面規模は、上面で不整円形をなし、長径1.27m×短径1.11m、底面では円形を呈し長径1.66m×短径1.64m、深さ73cmを測る。掘り方断面は、東側の一部を除き大きく袋状を呈し、底面では周囲が若干盛り上がっている。

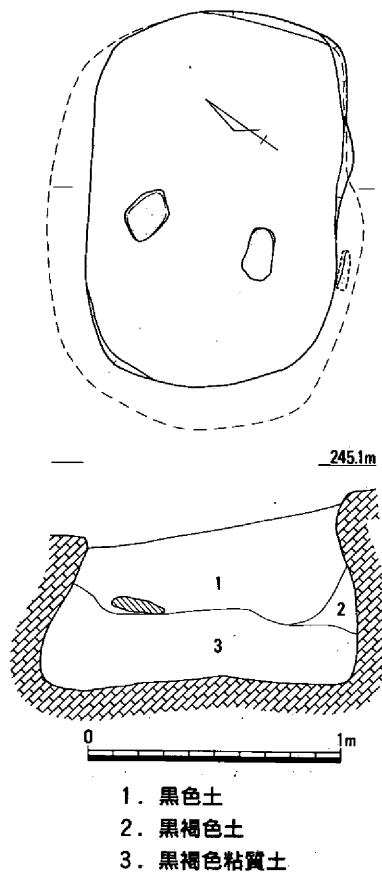
- |          |             |
|----------|-------------|
| 1. 黒褐色土  | 4. 灰黄褐色弱粘質土 |
| 2. 灰黄褐色土 | 5. 灰黄褐色粘質土  |
| 3. 黒色土   | 6. 灰黄褐色土    |

埋土は、断面作成位置に木の根が入り観察しづらかったものの、最下層で水平に近い堆積以外は中央が落ち込んだレンズ状の堆積をなしている。時期は、出土土器が細片のため確定し難いが土壙の形状等から弥生時代後半期のものであろう。

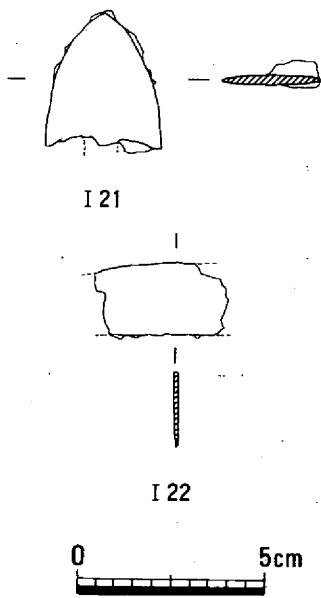
#### 土壙34

第2調査区北端、すなわち当遺跡の最北端の遺構である。平面規模は、上下とも長方形の形状をなし、上面で長辺1.5m×短辺1.0m、下部で長辺1.66m×短辺1.25m、深さ83cmを測る。掘り方断面は、袋状を呈し、ほぼ平坦な底面をなす。

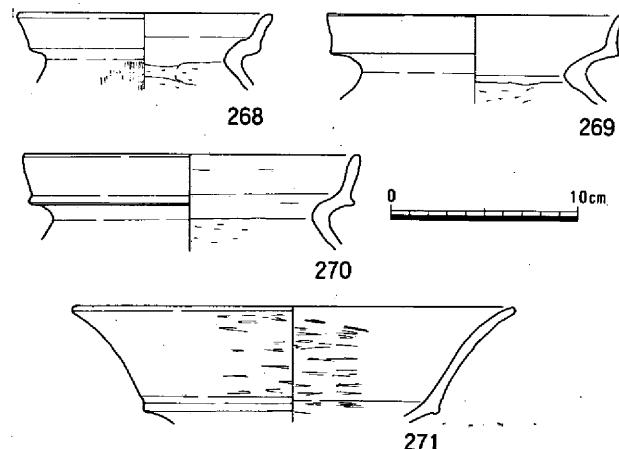
埋土は、上層の1、2層と下層の3層に大別可能である。時期は、出土遺物や土壙の形状等から弥生時代終末期であろう。



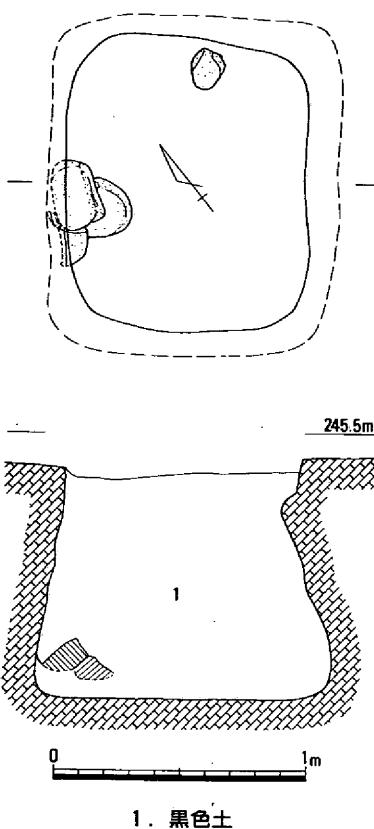
第234図 土壙34 (1/30)



第235図 土壙34出土遺物 1



第236図 土壙34出土遺物 2



第237図 土壌35 (1/30)

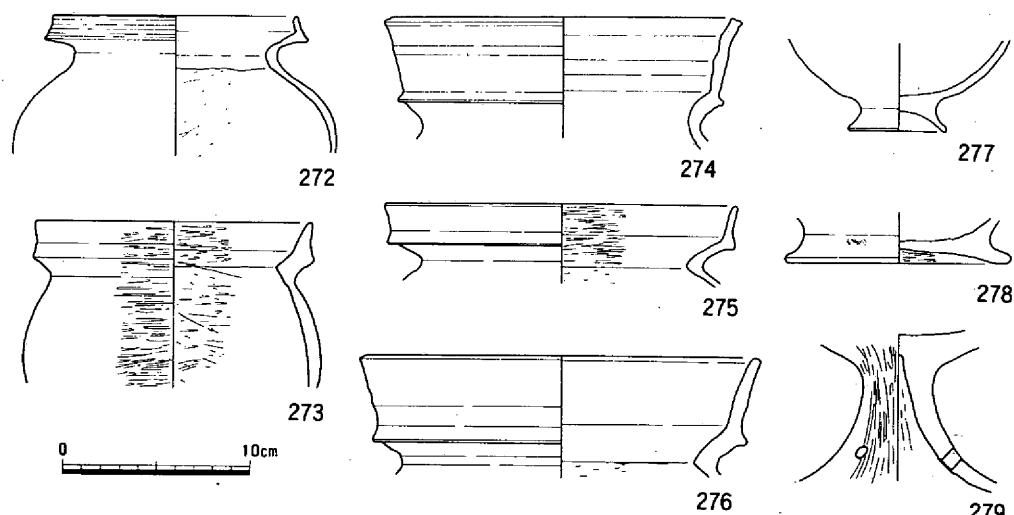
## 土壌35

第2調査区東端に位置する。平面規模は、長方形をなし上面で長辺1.2m×短辺95cm、底面で長辺1.4m×短辺1.18m、深さ98cmを測る。掘り方断面は、袋状を呈し、ほぼ水平な底面をなす。

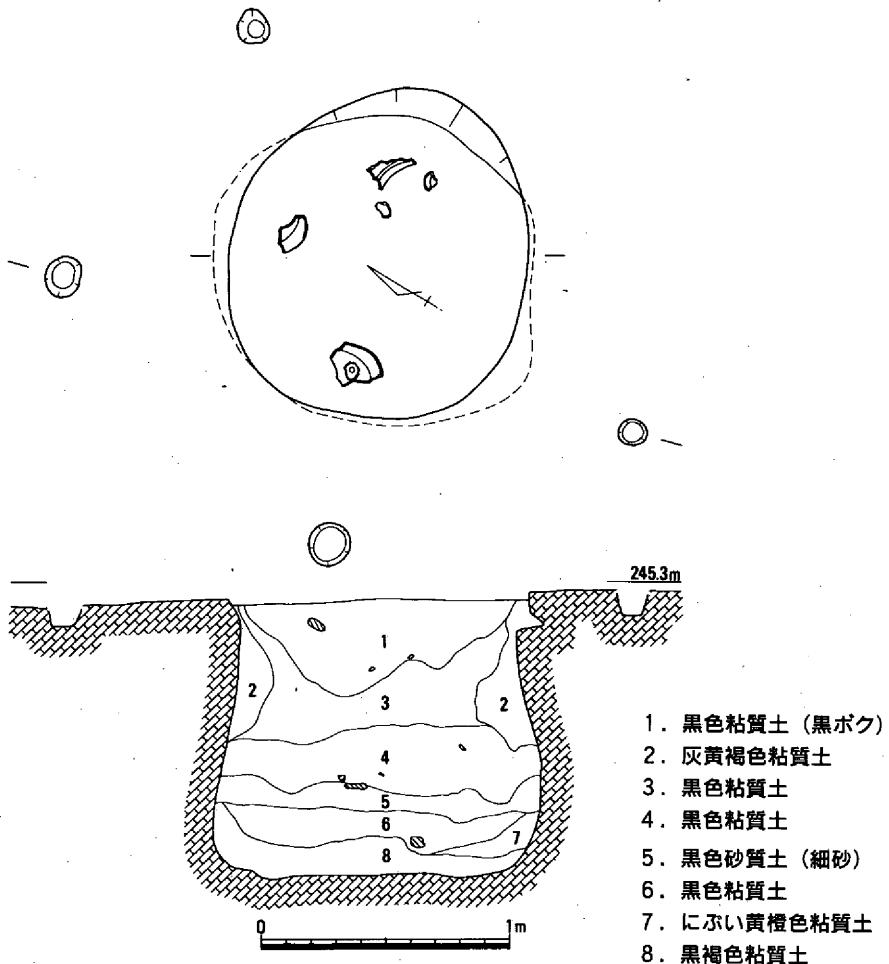
埋土は、黒色の比較的均質な堆積土で、北辺下部に20cm大の礫が集中している。出土遺物のうち体部外面に漆による文様を施したとみられる土器片がある。時期は、出土遺物や土壌の形状から弥生時代終末期と考えられる。

## 土壌36

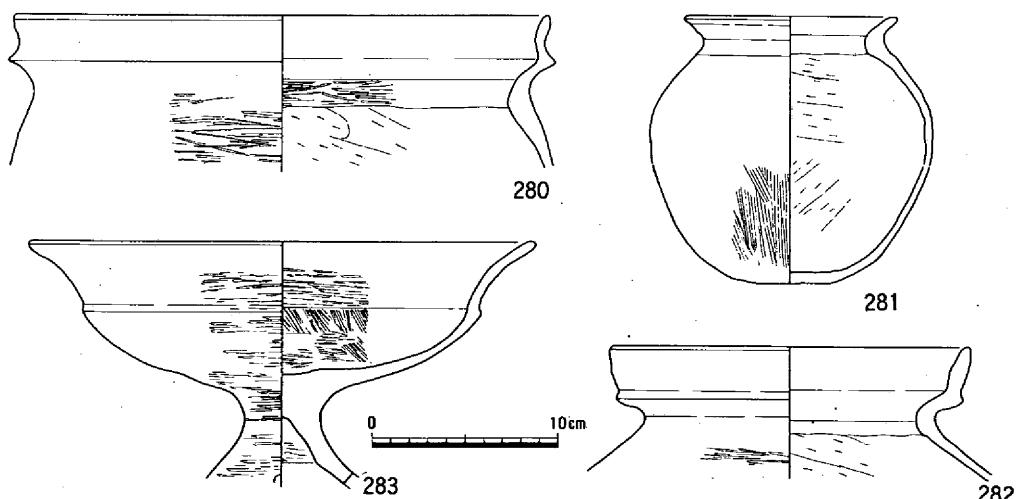
第2調査区中央のやや西より、竪穴住居9の近くに位置する。平面規模は、円形に近い形状をなし上面で長径1.05m×短径1.2m、底面で長径1.28m×短径1.25mを測る。掘り方断面は、若干袋状を呈



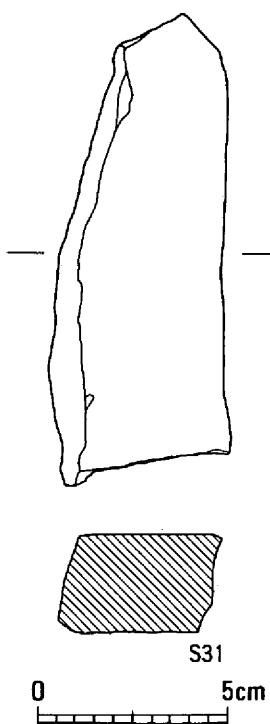
第238図 土壌35出土遺物



第239図 土壌36 (1 / 30)



第240図 土壌36出土遺物 1



第241図 土壙36出土遺物 2

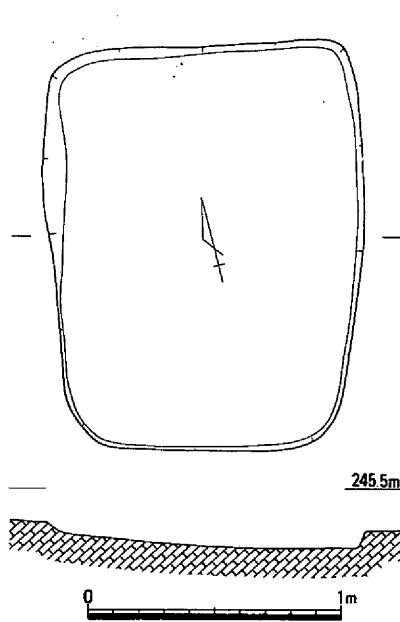
し深さ1.2mを測り、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、黒色～黒褐色土が大半を占め上下2層に大別可能で、下層の3～7層は水平に近い堆積をなす。当該土壙は、掘り方の周囲に上屋の支柱と想定される直径11～15cm、深さ10cm程度の柱穴を等間隔に4本設置している。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期であろう。

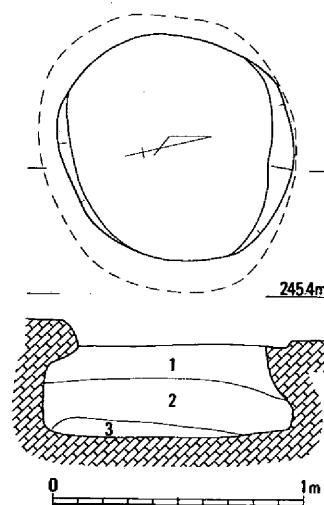
### 土壙37

第2調査区の中央付近に位置する浅い土壙である。平面規模は、長辺1.6m×短辺1.3mの長方形を呈し、深さ15cmである。掘り方断面は、浅い皿状を呈しほぼ水平な底面をなす。

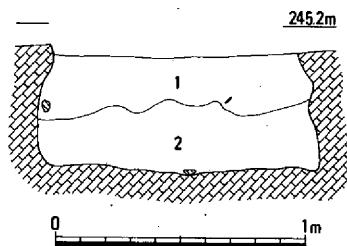
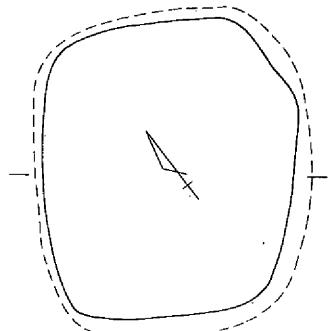
時期は、出土遺物が少なく確定し難いが器形の特徴等から弥生時代終末期のものであろう。



第242図 土壙37 (1/30)

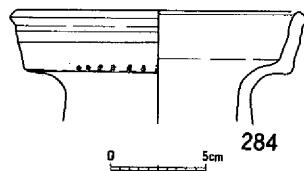


第243図 土壙38 (1/30)

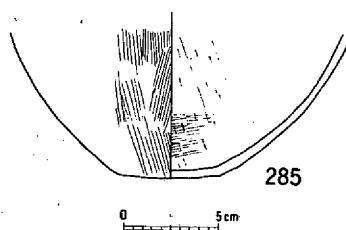


1. 暗褐色粘質土  
2. にふい黄褐色粘質土

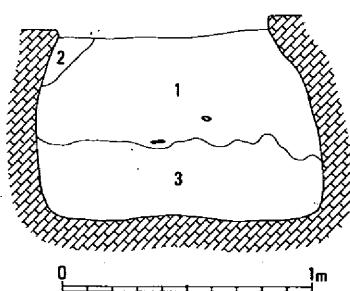
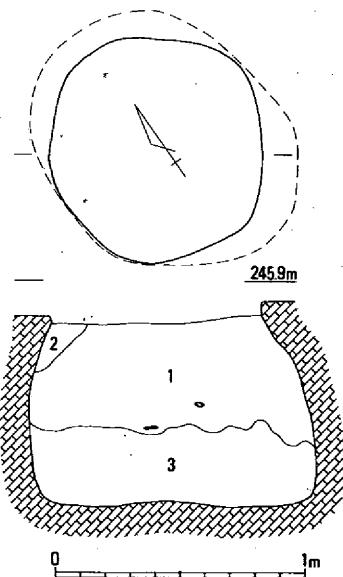
第244図 土壌39 (1/30)



第246図 土壌39出土遺物



第247図 土壌40出土遺物



1. 黒褐色土  
2. 灰黃褐色土  
3. 暗褐色粘質土

第245図 土壌40 (1/30)

### 土壤38

第2調査区東端に位置する貯蔵用土壌である。平面規模は、上下ともほぼ円形を呈し、上面で長径95cm×短径90cm、下部で直径1.1m、深さ46cmを測る。掘り方断面は、若干袋状をなし、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、ほぼ水平な堆積を示し、上層の1層と下層の2~3層に大別できる。時期は、出土遺物に細片が多く確定し難いが、器形特徴や土壌の形状から弥生時代終末期であろう。

### 土壤39

第2調査区中央の西より、竪穴住居9の近くに位置する。平面規模は、上下端とも長方形を呈し、上面で長辺1.3m×短辺1.1m、底面で長辺1.18m×短辺1.03mを測る。掘り方断面は、若干袋状を呈し、深さ52cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、褐色を基調とし2層に分層できる。時

### 3 上野遺跡

期は、出土遺物が細片のため確定し難いが、器形の特徴等から弥生時代終末期のものであろう。

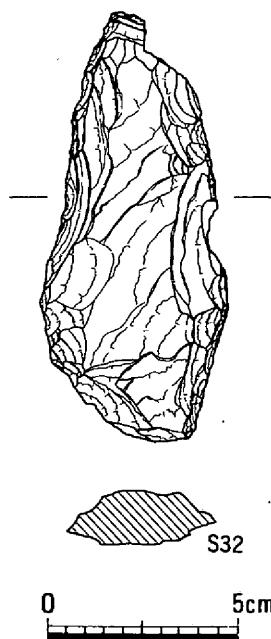
#### 土壤40

第3調査区の中央やや西に位置する。規模は、上面底面とも円形をなし、上面で長径91cm×短径88cm、底面で長径1.11m×短径94cmを測る。掘り方断面は、垂直に近く深さ83cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。

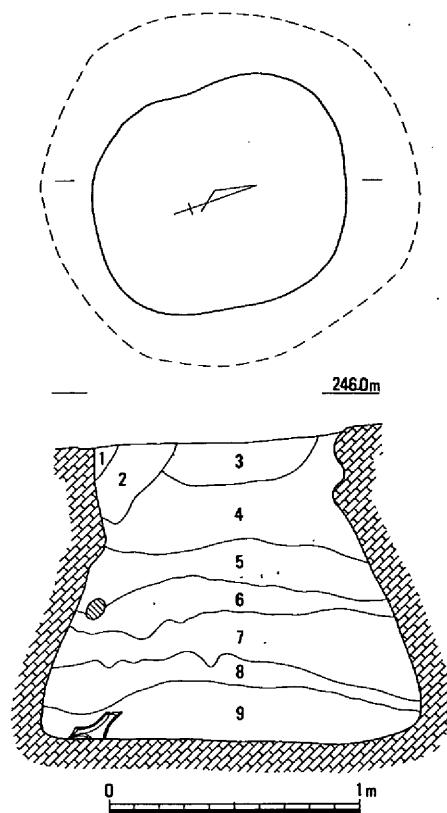
埋土は、1、2層と3層に大別できる。出土遺物は、甕の口縁部、底部片がある。時期は、埋土や出土遺物等から弥生時代終末期であろう。

#### 土壤41

第3調査区の西半に位置する。平面規

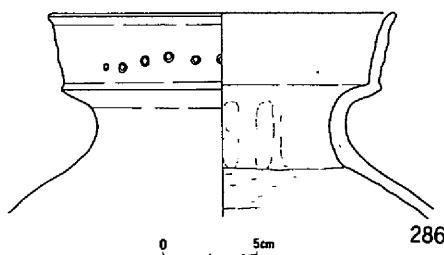


第250図 土壌41出土遺物 2

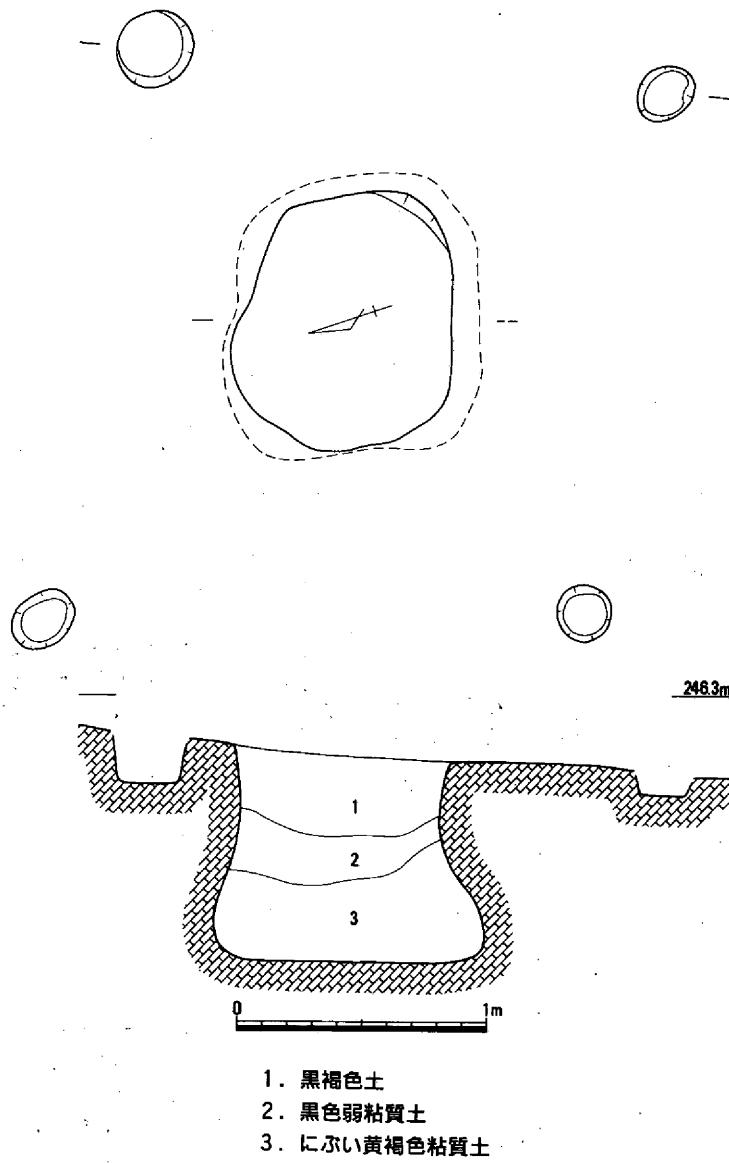


- |              |           |
|--------------|-----------|
| 1. にぶい黄橙色粘質土 | 6. 褐色粘質土  |
| 2. 灰黄褐色土     | 7. 暗褐色粘質土 |
| 3. 黒褐色土      | 8. 褐色粘質土  |
| 4. 暗褐色土      | 9. 黑色粘質土  |
| 5. 黒色粘質土     |           |

第248図 土壌41 (1 / 30)



第249図 土壌41 (47) 出土遺物 1



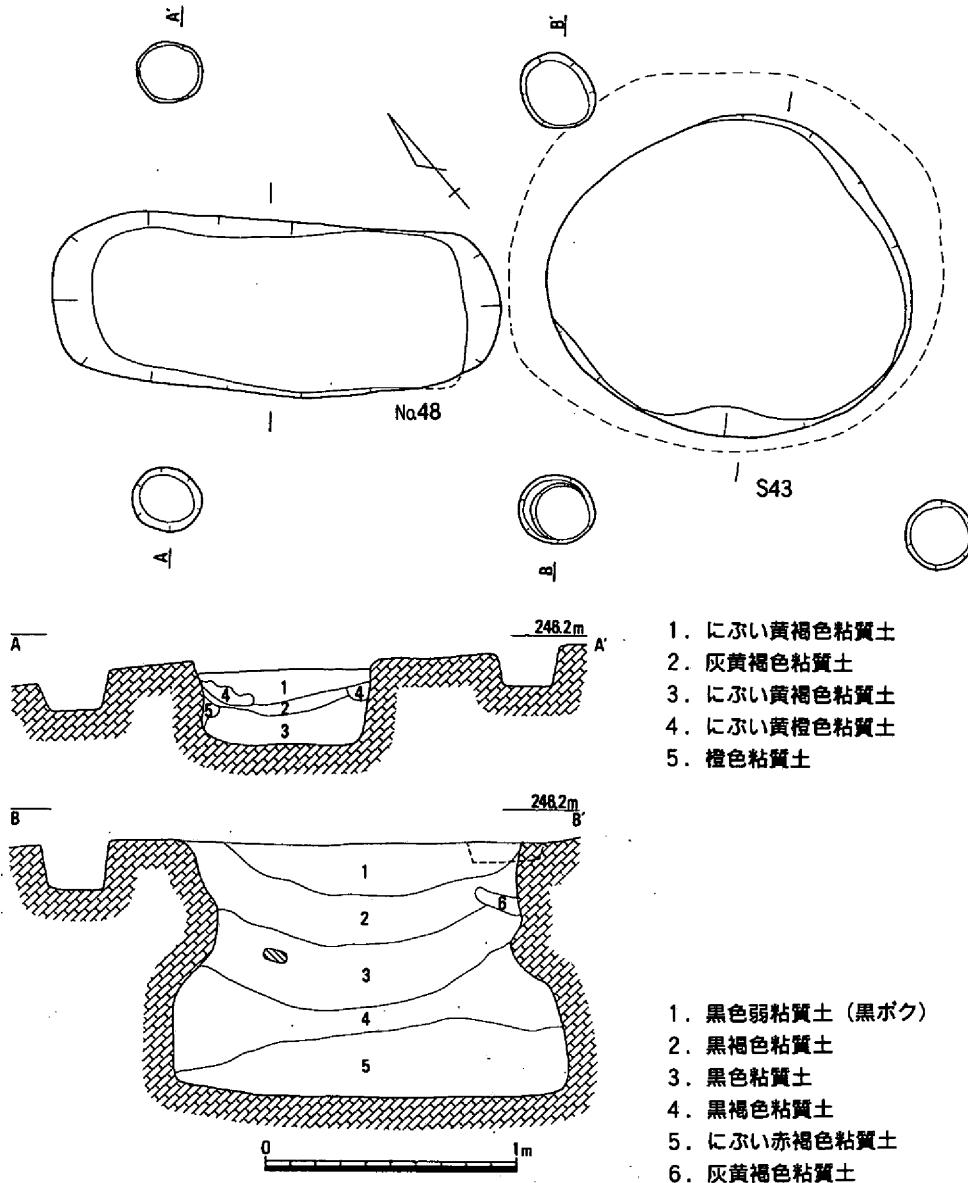
第251図 土壙42 (1/30)

模は、上面で長径1.03m×短径94cmの隅丸方形をなし、底面で長径1.53m×短径1.44mの円形をなす。掘り方断面は、袋状をなし深さ1.3mを測り、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、9層に分離を行ったが大別すると、3～7層の水平に近い堆積と1～3層の堆積になる。遺物は、最下層の黒色粘質土から甕が出土している。時期は、出土遺物や形状等から弥生時代終末期であろう。

なお、土壙の北側に2mの間隔を置き直径25cm程の浅い柱穴が2本位置している。土壙42、43に認められたと同様の土壙に付随する上屋の支柱の一部の可能性がある。

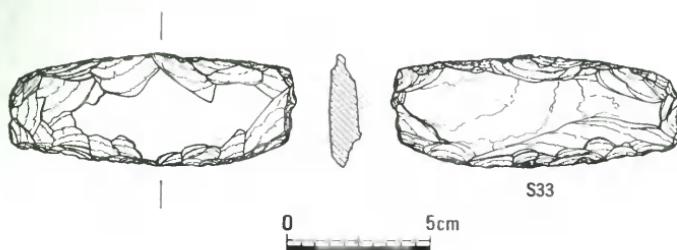
3 上野遺跡



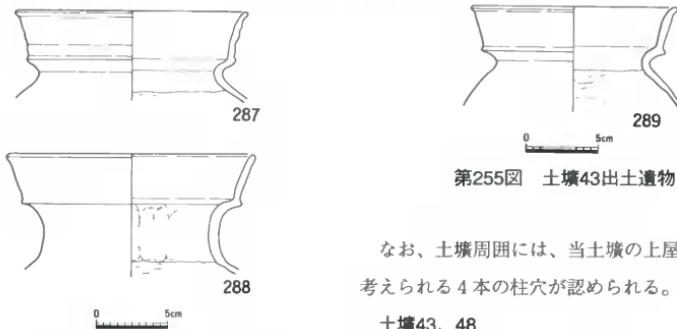
第252図 土壌43、48 (1 / 30)

土壤42

第3調査区北西の南斜面に位置する土壌群の一基である。平面規模は、上面底面とも若干膨らみをもつものの隅丸方形に近い形状をなし、上面で長径1.03m×短径88cm、底面で長径1.13m×短径1.03mを測る。掘り方断面は、袋状を呈し深さ90cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。埋土は、3層に分離可能な自然堆積である。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期であろう。



第253図 土壌42出土遺物1



第254図 土壌42出土遺物2

第255図 土壌43出土遺物

なお、土壌周囲には、当土壌の上屋の支柱と考えられる4本の柱穴が認められる。

#### 土壌43、48

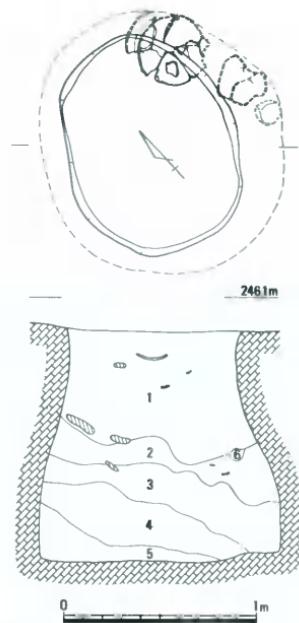
第3調査区北西の南斜面に位置する一連の土壌群のうちの2基である。両土壌は、東西には

接するように位置し、しかも、土壌周囲には取り囲むように現存で合計5本の柱穴状のビットが位置している。柱穴の配列は、東角が未検出だが東西2間×南北1間と想定される。ただ、これらのビットは、掘立柱建物の柱穴とはやや異なり柱穴の配置は明瞭であるものの柱穴底面のレベルが不揃いで、しかも削平を考慮にいれても浅く、おそらく両土壌を含めた簡単な上屋の支柱の可能性が考えられる。

東側に位置する土壌43は、上部平面形が長径1.48m×短径1.34mの不整形な円形を呈し、底面が長径1.74m×短径1.55mのはば円形を呈す。掘り方断面は、袋状を呈しほば水平な底面をなし、深さ1.06mを測る。

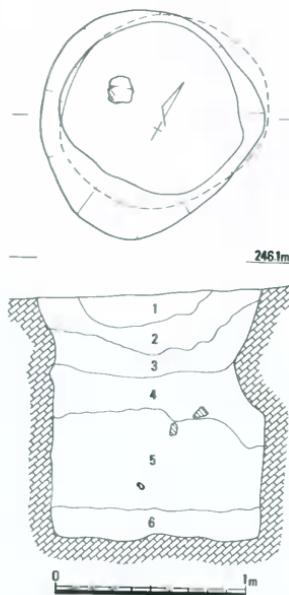
埋土は、最下層の中央が若干盛り上がる堆積をなす以外は、中央がくほんだ堆積をなしていない。時期は、出土遺物や形状等から弥生時代の終末期であろう。

西側の土壌48は、土壌43とは形状、埋土等が異なる。平面規模は、隅丸長方形を呈し、上面で長辺1.77m×短辺73cm、底面で長辺1.48m×短辺64cmを測る。掘り方断面は、台形状をなし



1. 黒色土  
2. 灰黄褐色砂質土  
3. 灰黄褐色砂質土  
4. 黑褐色土  
5. にぶい黄褐色粘質土  
6. 黑色粘質土

第256図 土壌44 (1/30)



1. 灰黄褐色粘質土  
2. 黑褐色粘質土  
3. 黑褐色粘質土  
4. にぶい黄褐色粘質土  
5. にぶい黄褐色粘質土  
6. 黑色粘質土

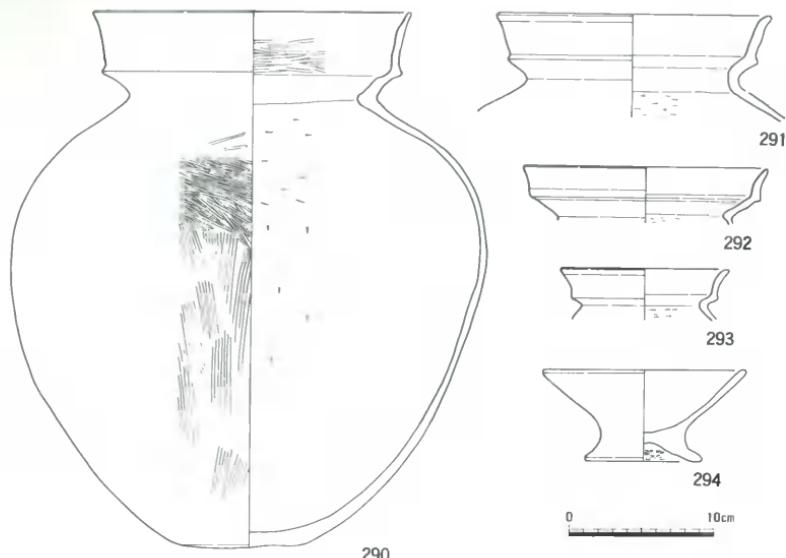
第257図 土壌45 (1/30)

深さ35cmを測りほぼ水平な底面をなす。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期と想定される。

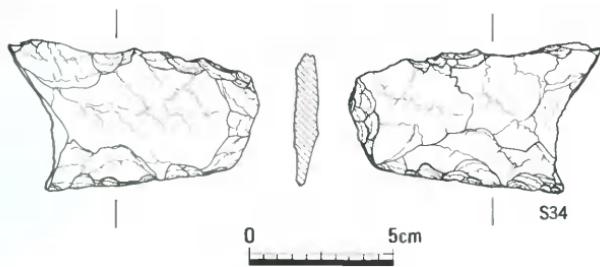
#### 土壤44

第3調査区中央の南斜面に位置する一連の土壤群の一基である。平面形は、上面で長径118×短径90cmの楕円形を呈し、底面も若干隅丸方形を意識した楕円形で長径1.41m×短径1.25mである。掘り方断面は、袋状を呈し深さ1.25mを測り、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、上下2層に大別可能で、下層の2～5層はやや南下がりの堆積をなし、第1層の黒色土は埋土中にかなりの土器片を含んでいる。時期は、出土遺物や形状等から弥生時代の終末期と考えられる。



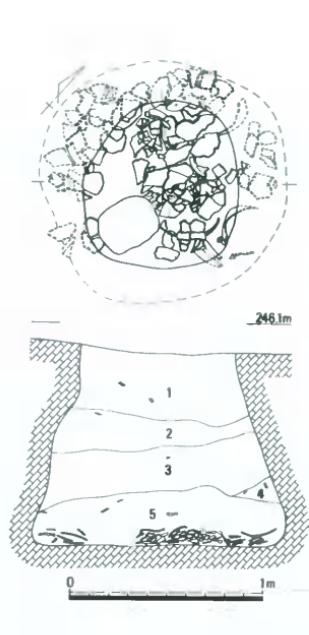
第258図 土壌44出土遺物 1



第259図 土壌44出土遺物 2

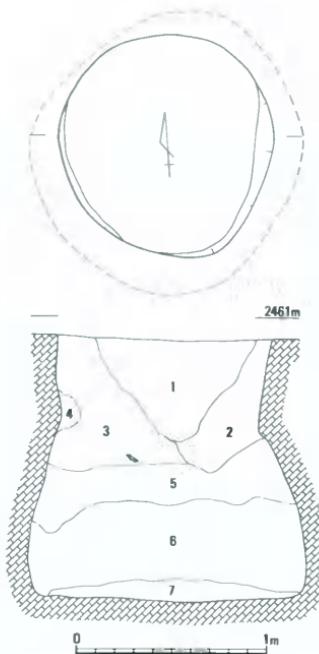
**土壤45**

第3調査区中央の西側斜面に位置する一連の土壌群の1基である。平面規模は、上面では円形をなし長径1.1m×短径1.15m、底面でやや不整形な円形をなし長径1.1m×短径1.0mを測る。掘り方断面は、垂直に近く筒状をなし深さ1.33mを測る。土壌底面は、ほぼ水平な面を



- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1. 黒褐色土   | 4. 黒褐色砂質土 |
| 2. 黒色砂質土  | 5. 黒褐色砂質土 |
| 3. 黑褐色砂質土 |           |

第260図 土壌46 (1/30)



- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1. 黒色弱粘質土 | 5. にい黄褐色粘質土 |
| 2. 褐色弱粘質土 | 6. 黑褐色粘質土   |
| 3. 黑褐色土   | 7. 明黄褐色粘質土  |
| 4. 黑褐色粘質土 |             |

第261図 土壌47 (1/30)

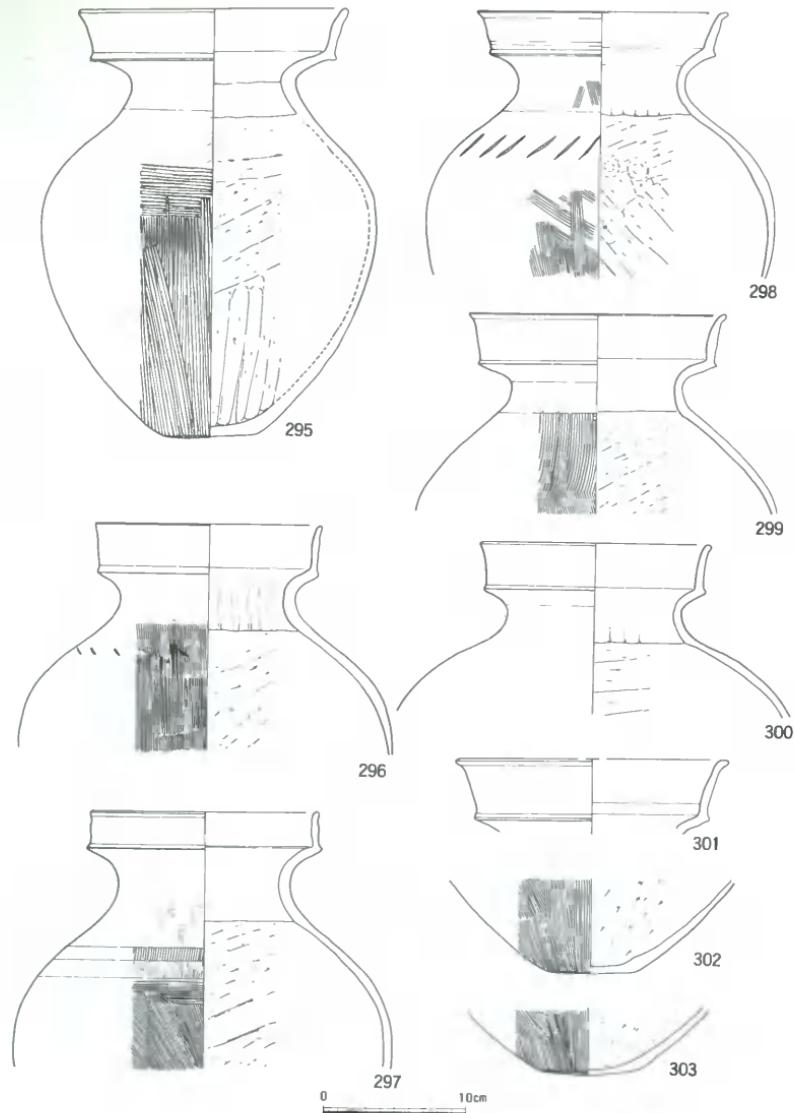
なす。

埋土は、6層に分離でき、このうち下層の4、5層では水平な堆積をなす。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期と考えられる。

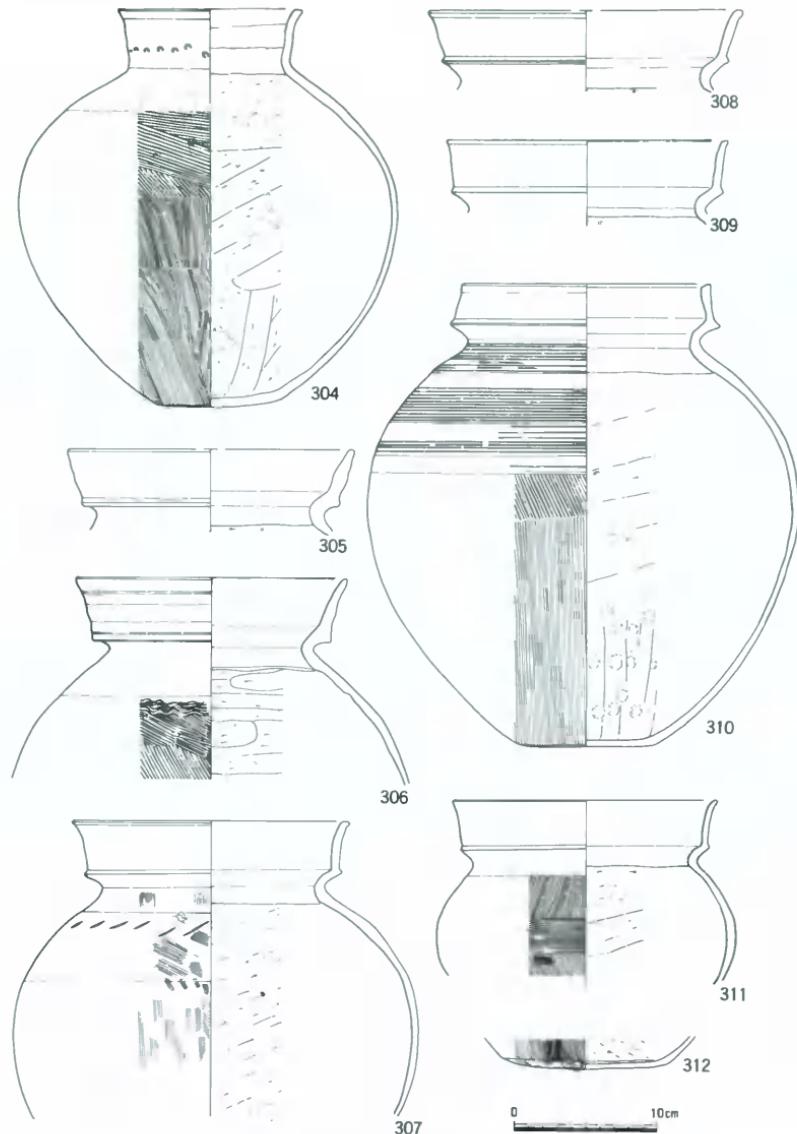
#### 土壤46

第3調査区中央やや南よりに位置する袋状土壤で最下層に多量の土器が廃棄されている。平面規模は、円形をなし上面で長径88cm×短径83cm、底面で長径1.33m×短径1.27m、深さ1.1mを測る。掘り方断面は、袋状をなし、ほぼ水平な底面をなす。

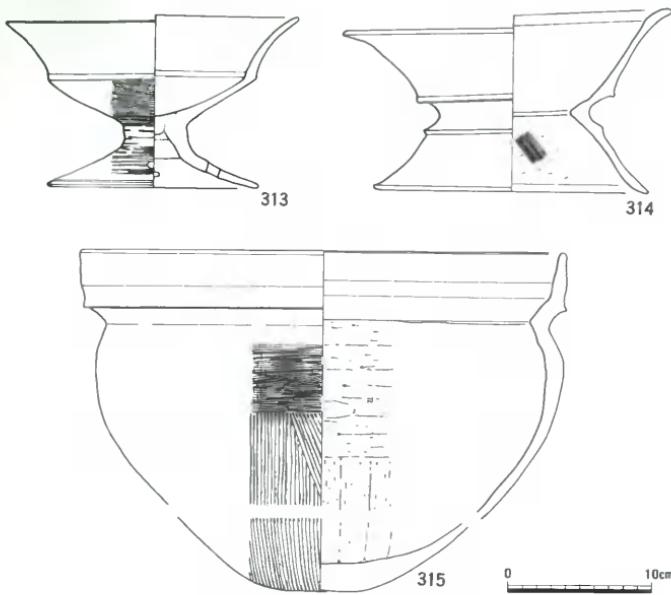
埋土は、5層に分離でき、このうち下層の3、4、5層にはいずれも類似した黒褐色の粘質土し、最下層には多量の土器片とともに、直径30cm大の偏平な石材が出土している。出土



第262図 土壌46出土遺物 1



第263図 土壌46出土遺物2



第264図 土壌46出土遺物 3

遺物は、壺、甕、高杯等の器種が見られる。時期は、出土遺物等から弥生時代終末期と考えられる。

#### 土壤47

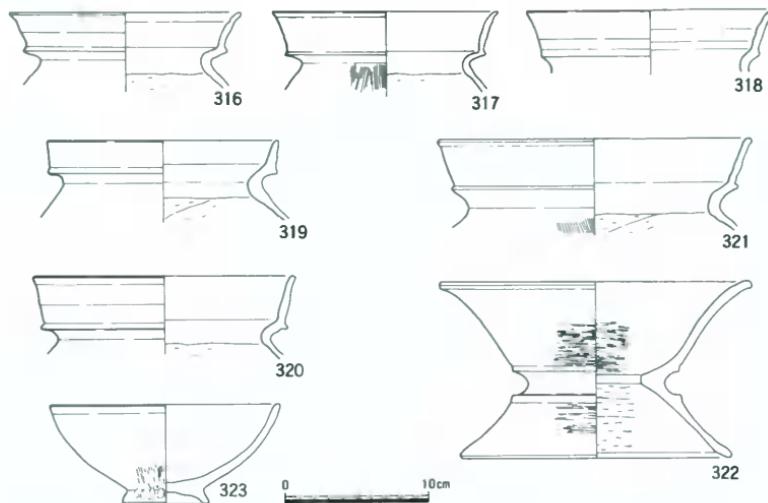
第3調査区のほぼ中央の平坦部に位置する。平面規模は、上面がやや不整形な円形をなし長径1.16m×短径1.08m、底面では、円形に近く長径1.47m×短径1.33mを測る。掘り方断面は、袋状をなし深さ142cmを測り、水平な底面をなす。

埋土は、上下2層に大別可能で、下層4～6層は水平な堆積をなし、6層に炭化物を多く含む。出土遺物のうち一部は、土壤67及び41と接合する。時期は、出土遺物や土壤の形状等から弥生時代終末期と考えられる。

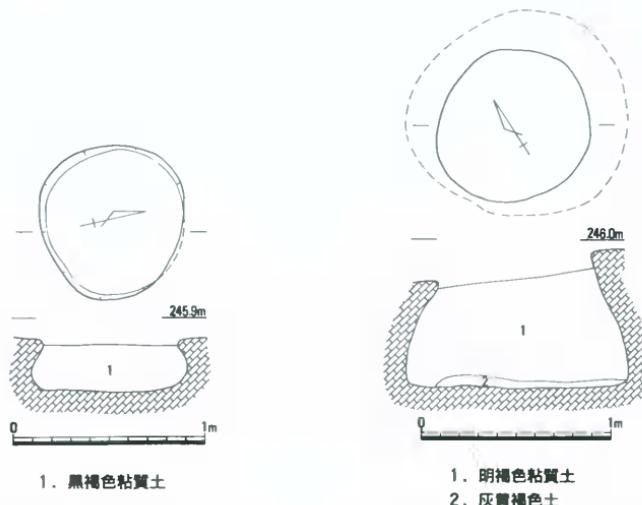
#### 土壤50

第3調査区南半の尾根鞍部付近に土壤51と並列して位置する。平面規模は、ほぼ円形を呈し、長径82cm×短径77cm、底面で長径77cm×短径72cm、深さ30cmを測る。掘り方断面は、若干袋状を呈し、ほぼ水平な底面をなす。

3 上野遺跡



第265図 土壌47出土遺物



第266図 土壌50 (1/30)



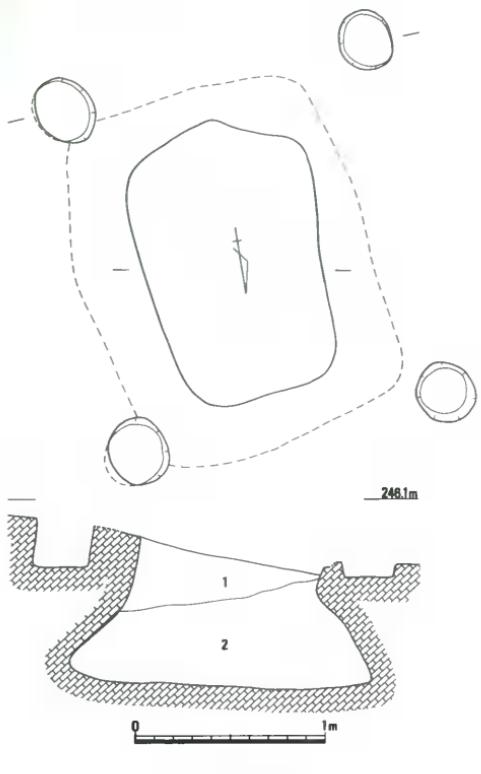
### 3 久世地域の調査

埋土は黒褐色粘質土の単一層である。出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や形状等から弥生時代後半期のものであろう。

#### 土壤51

第3調査区南半の尾根鞍部の土壤群の一基で西斜面側に位置する。平面規模は、上面、底面ともに円形を呈し、上面で長径85cm×短径80cm、底面で長径1.18m×短径1.09mを測る。掘り方断面は、袋状を呈し深さ75cmを測り、水平な底面をなす。

埋土は、粘性の明褐色土が大半を占め、最下層には灰黃褐色土が薄く堆積している。時期は、土壤の形状や出土遺物等から弥生時代終末期であろう。

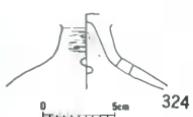


第268図 土壌52 (1/30)

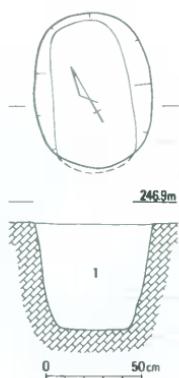
#### 土壤52

第3調査区南端の尾根鞍部の土壤群の一基で、西側斜面に位置する。平面規模は、長方形を呈し、上面で長辺1.43m×短辺1.03m、底面で長辺1.93m×短辺1.6m、深さ83cmを測る。掘り方断面は、顯著な袋状をなし、ほぼ水平な底面をなす。埋土は、上下2層に分離できるが、いずれも灰黃褐色の粘質土である。

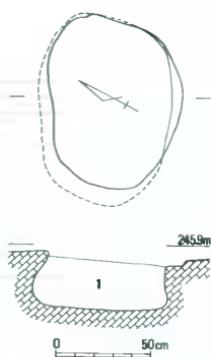
当土壤の周囲には、4本の柱穴が土壤を囲むように東西2m、南北1.7m程の間隔で配置されている。土壤41、42等と同様の貯蔵用土壤を覆う上屋の支柱を想定させる。時期は、出土遺



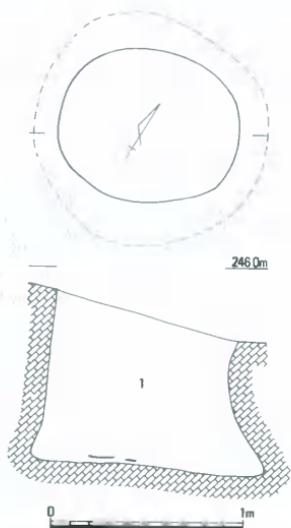
第269図 土壌52出土遺物



第270図 土壌53 (1/30)  
1. 灰黄褐色粘質土



第271図 土壌55 (1/30)  
1. にぶい灰黄褐色粘質土



第272図 土壌54 (1/30)  
1. 灰黄褐色土

物等から弥生時代終末期と考えられる。

#### 土壌53

第3調査区の南端、第4調査区との境に近い尾根鞍部に位置する。平面規模は、上面で橢円形を呈し長径82cm×短径62cm、底面で隅丸長方形を呈し、長径81cm×短径43cm、深さ58cmを測る。掘り方断面は、逆台形を呈し水平な底面をなす。埋土は、灰黄褐色粘質土の一層のみである。

当土壤は、出土遺物が皆無で時期の確定に乏しいが、埋土や底面に柱穴が無いものの形状等から縄文時代の落とし穴の可能性もある。

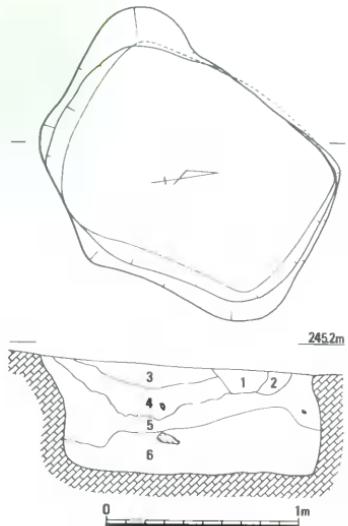
#### 土壌54

第3調査区南半の尾根鞍部に位置する土壤群の一基である。平面規模は、円形を呈し、上面で長径95cm×短径82cm、底面で長径1.26m×短径1.21m、深さ1.02mを測る。掘り方断面は、袋状を呈しほぼ水平な底面をなす。

埋土は、灰黄褐色の単一層で、下層から若干土器片が出土している。時期は、出土遺物や形状等から弥生時代終末期であろう。

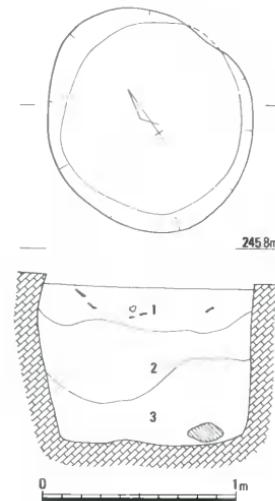
#### 土壌55

第3調査区南端の尾根鞍部に位置する土壤群の一基である。平面規模は、やや不整形な橢円形に近い形状をなし、上面で長径90cm×短径67cm、底面で長径1.0m×短径70cm、深さ30cmを測る。掘り方断面は、垂直もしくは若干袋



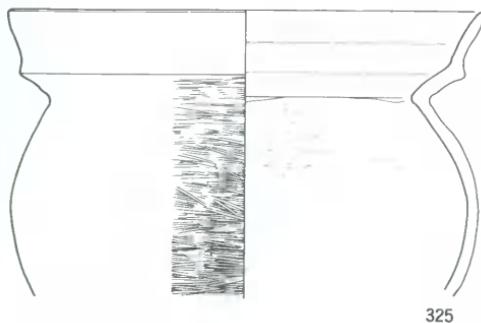
- |                |              |
|----------------|--------------|
| 1. 褐灰色土        | 4. 明黄褐色粘質土   |
| 2. 明黄褐色粘質土     | 5. 黒褐色粘質土    |
| 3. 黒色弱粘質土(黒ボク) | 6. にぶい黄褐色粘質土 |

第273図 土壌56 (1/30)



- |              |
|--------------|
| 1. 灰黄褐色土     |
| 2. 黒色土       |
| 3. にぶい黄褐色粘質土 |

第274図 土壌57 (1/30)



状をなし、ほぼ水平な底面をなす。

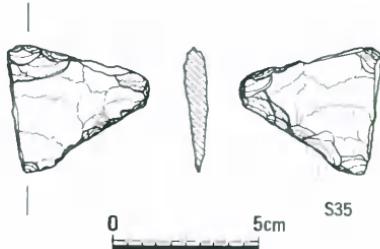
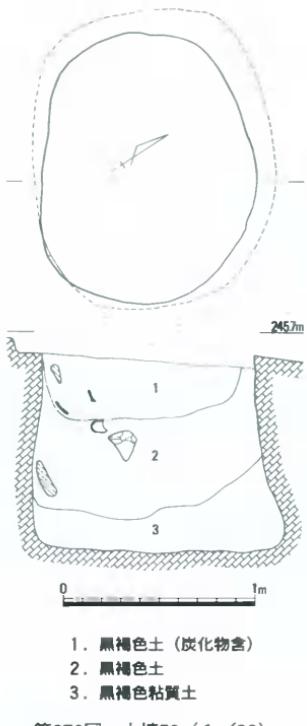
埋土は、にぶい黄褐色粘質土の単一層である。時期は、出土遺物が細片のため確定し難いが、器形の特徴等から弥生時代の終末期であろう。

#### 土壤56

第2調査区北端にあたるとともに、上野遺跡全体の最北



第275図 土壌57出土遺物



端に位置する。平面規模は、上面、底面ともに長方形を呈し、上面で長辺1.55m×短辺1.2m、底面で長辺1.3m×短辺1.03mを測る。掘り方断面は、垂直に近い形状を呈し、深さ65cmを測り、ほぼ水平な底面をなしている。

埋土は、5層に分層可能で、このうち1、2層は、レンズ状の堆積をなしている。出土遺物は、細片が多く時期の確定がしがたいが、器形の特徴等から弥生時代終末期であろう。

#### 土壤57

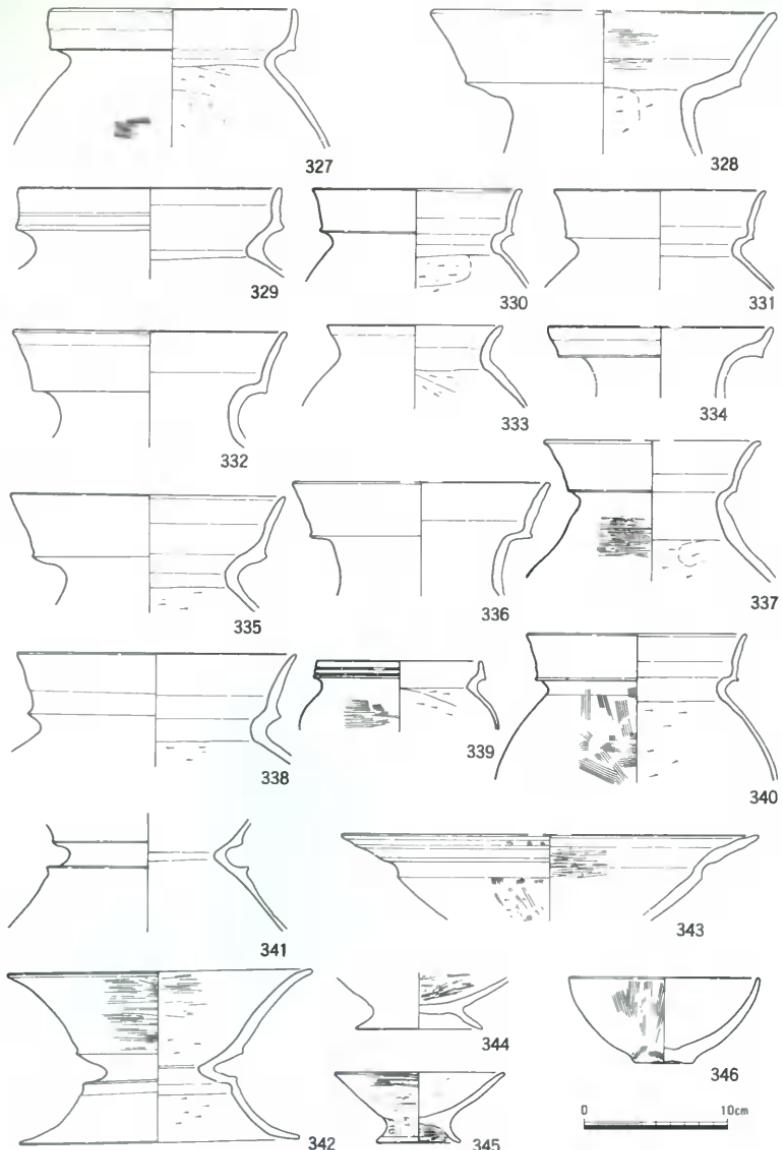
第3調査区中央付近の東端に位置する。平面規模は、ほぼ円形をなし、上面で長辺1.21m×短辺1.1m、底面で長辺1.0m×短辺95cmを測る。掘り方断面は、筒状をなし深さ92cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、3層に明瞭に分離でき、このうち上層の灰黄褐色土層から甕、壺、鉢の各器種を含む多くの土器片が出土している。下層からの出土遺物は少ない。時期は、下層の遺物が少なく確定し難いが、最終埋土は、弥生時代終末期である。

#### 土壤58

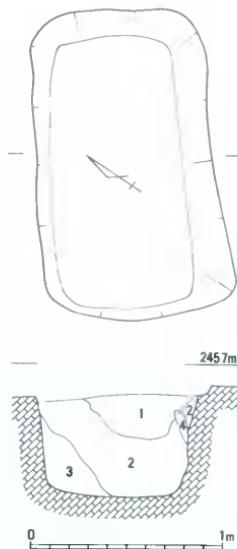
第3調査区中央の東端に位置する貯蔵用土壤である。平面規模は、橢円形をなし、上面で長辺1.44m×短辺1.13m、底面で長辺1.6m×短辺1.28mを測る。掘り方断面は、若干袋状を呈し深さ1.15mを測り、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、3層に分離可能であるが、いずれも黒褐色を基



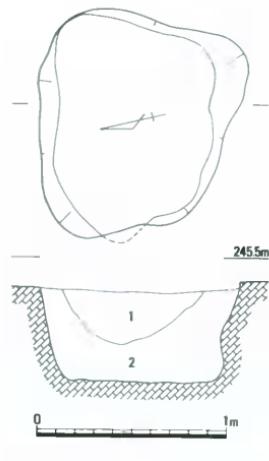
第278図 土壌58出土遺物 2

3 上野遺跡



第279図 土壌60 (1 / 30)

1. 黒色弱粘質土
2. 黒褐色土
3. にふい黄褐色土
4. 黒色粘質土



第280図 土壌63 (1 / 30)

調とする堆積土で、特に第2層に多くの土器と碟を含んでいる。時期は、出土遺物の諸特徴から、弥生時代終末期である。

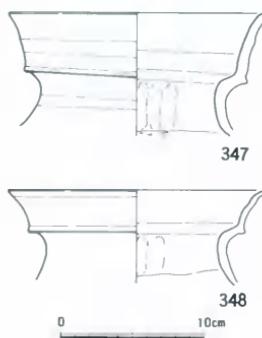
#### 土壤60

第3調査区中央の平坦部に位置する。平面形は、長方形を呈し、上面で長辺1.65m×短辺1.0m、底面で長辺1.44m×短辺73cm、深さ60cmを測る。掘り方断面は、逆台形の形状を呈し、ほぼ水平な底面をなす。

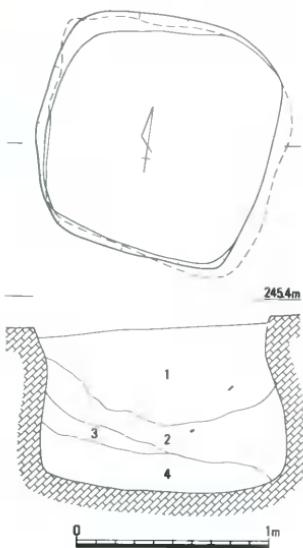
埋土は、大きく3層に分離でき、掘り方の南から流入した堆積をなす。遺物は、第2層の黒色粘質土中に若干含んでいる。時期は、出土遺物等から弥生時代後期後半期であろう。

#### 土壤63

第3調査区の北半、竪穴住居8の北側に位置する。平面規模は、上下ともやや不整形な形状を呈し、上面で長辺1.23m×短辺1.1m、下部で長辺1.15m×短辺83



第281図 土壌63出土遺物



1. 黒褐色土 3. 黒色弱粘質土  
2. 黑褐色土 4. にぶい黄褐色粘質土  
第282図 土壌64 (1/30)

cmを測る。掘り方断面は、下半が垂直に近く、深さ55cmを測り、水平な底面をなす。

埋土は、上下2層に分かれ、下層から土器片が出土している。時期は出土遺物等から弥生時代終末期であろう。

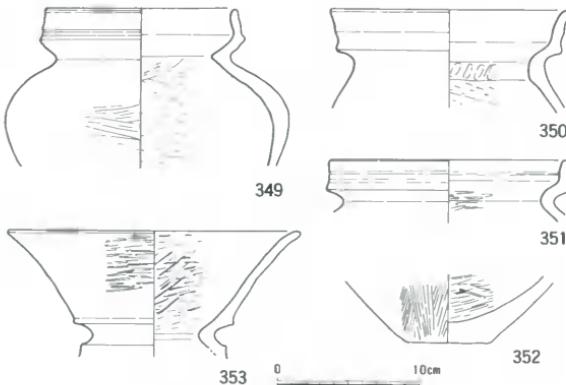
#### 土壤64

第3調査区の北半、竪穴住居8、9の間に位置する土壤群の一基である。平面規模は、方形をなし、上面で一辺1.25m、底面で長辺1.27m×短辺95cmを測る。掘り方断面は、若干袋状をなし、周囲がやや盛り上った底面をなす。

埋土は、1～3層の上層と4層の下層に分離できる。時期は、出土遺物や土壤の形状等から弥生時代終末期である。

#### 土壤65

第3調査区の北半、竪穴住居8、9の間に位置する土壤群の一基である。平面規模は、楕円形を呈し、上面で長辺1.14m×短辺86cm、底面で長辺98cm×短辺73cm、深さ33cmを測る。



第283図 土壌64出土遺物

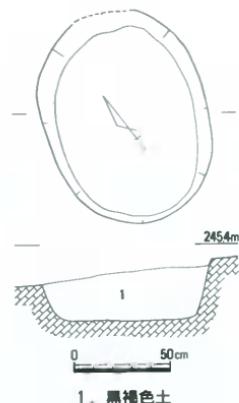
3 上野遺跡

掘り方断面は、台形をなし、水平な底面をなす。

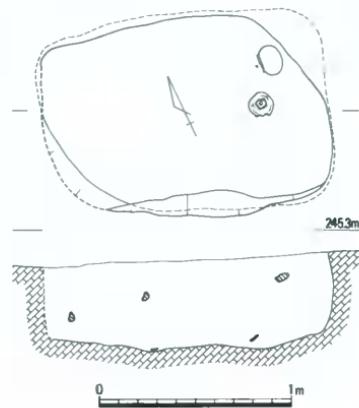
埋土は、黒褐色の單一層の堆積である。時期は、出土遺物に細片が多く決め難いが、器形の特徴等から弥生時代の後期後半期と考えられる。

土壤66

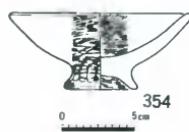
第3調査区の北半、竪穴住居8、9の間に位置する土壤群の一基である。平面規模は、不整形な長方形を呈し、上面で長辺1.5m×短辺1.05m、底面で長辺1.51m×短辺1.05m、深さ52cmを測る。掘り方断面は、ほぼ垂直に近い形状をなし、水平な底面をなす。



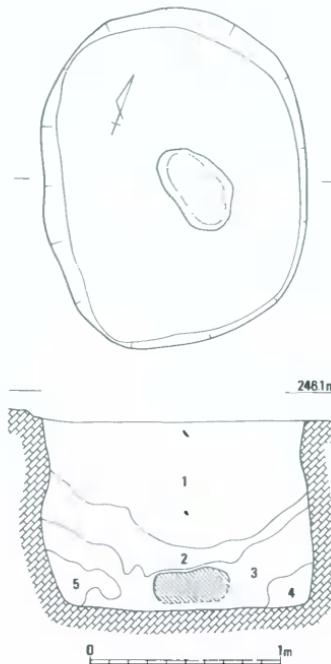
第284図 土壌65 (1/30)



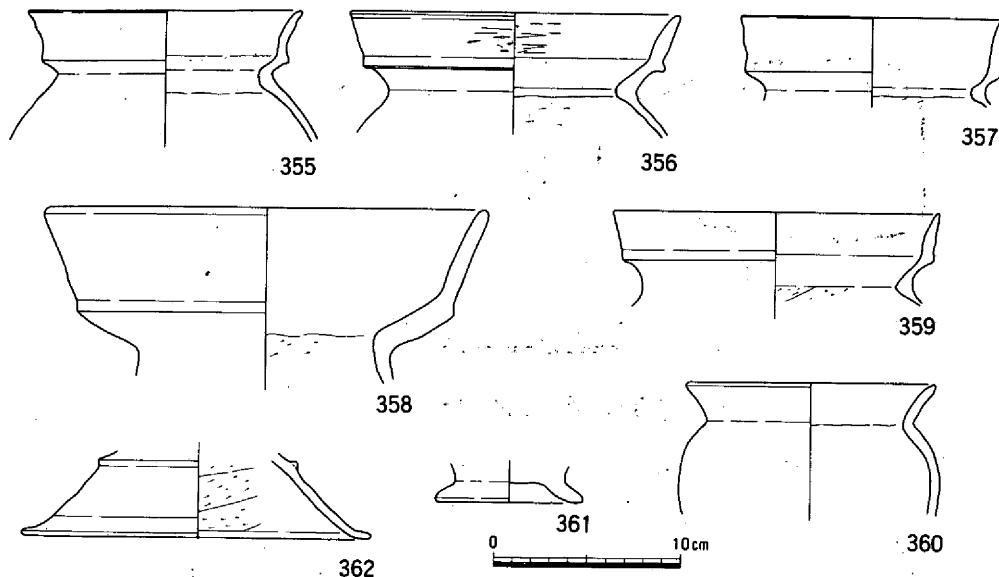
第285図 土壌66 (1/30)



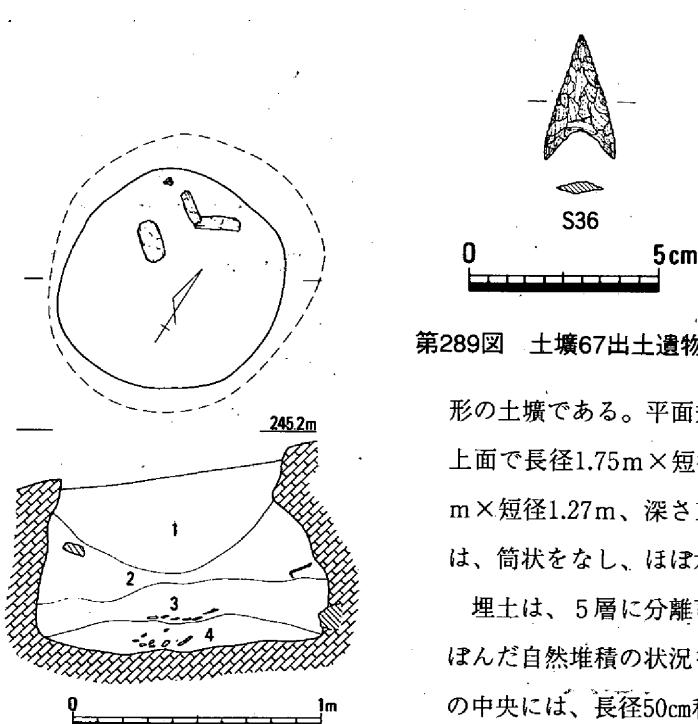
第286図 土壌66出土遺物



第287図 土壌67 (1/30)



第288図 土壌67出土遺物1



埋土は、にぶい黄褐色の単一層である。時期は、出土遺物等から弥生時代の終末期と見られる。

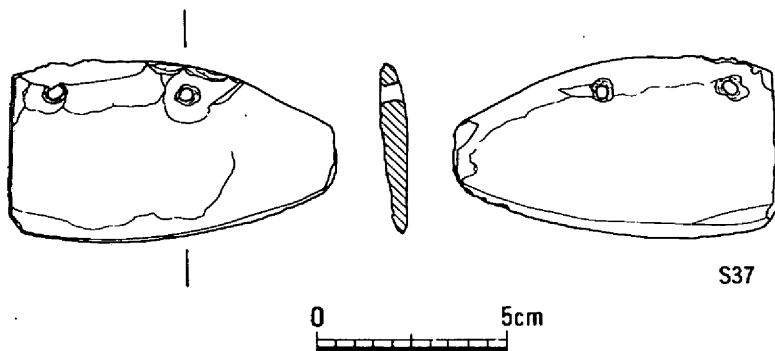
第289図 土壌67出土遺物2  
第3調査区の中央付近に位置する、やや大

形の土壌である。平面規模は、ほぼ楕円形を呈し、上面で長径1.75m×短径1.42m、底面で長径1.62m×短径1.27m、深さ1.07mを測る。掘り方断面は、筒状をなし、ほぼ水平な底面をなす。

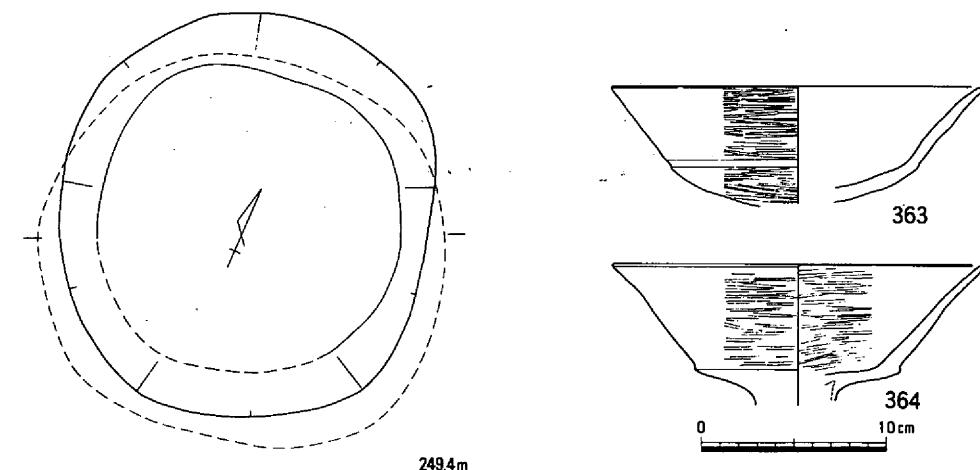
埋土は、5層に分離可能で、いずれも中央がくぼんだ自然堆積の状況をなしている。掘り方底部の中央には、長径50cm程度の偏平な石材が認められた。出土遺物のうち(359、362)が土壌47出土片と接合している。時期は、出土遺物や埋土、形状等から弥生時代の終末期である。

- 1. 灰褐色土
- 2. にぶい赤褐色土
- 3. 黒褐色粘質土
- 4. 灰褐色砂質土

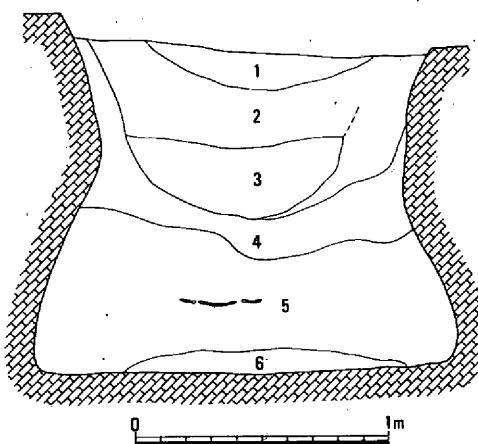
第290図 土壌68 (1/30)



第291図 土壌68出土遺物



第293図 土壌74出土遺物



- |              |            |
|--------------|------------|
| 1. 黒褐色土（黒ボク） | 4. にぶい黄褐色土 |
| 2. 褐色土       | 5. 黄褐色土    |
| 3. 明黄褐色土     | 6. 暗赤褐色土   |

第292図 土壌74 (1/30)

**土壌68**

第3調査区西端の南斜面に位置する。平面規模は、ほぼ円形を呈し、上面で長径95cm×短径88cm、底面で長径1.16m×短径1.03mを測る。掘り方断面は、深さ83cmを測り袋状をなし、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、上層の1、2層と下層の3、4層に分離でき、下層の3、4層は水平な堆積をなす。3層下部より4層および床面にかけて炭化物が多く出土している。時期は、出土遺物に細片が多

く図化できたものは少ないが、器形の特徴や土壙の形状から弥生時代の終末期であろう。

#### 土壙74

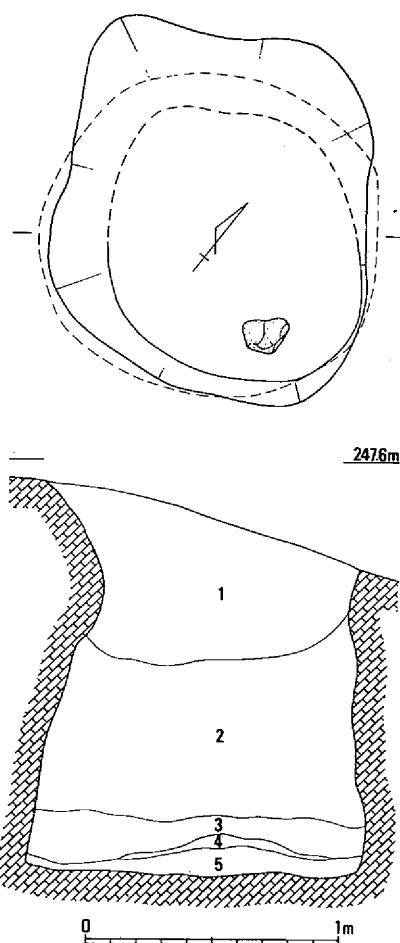
第4調査区北西隅に位置する貯蔵用の土壙である。平面規模は、円形を呈し上面で長径1.6m×短径1.5m、底面で長径1.65m×短径1.5mを測る。掘り方断面は、顯著な袋状を呈し、深さ1.5mを測り、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、1～4層の上層と5、6層の下層に大別できる。時期は、出土遺物や土壙の形状等から弥生時代終末期と考えられる。

#### 土壙75

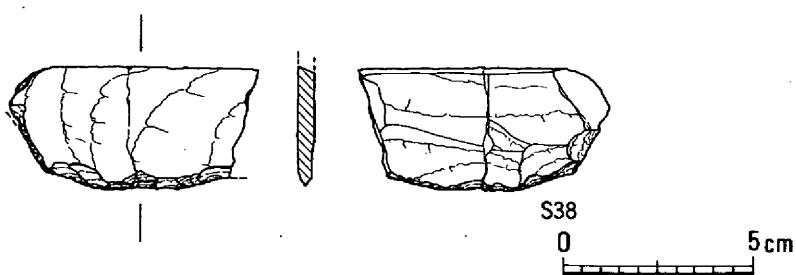
第4調査区中央付近の竪穴住居11の北側に位置する。平面規模は、上面では不整形な形状をなし、長径1.45m×短径1.25m、底面では円形をなし、長径1.34m×短径1.30mを測る。掘り方断面は、垂直もしくは若干袋状の形状で、深さ1.6mと良好な残りをなし、水平な底面をなす。

埋土は、上層の1、2層と下層の3～5層に大別できる。最下層の黒褐色微砂質土中からかなりの土器片が出土している。また、底面からは、直径20cm大の偏平な石材が出土している。時期は、出土遺物等から弥生時代後

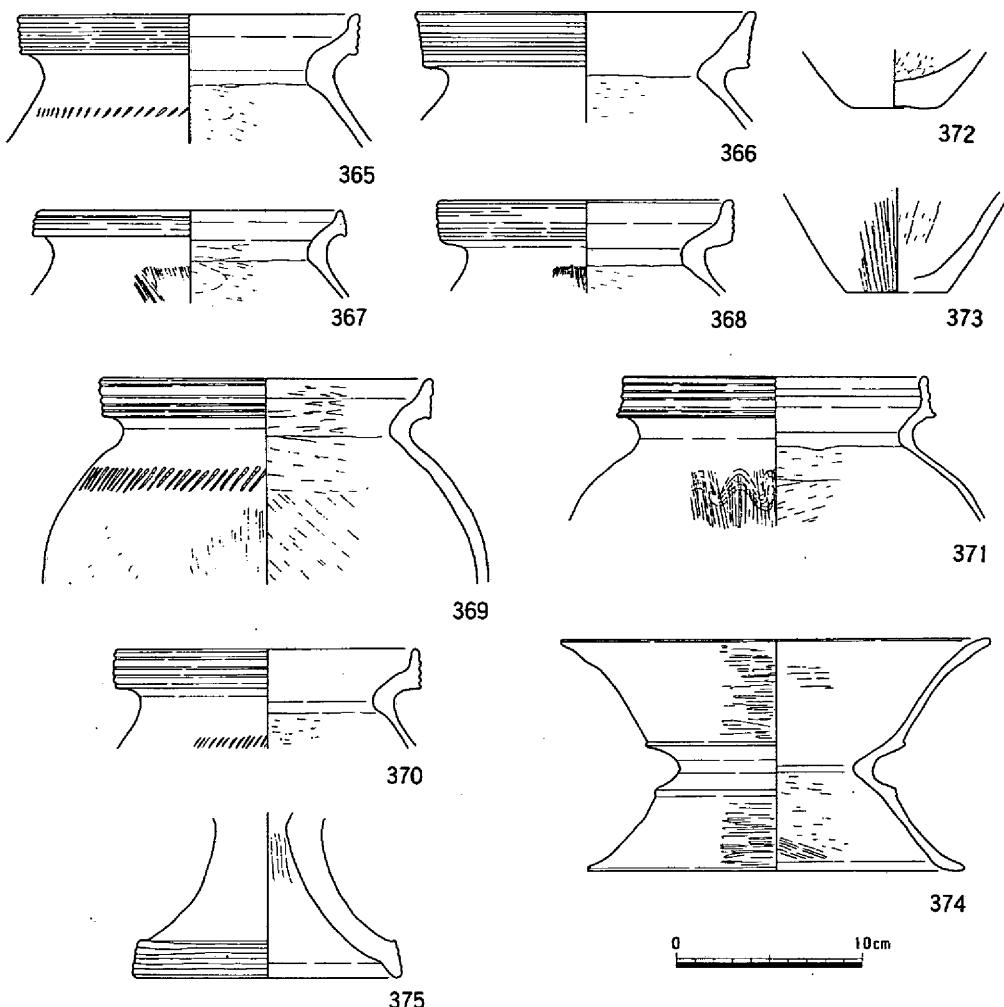


- |            |            |
|------------|------------|
| 1. 黒褐色土    | 4. 黒褐色粘質土  |
| 2. 灰黃褐色土   | 5. 黒褐色微砂質土 |
| 3. 黒褐色微砂質土 |            |

第294図 土壙75 (1/30)



第295図 土壙75出土遺物 1



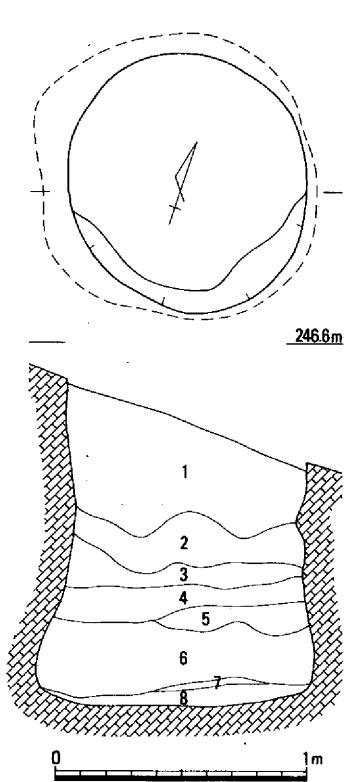
第296図 土壙75出土遺物 2

期後半期と考えられる。

#### 土壙76

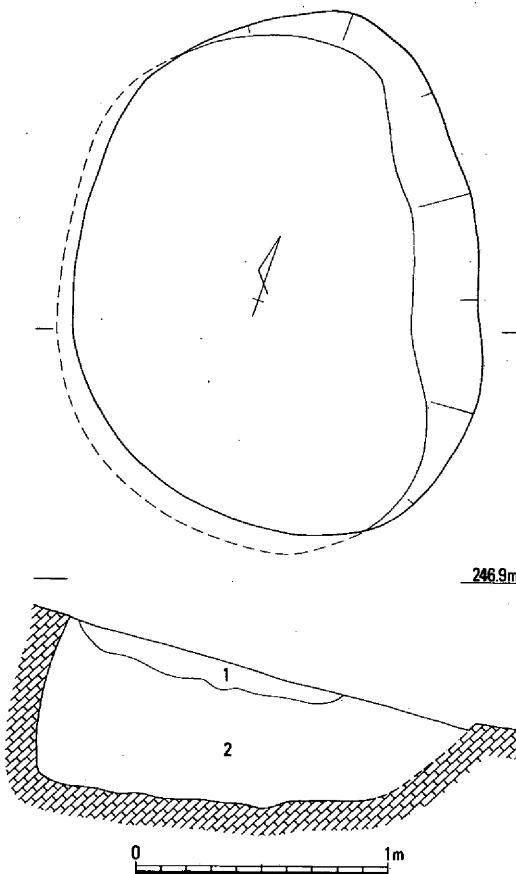
第4調査区東半の斜面上に、土壙77と接して位置する貯蔵用の土壙である。平面規模はほぼ円形を呈し、上面で長径1.03m×短径98cm、底面で長径1.24m×短径1.17m、深さ1.35mを測る。掘り方断面は、若干袋状を呈しほぼ水平な底面をなす。

埋土は、8層に分離でき、このうち第4層以下はほぼ水平な堆積をなしている。遺物は、弥生時代後半期と終末期の土器が混在して出土しているものの、土壙の埋没時期は弥生時代終末期と考えられる。



- 1. にぶい黄色粘質土
- 2. 黒褐色弱粘質土
- 3. 浅黄色粘質土
- 4. 黒褐色土（黒ボク）
- 5. 黄灰色土
- 6. 黄灰色土
- 7. 暗灰黄色粘質土
- 8. 黄灰色土

第297図 土壌76 (1/30)



- 1. 灰黄褐色粘質土
- 2. 黑褐色粘質土

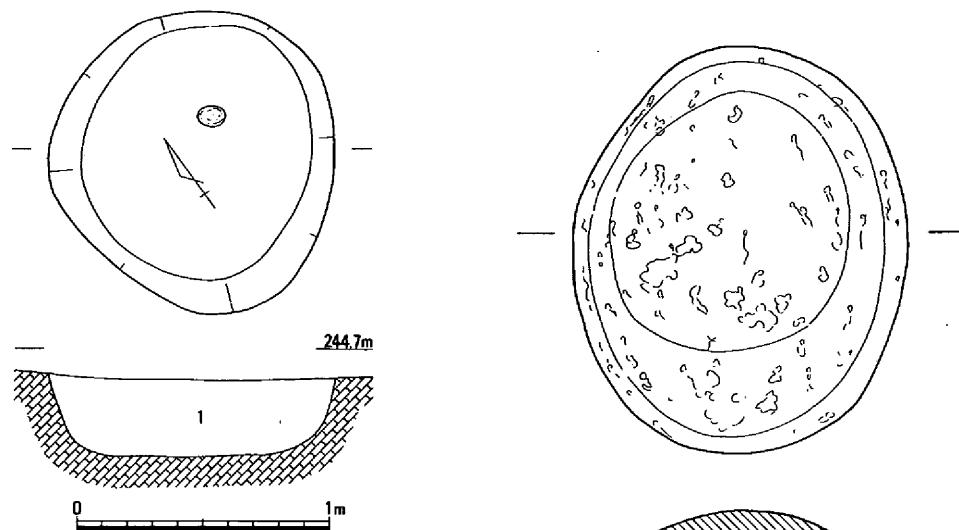
第298図 土壌77 (1/30)

### 土壌77

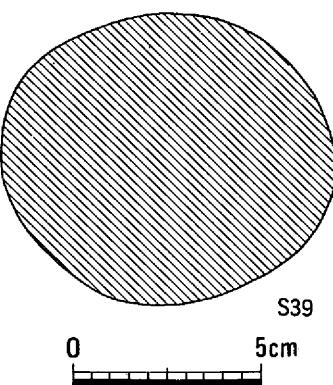
第4調査区東斜面に土壌76と接して位置するやや大形の土壌である。掘り方の一部が攪乱を受けているものの、上面および底面ともやや不整形な橢円形を呈す。規模は、上面で長径2.15m×短径1.6m、底面で長径2.13m×短径1.4m、深さ73cmを測る。掘り方断面は、袋状を呈しほぼ水平な底面をなす。

埋土は、2層に分離できるが、大半は下層の黒褐色の粘質土である。出土遺物がほとんど無く、時期の確定がしがたいが、埋土や土壌の形状等から弥生時代後半期と考えられる。

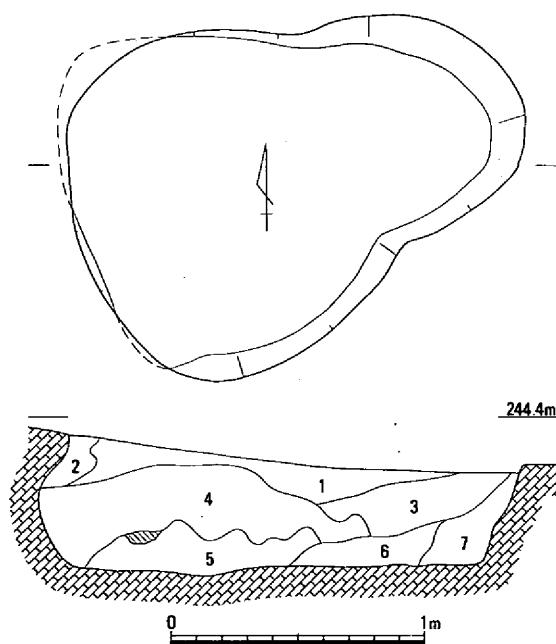
3 上野遺跡



1. 黒褐色土（黒ボク）  
第299図 土壌83 (1/30)

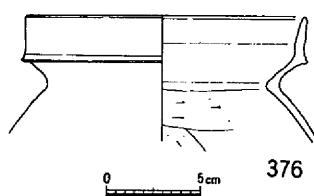


第300図 土壌83出土遺物

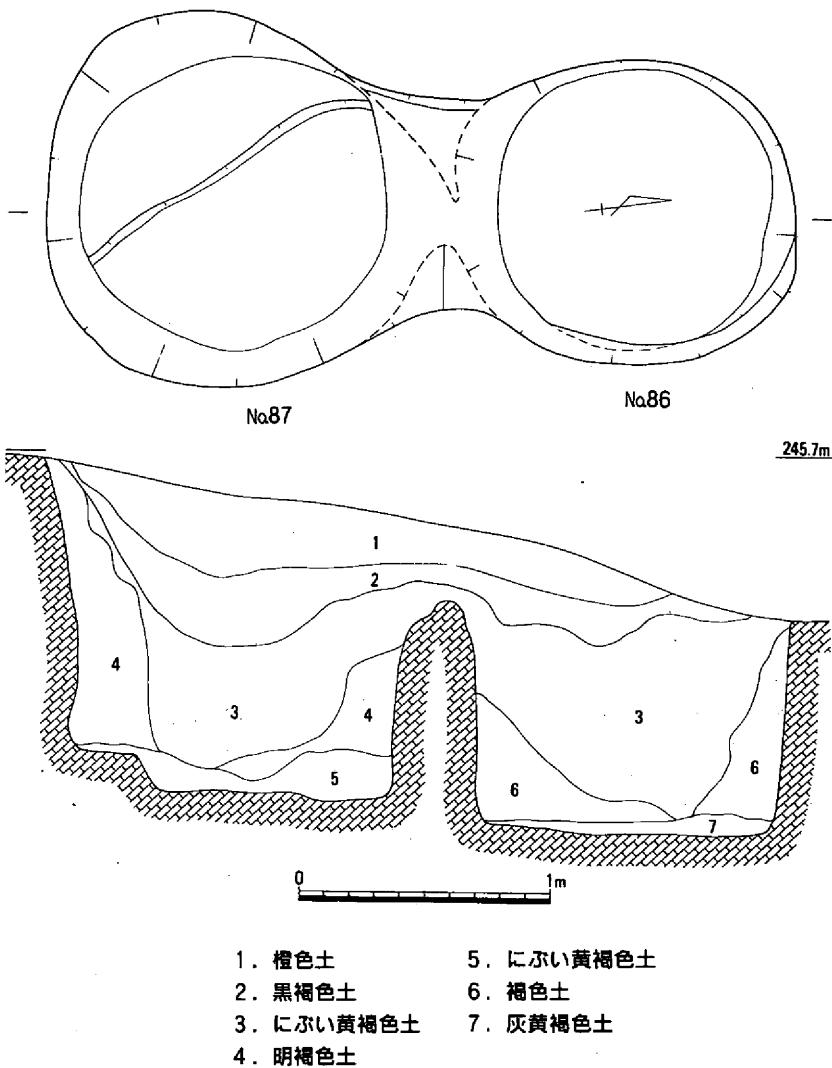


- 1. にぶい黄褐色土
- 2. にぶい黄褐色土
- 3. にぶい黄褐色土
- 4. 黑褐色土
- 5. 褐色土
- 6. 黑褐色土
- 7. 褐色土

第301図 土壌85 (1/30)



第302図 土壌85出土遺物



第303図 土壌86、87 (1/30)

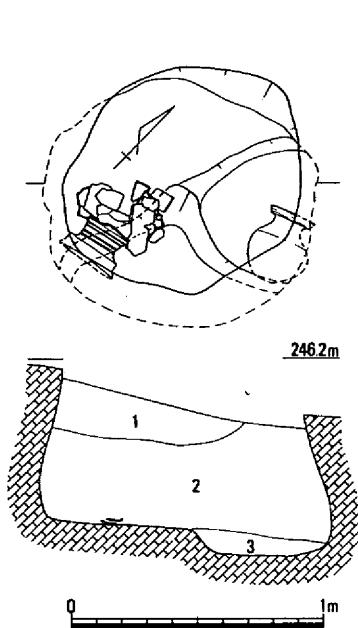
### 土壤83

第1調査区のほぼ中央の建物4の北西端に位置する。平面規模は、ほぼ円形を呈し長径1.25m×短径1.15mを測る。掘り方断面は、底面のほぼ水平な椀状をなし、深さ32cmを測る。

埋土は、黒褐色の黒ボコの単一層である。出土遺物は、土器の細片と磨石が1点である。時期は、出土遺物が少量のため確定しがたいが、埋土等から弥生時代の遺構であろう。

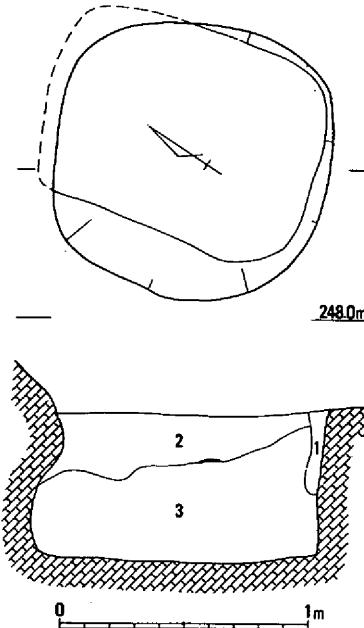
### 土壤85

第1調査区北半の緩く東側に傾斜が始まる付近に位置する不整形な土壌である。平面規模は、長径1.84m×短径1.41mを測り、土壌が重複した形状のようにも見える。掘り方断面は、一部



1. 黒褐色土  
2. にぶい黄褐色土  
3. にぶい黄橙色粘質土

第304図 土壙88 (1/30)



1. 灰黄褐色粘質土  
2. 灰黄褐色土  
3. 橙色

第305図 土壙90 (1/30)

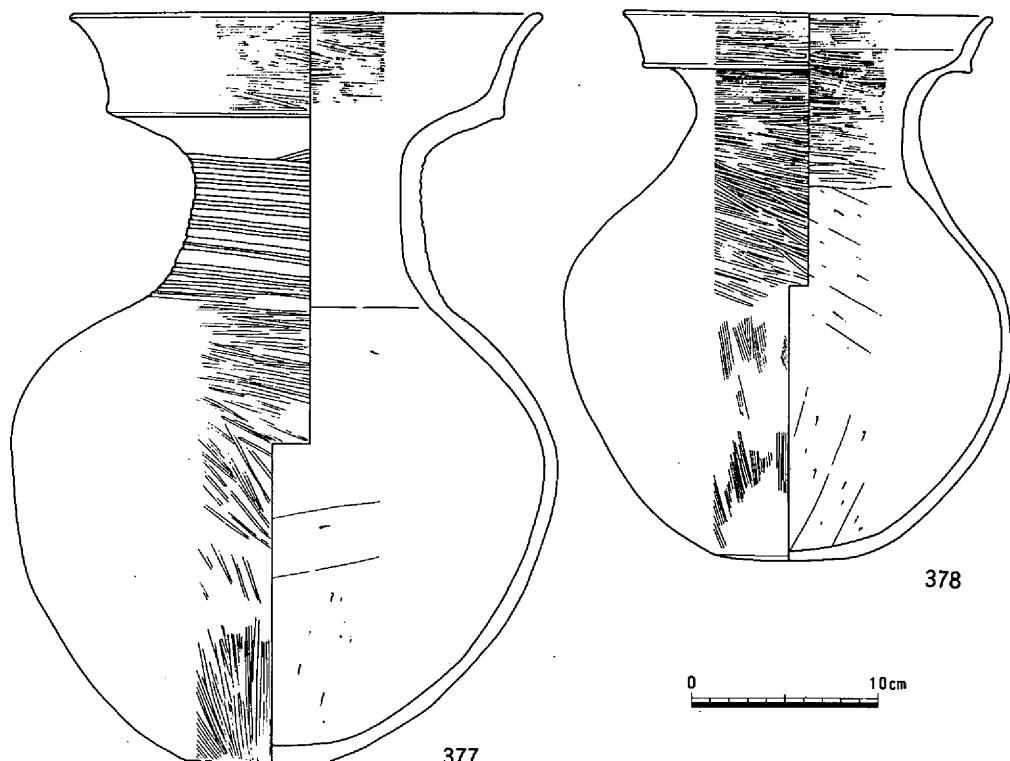
では若干抉りこんだ場所も見受けられ、最大で深さ56cmを測る。底面は、ローム層直下の礫を含む層で終っており、露出した礫層により若干の凹凸が見られる。

埋土は、7層に分離可能であるが、不均一な堆積をなし、一部地山との識別が不明瞭な場所も見受けられる。貯蔵用土壙等の明瞭な掘り方を示さないことから、風倒木痕の可能性も否定できない。時期は、出土遺物に細片が多く確定し難いが、器形の特徴等から弥生時代後期から終末期のものであろう。

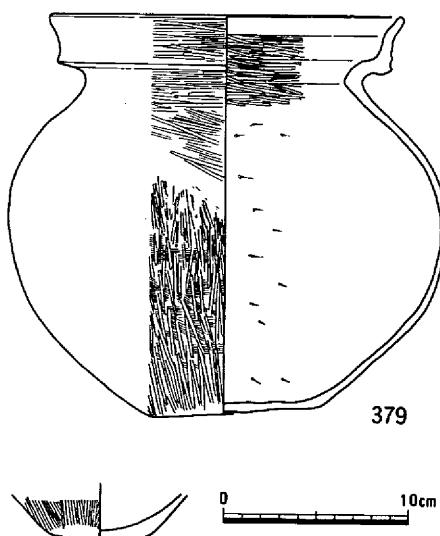
#### 土壙86、87

第4調査区北西隅に、南北に2基隣接して位置する貯蔵用の土壙である。いずれも円形の平面をなす。平面規模は、土壙86の上面が長径1.34m×短径1.24m、底面で長径1.16m×短径1.07m、深さ90cmを測る。北側に位置する土壙87が上面で長径1.6m×短径1.55m、底面で長径1.22m×短径1.2m、深さ1.4mを測る。掘り方断面は、いずれも筒状をなすものの、底面では土壙87がほぼ中央の東西で約20cmの段差がある。土壙86は、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、上層の1、2層が両土壙の上部を多い、3層以下の下層も両土壙とも同様の堆積をなしていることから、ほぼ同一時期に埋没した遺構と考えられる。時期は、いずれの土壙とも



第306図 土壌88出土遺物



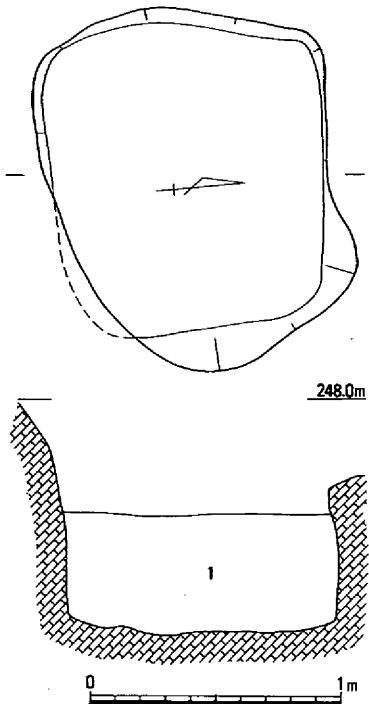
第307図 土壌90出土遺物

出土遺物が細片のため確定し難いが、器形の特徴や土壌の形状等から弥生時代の後期後半から終末期のものであろう。

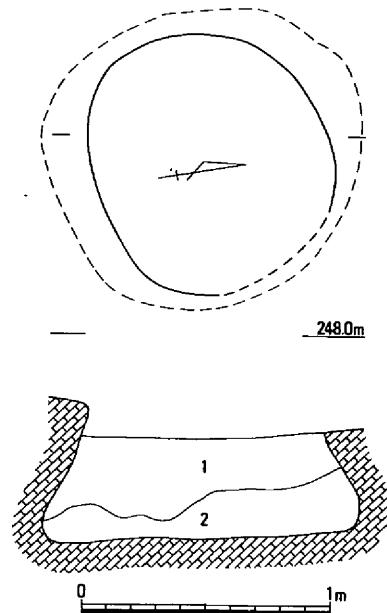
#### 土壌88

第4調査区北端の段状遺構8の平坦部に位置する貯蔵用土壌で、底面より壺形土器の2個体が出土している。平面規模は、上面がやや不整形な円形をなし長径1.05m×短径85cm、底面ではほぼ円形をなし長径1.06m×短径1.02mを測る。掘り方断面は、袋状をなし、底面では3段に高低差があり、北東部が最も深く77cmを測る。

### 3 上野遺跡



第308図 土壙91 (1/30)  
1. 灰黃褐色粘質土



第309図 土壙93 (1/30)  
1. 明黄褐色土  
2. 黒褐色土

埋土は、3層に分離可能であるが、大半は第2層の鈍い黄褐色土が占める。時期は、底面より出土の壺形土器の器形特徴から弥生時代後期の後半期と考えられる。

#### 土壙90

第4調査区ほぼ中央の竪穴住居11内に位置する3基の土壙の内の1基である。土層断面の観察や検出状況から土壙91と同様に竪穴住居11の廃棄後に設けられている。平面規模は、上面で方形をなし長辺1.14m×短辺1.1m、底面では、長方形をなし長辺1.1m×短辺86cmを測る。掘り方断面は、垂直もしくは若干袋状を呈し深さ60cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、上下2層に大別でき、上層の灰黄褐色粘質土中に若干の土器片を含んでいる。時期は、出土遺物に細片が多く確定し難いが、器形の特徴等から弥生時代終末期であろう。

#### 土壙91

第4調査区中央の竪穴住居11と重複した3基の土壙の内の南側の1基である。当土壙は、土壙90と同様に竪穴住居11の廃棄後に設けられた貯蔵用の土壙である。平面規模は、上面でやや不整形な方形をなし長辺1.45m×短辺1.16m、底面では長方形をなし長辺1.24m×短辺1.1mを測る。掘り方断面は、筒状をなし深さ65cmを測り、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、灰黄褐色の粘質土の単一層である。時期は、出土遺物に細片が多く確定し難いが、形状や切り合い等から弥生時代終末期であろう。

#### 土壙93

第4調査区の竪穴住居11と重複した3基の土壙内の1基である。当土壙は、竪穴住居11の床面下に位置していることや土壙埋土を切り込んで住居の主柱穴の1本を設けていることから住居造成以前の遺構である。平面規模は、上面で橢円形をなし長径1.05m×短径94cm、底面では円形をなし長径1.28m×短径1.23mを測る。掘り方断面は、深さ55cmを測る袋状をなし、ほぼ水平な底面をなす。

埋土は、上下2層に分離できる。時期は、出土遺物が皆無で確定し難いが、形状や遺構の切り合い等から弥生時代後期の後半期であろう。

#### 土壙94

第2調査区中央付近の竪穴住居2の南側に位置する浅い溝状の土壙である。平面規模は、長方形をなし、長さ2.4m×幅83cmを測る。掘り方断面は、浅い皿状をなし最大深さ15cmを測る。

埋土の下層は、地山の混入が激しい暗褐色土である。時期は、出土遺物が少量で確定し難いが、器形の特徴等から弥生時代終末期と考えられる。

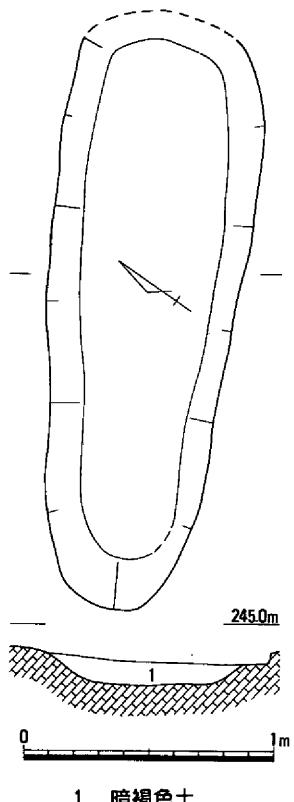
#### 段状遺構

##### 段状遺構1、2

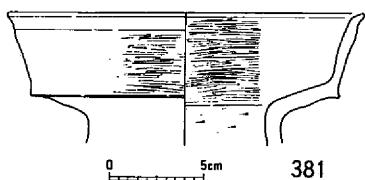
第1調査区南端の東斜面に等高線に沿って上下2段には接して位置する段状遺構である。段1、2の床面差は、30cm程である。

上段に位置する段状遺構1は、やや残りが悪く、南端では掘り方が不明瞭となる。規模は、現存長3.4mを測り、壁下には幅20cm程度のやや幅の広い浅い溝を設けている。

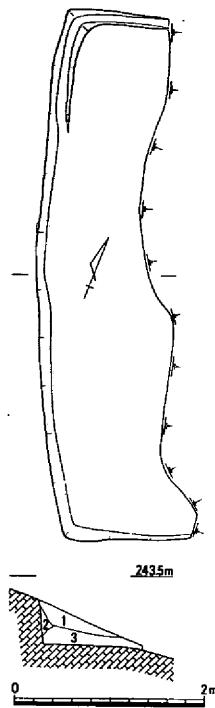
下段の段状遺構2は、上段より良好に残り、全長4.8mのコ字の区画をなし、平坦部も最大で1m程残存している。壁下には、幅60cm前後の段状遺構1と同様のくぼみ状の溝を設けている。さらに平坦部には、合計3本の柱穴が認められる。このうち区画の両端付近に位置する2



第310図 土壙94 (1/30)

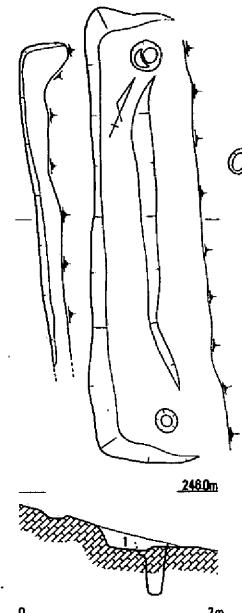


第311図 土壙94出土遺物

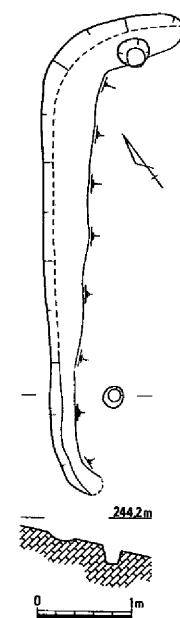


1. 黒色土（黒ボク）
2. 明黄褐色土
3. にぶい黄橙色黒褐色混り土

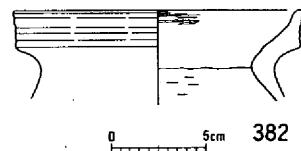
第313図 段状遺構3  
(1/80)



第312図 段状遺構1、2  
(1/80)



第315図 段状遺構4  
(1/80)



第314図 段状遺構3出土遺物

区画を設けている。掘り方平坦部は、最大幅1.5m程残存し、ほぼ水平面をなす。掘り方の北西隅には、幅20cm、深さ2~3cm程度の浅い溝を設けている以外には何らの施設も認められない。

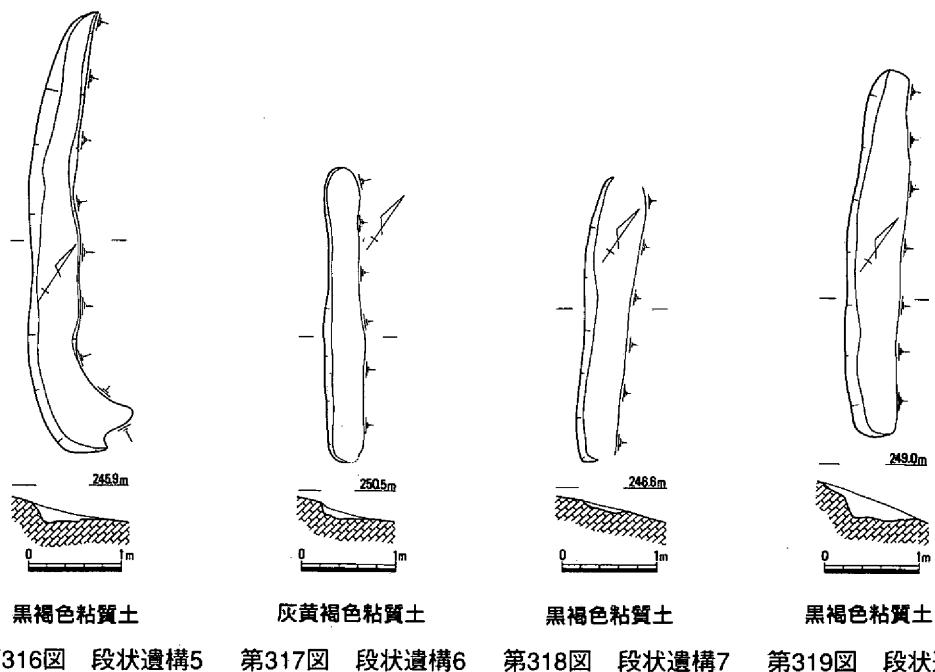
埋土は、3層に分離可能であるが、黒褐色の黒ボクが大半を占める。時期は、出土遺物が皆無で確定しがたいが、埋土や遺構の形状等から弥生時代後期の後半期の集落に伴う遺構と考えられる。

本の柱穴配置は、上屋の支柱の可能性が考えられる。

埋土は、いずれも黒褐色を呈す黒ボクが堆積している。出土遺が皆無で時期の確定はしがたいが、いずれの遺構も形状や配置等から弥生時代後期後半期の集落に伴うものと考えられる。

#### 段状遺構3

第1調査区の南東端で、段状遺構1、2の下方6m付近に位置する段状遺構である。掘り方は、海拔243.3m前後の等高線に沿い、全長5.6m、深さ50cm程を測るコ字形の



#### 段状遺構 4

第1調査区南半の南面する緩斜面に位置する段状の遺構である。平面規模は、全長5.0m、深さ7～8cmを測るコ字形の区画をなす。平坦部は、北東端で60cm程残存している。掘り方内には、南北の2ヶ所に柱穴が位置することと壁下に幅20cm程の浅い溝が巡っている。

出土遺物が皆無で、時期の確定がしがたいが、遺構の形状や配置等から弥生時代の集落に伴う遺構と考えられる。

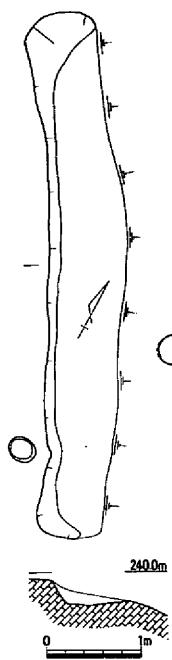
#### 段状遺構 5

第4調査区東斜面の中央付近に位置する段状遺構である。平面規模は、全長4.7m、深さ20cm程を測る。やや急斜面に位置するため平坦部の残りも最大60cm程と狭い。掘り方内には、壁下に沿って幅50cmとやや広いくぼみ状の溝が巡るのみで柱穴等は認められない。

埋土は黒ボコの単一層である。時期は、出土遺物が皆無で確定しがたいが形状や配置等から弥生時代の集落に伴う遺構と考えられる。

#### 段状遺構 6

弥生時代の集落に伴う遺構としては、調査区の最南端となる第4調査区中央に位置する段状遺構である。規模は、等高線に沿いほぼ直線の掘り方をなし、全長3.0m、深さ15cmを測る。平坦部は、ほぼ水平面を保っているものの、急傾斜のため最大幅40cm程と残りが悪い。区内には、柱穴等の遺構は何ら認められない。



第320図 段状遺構 8 (1/80)  
にぶい黄褐色粘質土

埋土は、やや褐色の強い灰黃褐色の粘質土の単一層である。時期は、出土遺物が皆無で確定しがたいが形状や配置等から弥生時代後期の後半期の集落に伴うものと考えられる。

#### 段状遺構 7

第4調査区の東斜面下方に位置する段状遺構である。規模は、等高線に沿いほぼ直線の掘り込みをなし、全長3.0m、深さ10cm程度を測る。平坦部は、断面観察によると若干溝状をなすものの、急傾斜に位置していることから最大幅50cm程度と狭い。区画内には、柱穴等の遺構は何ら認められない。

埋土は黒ボコの単一層である。時期は、出土遺物が皆無のため、確定しがたいが、埋土や形状、立地等から弥生時代の集落に伴うものと考えられる。

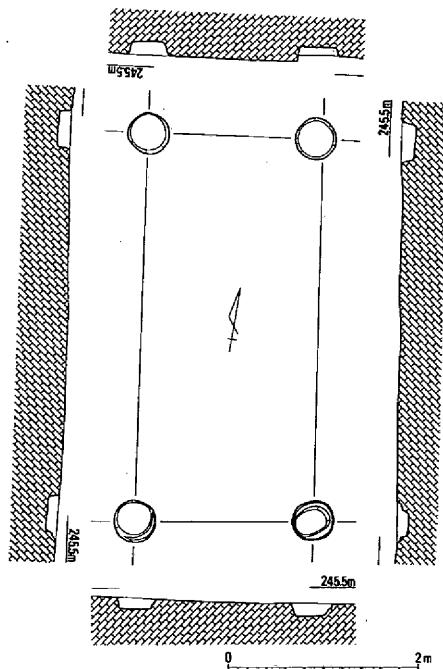
#### 段状遺構 8

第4調査区北端の丘陵東斜面に位置する段状遺構である。規模は、等高線に沿いほぼ直線の掘り方をなし、全長5.5m、深さ20cmを測る。平坦部は、最大幅80cmを測るほぼ水平面をなす。区画内には、中央やや南よりに直径30cmの柱穴を1本確認している以外には、何も設けていない。

埋土はややすえた感じのにぶい黄褐色の粘質土の単一層である。時期は、出土遺物が皆無で確定しがたいが埋土や遺構の形状、配置等から弥生時代後期後半期の集落に伴うものと考えられる。

#### 段状遺構 9

第4調査区の竪穴住居11の南側にほぼ接するように位置する段状遺構である。掘り方規模は、等高線に沿い全長3.9m、の平坦面をなす。平坦部は、急傾斜に位置しているにもかかわらず、深さ40cm最大幅60cm程度残り、ほぼ水平面をなす。区画内には、何らの施設も設けていない。



第321図 建物 1 (1/80)

埋土は、黒ボコの單一層である。時期は、出土遺物が皆無のため確定しがたいが埋土や形状、配置等から弥生時代の集落に伴う遺構と考えられる。

#### 建物

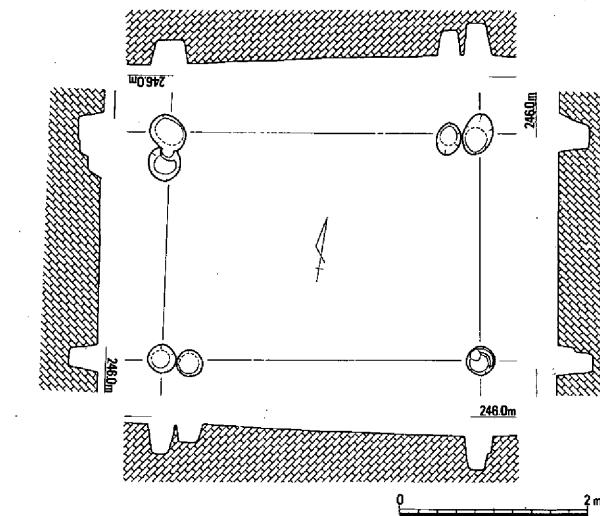
##### 建物 1

第1調査区の北端で竪穴住居4を一部切り込んでいる桁行間隔の長い桁行1間×梁行1間の掘立柱建物である。建物規模は桁行4.1m、梁行1.85m、面積7.79m<sup>2</sup>を測る。柱穴は、直径40cm強のほぼ同形同大をなし、深さはいずれも20~30cmと浅い。建物長軸方位は磁北より8度西に偏るほぼ南北方向の建物である。

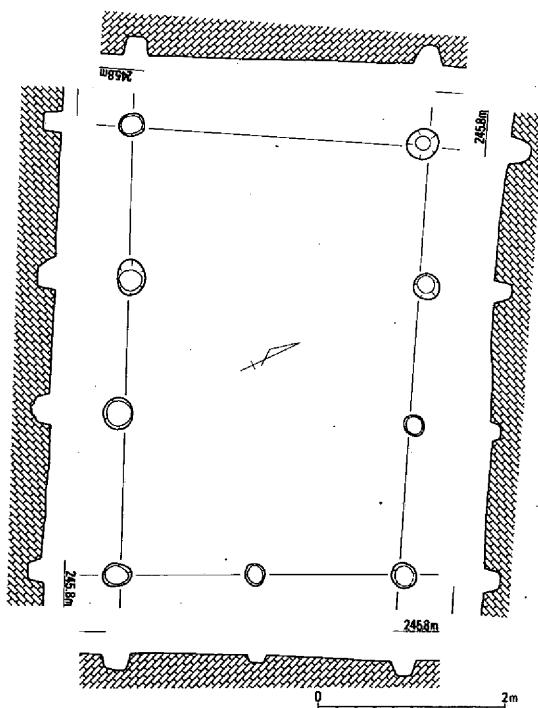
柱穴埋土は、黒ボコを主体とする堆積となし、柱痕は認められない。柱穴内からの出土遺物が皆無のため時期の確定はしがたいが、埋土や規模、切り合い等から弥生時代の終末期のものと考えられる。

##### 建物 2

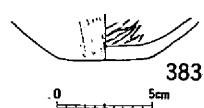
##### 第1調査区北西の竪穴住居5



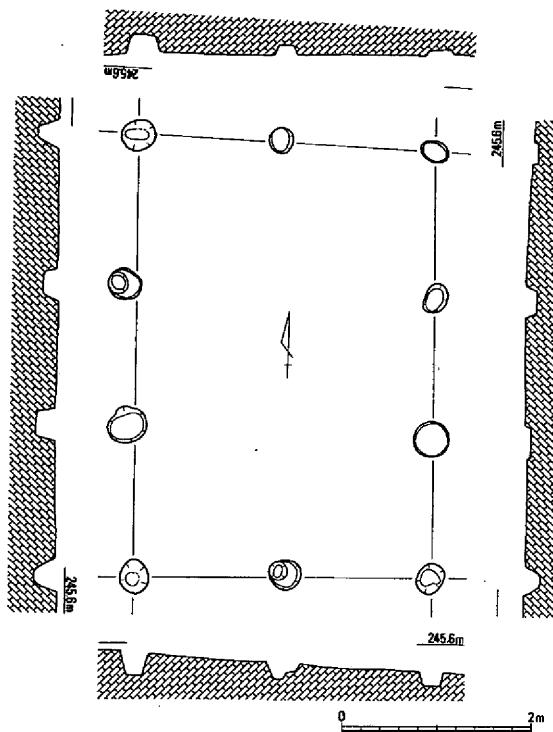
第322図 建物2 (1/80)



第323図 建物3 (1/80)



第324図 建物3出土遺物



第325図 建物4 (1/80)

と建物3の間に位置する桁行3間 (4.6m) × 梁行2間 (3.1m) を測る掘立柱建物である。建物の棟方向は磁北より63度西に偏る。梁行中央の柱穴は、他の柱穴と比較して浅く、西側ではわずかに10cm程度の残りをなし、東側では削平によりすでに消失したものとみられる。

柱間寸法は、桁行中間部が1.4m程、他が1.5~1.7mを測り、中間部が他と比較して若干狭い配列である。柱穴はいずれもほぼ円形をなし、直径20~35cm、深さは梁行中間部を除き20cm前後とほぼ一定の規模である。建物床面積は、14.4m<sup>2</sup>を測る。

柱穴内出土遺物は、P1に若干の土器片が認められるものの

時期の確定には乏しい。ただ埋土や建物の配置状況から集落に伴う可能性もある。

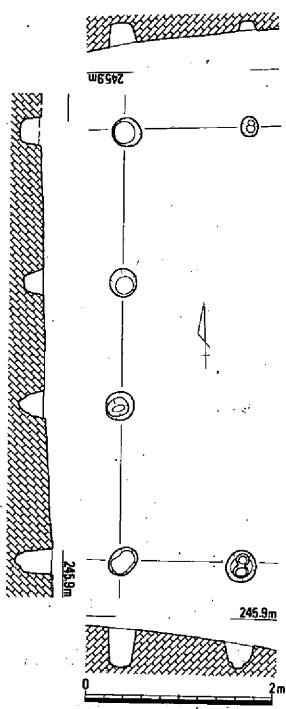
### 建物3

第1調査区の北西部で縄文の落穴遺構14と重複する掘立柱建物である。建物規模は、桁行1間 (3.35m) × 梁間1間 (2.4m) のほぼ東西棟である。建物の棟方向は、磁北より80度東に偏る。柱穴は、南東隅を除いて他の3本がいずれも重複しており、建て替えが考えられる。柱穴埋土は、黒色~黒茶色をなし、一部では柱痕跡も認められる。柱穴規模は、直径30~40cm、深さ30~40cmを測り、いずれも同形同大をなす。建物床面積は、8.0m<sup>2</sup>である。

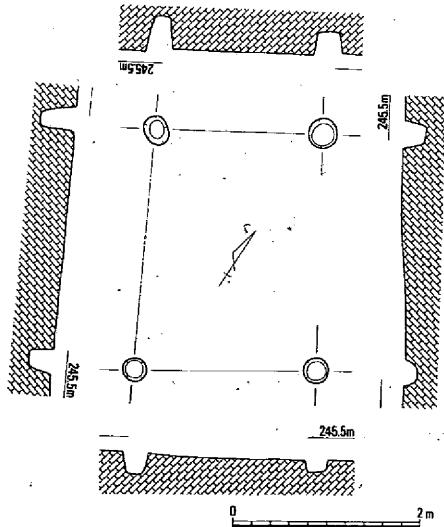
出土遺物は、図化した以外はいずれも細片のため時期の確定がむづかしいが、建物の配置や規模、埋土等から判断して弥生時代のものと想定される。

### 建物4

第1調査区中央のやや北よりに位置する掘立柱建物である。建物規模は、桁行3間 (4.6m) × 梁行2間 (3.15m) の主軸をほぼ南北に向ける南北棟である。建物の棟方向は、磁北より1度程度西を向く。柱間は、桁、梁行とも1.45~1.6mの等間の配列をなしている。建物床面



第326図 建物5 (1/80)



第327図 建物6 (1/80)

積は、 $14.5\text{m}^2$ である。柱穴は、直径20~30cmの規模を有するものの地形が若干東に傾斜していることから深さ10~30cmと不揃いである。

出土遺物が皆無で、時期の確定がしがたいが、埋土や、形状、配列等から弥生時代の可能性も考えられる。

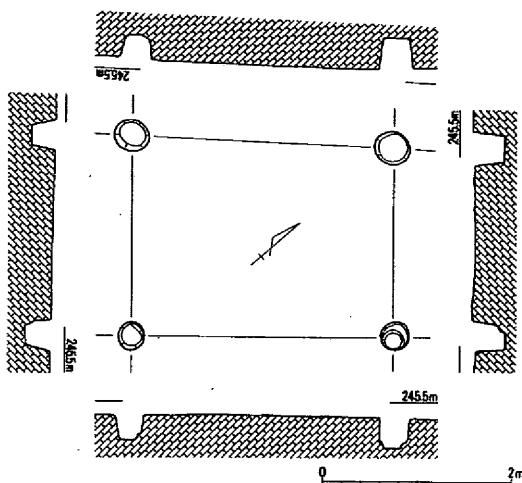
#### 建物5

第1調査区のほぼ中央、竪穴住居1と2の間に位置する梁行推定2間（約2.6m）×桁行3間（4.6m）の掘立柱建物である。建物は、東緩斜面に位置しているため東側柱列は、すでに削平を受け消失している。建物規模は梁間が現存の1間分だとすると桁行中間部の柱穴が両端の柱穴と同一レベルにあるにもかかわらず、見あたらないこと等から桁行3間×梁行2間の南北棟と考えた方が妥当であろう。建物床面積は、推定 $12.0\text{m}^2$ である。建物方位は磁北より2度程西に偏るほぼ南北棟である。柱穴は、北東隅の柱穴が削平を受け、やや規模が小さく直径20cm程、深さ10cmと浅い以外は、いずれも直径30cm前後と同規模で深さ25~40cmを測る。

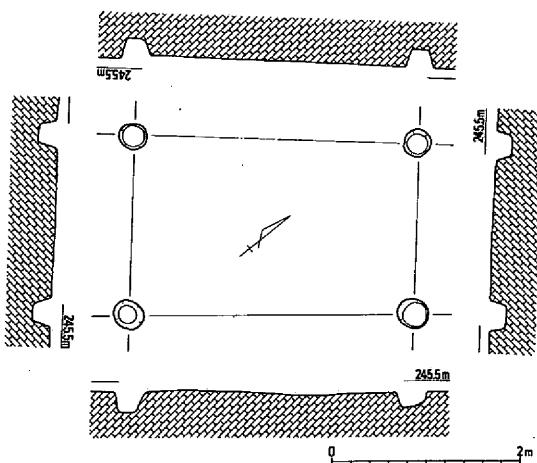
時期は、いずれの柱穴からも出土遺物が無く、確定しがたいが建物の形状や埋土配置等から弥生時代の集落に伴う建物の可能性を否定できない。

#### 建物6

第2調査区の南端に位置する小形の掘立柱建物である。建物規模は、桁行1間（2.8m）×梁行1間（2.1m）で、床面積



第328図 建物7 (1/80)



第329図 建物8 (1/80)

5.9m<sup>2</sup>を測る。柱穴は、いずれも円形をなし、直径25cm程度、深さは北西隅がやや深く40cmで他の柱穴より10cm程深く掘り込まれている。建物方位は磁北より43度西に偏っている。

時期は、柱穴内の出土遺物が皆無で、時期の確定はしがたいが、埋土や建物の形状等から弥生時代の集落に伴うものであろう。

#### 建物7

第2調査区の中央のやや東よりに建物8とほぼ接して位置する小形の掘立柱建物である。建物規模は、建物6と同様の桁行1間(2.05m)×梁行1間(1.85m)で、床面積3.8m<sup>2</sup>を測る。柱穴は、いずれも円形をなし、直径30cm程、深さ25~35cm程度である。建物方位は磁北より西に30度偏っている。

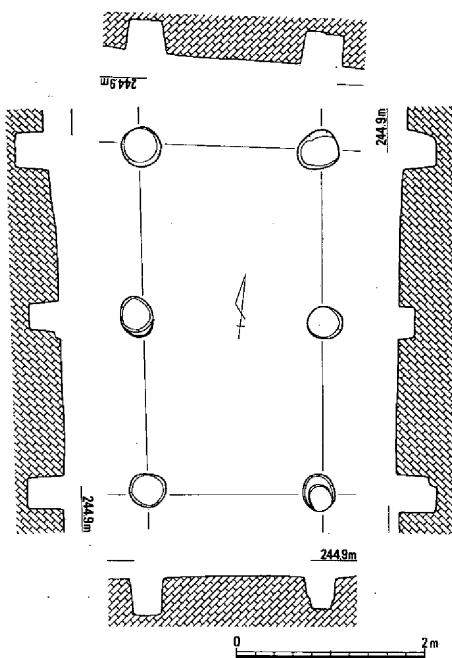
時期は、柱穴内の出土遺物が皆無で確定しがたいが、埋土や建物の形状等から弥生時代の集落に伴う可能性がある。

#### 建物8

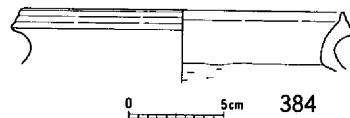
第2調査区中央のやや東よりに建物7とほぼ接して位置する小形の掘立柱建物である。建物規模は、桁行方向の長い桁行1間(3.0m)×梁行1間(1.85m)のほぼ南北棟で、床面積5.6m<sup>2</sup>を測る。柱穴は、いずれも円形をなし直径25~30cm程度の同形同大で、深さは15~20cmと比較的浅い。建物方位は、磁北より40度東に偏り、建物7と長軸方向が類似している。

時期は、出土遺物が皆無で確定しがたいが、埋土や形状、配置等から弥生時代の集落に伴う可能性がある。

#### 建物9



第330図 建物9 (1/80)



第331図 建物9出土遺物

第3調査区西端の尾根上に位置する良好な残りをなす掘立柱建物である。建物規模は、桁行2間(3.65m)×梁行1間(1.9m)の南北棟で、床面積6.9m<sup>2</sup>である。桁行柱間寸法は、1.8~1.85mとほぼ等間隔である。建物の棟方向は、磁北より7度西である。

柱穴は、直径35~45cm程度のほぼ同形同大をなし、深さは、東側の桁行中央の柱穴が他と比較してやや浅く20cm程で他の柱穴は35~40cmの深さである。

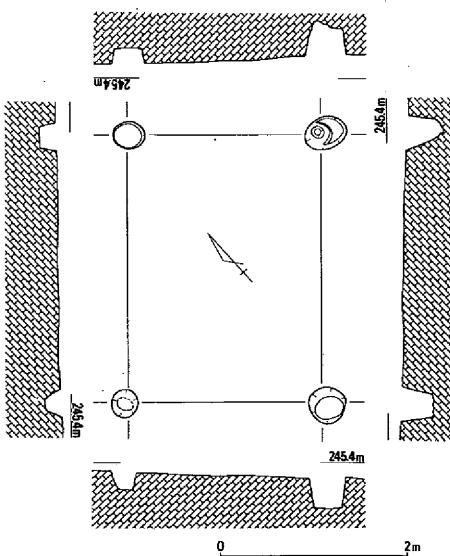
出土遺物は、4本の柱穴内より弥生土器の細片が出土しており、図示したものは、南東隅の柱穴より出土したものである。

建物の時期は、柱穴内より出土した遺物が弥生時代後期後半期の特徴を持つことや、埋土の状況、形状等から弥生時代の集落に伴う掘立柱建物である。

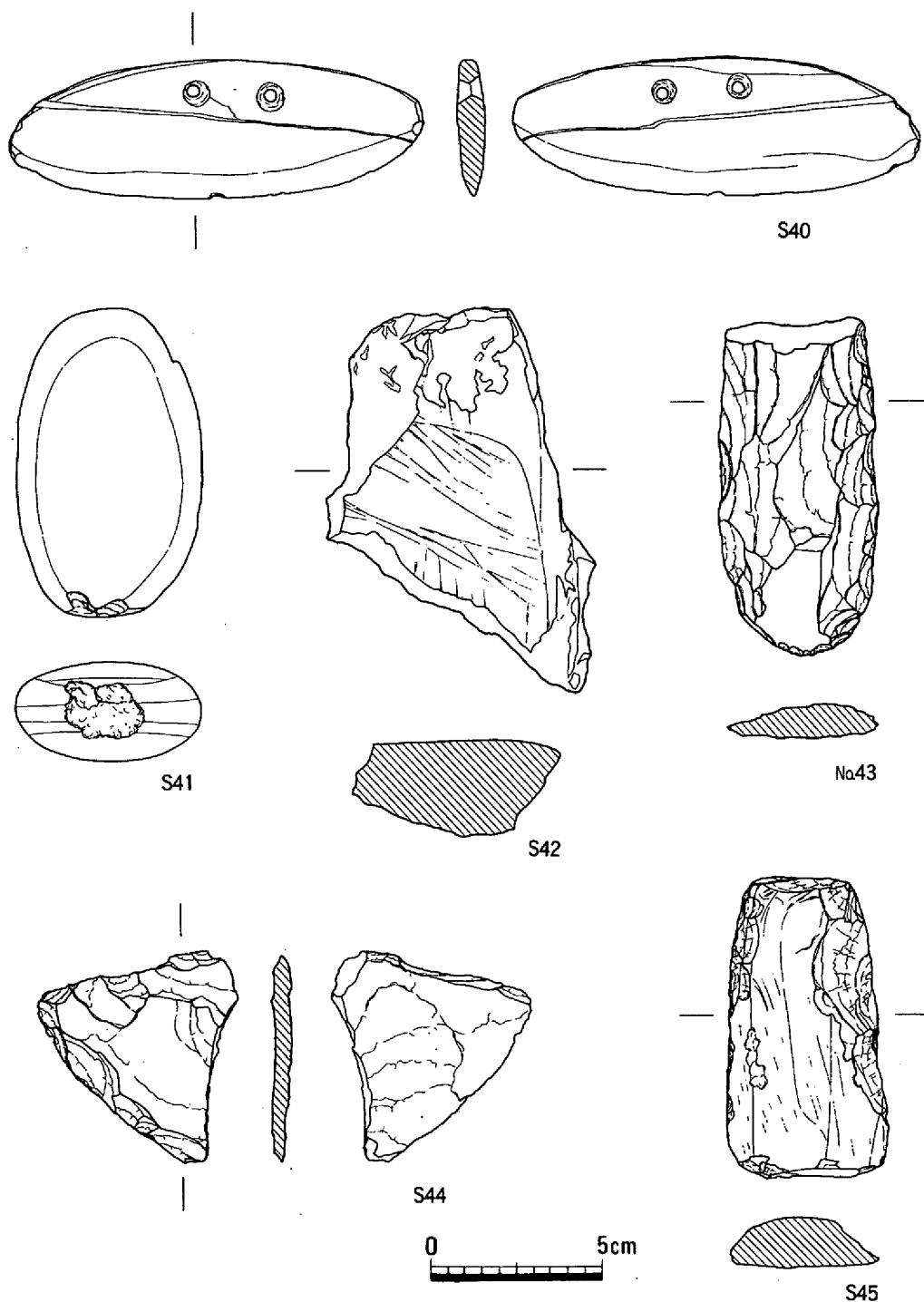
#### 建物10

第1調査区の中央やや東よりの平坦部に建物4と接し位置する。建物規模は、桁行1間(2.85m)×梁行1間(2.05m)で、床面積5.8m<sup>2</sup>を測る。柱穴は、いずれも直径30~45cmのほぼ円形を呈し、深さは、東側の2本がやや深く、35~40cm、西側の2本が浅く約20cm程である。建物の棟方位は、磁北より41度東に偏っている。

時期は、柱穴内の出土遺物が皆無で、確定しがたいが、埋土や、建物規模等から弥生時代の集落に伴うものであろう。



第332図 建物10 (1/80)



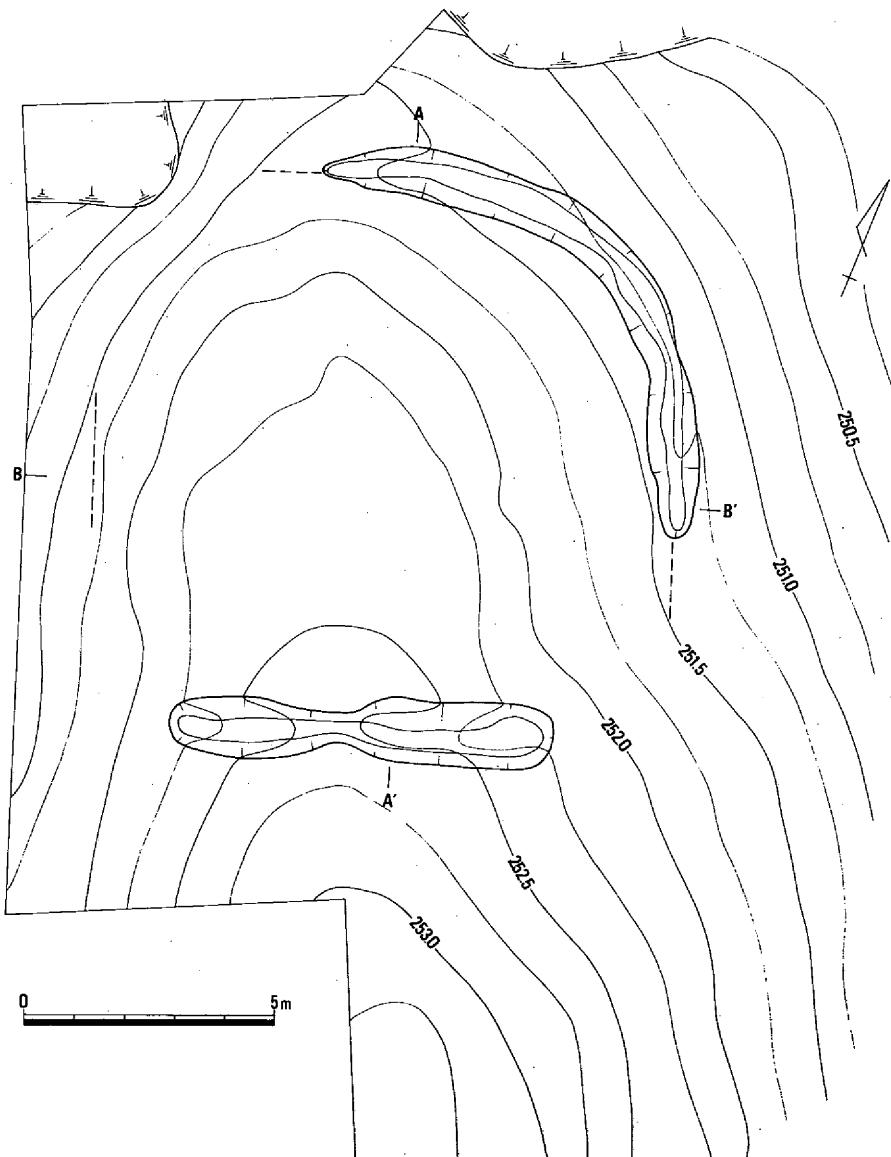
第333図 柱穴他出土遺物

## 4. 古墳時代の遺構、遺物

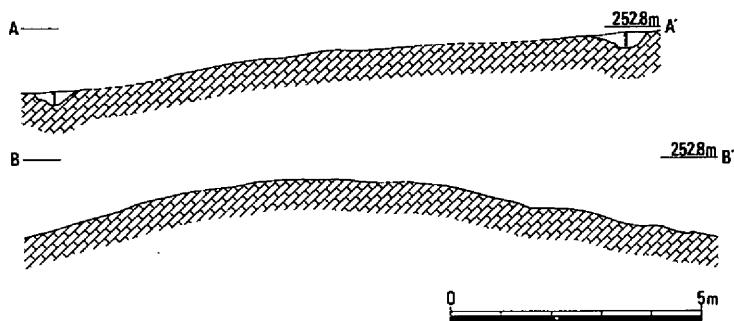
古墳

1号墳

位置 上野遺跡第4調査区の南西隅の尾根上に位置する古墳である。標高268.8mの頂部か



第334図 1号墳墳丘図 (1/150)



第335図 1号墳墳丘断面 (1/150)

ら北側に派生する尾根が上野遺跡の中核をなす平坦部にさしかかる直前の丘陵先端部、標高250m付近に位置する。古墳の西側は急峻な地形をなし、眼下に旭川の支流である目木川を望み、水田との比高差65m程を測る。

当古墳は従前より周知された古墳ではなく、第4調査区の表土剥ぎ後の検出作業により周溝の一部を確認したため再度尾根付近の拡張を行い、新たに古墳の存在を確認したものである。

**墳丘** 墳丘盛土は、すでに流失し確認できなかったものの尾根を切断する全長3.0m、幅50cm、深さ15cmの東西溝と尾根先端の北東斜面に弧を描く全長4.7m、幅40cm、深さ10~20cmの溝を掘り下げることにより、わずかであるが墳丘の形状が確認できる状況である。周溝内流入土は、比較的均質なよくしまった暗褐色土の単一層が堆積している。

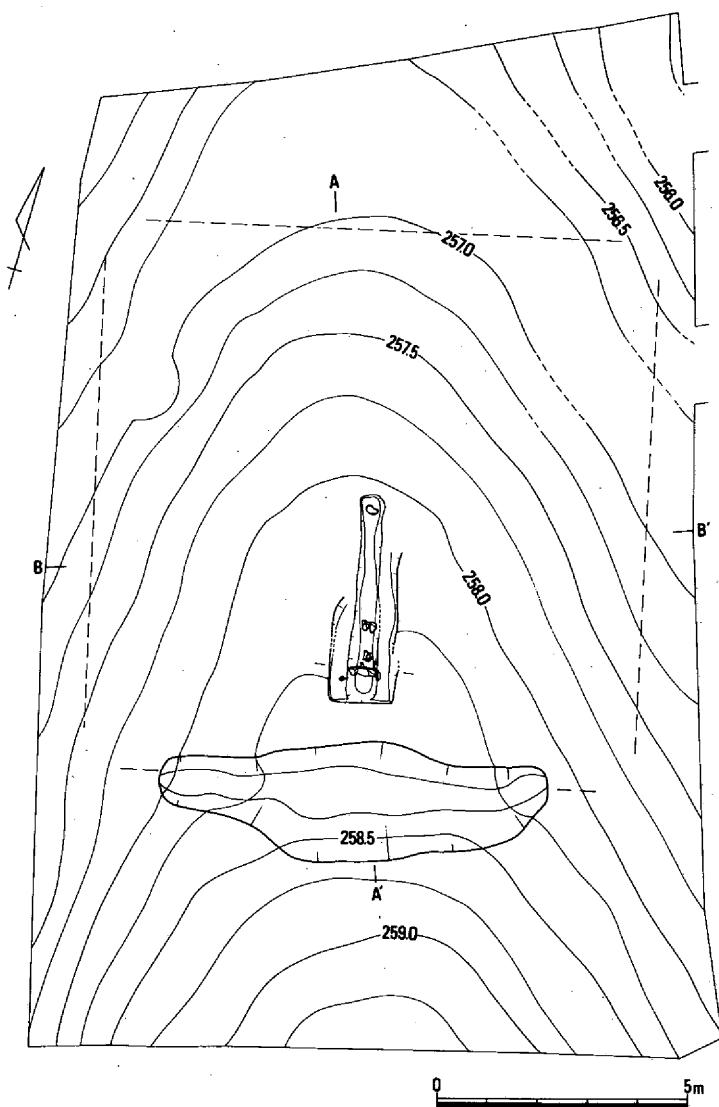
墳形は、わずかに残った2ヶ所の溝の痕跡から判断する以外に手がかりがないが、尾根切断の直線的な溝の形状から方形の区画が、墳端の弧状の溝から円形の区画が推定され、墳端部の形状のみからではいずれとも決しがたい状況である。ただいずれにしても残存の周溝から推察して直径、もしくは一辺が4.4~4.5m程の小規模墳であることには変わりがないと考えられる。

**主体部、時期** 主体部は、墳丘の中心部を詳細に調査したにもかかわらず、検出できず、すでに墳丘盛土とともに流失したものとみられる。

時期については、墳丘、周溝、周辺部からも古墳に伴うと思われる出土遺物は皆無で、確定しがたいが、横穴式石室採用前であることや古墳の形状や2号墳の状況、配置等から一応の下限を5世紀代末としておきたい。

## 2号墳

**位置** 上野遺跡の南側に位置する標高268.8mを測る丘陵頂部から北側に派生する尾根の標高258m付近のやや平坦部に位置する。1号墳とは、約30mの間隔を置き、尾根の上方、すなわち南側である。西側は急峻な地形をなし、低地の水田面と73m程の比高差がある。

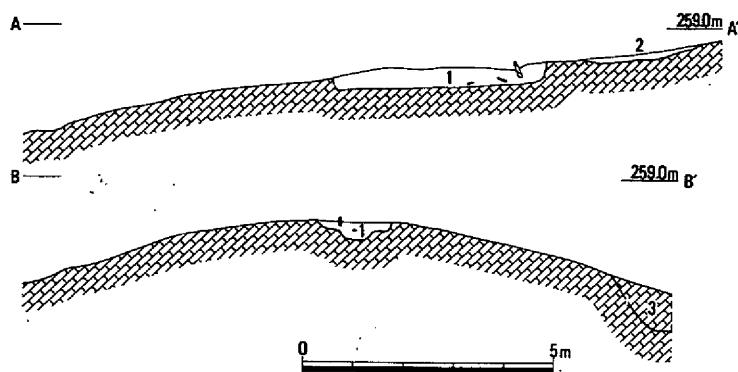


第336図 2号墳墳丘図 (1/150)

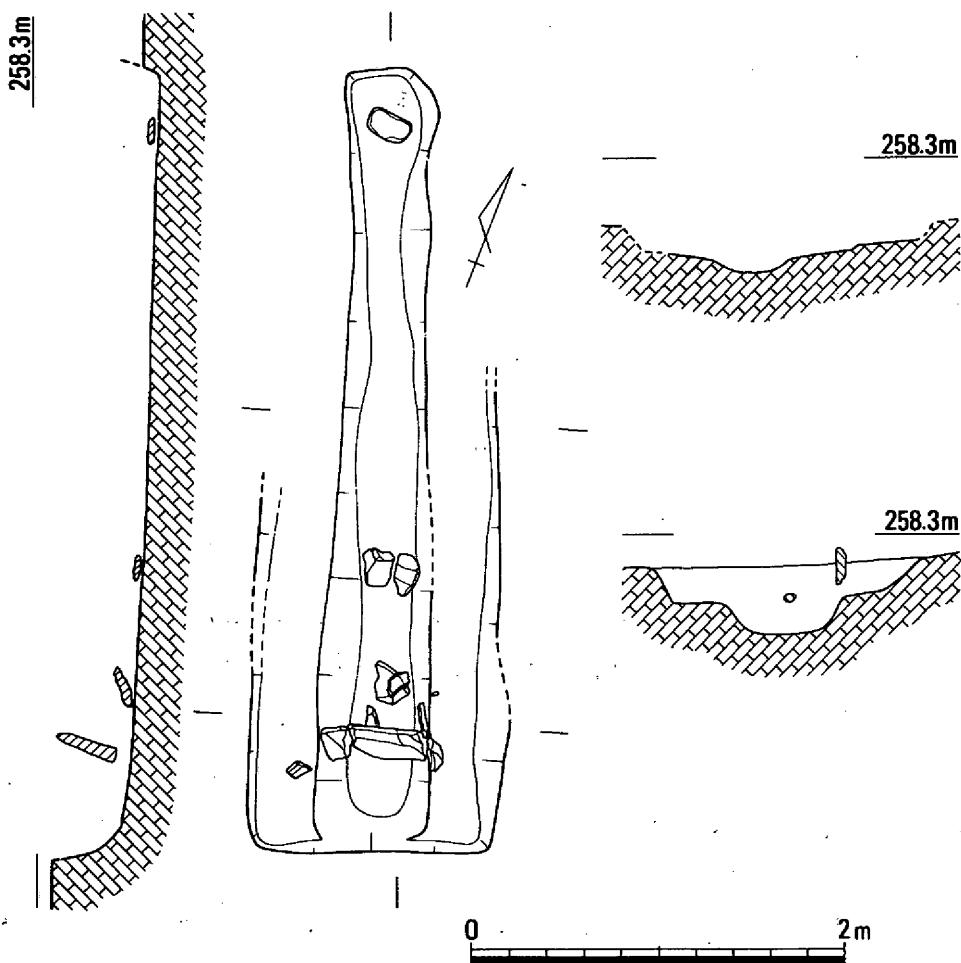
1号墳と同様に当初から周知された古墳ではなく、上野遺跡の南限を確認するためのトレンチ調査中に周溝状の落ち込みを発見したことと尾根上が若干高まりをなしていたことにより古墳の存在を想定した場所である。

ただ墳丘推定の根拠の一つとした墳端付近に検出した周溝状の落ち込みは結果的には、風倒木の痕であったため古墳の墳端を画する遺構とはならなかった。

**墳丘** 当古墳の墳端部を画する唯一のものは、尾根を切断する全長7.8m、幅2.4m、最大深



第337図 2号墳墳丘断面 (1/150)



第338図 2号墳主体部 (1/40)

さ15cm程のやや不定形な溝のみである。土層断面の観察から墳丘部は、南側がやや風化した岩盤で、北側に行くにしたがって風化した漸移層が徐々に厚く堆積しているのみで盛土の痕跡は認められなく、すでに流失している状況である。

したがって尾根切断の溝以外に墳端を明確におさえる場所がなく、墳丘規模についても確定しがたいが主体部位置や溝の形状や全体の高まり等から推定すると一辺11m前後的小規模な方墳であったと推察される。

### 主体部

主体部は、表土除去後の検出作業の段階で、石材の一部が露出していたため、箱式石棺の一部が残存している可能性をうかがわせた。しかし、その後の掘り下げの結果から、2段掘りの掘り方をなし、木棺を直葬する主体部が確認された。当初露出していた石材は、長径40cm×短径33cm、厚さ8cm程の偏平な形状をなし、掘り方の南端近くの墓壙内に立て置かれており、その両端に小礫を充填しているものもあった。おそらく木棺の小口を塞ぐ石材と推察される。墓壙は、墳丘の中央に位置し、主軸方向は、尾根筋にほぼ並行する、N20°Wの向きである。

掘り方は、北半部では、墳丘表面近くからほぼ岩盤を掘り込んでいたために、2段掘りの状況がつかめたものの、南半部では、風化土からの掘り込みで非常に検出しづらく、下段部のしかも岩盤を掘り込んだ輪郭しか確認できていない。墓壙上面の規模は、現存長2.5m、最大幅1.35m、上段の掘り込み底まで17~18cm、下段まで最大40cm程を測る。下段の掘り方は、全長4.15m、最大幅60cm、最大深さ20cmを測り、底面は若干北に向かって傾斜している。

棺痕跡は、確認できなかったが、墓壙底部の岩盤の掘削がいずれの場所もゆるく弧を描いており割竹形木棺の可能性が考えられる。木棺規模は、南側の偏平な石材を小口位置と想定すると全長約3.5m、墓壙底のカーブから推定し、最大径70cm程と推定される。墓壙底面には、両側に枕石を配置しており副次埋葬が推察される。このうち中央やや南よりのものは、20cm大の角礫2個を使用し、北端のものは、長径23cmの偏平な石材1点を使用している。

時期は、出土遺物が皆無で確定しがたいが、墳丘の形状や主体部の形態等から5世紀代の末までと考えておきたい。

## 5. 小 結

上野遺跡は、総面積6700m<sup>2</sup>程の発掘調査を行った結果、縄文時代から古墳時代前半にかけての複合遺跡であることが判明した。以下、発掘調査で得られた主要な成果について概要を記述しまとめに代えたい。

先ず、当遺跡で検出した最も古い遺構は縄文時代の20基の土壙である。このうち13基は、動物捕獲用と考えられている落とし穴の遺構である。平面形は長方形もしくは隅丸の長方形をなし、筒状に近い断面を成し、底面中央に小柱穴を設けている。ただ小柱穴はないが同様に落とし穴と見られるものも3基検出している。これらの落とし穴は、調査区全般に広がっているようであるが、詳細に見ると調査区北半の1、2、3区を囲むよう北西及び東西に位置する浅い谷に囲まれた尾根平坦部にやや集中して配置されているようである。恐らくこれらの谷を結ぶ獸道が1、2、3区の平坦部に通っていたためにこの付近を中心として落とし穴を仕掛けた可能性が考えられる。共伴遺物がなく時期の確定がしがたいが土壙73から縄文時代の後期と考えられる椀の完形品が出土している。そのほかに早期から後期の土器の細片が出土している。

落とし穴以外の遺構では、住居は確認できなかったものの比較的時期の確定がしやすい出土遺物を伴う土壙を2基検出している。このうち土壙59から後期の彦崎K2、土壙69から前期の羽島下層の全体の把握できる深鉢が出土している。

次に、弥生時代の遺構は、弥生時代後期の集落遺構で当遺跡の主要な部分を占める。遺跡の立地する東西目木川の合流する北側の丘陵は、この付近ではかなり広い緩斜面を有し弥生集落の立地する場所としてもかなりの好条件をなしていたようで、今回調査を行った地区は遺跡の西半部と考えられる。主な検出遺構は、竪穴住居11軒、掘立柱建物9棟、貯蔵用土壙59基等である。遺構の時期は、弥生時代の後期前半から終末の間に集中しており比較的短期間の集落であったことが考えられる。

検出した竪穴住居11軒のうち2軒は、焼失住居で、うち1軒の後期終末期の竪穴住居3からは多量の炭化材が出土しており家屋構造の解明に好資料を提供したものと考えられる。なお炭化材のC14の年代測定の結果1800±100年の年代が計測されている。竪穴住居の形態は、やや隅丸の方形と円形である。検出した11軒の住居のうち建て替え、もしくは拡張等の痕跡のあるものが比較的多く、方形の小形のものから終末期には円形の大形住居に変化している。特に、調査区のほぼ中央に検出した竪穴住居2は、直径10mをこえ、床面積83m<sup>2</sup>を測る県下でも最大級の規模を有す。出土遺物等から弥生時代後期後半に属し、数回の建て替えを行っている。出土遺物中では、鐵器が12点と特に多い。同様の規模を有す突出した住居は、今回掲載した落合地域の元定古墳群中の2区にも時期はやや古いが、直径が10mを越す竪穴住居8を検出してい

る。山間部における弥生後期の集落構造に相似た様相が見られたことは興味深い。

土壙は、総数92基を数え、このうち弥生時代の貯蔵用の土壙と考えられるものが59基である。底部の平面形態は、方形もしくは円形を基本とするもので、直径もしくは一辺が最小で70cm、最大で1.7m程度である。断面は、顯著な袋状をなすものと、筒状をなすものが見受けられる。ただ、筒状を呈する土壙は、袋状土壙の上層が崩壊した結果である可能性もあるが、検出した筒状の土壙からは明確な壁面の崩壊は確認できなかった。

土壙内の出土遺物のうち、調査区の中央で検出した土壙46の床面から一括廃棄のまとまった遺物があり土器編年を検討するうえで好資料となるものである。南半の土壙88からは、土壙内の貯蔵方法の一例とも考えられる2個体の大形の完形の壺が出土している。

特筆するものとして、西斜面に検出した3基の袋状土壙の周囲に上屋の支柱と考えられるいずれも浅い柱穴を検出したことである。柱穴の深さは、底部をそろえず傾斜にあわせた深さであることから簡単な被い屋の構造であったものと思われる。

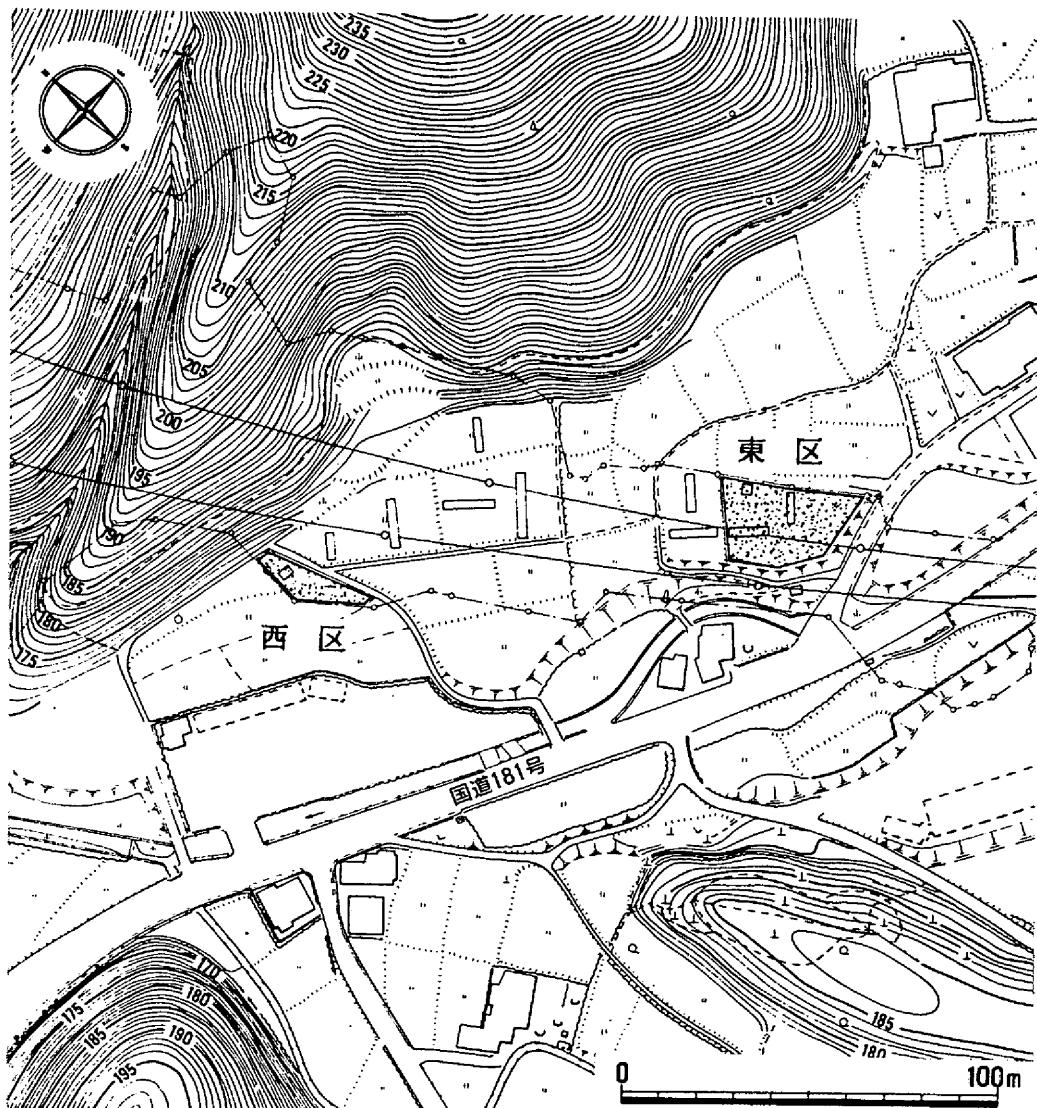
なお、土壙内の温度の測定を8、9月の短期の測定であったが調査区の南西付近に検出した土壙15を用いて土壙41、43等で検出した被い屋の構造を考慮し簡単な屋根と土壙上面の周囲に周堤帯を設けさらに檜の皮を用いた蓋をして行った。日中の土壙内の温度は、23から24.5度と一定であったが湿度も高く90パーセント以上を示していた。

以上、問題点の指摘にすぎなかつたが、美作地域の山間部における調査から得られたこれらの資料が今後の地域史の解明に役立つことを期待したい。

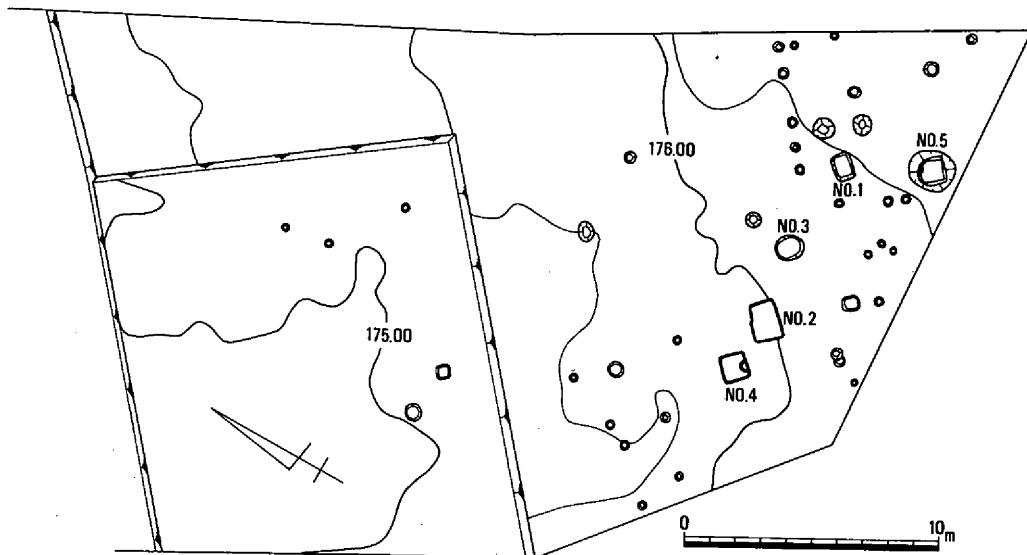
## 5. 大内原遺跡

### 1. 調査の概要

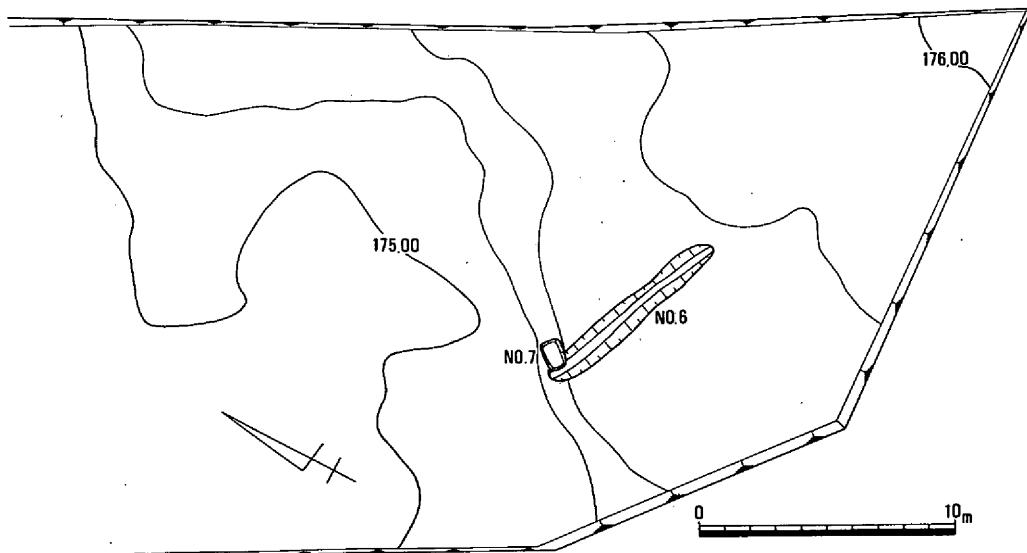
遺跡は、久世町大字目木字大内原に所在し、国道181号線とこれに沿う目木川の支流宿川の北側の海拔175m付近の段丘状の水田部分である。調査対象地前面の国道を挟んで南側の低丘陵は、同じく調査対象となった中原古墳群が所在する。



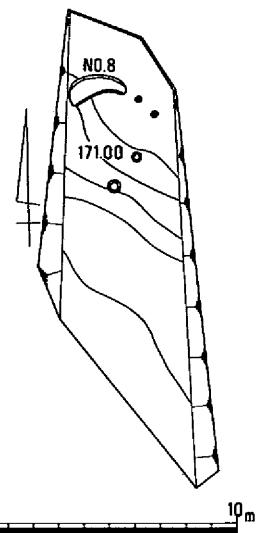
第339図 調査位置図 (1/2,000)



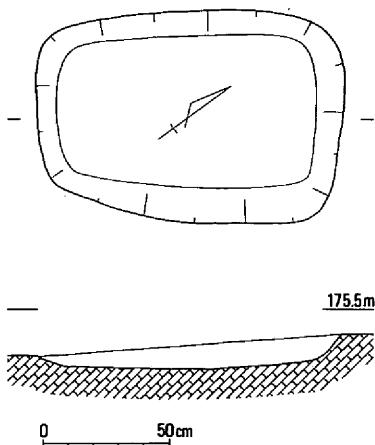
第340図 東区上層全体図 (1/300)



第341図 東区下層全体図 (1/300)



第342図 西区全体図（1／300）



第343図 土壌7（1／30）

広範囲に中世の土器片の散布が認められたことから、大内原散布地の名称で当初対応していたものの確認調査により遺構が検出されたことから大内原遺跡と名称変更して本報告とする。

当初、遺跡の状況が不明瞭であったために、確認調査を予定し、平成2年1月25日より2月上旬にかけて上野遺跡の調査終了にともない第1班が調査対象地に合計11本のトレーンチを設定した。その結果、東側の地点の台地上で小規模な柱穴を検出した。また、西側の地点では包含層よりほぼ完形の須恵器（1、2）が出土した。出土遺物の状況から、この近くに削平された古墳が存在する可能性が高く、東側の調査区とともに全面調査が必要と考えられた。

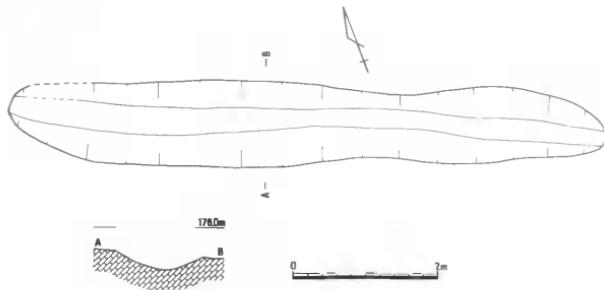
なお、両地点の中間部分は、深い谷地形を形成し遺構は存在しないと考えられた。この谷部の下層から埴輪片（3）が出土している。

第1次調査の結果に基づき全面調査の必要である2地点を、平成2年6月1日から30日の間に、木谷古墳群の調査を終了した第2班が実施した。

調査の結果、東区には上下2層の遺構が確認され、上層では円形または方形

を呈する5基の土壙と40個の柱穴を検出したが、柱穴の配置に規則性はなく、建物としてまとめることができなかった。わづかに採集した遺物から推定すると、これらの土壙や柱穴は古くても明治時代をさかのぼることはないと想定される。下層には1条の溝と1基の土壙が切り合った状態で存在し、各々の内部から中世に属する小破片の土師器が出土した。

西区には、破壊された横穴式石室の古墳が存在するかもしれないと考えられたが、弧を描く



第344図 溝6 (1/80)

浅い1条の溝と4個の柱穴を確認しただけであった。

#### 東区

##### 土壌7

No 6溝と重複する下層遺構の1つである。規模は、長辺1.21m、短辺85cmの長方形を呈す。掘り方断面は、浅い皿状を呈し深さ10cmである。埋土は淡褐色の単一層である。

出土遺物は、小破片で時期の確定がしがたいが遺物の特徴や埋土等から中世のものと見られる。

##### 溝6

調査区のはば中央に検出した下層遺構の1つである。切り合いは不明瞭であるがNo 7の土壌と重複している。検出規模は、全長8.2m、幅1.2mを測る。掘り方断面は、皿状を呈し最大深さ20cmと深い。溝底部レベルは、東端を最高とし西端で40cm程低下している。

時期は、出土遺物が小破片で定かでない特徴等から中世のものと見られる。

#### 西区

##### 溝8

調査区の北端近くに検出した浅い溝状の遺構である。全長2.3m。最大幅85cmを測り若干カーブしている。掘り方断面は、浅い皿状をなし最大深さ10cmである。溝底部レベルは、西に傾斜し西端で40cm程低下している。

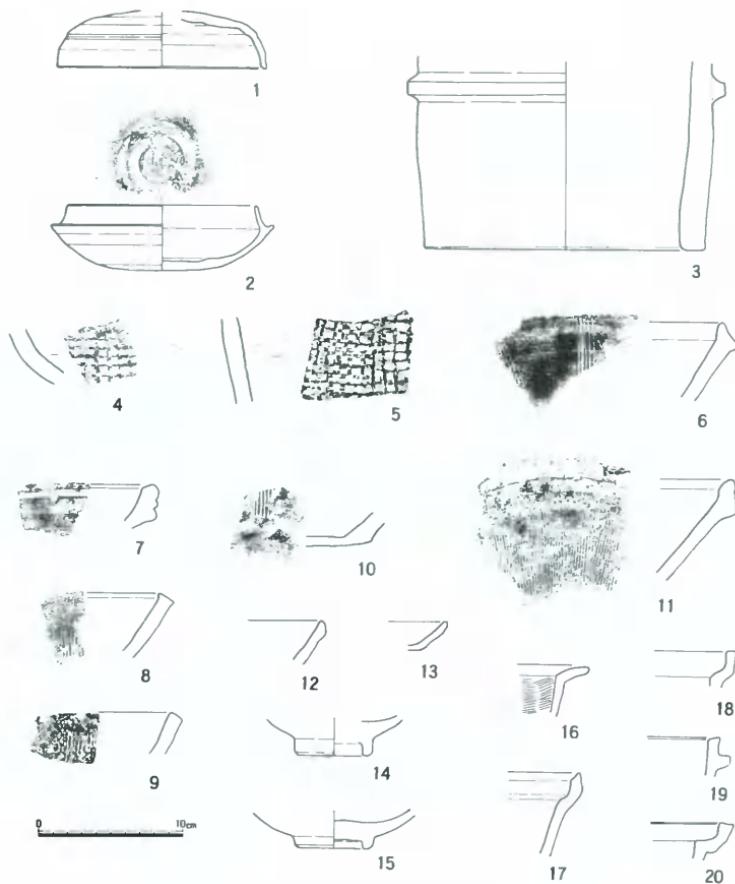
出土遺物が皆無で時期の確定はしがたい。

##### 小結

第2次の東西両調査区の全面調査の結果、中世以降の土壌、溝等が検出されたもののいずれも遺構の密度は薄く、西区で

第345図 溝8 (1/80)





第346図 出土遺物

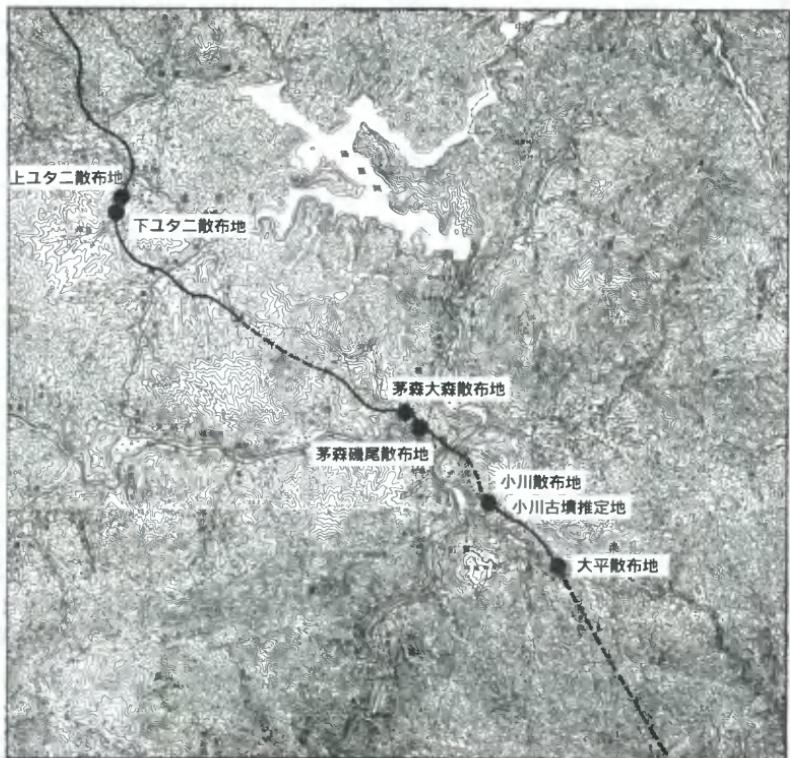
1次調査で検出した須恵器等から後期古墳の存在も想定したものとの確認できなかった。ただ、出土遺物は、少なかったものの中世の土器の種類は豊富であった。

その他に、第1次調査の谷部のトレンチ下層から埴輪片の出土が認められた。付近に埴輪を伴う古墳等が存在したことが想定される。

## 4. 湯原地域の調査

### 調査の経過と概要

湯原地域の調査は、昭和63年度に実施した湯原インターチェンジ予定地内に位置する小川散布地の遺跡確認調査が最初である。その後、平成元年度に大平散布地、茅森磯尾散布地、下ユタニ散布地、上ユタニ散布地、茅森大森散布地の確認調査を行ったが、遺物は少量出土するものの、遺構は何も検出できなかった。湯原町の遺跡分布地図に記載されている小川古墳が、自動車道予定地内に存在する可能性があつて試掘したが、所在は把握できなかった。



第347図 湯原地域位置図 (1/50,000)

## 1 調査の経過

### 日 誌 抄

昭和63年度

11月 1日 小川散布地の確認調査着手。

トレンチ掘り下げ。

15日 トレンチ土層断面実測。

17日 トレンチ埋め戻し。

21日 トレンチ配置図作成。

29日 小川散布地の確認調査完了。

平成元年度

4月 1日 発掘調査に必要な器材の準備。

4日 川上村、湯原町、久世町の遺跡や  
散布地の現地踏査。

6日 湯原町の散布地の現地踏査。

湯原町教育委員会との打ち合せ。

発掘作業員に調査内容を説明。

12日 大平散布地の確認調査着手。

トレンチ掘り下げ。

17日 トレンチ土層断面実測。

20日 トレンチ埋め戻し。

25日 トレンチ配置の平板測量。

大平散布地の確認調査中断。

26日 茅森磯尾散布地の確認調査着手。

27日 トレンチ掘り下げ。

5月 2日 トレンチ土層断面実測。

トレンチ埋め戻し。

8日 トレンチ配置の平板測量。

23日 茅森磯尾散布地の確認調査完了。

24日 下ユタニ散布地の確認調査着手。

25日 トレンチ掘り下げ。

30日 トレンチ土層断面実測。

6月 8日 トレンチ埋め戻し。

13日 トレンチ配置の平板測量。

下ユタニ散布地の確認調査完了。

14日 上ユタニ散布地の確認調査着手。

トレンチ掘り下げ。

19日 トレンチ土層断面実測。

20日 トレンチ埋め戻し。

27日 トレンチ配置の平板測量。

29日 上ユタニ散布地の確認調査完了。

7月 3日 大平散布地の確認調査再着手。

トレンチ掘り下げ。

5日 トレンチ土層断面実測。

7日 トレンチ埋め戻し。

トレンチ配置の平板測量。

10日 大平散布地の確認調査完了。

11日 茅森大森散布地の確認調査着手。

13日 下草刈り、立木伐採作業。

14日 トレンチ掘り下げ。

24日 トレンチ土層断面実測。

25日 トレンチ配置の平板測量。

8月 11日 茅森大森散布地の確認調査完了。

18日 小川古墳推定地の確認調査着手。

19日 トレンチ掘り下げ。

22日 トレンチ土層断面実測。

23日 トレンチ埋め戻し。

トレンチ配置の平板測量。

29日 小川古墳推定地の確認調査完了。

30日 発掘調査で使用した道具を久世町  
の事務所へ運搬。

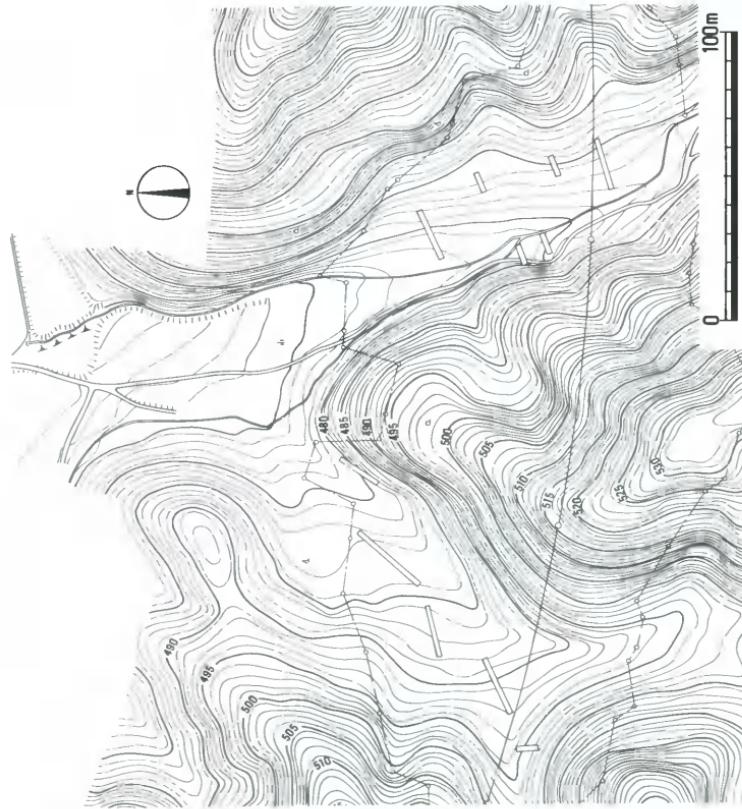
31日 湯原町内の発掘調査すべて完了。

### 上ユタニ散布地

5本のトレンチを設定して確認調査を実施した。しかしながら、多くの鉄滓と中世に属する土鍋の口縁端部の小破片とが出土したもの、遺構は検出できなかった。

### 下ユタニ散布地

調査は、谷川の両側に6本のトレンチを設定して行った。その結果、花崗岩風化土の地山面上位には暗褐色または暗黒褐色を呈する表土、黒褐色上、暗灰黒褐色上が堆積し、弥生時代に属すると思われる小破片の土器片を2片だけ採集したものの、鉄滓を含む層や遺構などは認められなかった。

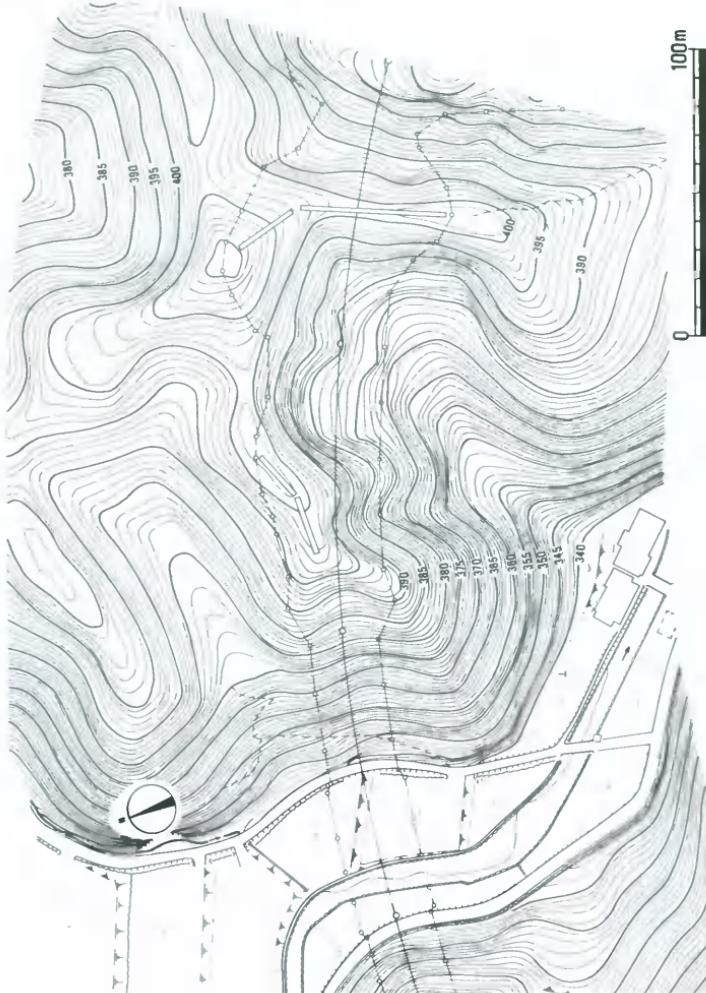


第346図 上ユタニ・下ユタニ散布地トレンチ設定図 (1/2,000)

### 3 茅森大森散布地

#### 茅森大森散布地

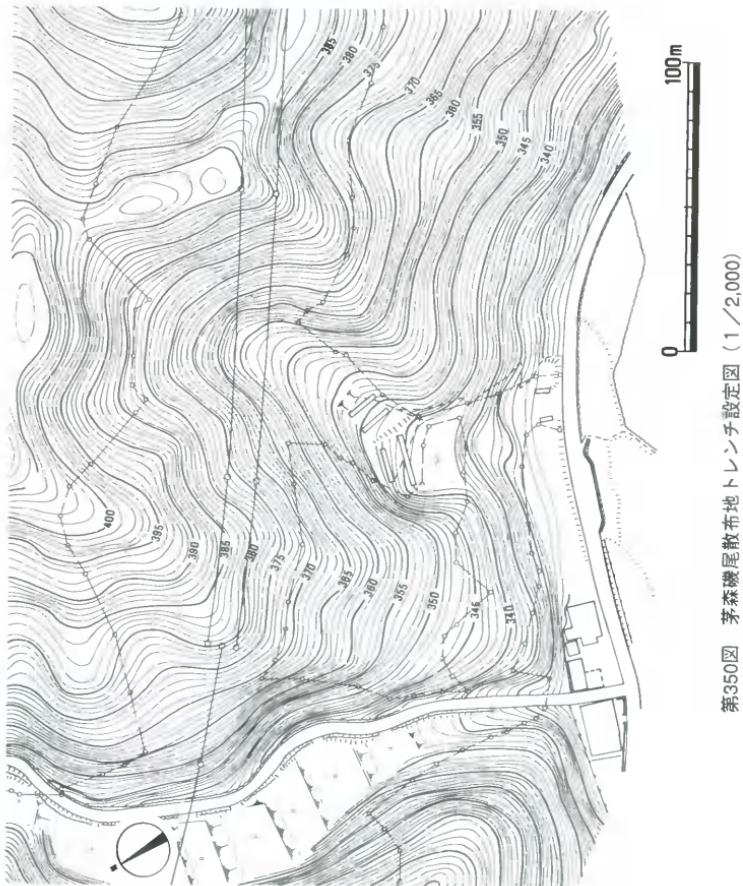
確認調査は、尾根上に4本のトレンチを設定して行った。その結果、暗褐色または黒褐色の表土の直下が黄褐色を呈する花崗岩風化土の地山で、遺物や遺構は検出できなかった。



第349図 茅森大森散布地トレンチ設定期 (1/2,000)

## 茅森磯尾散布地

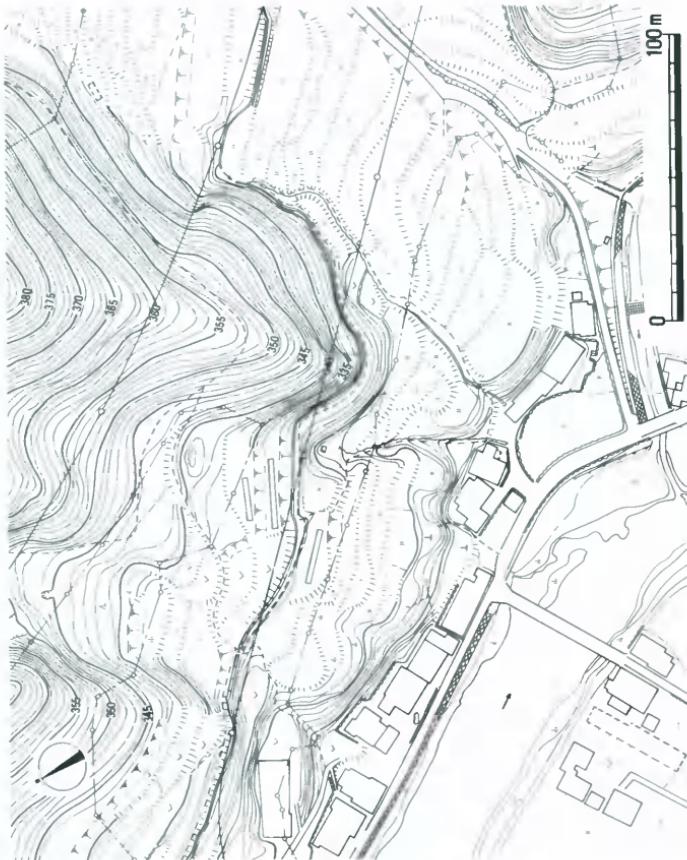
調査対象地に5本のトレンチを設定し、遺構や遺物の有無を追求した。その結果、基本的な層序は黒褐色を呈する表土、暗黒褐色土または灰黒褐色土、黄褐色の花崗岩風化土の3層で、深い部分は表土から約3mまで掘り下げた。出土した遺物としては、平安時代の土師器や須恵器と中世の土師質土器や瓦質土器の小破片が比較的多く認められ、龍泉窯系青磁碗の口縁端部破片も存在したが、遺構はいずれのトレンチからも検出できなかった。



第350図 茅森磯尾散布地トレンチ設定図 (1/2,000)

## 小川古墳推定地

調査は、雑木や雑草を刈り払い、墳丘の盛土や石室の石材が存在するかどうかを観察とともに、水田と畑地に3本のトレンチを設定して行った。土層断面は、黒色または灰黒褐色の表土、褐色土、暗褐色土、黄褐色の地山となっていた。出土した遺物としては、表土から古墳時代後期の須恵器片や中世の土鍋片と小皿片を比較的多く採集した。しかしながら古墳については、特定することができなかった。



第351図 小川古墳推定地トレンチ設定図（1/2,000）

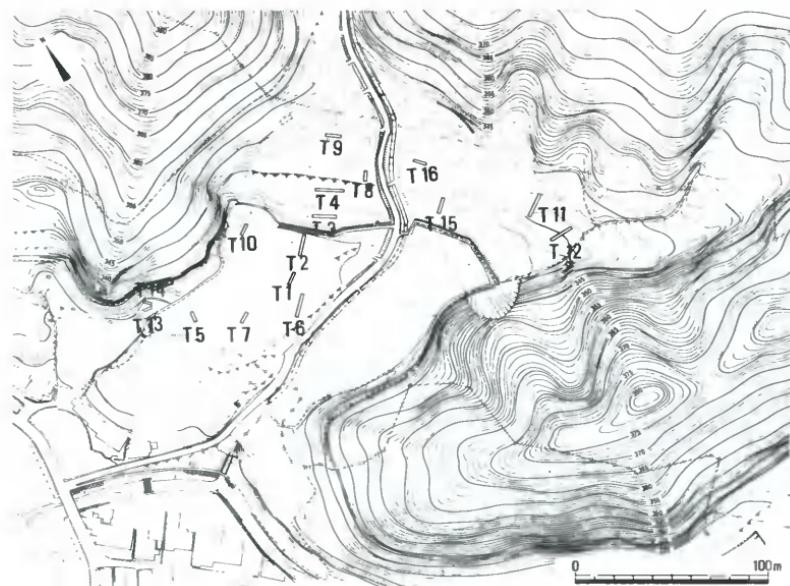
## 小川散布地

小川散布地は、農道から北側のT-1～T-10・13・14の第1散布地と同東側のT-11・12・15・16の第2散布地からなる。

第1散布地は、T-9からT-7までの比高差が12mほどあり棚田となっている。いずれのトレンチにおいても、20～30cmの黒ボコの堆積が認められその下層に黄褐色の礫を含む基盤層が存在する。黒ボコ層及び基盤層においても遺構は認めることはできなかった。遺物は、黒ボコ層より若干の近現代の磁器類が検出された。

第2散布地は、比較的平坦な水田を形成している。T-15と下の水田との比高差は、1mほどであるが湿田となっている。トレンチ調査の結果は、山砂混りの黒ボコ層が30～50cmほど堆積し、その下層に比較的大形の転石が認められた。黒ボコ層及び基盤層と考えられる転石近くにおいても遺構は認められなかった。遺物は、近現代の磁器が若干出土した。

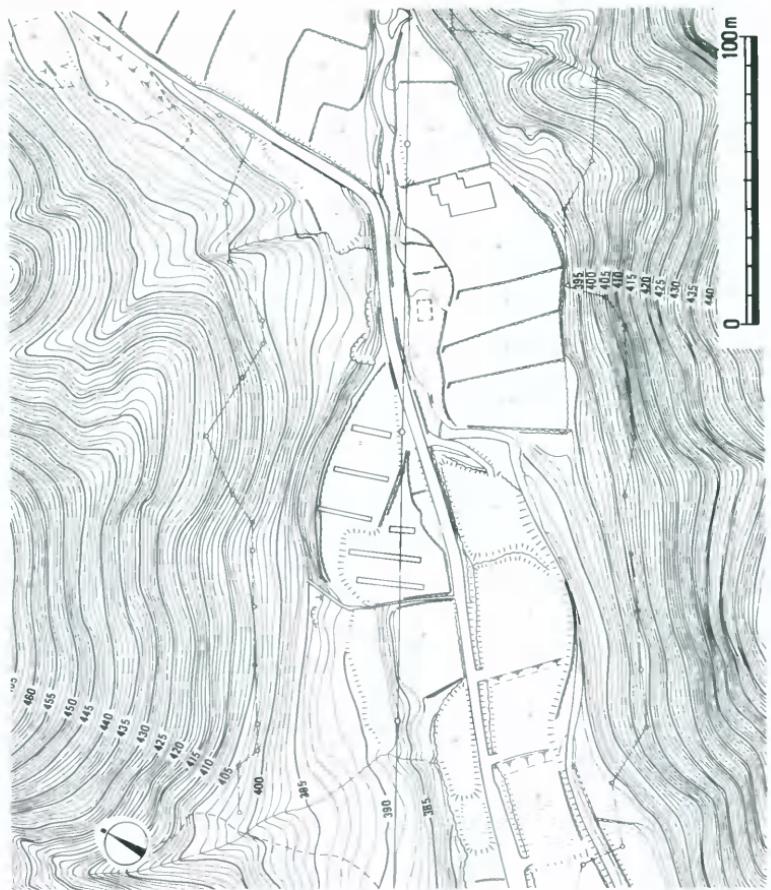
T-13・14は、地元の方が、昔に鉄刀が出土したと伝えられている地点であるが、それらに関わる遺構及び遺物は、認めることはできなかった。



第352図 小川散布地トレンチ設定図 (1/3,000)

## 大平散布地

調査範囲内に6本のトレンチを設定して調査を実施した結果、上層より下層にかけて水田耕作土の黒色土、暗灰黒褐色土、鉄分を含む暗茶褐色土、礫を多く含む暗黄褐色土、暗黒褐色土、灰黒褐色土、鉄分を含む茶褐色土、黒褐色土、黄褐色土、礫を多く含む黄褐色土が堆積していた。遺物としては、中世の備前焼摺鉢や土鍋の小破片など数片が出土したが、遺構は検出できなかった。



第353図 大平散布地トレンチ前提図（1／2,000）



1. 遺跡遠景（南から）



2. 調査後遠景（東から）

元定古墳群

図版 2



1. 1区南半全景（北西から）



2. 1区竪穴住居2（南東から）

元定古墳群

図版 3



1. 1区竪穴住居 3、段状遺構 3（南から）



2. 1区竪穴住居 4（西から）

元定古墳群

図版 4



1. 1区竪穴住居 6 (南から)



2. 1区竪穴住居 5 (南東から)

元定古墳群

図版5



1. 1区竪穴住居7（南西から）



2. 1区竪穴住居8（南から）

元定古墳群

図版 6



1. 1区土壤1 (北から)



2. 1区土壤2 (南から)



3. 1区土壤4 (西から)



4. 1区土壤5 (北西から)



5. 1区土壤6 (西から)



6. 1区土壤7 (南西から)

元定古墳群

図版 7



1. 1区2, 3, 5, 6号墳（北東から）



2. 1区3, 5, 6号墳（北東から）

元定古墳群

図版 8



1. 1区2号墳主体部（南から）



2. 1区5号墳箱式石棺（南東から）



3. 1区5号墳箱式石棺（北西から）



1. 1区6号墳箱式石棺（東から）



2. 1区6号墳箱式石棺（南西から）



3. 1区6号墳箱式石棺（西から）

元定古墳群

図版10



1. 1区7号墳全景（南西から）



2. 1区8号墳全景（南から）



1. 1区7、11、12号墳付近全景（南東から）



2. 1区12号墳付近全景（西から）

元定古墳群

図版12



1. 2区竪穴住居1（北東から）



2. 2区竪穴住居12（西から）



1. 2区竪穴住居16（南から）



2. 2区竪穴住居11, 14, 16, 22, 24（北から）

元定古墳群

図版14



1. 2区竪穴住居13（東から）



2. 2区竪穴住居18、19（南東から）



1. 2区竪穴住居15（西から）



2. 2区竪穴住居17（東から）

元定古墳群

図版16



1. 2区建物5（南から）



2. 2区建物6（南から）



1. 2区1号墳（北から）



2. 2区1号墳周溝、出土遺物（北東から）

元定古墳群

図版18



1. 2区4号墳（南西から）



2. 2区14号墳（南東から）

元定古墳群

図版19



1. 3区調査後遠景（北東から）



2. 3区近世墓、建物4周辺（北から）

元定古墳群

図版20



1. 3区10, 13号墳(東から)



2. 3区土壤28(北西から)



3. 3区土壤27(北東から)

元定古墳群

図版21



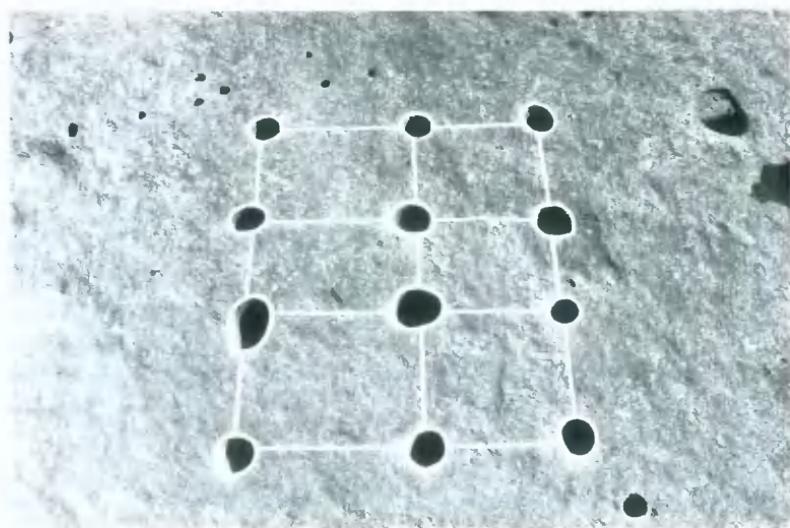
1. 4区調査後遠景（東から）



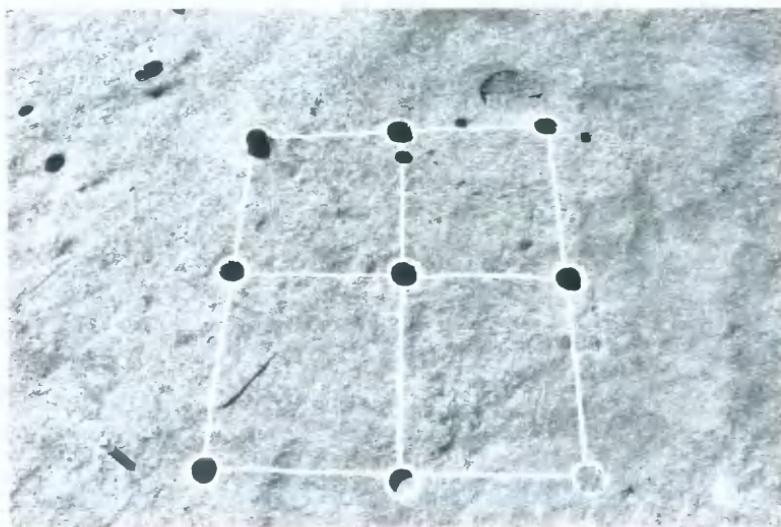
2. 4区全景（南から）

元定古墳群

図版22



1. 4区建物1（北から）



2. 4区建物2（北から）



1号墳周溝



4号墳周溝



H 2



2号墳



2号墳



1号墳



4号墳



土壤43

出土遺物 1

元定古墳群

図版24



7号墳周溝



8号墳周溝



土壤8

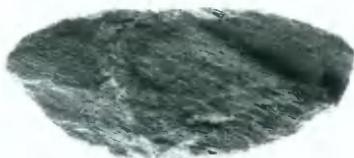


H 2



11号墳周溝

H 2



H 9



H 12



H 14

出土遺物2

信実散布地 元定散布地

図版25

1.

信実散布地全景（西から）



2.

信実散布地T2（西から）



3.

元定散布地全景（南西から）



上野遺跡

図版26



1. 航空写真（北から）



2. 調査後遠景（北から）



1. 調査区中央付近（北西から）



2. 調査区南半（北から）

上野遺跡

図版28



1. 土壌59  
(南西から)



2. 土壌59東西断面  
(南西から)



3. 土壌20  
(北東から)



1. 竪穴住居 1 (北から)



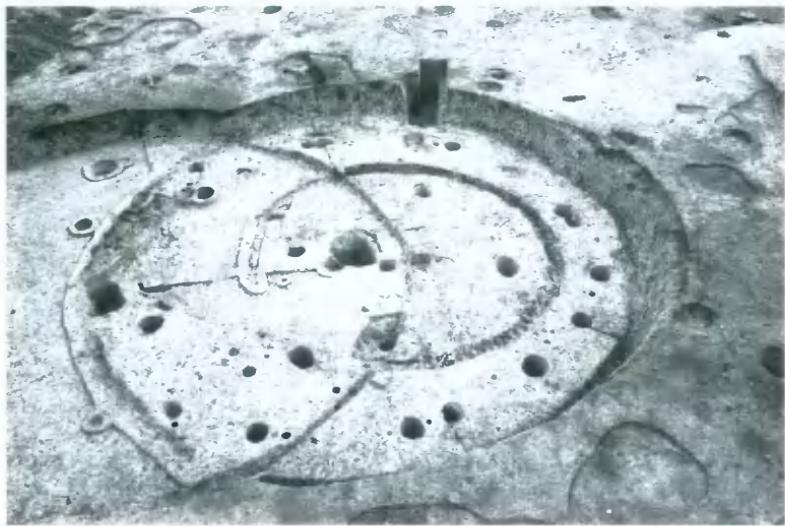
2. 竪穴住居 2 (北東から)

上野遺跡

図版30



1. 穫穴住居 3 (西から)



2. 穫穴住居 4 (北から)



1.

竪穴住居5  
(東から)



2.

竪穴住居6  
(南西から)



3.

竪穴住居7  
(南から)

上野遺跡

図版32



1. 竪穴住居 8 (南西から)



2. 竪穴住居 9 (南西から)



1. 竪穴住居10（北から）



2. 竪穴住居11（東から）

上野遺跡

図版34



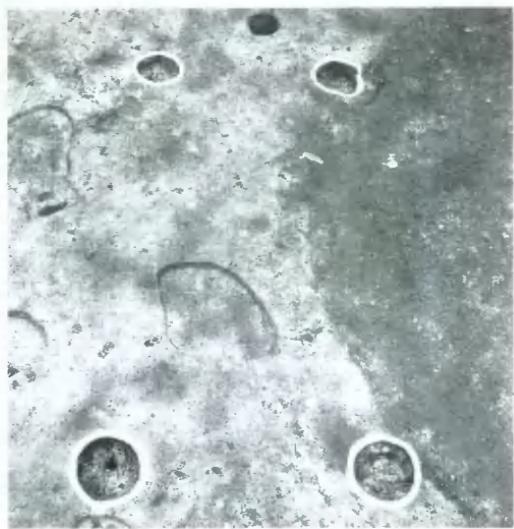
1. 段状遺構 1・2 (南から)



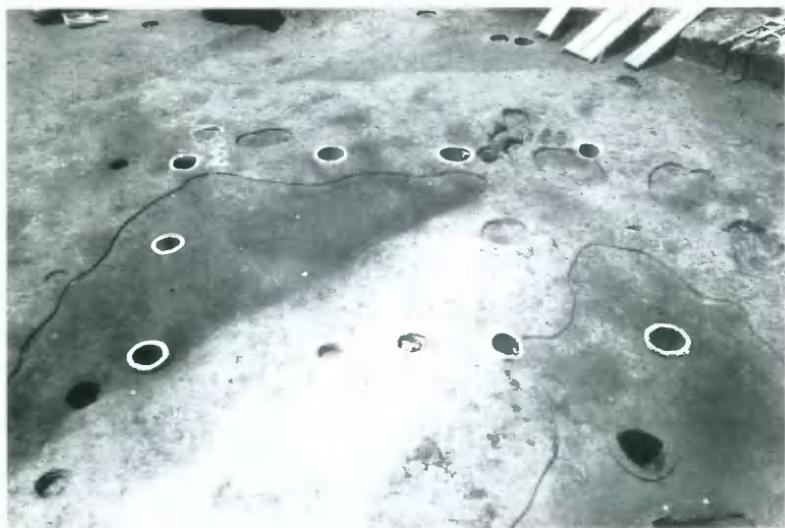
2. 段状遺構 3 (北から)



3. 段状遺構 5 (北東から)



1. 建物1（南から）



2. 建物2（北東から）

上野遺跡

図版36



1.  
建物 3  
(東から)



2.  
建物 4  
(南から)



3.  
建物 5  
(南から)

1. 土壌1、2  
断面  
(東から)



2. 土壌1、2  
(北東から)



3. 土壌  
22、  
23  
(北から)



上野遺跡

図版38



1. 土壌8断面  
(東から)



2. 土壌9断面  
(南から)



3. 土壌25断面  
(西から)

上野遺跡

図版39



上野遺跡

図版40



1. 土壌74断面  
(北から)



2. 土壌75断面  
(北から)



3. 土壌76断面  
(北から)



1. 土壌36（西から）



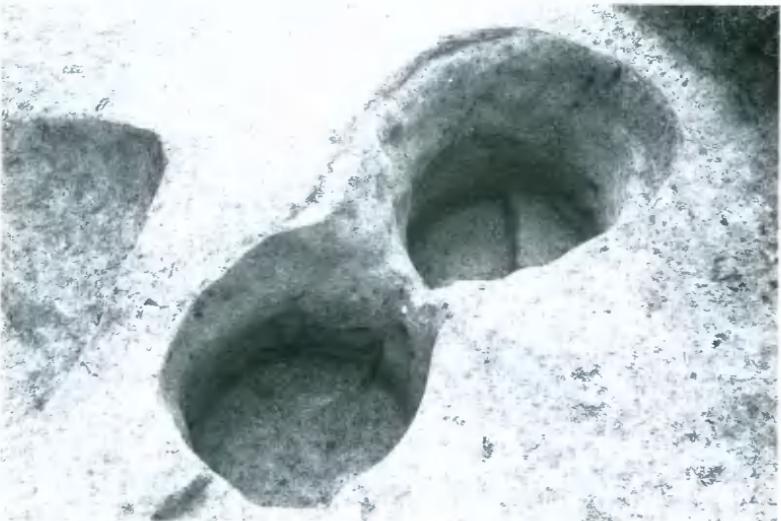
2. 土壌43、48（北東から）

上野遺跡

図版42



1. 土壙52（東から）



2. 土壙86、87（北西から）

1.

土壤46  
遺物出土状況  
(南から)



2.

土壤58  
遺物出土状況  
(南から)



3.

土壤88  
遺物出土状況  
(北西から)



上野遺跡

図版44



1.  
1号墳  
(南から)



2.  
2号墳  
(南から)



3.  
2号墳主体部  
(南から)

1.

定池古墳推定地（南西から）



2.

調査風景（北から）



3.

現地説明会（西から）

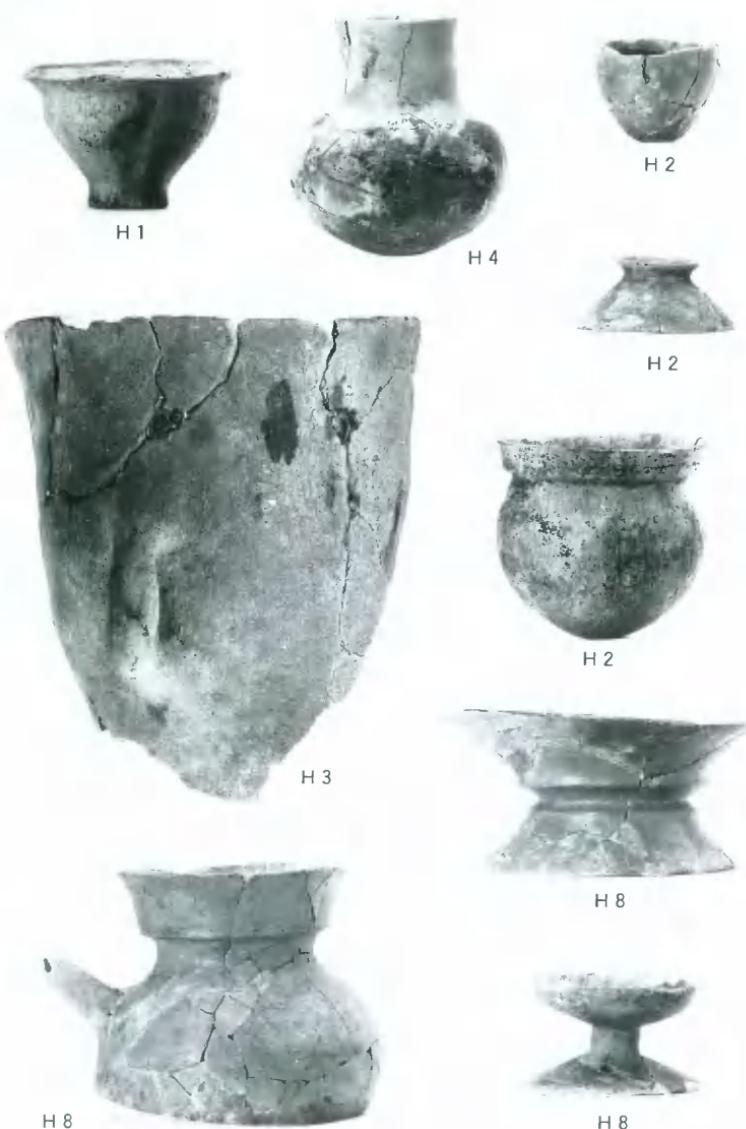


上野遺跡

図版46



出土遺物 1



出土遺物 2

上野遺跡

図版48



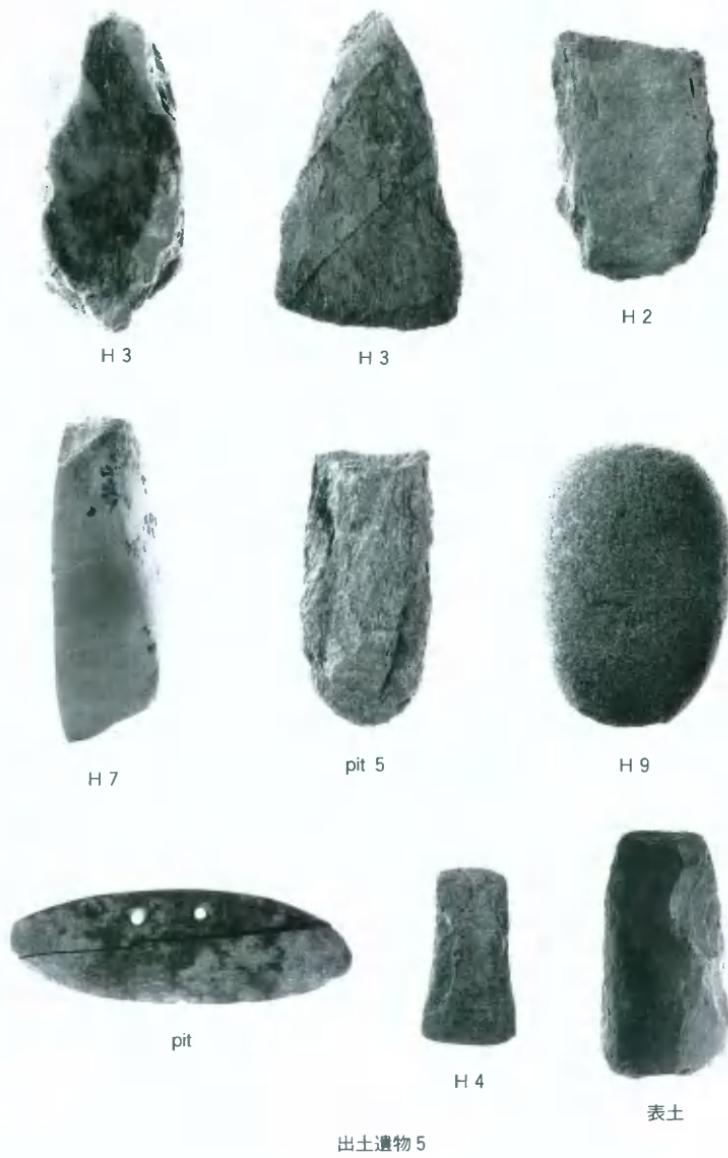
出土遺物3（土壤46）



出土遺物 4 (土壤46)

上野遺跡

図版50



出土遺物 5

表土

大内原遺跡

図版51



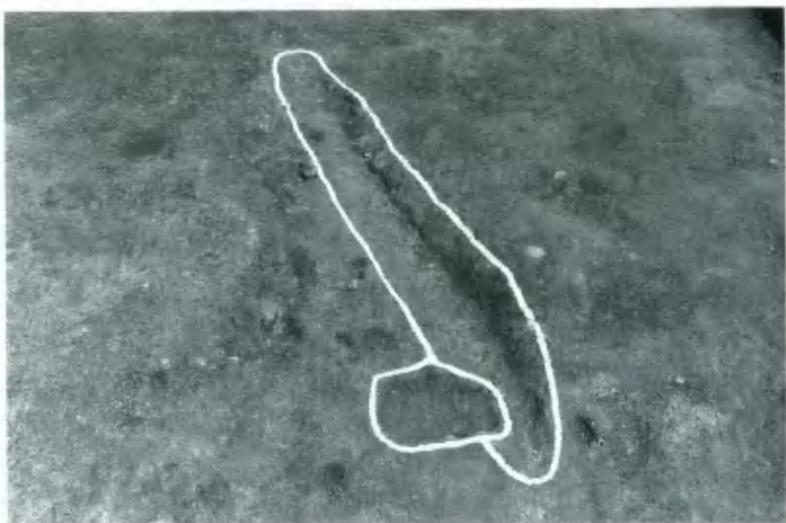
1. 第1次調査後遠景（北西から）



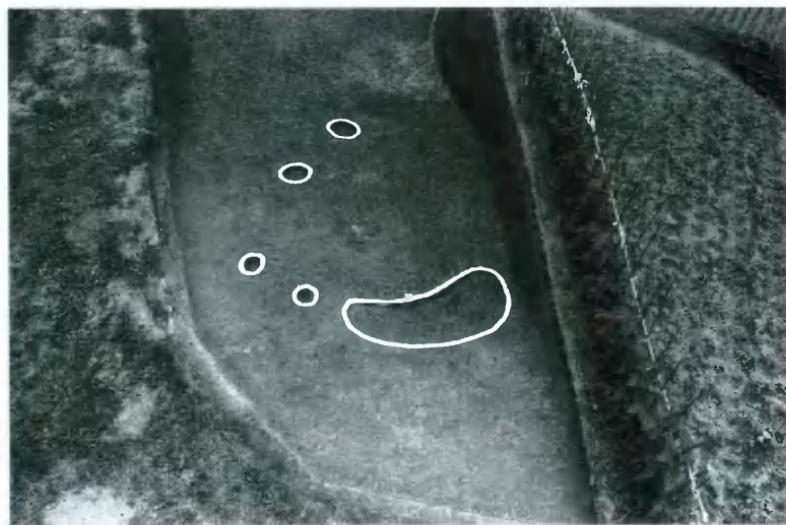
2. 東区上層全景（北西から）

大内原遺跡

図版52



1. 東区下層溝（北西から）



2. 西区全景（北から）

大内原遺跡

図版53



T 11

T 11



出土遺物

上ユタニ、下ユタニ、茅森大森散布地

図版54



茅森礎尾，大平散布地，小川古墳堆定地

圖版55



1.  
茅森礎尾散布地 T 5・6



2.  
小川古墳推定地 T 2



3.  
大平散布地 T 1・2

城山東、下郷原和田、下郷原田代遺跡

図版56



1. 城山東遺跡T2断面



2 下郷原和田遺跡



3. 下郷田代遺跡No.2地点

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 91

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査 1

1994年3月20日 印刷

1994年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター

発行 日本道路公団広島建設局津山工事事務所

岡山県教育委員会

印刷 旭総合印刷株式会社